江戸三国志「下」（吉川英治）

灯を呼ぶ呼子笛

その時刻と前後して、城下のちまたから荒川へ流れ出る藍屋川の土橋の上に、ひとりの女性が立ちました。

被衣のようなものをかぶっております。褪紅色のうす絹です。

『女装考』などを見ますと、女の被衣する風俗も元和寛永をなごりとして、正保の頃に至っては、三都ともにその風おとろえ、ことに江戸には見ることはきわめて稀としてありますが、地方の良家の子女の間には、まだその古風が残されていまして、今、土橋の上に立った女といわず、この辺では、女が夜行に被衣することは、さまで異とする姿ではありません。

それは異とするに足らないとしても、これは異としなければならないのは、その褪紅色の被衣にくるまれた女の顔です。

川には、藍屋町の藍滓が油のように浮いて、深淵のごとき深い色をドンヨリと流しています。その川面を見おろしている女の顔をごらんなさい。

耳まで裂け上がっているくちびるは、二本の牙におさえられて、歯のあいだから血がしたたろうとしております。小鼻の両わきから青く深くえぐられた陰影は、怒れる皺のようにも見え、泣きたいような皺にも見える。青い眉は瞋恚の炎をなし、金色のひとみはあらゆる呪いを焼いているかとも思われますのに、なお額からは二本の人さし指のごとき角が被衣のかげにありありと見てとれるのです。

ここにも螢がとんでいました。

水を離れて、彼女の顔へ吹き上げられてくる螢も、その形相に近づくや、光を滅してあたりを去ります。

「……まだかしら？　乳母やのお寺は」

橋桁にもたれたまま、般若がやがてつぶやいています。

「荒川の畷から北へ四、五丁、そこの鼻寺というお寺にいると、乳母やの使いが言ったけれど、道を聞く家はないし、足はくたびれるし……こんなことなら、かごにでも乗ってくればよかった……」

でも、先に心を急いでいるとみえて、程なく、楚々と土橋を歩いてゆく。

時折つよく来る風が、被衣を奪って彼女の下をのぞこうとします。彼女はそれをとられまいとするらしく、両手を胸に組みあわせました。

そして、楚々と草履を摺ってあるく。

藍屋川の川べりに添って、やや暫く西へくだると、また一つの橋がある。しかし、そこには一基の石が畷の道を教えていましたから、彼女の足元はやや明るくなって、迷うところなく、右手ののぼりをうねりますと、程なくそうそうたる篠のそよぎが耳につく。

「ここにちがいない――荒川の畷は」

真っ黒なやぶと青田の間をつづいている白い道に立って、

お蝶は初めてほっとしました。

「灯が見える」

そこに立つと、寺町の灯が幾つかかぞえられました。お蝶はその三つ四つのまたたきのなかに、乳母のお咲がともした明りもあるのだろうと考えこみます。

折角、この甲府まで来てみたけれど、もうさがしあぐねて、とても逢われぬものとあきらめていた乳母のお咲から、思いがけない寺男が使いに来たのは、きのうの夕方。——お蝶は宿に払う路銀もとぼしくなって、どうしようかと、さすがに旅の心細さに、ふさぎ込んでいた時です。

使いに来た八助という寺男から、乳母のお咲の言伝というのを聞いて、お蝶はおどりたちました。

で。行くと返辞を与えましたが、後で考えてみると、いやな予感がしないでもありません。

わずか二日まえに——あの蜻蛉売りの久助の家に泊った晩——そこの行燈に書き残してあった日本左衛門の文字が、ともすると、お蝶の胸に、あぶり出しのようにういて出ます。

もしや？……

そういう危惧に襲われます。

止めよう。あの寺男といって来た使いも、何だか知れたものじゃない。

感づいて、一度は断念したのを、にわかにまた、行くと決意をしてしまったのは、深夜宿へ届いた一通の無名の飛脚が、お蝶を気づよくしたためです。

無名の飛脚の内容は、数行につきていて、大略のところをつまめば——こんな意味。

明夜は鼻寺へ行った方がお嬢様の幸福ですよ。

何か不安がありましょう。それで迷っておいでしょう。たとえば日本左衛門のことなど。だが、さるお人のいいつけで手前がその方はよそながら守護しておりますから御心配なく。

くれぐれも御懸念は御無用。

迷わず鼻寺へおいでなさい。大事な岐れ路をふみまちがえてはいけませんよ。行けば吉。行かねば凶。断じて大凶です。

今もたもとからその文がらを出してみて、これは、乳母のお咲の心くばりではなかろうか、などと考えながら行くうちに、お蝶は、何か触覚の異様なものに、足元をすくわれて、思わずそこによろけました。

はっとしたのは、目の前に仆れている黒いものを見たからです。人間です。露ッぽい草のなかに、短い髪の毛を散らばしてうツぶしている一個の死骸は夜目にも明らかな女であります。

「おや？」

お蝶が、死骸をみてつぶやいた声は、いかにも他人ごとのようでした。

次には、そばへ寄って、

「どうしたのかしら？　……刀傷もないし締め殺された様子もない。そのくせ、死んでいるなんて」

おかしい事のように仮面のなかで言いました。

そして、女の髪の毛が、短く切りとられてあるのを見くらべて、お蝶の好奇心は、死者を見る同情などを忘れている。

まったくその死顔は、死顔というべくあまりに凄艶です。むしろ作り物にしろ、生けるお蝶の仮面の方がどれほどすごいかわかりません。

「あらッ？」

そのうちに、お蝶はこう言って、やにわに顔につけている洞白の仮面を、額の上へめくりました。

「見たような女だ……見たことがある。おかしいね、たれだろう？」

しきりと考えていましたが、その身なりから推して、江戸で会った者だろうとだけは想像がつきましたが、にわかに、何処で会った誰ということまでは、どうしても思いあたらない。

と。

天を向いた般若の仮面と、お蝶そのものの美しい顔とが、何に驚いたものか、キッと、うしろを振向きました。

「あっ……」

すッくと立って耳をすますと、まさしく畷の篠のやぶにあたります。風とも思えないしのびやかな音が、水のようにザワザワと流れて来る。

途端に——

一方の木立のなかに、ちらとうごく人影を見たので、お蝶は、仮面と顔とをヒラリと被衣にくるんで、風のごとく馳けだしました。

「それッ」

一陣になって追い慕ッたものがある。

御用——と黄色い明りを振れば、すぐに捕手とわかりますが、この一団の人影には一個の明りもたずさえられておりません。

やがて——

いたずらに、畷の篠や青田のあぜを馳けずり廻って、むなしく先の数人が引っ返して来てみますと、一方、お粂の死骸のまわりにも、幾人かの軽装な捕手が、それをとりまいていぶかしそうに小首をかしげている様子。

きりょうの美い女だ。それに髪を切られているから、これはどこか城下の茶屋女が、痴情で殺されたものだろう——などと、いっぱしな目明し気取りで、鑑定をつける者がある。

いや、こんな女は、城下の茶屋じゅうで見かけたことがない。という異説も出たりします。

第一この死にかたがどうも怪しい。

評議まちまちの結果でした。

とどのつまり、やはり、これは一応誰か然るべき者か上役の者に来てもらわなければ、この死骸をこうして置いていいか、それともべつな処分をするか、どうにも去就がつかないということになります。

で、話がそうきまると、ひとりの捕手が、合点という風に畷のやぶに飛びこみました。

しばらくすると、篠のそよぎの消えて行った藪の奥で、一声、二声、まろび音に吹かれた呼子笛が尾をひいてひびきま

す。

初めて、ぼっと提灯が浮いてくる。それも人魂のごとくたった一つ。

どこかに伏せておいたのが、呼子笛に急いて来るのでしょう。

まもなくだんだんそれが近づいて来ると、合図をした組子のひとりが、藪を分けて案内に立つ。

何かしきりとしゃべるのを、明りに添って来る三人が、うなずきながら聞き取っている。そしてザワザワと畷へすすむ。明りの先にバラバラと虫が飛ぶ。

提灯を手にしているのは、柳沢家の町方与力か、或いは同心程度の捕吏であろう。朱房の十手を前ばさみにしている。

そして、あとの二人というのは、徳川万太郎に目明しの釘勘でした。

大盗の恋

「おい法達、いぶすのはもういい加減にしてくれないか。目に沁みてしようがねえ」

例の鼻寺の方丈に端居して、日本左衛門はしきりと団扇をうごかしています。

榧を折ってはくべていた法達は、煙の中から、脂ぎった顔を振向かせて、

「そうですか。客人がそろったから蚊いぶしも馳走のつもりなのですが」

「もう充分だ。これ以上いぶされちゃ、どいつも、しッぽを出さずにいられまい」

「は、は、は、ちげエねえ。今夜の客人をいぶすのは禁物だったかもしれない」

最前ここへ訪ねて来て、そこに居合せた雲霧と四ツ目屋も、声を合せて笑いながら、

「なあに、おれたちは極めつきの白浪だ。このほかに出すしッぽもねえが、御夢想ぐすりなんていういかもので世間様をごまかしている、鼻寺の和尚がいっち先に尻尾を出してしまやあしねえか」

「ひどいことをいうなよ。御夢想ぐすりでもばかにはならんぜ。なんなら、一服進ぜようか」

「もう売りつけにかかっていやがる。おあいにく様だ。ここには、人一倍鼻のきく人間ばかりそろっている」

ところへ、何かピチピチとはねる水桶をさげて、薄暗い庭先へ顔を出した寺男の八助が、

「方丈様、やっと目っけて来ました」

「あったか、鯉が」

「大きなやつを、三匹ばかり仕入れて来ましたが、なんに致しますかね、こいを」

「どれどれ」

と、法達も四ツ目屋も、縁先へ出て水桶をのぞきながら、

「なるほど、いい鯉だ」

「おことばに甘えて、あっしは洗いにねがいたいね」

と、新助がいうと、雲霧が、

「おれは鯉こくを注文するぜ」
「寺へ来て、お茶屋へでも行ったようなぜいたくを言いなさんな」
「じゃ方丈様、造作はありません。両方に振分けてつくりましょうか」
「ウム、御苦労だがやってくれ。そのまに、おれは膳の方を出しておくから」
法達が庫裡の方へかけこむと、八助は庭先の流れへ、すぐ、出刃とまな板を運んで来て、鯉の作り身にかかっています。
何を考えているのか、寺の水で鯉の血が洗われているのを眺めて、日本左衛門はひとりでクスクスと笑っている。
「おや、本堂の方で、人声がしやしねえか」
「そうだな」
新助が立って行ったかと思うと、程なくそこへ、千束の稲吉を伴って席へ帰って来ました。
「親分」
「お、稲か」
「秦野屋はまだ参っておりませんか。実あ、ゆうべおそく、話があるから此寺へ来いという飛脚があったので、日の暮れるのを待ちかねてやって来ました」
「九兵衛もそのうちに見えるだろう。……だが、てめえ達は、なんの為に、今夜おれの前でガン首をそろえようというのか」
「それは今に、九兵衛が来てから言うでしょう」
「そうか。……まあいい、折角の久し振りだ。今法達が酒の支度をしているから、今夜はゆっくり飲むとしよう。ところで」
と、急に庭先を振向いて、
「おい、八助」
「へい」
「ゆうべの返事は、たしかに訪ねて来ると言ったのだな」
「まちがいなく来ることになっています」
聞きとがめて、そばの者が、
「親分、秦野屋のほかに、まだ誰かここへ来るものがあるんですか」
「だから、少し静かにしていてくれ」
「へ」
「本堂まで訪ねて来ても、もし、奥の方で荒ッぽい声が聞えては折角な獲物を網から逃してしまう」
にわかにシンと声を沈ませて、
「たれですか。そいつは」
「お蝶」
「えっ、お蝶が」
「乳母のお咲という女が、尼になっているつもりで、今夜此寺へたずねて来る」
「うまい手はずにゆきましたね」
「だが、おれはすこし考え直した。どうもお蝶を殺してはまずい」
「で、どうするつもりなんで？」
「笑ってくれ」
「親分……」

「は、は、は。笑ってくれ」
「親分、何を笑っていいんですか」
「実あな」
「へい？　……」
「おれはお蝶を女房にしようと思うのだ」

雲霧と四ツ目屋は黙って顔を見合せたのみです。
余人なら知らないこと、日本左衛門が自分の口から、お蝶を女房にしようかと考えている――というのですから、ちょっと口が出しかねました。
「親分」
その時、方丈の横のふすまが、音もなく開いていました。
そこに突くばっている九兵衛を見て、
「おう、秦野屋か」
「よろしゅうございますか。今、裏の方へ廻ろうと思ったら、木戸が閉まっておりますんで」
「仲間うちだ。なんの遠慮があるものか」
「ごめんなすって下さい。お、稲吉も来てくれたか」
「ゆうべ、兄貴からくれた飛脚を見て、何はおいてもやって来たのよ」
「御苦労だなあ」
新助や仁三にも会釈をして、
「やれ、こうしてみんなと膝をくむのも、何か、たいそう久し振りのような気がする」
いかにも、心からくつろいだように、九兵衛はさりげなく煙草入れを抜きとって、ゆうべからの暗中飛躍などは、みじんも顔にあらわしておりません。
強いて彼の行為を知っているものが、仔細に彼を注意していれば、口へきせるをくわえた時、庭先で鯉を料理していた八助へ、ジロリと意味ありげな一瞥を投げましたが、それとて日本左衛門の炯眼にさえ、少しも怪しげに見えなかったくらいなものです。
「時に秦野屋、ちょうどいい所へ来てくれた。実は今親分から、思いがけないことを打ち明けられて、おれ達のような若い者じゃ、相談相手になりそうもなく、弱っていたところなのだ」
日本左衛門は笑いながら、そばから語尾を引き取って、
「仁三のように、そうしかつめらしく聞かれては困る。実はな、九兵衛」
「へい」
「軽い気持で聞いてくれ――夜光の短刀をさがす上に、とかく邪魔になるやつを片づけてしまおうと、おめえをはじめ皆にも役割をきめて今日までだいぶ手をつくしたが、こいつあおれのしくじりだった。明らかに日本左衛門の心得ちがいに相違なかった。なるほど、盗賊としての四ツ目屋や雲霧は、どんな離れ業でもやってのける、たしかに一人前以上の才覚はあるが、さて、人を殺すという仕事は、すこし性質が違っている。で、尺取のやつのように、かえって向うのわなに墜ちたりなんぞするというもの。おそらくは、おめえのような巧者にして、金吾を狙ってみるとなれば、物を盗む仕事とは

だいぶ勝手が違うだろうと思うのだ」
「なるほど」
　九兵衛は煙管をしゃに持って、とっくりと耳を澄ましていた。
「で、おれのうけ持ったお蝶だが……。あれにしても、殺せるまでにこぎつけるにゃ、それ相応に骨が折れた。しかし、おれはたしかに、そこまではこぎつけた」
　と、稲吉や新助の怪しむ顔を見廻して、
「――実をいうと、この間の晩、甲府の或る裏町で、おれはお蝶を殺すばかりにしたのだ。そこは、蜻蛉売りの久助というやつの家だった。その久助は、山岳切支丹族のなかまの一人で、秩父か赤城のやつらの会堂へお蝶をつれて行こうというので、その晩こっそりと相談をしていた」
「親分、お話し中ですが……」
「ウム、何だ」
「その山岳切支丹族というのは、一体どういうものなんです」
「この世間では絶対に信仰のゆるされない切支丹。どうしてもその宗門を裏切れない信徒。寛永の邪宗門狩以来、山のなかに逃げこんで山の会堂に子孫をつくっている伴天連の血脈。そういうものの一団だ」
「じゃ、まったく世間の外に生きている人間どもですか」
「まあ、そんなものと思えばいい。だが、時には嵐のように世間へ出て、不思議な仕事をすることもある。たとえば、近ごろ江戸の切支丹屋敷の牢獄からヨハンの姿が消えたというわさがある。また、蜻蛉売りの久助が、お蝶を山へ連れて行こうとした」
「そうして、何をやろうというのだろう」
「無論、やつらの目あても夜光の短刀にある」
「じゃ、あのお蝶と夜光の短刀とは、何かそんなに深いわけがあるんでしょうか」
「ある！」
「で親分も、お蝶を女房にしようと考えついたので？」
「それもあるが、いつわりのないところ、おれはお蝶に恋をしたよ。だから笑って聞いてくれと、前もって断ってある……」
　そう言って、手のなかに団扇の柄を揉んでいる日本左衛門の姿を、兇猛無比な大盗とたれが見ましょう。
　お粂を失った後の彼の胸の空虚に、堪えようのないさびしいものが生じたことは、彼がお粂をふみつけて、千鳥ヶ浜で言いました。それとしても年齢としても、日本左衛門が恋をする、それが、なんらの不思議でもないわけです。
「その晩、おれが夜ふけてから忍びこんで、蜻蛉売りの久助夫婦を殺しているのだ。だのになぜ隣の部屋に寝ているお蝶を殺さなかったろうか」
　そう言って日本左衛門は、またあの口重そうなことばをつぐのでした。
「――おれはつくづくお蝶の寝顔をその時見た。ころびばてれんの娘だが、一種の高貴の相をもっている。そのくせ、朱い唇は妖婦のようで、長い睫はみだらな美しさと異国人の

血を混ぜていることをあらわしている。何しろいい寝顔をして寝ているのだ。で、むざと殺すのが少し惜しい気がして、おれは、行燈へ一筆墨をぶつけて、ふいと帰って来てしまった。それから、自分の考えかたが変って来たのは事実だが、それも、恋だか慾だか、本心のところは自分でもよくわからない……」

と、ここで彼はまた、前にのべた山岳切支丹族のことに話をもどして、夜光の短刀とお蝶との関係にわたり、そのお蝶を失うことは、秘刀探索のやみに光る一点の灯をふき消してしまうようなものだと、その不利なわけを言って聞かせる。

では、日本左衛門がお蝶を生かしておいて、お蝶を利用すべく女房にしようという野心は、まったく野望のための野心であって、恋ではない。

そうも言えるじゃないか——と九兵衛は肚のうちで思いました。

しかし、九兵衛にはそれがどっちであろうと、大した問題ではありません。彼には彼の肚がある。——こうしてお座なりのおつきあいしているのも、もう半刻か一刻。

そのわずかな後に来るおそろしい運命の暴風を気づかずに、遠大な計をめぐらすつもりで、しきりとお蝶の生殺に考えを囚われているのは、やはり神ならぬ日本左衛門の気の毒なところだと、おかしく考えているのです。

と、そこへ法達が膳を運んで来ました。

納所用の朱い椀に、手製の鯉こくの味噌のにおいや、八助が寺の小流れで洗いあげた作り身などが添えられて出る。

そこで。

各〻の手へ杯が分けられた機に、九兵衛はここへ一同を集めた手前、この甲府にいることは危険だから、一日も早く、柳沢家の勢力外の地へ、足をぬいた方が得策であろうということを、あの老弁でいかにも日本左衛門の身を杞憂するごとく、じゅんじゅんと説いて自分のお座なりの一役をすませました。

九兵衛の胸の底に、自分を裏切るおそろしい策がかまえられているとも知らずに、日本左衛門はだいぶ心をうごかされた様子。

では、どうせ土用の辰の日には、鹿野山で顔をそろえる約束のあること、ここをひきあげて、一先ず上総の方へ足を抜こうか。

「どうだ、みんな」

一同へはかると、雲霧、四ツ目屋、稲吉にも、それには異存がないと言う。

「——じゃこうしよう。もうやがて、お蝶がここへ来る時刻だからそれを取ッちめたら明日を待たず、今夜のうちに甲府境を出てしまおう」

「するとかごがいりますね。まさかお蝶をひッかついでも歩けますまい」

「あの女が、おれのことばに、なんというかあわからないが、もしジタバタするようだったら、猿轡にかごという支度よりほか仕方があるまいな」

「無論、騒ぎ立てるにきまっております。じゃ法達、その用

意をしておいてくれねえか」
「かごですか」
「そうだ、かご屋も真面目なやつはだめだぜ。酒代さえウンとにぎらせれば、どんな事でもやッてのけるというような、頼母しいやつをさがしてくれ」
「ようがす」
と法達は、のみこんで手のあいた八助にそれをいいつけて、
「急にこの酒がお別れとなりましたね。じゃあ手前もひとつ、お流れをもらいましょうか」と車座のなかへ割りこみます。
――すると、法達にいいつけられて、かごをさがしに行こうとした八助が、すぐにそこへ引っ返して来て、
「親分――」と低い声を落しながら、本堂の方を指さしました。
「来ましたぜ……例のが」
「え？　お蝶が」
「そうらしゅうございます。今、庫裡から草履をはいて出ようと思うと、ちょうど山門のところに立って、何か、こうそこらを見廻している影が見えました。たしかに、あの娘にちがいありません」
「そうか」
日本左衛門がきっぱりとうなずくと、方丈の酒もりは、にわかに、無人のようにシンとなって、白い眼と眼がけわしく動きました。
四ツ目屋は身をのばして、
「で、親分」
と、ささやくような小声で訊く。
「お蝶が来たら、どういう手都合にします？　およそ段どりを極めておいた方がいいでしょう」
「ウム、耳を貸せ」
大きく投げられている人影が、すすけた壁に重なりました。

鼻寺炎上

雀羅を張った破風から鬼の腕でものびそうに思われる、――その朽ち傾いだ山門の、顔をなでられてもわからないような暗のなかに、チラリと、銀簪の光がうごきました。
さらに見れば、チラチラする銀簪のほかに、あの濃い睫をもったお蝶の特徴のある目が、太い柱のかげから、そこまで走って来てうしろの暗をジッと見ています。
「びっくりした……。何だろう？　いま私を追いかけて来たやつは」
暫くはそこで、息のハズむのをしずめている。そして、帯の間からたとうを出しました。櫛を抜いて髪を直し、襟を合せてキチンと帯のうしろをしめる。
はばの広い階段の前に立ちました。そこは本堂と思われますけれど、ほかに、寺僧の居そうな明りも見えないし、どこが庫裡だか方丈だか見当もつかないので、
「今晩は……」
おかしいような気がしましたが、ともかくも、そこに立って、こう訪れてみたのであります。

「……こんばんは」
と、もういちど。
洞然とした伽藍のやみに、高くないお蝶の声が、気味のわるいほど妙な音波をひろげました。しかしいつまでも、返辞もないし、明りの影がうごいて来ません。
「居ないのかしら。……それに、お咲ひとりで留守をしているという尼寺が、こんな大きなお寺なのかね？　……」
立ち迷って、しばらくそこに腰をおろしておりますと、やがて何処かで、ガラリと重い欅戸でもあいたような音がひびきました。
「どなたでござる」
誰か、こういう者があります。
振向いてみると階段の上に、ひとりの法衣の人影が見えますので、
「うかがいますが」
と、お蝶が小腰をかがめました。
「はい」
と、ジロリと見おろしているのは法達の目です。——なるほどこいつア美しいヤ、と腹のうちでつぶやいている。
「見ればお女中のようだが」
「ええ、あの……、こちらは、鼻寺というお寺ではないんでしょうか」
「左様、西蓮寺といいますが、俗に、鼻寺でも通っております」
「じゃあ、やっぱりここかしら」
「何か、人でもおたずねかな？」
「尼寺だというて、聞いて来たのでございますけれど、尼寺じゃないようだし……」
「ああ、それでは娘御は、江戸のお蝶どのという方ではないのかな」
「はい、そのお蝶でございますが」
「では、待ちかねている仁がございますぞ。さ、上がるがいい。……いや、そこから」
もっと念を押そうと思うまに、法達はススと本堂の畳を摺って、内陣の暗やみから、一個の網雪洞をとって、それへ明りを磨りつけている。
——まだ半信半疑の気もちで、階段の上に立っているお蝶を振りかえって、
「いま案内をしてあげる。さ、そこに居て、すこし足でも休めなさるがいい」
「お咲は、こちら様に、居るのでございましょうか」
「只今、裏の庵室で、ちょっと、おつとめをいたしていますじゃ」
「そうですか、それじゃあ……」と、お蝶は初めてホッと気をゆるしました。そして、暗いのを幸いに、本堂のなかほどへ足を横にして坐りながら、
「アア、ほんとにくたびれた。……じゃお咲が来ますまで、ここに休ませておいてもらいます」
そう言って、内陣の方を振向きましたが、そこには今、人がともして行った一個の網雪洞が、厨子の螺鈿や古びた金泥

の物体を、メラ、メラと、あやしげに明滅させているのみで、法達の姿はどこへ行ったか見当りません。

そのまま、いつまで待っても音沙汰がないので、

「ちッ、どうしたの」

お蝶はすこしじれだしました。

「自分から、来てくれといって使いをよこしておきながら、人をばかにして――。帰っちまうよ私は。いいかい乳母や」

袂から出した洞白の仮面を膝にのせて、誰にも言い人のない叱言を般若に聞かせておりました。

すると。

ひとみの中に火を焚かれたように、般若の金瞳がトロトロと燃えて、キバに裂かれた青隈まで、急にすごく浮いて出ましたから、彼女が、アッと、それを投げようとしますと、

「お蝶、来たか」

と、うしろの声です。

仰ぐと、そこに白上布を着流した日本左衛門の影が水のごとく立っていました。そして、彼女の肩の上に、網雪洞の細い灯をかざしてニンマリと笑みをゆがめている。

膝にのせていた般若のひとみがトロトロと燃えたと見えたのは錯覚ですが、そこに日本左衛門が立ったのは現実です。

お蝶はぶるぶるッとすくんでしまう五体をどうしようもありません。日本左衛門の目は冷ややかにそれを眺めて笑っている。

彼女は、一尺二尺と、あとへ体をずらせました。

が――立つ隙がありません。――逃げる隙がありません。腕も袂もつかまれていはしませんが、のがれることのできない竦み。

「よく来たなあ。おれは待っていたんだ。乳母のお咲という使いは、この日本左衛門が出したのだ」

こう言って、相手が膝をまげて、ぼんぼりを下へ置こうとしたせつなに、彼女は、飛鳥のように立ちました。

と――

「お蝶ッ」

日本左衛門が鋭く言います。

「だめだ！　廊下を見ろ、うしろの内陣をよく見ろ。白いものが見えないか、あれは人の骨ではない。短刀だ、おまえが逃げるところを待っている短刀だぜ」

その時には、明らかに人の気配が四方のやみにうごいていました。

すると、日本左衛門はその暗へ向って、

「雲霧――」

と、まず呼びます。

「へい」

「秦野屋」

「へい」

「稲吉」

「オオ」

「四ツ目屋――。もうここはいいから、方丈でゆっくり飲んでいてくれ。ウム、用があったらいつでも呼ぶ」

姿の見えない跫音が、静かにそこを去ってゆくと、
「まあ坐るがいい。そうしていてもしかたがねえだろう」
お蝶の袖をおさえました。
極端なおびえから極端な落着きにうつる気持が、自分でもわかるように、お蝶は、体のふるえが止まっていました。度胸というのか、不貞腐れというのか、処女のような恐怖の度をとおり越すと、いつも、お蝶は怖いものを知らないような女です。
で、引かれた袖の方へ、黙って横に坐りこむ。
そして、欄間や厨子を見廻して、そこに日本左衛門の居ることすら度外したような顔でいますと、自分の帯から二寸ばかり上の胸元に、樋へ流したような刀のみねが、ピタリと突きつけられて来ました。——ちょうど刀の神経で心臓の音を聞こうとでもするように。
「なんですか、これは」
そういったものです。朱いくちびるが。
「切れることに類のない備前の長船もの」
「まあ、きれいな鉄の色ですこと」
「おとといの晩、お前にたしかに預けておいたものがある。その命をな」
「私の命は、盗賊の借りものなんかではありはしない。……ですけれど、今夜は逃げもかくれもしませんよ」
「逃げようとしても、逃げられない」
「いいえ、逃げようとすれば、きっと逃げられるけれど、お前さんみたいな、しつッこい、根気のいい、そして、やたらに変な子分の多い人に見こまれては、私も助からないものと覚悟をきめましたわ」
「そうだ、お前のいうとおり、おれは執着と根気の人間だ。あきらめたか」
「で、私を殺すつもりなんですか」
「いやと言えば、それよりほかにしかたがない」
「え、何をいやと言えばなの？」
「女房になれ。おれの女房になるとここで誓いをしろ。そして、おれが幾年かたずねている夜光の短刀を、共々、一緒になって、探索するということを、きっとおれに約束するのだ」
「——夜光の短刀のあるところですって。私、何にも知りゃあしないのに」
お蝶のことばは、胸元へ来ている刀に自分の体のうごきを止められているようでもなく、だんだん常の調子になって、
「それだのに、そんな誓いを立てたってしようがないじゃないの」
と、流し目に言って、相手の顔色をジッと見ました。
「いいや、お前はそのありかを知らなくても、おまえにそれを教えようとしている人間がある」
「たれ」
「ヨハンだ。山岳切支丹族の者だ」
「だって私、そんなことを、誰にも頼んでありゃしませんよ」
「ともあれ、お前は夜光の短刀の秘密をひらく一つの鍵だ。おまえという羅馬王家の血すじを伝えている人間があればこそ、死んでは渡り、絶えては代り、この日本へ海を越えて来

る伴天連がある」
「だから、私と切れない縁をむすんで、その夜光の短刀をさがす手先に使おうとするの？　そしてその短刀を羅馬へ売りつけようとするの？　……ホホホホホ、なるほどあなたは虫のいい泥棒ね」
「が、お蝶。もうすこしおれの話をきけ。おれがそう言ったら、お前を慾の手先にだけするようだが、実あ、いつぞやの晩もお前を殺しかねたほど、おれの気持が変っているのだ」
「変っているッて、どう変っているんですか。私には、何だかさッぱりわからない」
「おれはお前に恋をしている」
「刀でおどかして、口でだますの？」
「日本左衛門、うそは言わない」
「……」
「いやか！」
お蝶は、手にしている洞白の仮面を指でもてあそびながら、恥しそうに首を曲げて、
「わからないわ……私」
不意に、鞘は刀を吸いました。日本左衛門はそれをうしろへ置いて、ずっとそばへ膝をすすめるなり彼女の体を寄せて、
「お蝶、いやではあるまいな」
抱えあまる腕のなかに、彼女の肩を仆しました。
腕のなかで、銀の簪がサラサラ鳴って、
「知らない……知らない……私、そんなこと」
言ったかと思うと、彼女の手の裡から、不意にひらめいた細手な短刀が日本左衛門の脾腹へと走ったのを、さッとかわされて、その腋の下を一文字に突きのめりました。
「その策かッ」
と、平手打ちに、刃物をたたき落とそうとしましたが、計って立ったことなので、お蝶は、すばやく返した短刀を逆手に斬りつけました。
飛びさがって、うしろの大刀をつかんだ日本左衛門は、その鐺を向けて、お蝶へ体当をかけましたが、しかし、それよりも早く、彼女は本堂の廻廊を目がけて逃げ走っています。
そして、ヒラリと跳ぼうとしましたが、もう両方から駆け出していた雲霧や、秦野屋や、千束の稲吉が、そうはさせずに抱きとめて、
「静かにしろッ」
ひとりが喉輪へ腕をかけて締めつけると、ひとりは逸早く手ぬぐいを取って猿轡をかける。
「それ、かごへ」
「オオ、八助」
法達が本堂の蔭へ手を振りました。
ねじ抱えられたお蝶の体が、どたどたと板縁を運ばれてゆくうちに、その両足を抑えていた秦野屋九兵衛は、彼女の袖にひそめてあった洞白の仮面を抜き取って、すばやく自分のふところへ移している。
が、彼の動作に気がつくものは誰もなく、お蝶をかごの中へほうりこむや否や、各〻は高飛びの足ごしらえに急であります。

脚絆の紐、わらじの緒、手早く結び終えますと、千束の稲吉、雲霧の仁三、秦野屋九兵衛、それに四ツ目屋の新助と都合四人。

お蝶のかごを取り巻いて、

「じゃ親分。上総の方へ一足お先に」

一文字の笠をそろえて会釈しました。

日本左衛門は廻廊の端まで出て、蝋色鞘の大刀を板縁に突いて手を置きながら、

「城下境を出るまでは、人目につかぬよう、なるたけちりぢりに分れてゆけよ」

と、見送っている。

棒鼻にゆらゆら揺れる明りにもつれて、かごと人との影は、一散に、鼻寺の本堂をあとにして、山門の際まで走り出ました。

途端です――

その行き足を食い止めて、わッという波のような人声。と共に、霜柱を蹴ちらしたような銀みがきの十手の一ツ一ツから、御用、御用、御用、御用！　果てしもない人数の喚きです。

「しまッた！」

ドンと板縁に鐺をついて、その大刀を横に提げ直した日本左衛門が、ばらばらと方丈の奥へ駆け込もうとすると、内陣の宝燈、経机をくずして、忽然とおどり立った一人のものが、

「日本左衛門待てッ」

と鋭く呼び止めました。

内陣からおどり出して、待てと、自分の前に立ちふさがった侍、日本左衛門は、それも捕手役人のひとりかと思いましたが、意外です。相良金吾でありました。

こんな際また、この、場所へ、金吾が姿を見せたことは、彼にとっては尠なからぬ驚きであったらしく、

「オオ」

と、跳び退いて、ひっさげた長船の反りを小脇に、

「金吾だな！」

という言下に、その体は、すでに自然な身構えを持しています。

待てといい、オオと答えたことだけで、もう双者は一髪を容れぬ対峙となって、かれの長船と金吾の了戒の一刀はなんどきでも、鞘を脱して敵の血を吸わんとする用意を怠っておりません。

金吾は、彼を広い本堂の中央へ誘うために、じりじりと身を移しながら、

「かねて、小仏の谷間で誓ったことばを――その時の広言をば、おのれ、よもや忘れてはおるまいな」

「ウム、それがどうした」

「日本左衛門！」

五体に力をみなぎらして金吾が叫びます。

「こよいこそ、おのれの一命を申しうけに来たぞ。卑怯に、逃げかくれをいたすなよ」

「性懲りもなくまたやッて来たか。して、約束の貴様の名分はどう立てる？」

「この金吾が、お粂の色におぼれている武士であるかないかは、これを見て知るがいい。お粂の生首の代り、遺物として貴様にくれてやるから、取っておけ」

一つかみの黒髪は、やにわに、彼の面上へ投げられました。暗に投げられた妖婦の黒髪は、煙のように散らかって、ひとすじひとすじ、愛慾の息をつき、悲恋の呪いを描くものの如く、日本左衛門の顔や肩にまつわりました。

「えい、うるせえッ」

その黒髪を断つが如く、颯然と鳴った大刀は、白光の火を縦に曳いて、金吾の真ッ向へ落ちてくる。

と。

一宮流の抜刀法――金吾の刀は抜く手の音もさせません、かれの憤然たる初剣をかわして、来の了戒のあざやかな鉄色が、静かに、そして鋭く、眼光刀光が一すじになって詰め寄ろうとしています――平手青眼のかたちに。

「むッ」

と、気をふくんだ日本左衛門。

「……」

ミリミリと手にしている刀身に、彼の殺気がシビれて来るように感じたでしょう。金吾はいちだんと精をあつめて、らんらんたる双眸を研ぎすまし、彼の隙をうかがいました。

――が、そうしているまに、早くも本堂の階段や、そこ、ここには、山門の方から手分けをした捕手が、土足で廻廊にふみ上がって、逃げまわる和尚の法達と八助を追って、御用、御用、という声を暴風のようにわめかせております。

――ともすればその十手に、うしろを襲われそうなのが、いちじるしく日本左衛門の不利でもあり、彼の気をいらだたせていました。で、眼前の邪魔者を、早く片づけようとするあせり気が、カッカと燃える毒焔のように、長船の先からほとばしッている。

金吾は一途です、死に身です。積日の怨みをこの機会にすすがなければ、彼の立場はありません。生きて何人に会わせる顔もない。こう死を期している彼でした。

この気持の相違は、いやでも双方の剣の上にあらわれなければなりません。

日本左衛門が、つけ入ろうつけ入ろうとするほど、金吾は堅実味のある平手構えをくずさず、容易に絃を切って放たないのは、いつもの金吾とだいぶちがいます。すくなくも、あの精悍一徹なあぶな気が、今夜だけはないようです。或いは、それを自分の短所と知って、大いに戒しめているのかも知れない。

ですが。

場合による双方の気もちの変化はともかく、根本の実力に於いて、金吾の巧者が日本左衛門の剛質な剣法に及ばないことは、千鳥ヶ浜の場合でも証拠だてられているとおり、うごかすことのできない事実です。

やがて、金吾の堅実にとった平青眼も、彼のすばらしい圧

倒的な上段に、割りこまれはしないだろうか、その危ぶみが、ないとは言えません。

と――案に相違して、どういう虚を見たか、やがて、かえって金吾の方から少しずつ攻勢をとってゆきました。と言っても、三、四寸ずつ――鵜鴒の尾を振るように、了戒の切ッ尖が微光を発しながら、相手の胸板へ迫ったに過ぎませんが、今、おそるべき殺気を撓めきッている彼の剣下へ、一尺と迫ることは、半ば、死のふちへ足をかける覚悟でなければなりますまい。

とたんです――眠龍の髯に触れたように、彼の気合が耳をうッたかと思うと、相良金吾のからだは斜めに走ッた日本左衛門剣風の先に跳んでおります。

が、むしろ、それは金吾としてあざやかなかわしかたでした。彼の気合を空刃に反らしたところで、金吾はおそろしい速度で斬りかけました。左刃、右刃、息もつかせぬ攻勢です。

タタタと五、六歩の間、日本左衛門もまったく受け身にならざるを得なかったくらい。

「オオッ」

いずれの声だったかわかりません。

日本左衛門が剣勢を改めて踏み止まったとたんに、当然、両方の刃が火を磨りました。まッ暗な伽藍のなかに、異様の鉄のにおいが流れる。

御用、御用。

庫裡や方丈の方で騒擾たる人の足音が絶えません。そして、そこから見れば、山門の方は火を焚いたような提燈の明りです。

（お蝶のかごはどうしたろうか？　雲霧や秦野屋やそのほかのものは無事にこの寺を切りぬけて出たろうか）

こう思うと日本左衛門、おのれの身より、子分の上が案じられてならない。お蝶のかごが、気づかわれてならない。

「ええ、青二才」

面倒と思ったのでしょう。それはむしろ、暴ともいうべき鍔競りをしかけて、いきなり金吾を押して来ました。場なれのした彼の大胆と、その上背から押してくる圧倒です。

「ムム」

と、いやおうなく、鍔押しに押されてゆく金吾。

一歩ー二歩ー気をくだけば彼の剣がズバリとそのまま欲するところを割りこむに違いない。

「あっ……」

よろめきました。

さっき、そこへ置かれた手燭です。手燭を離れた蝋燭をふんで、金吾の体が意外なよろけ方をしたので、互いに、蛇舌を吐いてかみ合っていた二刀の銀蛇は、不意をくッて、意志のない光を描いて離れます。

せつなに、日本左衛門はここぞとばかり斬ッてさげる。身を起こせば斬られたでしょう。あやうくも金吾、ぱッと、畳に伏して足元を薙ぎつけていました。

――その寝打ちの払いが届いて日本左衛門が片脛を断たれたか、彼の振下ろした大刀が金吾の背すじを割りつけたか？

……その結果を見ぬうちに、突然、内陣の一方から、真っ

赤な火光がカッとあたりを染めました。
火光が射して初めて知れたのは、いつのまにか、もうもうとした黒煙りのうずが、本堂の伽藍いッぱいに立ちこめていたこと。
その、まっ黒な濃煙が、ゆるい運動をえがいているなかに、金吾と日本左衛門の影は、すでに法や格を無視したところの殺剣を交ぜて、鏘々たる火花をちらし合っている。
もう、眼を向けられない煙です。いずれが金吾か、いずれがこれか、その識別もつかないまでに。
ふと見ると、内陣の深くは、赤い蜘蛛の巣がかがやいている。そして、剥落した金泥の薬師如来か何かの仏像の足元から、朱金の焔がメラメラと厨子の一角をなめ上げているのでした。
火事！　と誰やら絶叫して騒ぎ出すうちに、紅蓮は厨子から円柱をつとうて縦横に本堂の梁へ。
「おのれッ」
「法達ッ、法達」
すさまじい物音が、その時、内陣のうしろにあたって響きました。
本堂の裏に火を放って、その騒ぎにまぎれて逃げのびようと計った和尚の法達は、自分のそそぎかけた油の煙と炎に追い出されて、潜伏していたそこを走り出したとたんに、
「それッ、法達だ」
「御用」
と、八方から呼ばわる捕手に追い廻され、とどのつまり、僧房の一隅に袋づめにされて、十手の乱打に気をうしない、高手小手にしばりあげられる。
そこで、
「法達召捕った」
と凱歌があがった時、庫裡の隅でも、寺男の八助が縛についた様子であります。
が――一方、山門までお蝶のかごをやって、そこで、わっと捕手の一群に出っくわした雲霧や四ツ目屋の一組の方はどうしたでしょうか。
無論、殺到した人数におどろいて度を失うような連中ではありません。
「おっ、来やがったな」
と、まず精悍なる雲霧が、大刀をかまえてかごの前におどり立ち、千束の稲吉も手に唾をくれて、
「よし、ここはおれと雲霧とで食いとめるから、秦野屋と四ツ目屋の兄貴は、一足先に出かけてくれ」
叫ぶや否、抜いたる刀をふりかぶって、御用と声のかかるを待たずに、むらがる捕手のなかへ斬って入りました。
「裏山から阿弥陀街道へ抜けろ。でなければ、木賊の奥から秩父の道へ」
四ツ目屋へ向ってこう言いながら、雲霧もまた寄りつくものを斬って払う。
「合点だ。あとをたのむぜ」
と、こう四ツ目屋の新助。
「それ、かご屋！　裏山へ、裏山へ」

と言ったのは秦野屋九兵衛です。――九兵衛はまごつくかご屋の先達になって、すばやく境内を引っ返し、八十八ヵ所の小路が縦横にある鼻寺の裏山へ向って、無二無三に、お蝶のかごをのしあげました。

そこにも、樹間をチラチラする提灯の幾つかが、狐火のように浮遊して、しきりと行く手行く手の先を尾け廻しましたが、裏山を越えて、次の木賊谷へのぞむと、もう逃げる天地は自由なものです。

ほっと息をついて新助が、

「兄貴、ここまで来りゃあもう大丈夫だ。それにしても、親分はどうしたろうな」

と、秦野屋の姿をふりかえりますと、いままで、かごのわきに尾いていた九兵衛の姿が見当りません。

「おや」四方をすかして、

「秦野屋――おい、秦野屋――」

こう呼ぶと、四、五間うしろで、

「おお」

九兵衛がわらじをおさえて、かがみ込んでいるのが分りました。

「どうしたんだ」

「踏み抜きをしてしまッた。……ア痛、ア痛。と、とんでもねえ物を踏みつけて」

「えっ、釘でも踏み抜いたのか」

「まっ暗で、何をふんだのかわからねえが、右の足が、ち、血だらけだ……。ウーム、どうにも痛くって立つことができねえ。おめえは先へ行ってくれ、早く先へ」

「でも、兄貴を捨てて」

「なアに、おれはまた、どうにでもして後から追いついてゆく。だがおめえは、これから落ちてゆく道をどう取ってゆくつもりだ」

「雁金峠の裾を縫って、奥秩父から中仙道へ出ようと思う。そして親分との約束もあるから、ひとまず、上総の木更津あたりで、みんなの来るのを待ち合せている考えだが」

「じゃ、おれも、きっとそこで落合うから、かまわず先を急いでくれ。何しろ、足に怪我をしちゃ、かえっておめえの足手まといだ」

そう言われても、まだ新助は去りかねていましたが、そのうちに、捕手の提灯と人影が近づいて来ても、まだ秦野屋が腰を上げようとする気振りもなく、

「さ、かまわずに行ってくれ。おめえと一緒に居ちゃ、かえっておれも逃げにくい」

と手を振っていなむので、ではとぜひなく、後日の会合を約して、四ツ目屋の新助とお蝶のかごは、木賊谷をくだって山つづきの深くへ影を消しました。

あとで九兵衛は、ケロリとした顔で立ち上がって、ふところから、手拭でくるんだ仮面を出して見ながら、

「さアて、これからどういう寸法にしようか」

と峰を辿って、もと来た方へ引き返して行く。

だが、べつだん足を痛めたような様子も見えません。

「オオ、火が上がったぞ」

そして。

鼻寺の伽藍が、すぐ真下に見えるところまで来ると、彼は、手にしていた洞白の鬼女仮面を顔につけて、そこに仆れてある石仏の背なかへ腰をかけ、

「ウム、こいつア美しい」

と、両方の手へ、仮面をかぶった顔をのせて、熾に、火の粉を吹きあげて来る修羅のさわぎを、他人事のように見下ろしていました。

九兵衛が頬杖をついて見ている目の下のながめは、なるほど、きれいと言えばきれいです。壮観といえば壮観です。

何が美しいと言って世に大きな炎が物を焼きつくしてゆくほどの変化のある美はありません。

ですが、その美観は、それを対岸の火災視することのできる、冷たいひとみにだけ映るもので、ひとたび、その紅蓮を身にかぶるなり、その火の粉に追われるなりする時は、人間は決して、火を美しいとは言いますまい。

今も、鼻寺の炎上を、九兵衛は山の上から、頬杖にあごをのせて見物していますが、その火の粉の舞うところ、その炎のうずまくところ、その黒煙りの底は大変です。文字どおりな修羅の巷です。

たれが苦行して開山いたか、あたらこの一刹も、弘法大師を売り物に御夢想ぐすりの看板をかけられ、狐狸のすむ以上な人間の巣となって、今は、不浄役人の駆けずり廻る間に、惜しまれもせずバリバリと焼けています。

かりに、こういう寺にも、仏心のある菩薩の像がすえられていたならば、むしろ、焼けた方がよいと、大紅蓮の厨子のなかで、あざ笑っているかもしれません。

何しろ、炎は、ない風を呼びあつめて、鼻寺の境内、そのほか一町四方の木立のなかまで、夕焼のような明るさです。そして、伽藍の大廂から吐き出す黒煙りの影が、赤い大地を、むらむらとうごいてゆく。

雲霧と稲吉のふたりは、あまたの十手にへだてられて、わかれわかれに捕手の人数をなやましているようです。それも二手になって働いている黒い人影と刃物の光に察しられることで、いずれが稲吉やら雲霧やら、このあわただしい爆音と黒煙りとでは、とても、その行動を見てとることができません。

しかし、しばらくすると、一方の争闘が止んで、捕手の影が一団に蝟集したので、それが千束の稲吉を囲んでいたのだと知れました。さすがの稲吉も、遂に、力が尽きたのでしょう、折り重なった捕手の下になって、

「さわぐな。こうなりゃ女々しい真似をする稲吉じゃねえ」

いさぎよく脇差を投げ出しました。

で、わッという声をあげて、

「稲吉を捕ッたぞ」

と捕手たちが叫んだものですから、それが雲霧の耳へもとどいたとみえて、

「よし、おれが大刀と命がつづくかぎり、いらざるまねをしやがった柳沢家のやつらを、斬ッて斬ッて斬りまくしてやる

から、見ていやがれ」

さながら、悪鬼のさまとなりました。脇差の刃もそれをとる手も、血みどろです。

おまけに、赫々と燃え上がっている焔の色が、彼の、死にもの狂いな形相にすごみを加えていますから、その姿だけでも二十や三十の捕手を畏怖して寄せつけないには充分でした。で、ここの方は、彼を遠巻きにする霜の如き十手が、御用御用といたずらにさわぐばかりで、雲霧の就縛、いつとも果てしが見えません。

時に。

その雨と降る火の粉と人数のなかを、血眼で疾駆しているひとりの貴公子がある。

また、もしその人に怪我をさせてはと、絶えず影について火をくぐり、煙をしのいで、あとから駆け歩いているもう一人の目明していの男がある。

「釘勘ッ、なんでそちは、わしのあとにばかりついて廻る？手分けをして、日本左衛門を探し出せ。わしは、お蝶の姿を見つける」

そのお蝶は、あのかごの中にかくされていたのだとは知らずに、こう、かんぺきの高い声で罵ッたのは、徳川万太郎です。

釘勘も、ここへ踏ん込むと共に、それは気が気でないのですが、何しろ、この自力を顧みない奔放な若殿を、ひとりで、修羅のなかへほうり出すことは、とてもあぶない気持がして、「でも、万一若様に、まちがいでもありましては、この釘勘が、後日申しわけが立ちませぬ」

と言うと、万太郎は、いやが上に、かんしゃくを起こして、「ばか、ばか。このような場合に、私を足手まといにしているやつがあるか。見くびるな、この徳川万太郎を！　万太郎だからとて、火や剣をおそれはしない。鼠賊の一人や二人、斬ッてすてるに何の造作があるか。――お前は裏山の方をさがしてみろ。わしは、炎をくぐって、この本堂のなかを見届けてみる」

と、意気軒昂です。

さあその調子ですから、釘勘は、なんとも、ハラハラさせられて、この人のそばを離れることができません。

やや説きおくれておりますが、万太郎と釘勘が、柳沢家の捕手をかりて、ここへ襲撃して来たことは、相当な筋道のあることで、決して偶然ではありません。

二、三日前から、鼻寺の附近には、充分、さぐりがはいっていました。ですが、一挙に今夜の決行をうながしたのは、前夜、しかも深更になって、柳沢家の甲府町方役宅へ、徳川万太郎宛にとどいた、無名の飛脚からです。

深更をおどろかした手紙は、それより少し前の時刻に、町の飛脚屋を叩き起して、かの秦野屋九兵衛が投じたものであることは、かさねて、説明に及びますまい。

無名ですから何者が投じたものかわかりませんが、とにかく、内容には、明夜御城下外の鼻寺で、日本左衛門とそのほかのものが、必ず落ち合うことになっているということ。

また、尾州家の秘蔵仮面を持つお蝶も、同じ時刻に、そこ

へ姿を見せるでしょう――として、意外な秘密があばいてある。

なか一日の余裕がある。で、手配はみッちりつきました。すでに、この近傍には、非人などに変装した者が、今日の夕刻を期して、ちらほらと立ち廻ってその間違いのないところを、彼へ報らせが飛んでいました。

前もって、柳沢家とは了解のあること、人数は、望み次第町方与力から繰り出すというので、万太郎の意気ごみは鋭い。

そして、寺まで来ないうちに、荒川畷ではお蝶らしい者の影を見つけ、また、そこに倒れていた、丹頂のお粂のふしぎな死骸をも見出しました。

その時、彼をよく知っている釘勘が、お粂のからだをあらためてみると、何とも腑に落ちない点があるし、かすかに呼吸もあり、体温もあるので、二、三の組子に言いつけて、ひとまず、お粂の体は、そこから役宅の方へ運んでおくように言い残し、枚をふくんで、鼻寺へ近づいたものです。

ところが。

第一に何よりの手ちがいを見たのは、人数が、しのびやかに山門へ近づくやいな、計らぬかごと人とが、向うから、何も知らずに出て来て、手配のととのわぬうちに、そこで、いやでも物音をあげなければならなかった不測の事です。

不意だったので、先も驚いたでしょうが、捕手の方も行動が一致しない。

とこうするうち、本堂から火があがる。人数はいたずらにちりぢりになる。そして、かんじんなお蝶の姿と日本左衛門が、いつまでも見当りませんから、万太郎たるもの、青筋を立てるいわれは多分にあります。

釘勘はまた、この人あるがため、自分の敏捷を欠いているのを知っていますが、口にはいえないで、

「じゃ、本堂の方は、手前が見届けますから、若様は、裏山をひとつ……」

と、それとなく、無難な方へ彼を避けさせようとしましたが、何がさて、人のさしずなどをうけて、そのとおりに動く万太郎ではありません。

「いや、裏山へはそちが行け。あの火の手をあやぶんで、捕手どもは、伽藍のうちからみな飛び出しておるではないか。ふがいないやつめ」

紅蓮の廂の上にのぞんで、煙の立ちこめた真っ暗な本堂の階段へ、もう、一散に走っております。

「ちッ」と、釘勘は舌うちをしましたが、さりとて、持てあました若殿を、持てあましたまま見すてもおけず、つづいて、炭のように焦げた本堂の板縁へ、十手をさか手にひらりと跳びあがりました。

むッと、面を吹いてくる、熱風と熱気に、

「あッ、万太郎様」

と彼は、思わず袖口で息をおさえながら、

「畳のある所へ、足を踏んごんではいけませんぜ。畳の上へ――」

向う見ずな万太郎も、おそらくそれは感知したでしょう。

柱、うつばり、暗澹たる焦熱のやみの中にすべてチラチラと火をハゼておりますが、畳ばかりは一見なんの異状もないように見えます。が、それへ身を乗せたが最後、やわらかに焦げきっている藁の火と共に、どすんと焦土の底へ堕ち込んでしまうことは明らかであります。

と――

板縁を廻って、奥と持仏堂の境まで来た時。

突然、一方の長廊下に当って、バリバリッという凄い物音です。

と同時に、何者か、煙をくぐッて、駆け出したような跫音を聞きました。

「やっ？」

いったん、そこを駆けぬけた万太郎が、不審と、きびすを返して飛んで来ると、今しも一室の源氏窓を蹴破ッて、火の粉と共におどり出した、大童な男の影。

「日本左衛門！」

喉のうちで、こう叫んで、万太郎は一跳足に、煙を払って追いました。

先の影は引ッさげ刀で、庭廊下をドドドドッと駆けだしてゆく。

「おのれッ」

そのうしろへ万太郎が、気いッぱいに斬りつけた抜き打ち。

「あっ！」――というと彼の刀は、青龍刀のような空鳴りをさせて、徳川万太郎そのものの体と共に、相手の肩を越して方丈の庭先へもんどり打って捨てられています。

あやしげな人影を追って、万太郎が奥へ駆けこんだ様子に、釘勘は冷やりとしながら、同じ廊下を韋駄天と飛んで来ますと、その心配もまにあわないで、あッ――というまに、先の相手に、彼は気味よく庭先へ投げ出されている。

松や楓などの庭木にくるまれているため、まだこの一棟には、たいして火が廻っていなかったのが、せめてもの僥倖でした。

万太郎を投げすてた者は、それに見向きもせず、なおすすんで、最後の一室へ馳け込みました。そして、そこの肘掛け窓へ足をかけて、外へ飛ぼうとするところを、釘勘が、

「野郎ッ」

と、たすきに組みつきました。

釘抜きといわれた勘次郎が、うしろから好みをつけて、こう組んで締めた以上は、たとえ日本左衛門でも、めったにこれを振りほどかせはしない――と彼には自信がありました。

「ええッ」

と、相手はもがいて、ハタき捨てようとする。

そして、その手にする大刀が、耳の近くを幾たびか空を斬ってうなりました。

が――餅のようにねばり付いた釘抜きの体は、容易に離れないで、そのまま、よろよろとうしろへ引き戻しましたが、やにわに、相手が膝をついて、肩をすかしたからぜひもありません。はッと思うとたんに、柔術の無双ほどき、ずでんと、前へうッちゃられる。

「くそうッ」
と、仆れながら釘勘の十手が、いきなり横に払って、敵の片脛をびゅッと打つと、
「あっッ」
跳ぶというよりは落ちるように、相手はうしろへ捨て刀をくわして、窓の下へ地ひびきを打たせました。
ところへ、先に庭先へ投げすてられた万太郎が、跳ね起きてそこへ来るなり、最前の相手と見ましたから、
「おっ、居たかッ」
とおめきながら、前の手痛い目も忘れて、無二無三に斬りつけてゆきます。まことに、この若殿の剣法なるものは、しばしば実例が示すとおり、釘勘の目でさえハラハラするものでありますが、長袖の大名そだちに似合わない、その無二無三流な意気だけは、愛すべきものであるやもしれません。
果たして、一方の者は、万太郎としては烈々な気込みで斬ッてかかった刃を、二、三合ほどチャリンと軽くはねつけたばかりで、まッしぐらに、彼方へ向って駆け出すのを、彼はまた得意となって、
「おのれ、待てッ」
と、追いかけたものであります。
五、六間ほど、脱兎の如く身を跳ばしてから、先の相手も、窓を越える時、十手で払われた脛の痛手が、にわかにこたえて来たものと見えて、よろりと前へのめりかかる。
「得たり！」と万太郎。
そこを、背割りにと浴びせかけましたが、のめりながらも、相手の体は、素早く横にかわっております。
で、二度までも、
「しまッた」
と斬りすべって、空を切って泳いだまま、体の取り返しもつかないところを、先の腕がその柄手を抑えて、ムズと手元へ抱きこみました。
すわ、若殿の危急。
と、仰天して釘勘は、駆けるいとまもありません。やっという声の下に、手を離れた早ほどきの捕り縄、五、六間の宙に分銅を躍らして、
「うぬッ」
と、投げた縄の端を、グッと睨んで、うねりを引きます。縄の手加減、あざやかに効を奏して、飛縄は万太郎の手首をつかんだ敵の左腕をグルグルッと巻きつけました。
が、左腕を捕っても何になりましょう。右手の閃刃が横なぐりにそれを払うと、縄は唐竹を打ったように、カラリッと鳴って二ツに断られている。
しかし、先にそれだけの隙を作らせたので、釘勘が、手元へつけ入る余裕はできたわけです。
隼のように、彼のふところへとび込む。
そして、振り込んだ十手。
同時に、サッと上がった敵の剣と、持ち直した万太郎の刀とが、そこに三角線の白い光を曳いたせつな！
「やっ、あなたは？」
愕然として、相手はそこへ身を屈して、あとのことばもな

く、ガバと、大地に顔をうつ伏せてしまいました。

万太郎は気技けがしたように、自分の前へひれふした男の姿を、不審そうに見つめていましたが、釘勘はせつなに膝を折って、

「もしやあなたは、金吾様じゃございませんか」

と、その手をすくい取って握りしめると、

「おお、釘勘」

かすかに面を上げて、おそるおそる彼と万太郎を見あげるまなざし、それは、まぎれもない金吾であります。

と、万太郎も愕然として驚きの目をいっそう見張りながら、

「えっ――相良金吾だと？　おうそちが、おお、金吾か……」

とばかり、ただあきれたように自失している。

彼として、金吾の姿をここに見たのは、まったく思いもうけぬ突然でした。その意外さと共に、突然な邂逅が涙ぐましい感激をつきあげて、暫くは言うことばをすら知りません。

が――やがて万太郎の口から出たことばは、常々、金吾が恐懼していたような冷たいものではなかったのです。

「どうしたのじゃ、相良」

と、彼の肩へ手をのせました。

「かねて、釘勘からそちの消息は聞いていたが、なぜ、わしのところへ戻って来ぬのじゃ。この万太郎にあいそが尽きたか」

以前と少しも変りのない主従のことばです。いや、そういう階級意識を超えた愛熱がことばのうちに溢れていました。

「滅相もない仰せです。不肖者の金吾、ただ申し訳もござりませぬ」

彼には、そういうだけの答えしかありません。もっとつけ加えれば、まだここで万太郎と会うのは何としても面目がないということを言いたかったでしょう。

けれど、万太郎はこの奇遇に何ものも忘れたような満足をあらわしている。そして、釘勘と共に、どうしてここへ来合せたかとたずねましたが、彼は、熱海以来の経過や秦野屋九兵衛の助力のことなどを、ここでくわしく話すには、あまりに心がせいているので、簡単にその要点だけを言って、すぐに、日本左衛門のあとを追おうとして立ち上がりました。

で、釘勘も万太郎も、にわかに奇遇のよろこびから醒めて、彼と共に、鼻寺の庭から灌木の小道をわけて、日本左衛門が逃げのびたとおぼしき裏山へ駈けあかって行きます。

その頃ちょうど本堂の方で、轟然たる炎の音響が地鳴りをして天地に狂いました。建物の中心が焼け落ちたのでしょう、一瞬の後は、黒煙りと火の粉ばかりがその辺りにたちこめて紅蓮の勢いはやや下火です。

で、夕焼の灼光が滅したように、裏山の一帯が急に暗くなったと思うと、そこの頂上に頬杖をついていた般若の顔も薄れて消える。

姿は薄れてしまいましたが、そこで、九兵衛のつぶやきだけは聞こえました。

「……あ、とうとう焼け落ちてしまいやがった。しかし、どうしたろうな、金吾様の方の首尾は」――と。

ところへ。

数歩の距離にガサガサと人の来る跫音がしたので、九兵衛はあわてて仮面をはずし、ぽんとうしろの草むらへ飛び込みましたが、先もその物音を怪しんだと見えて、急に足を止めた様子です。そして暫くの間双方が、そのままの距離を保ってさぐり合っていましたが、やがて、乱びん蒼白な面をなし、抜き刀をひッさげたその人影は九兵衛のすぐ目の前を抜けて、木賊谷の方角へ風のごとく駆け過ぎてゆきました。

「いけねエや」

そのあとで、姿を見せた九兵衛は、腰かけていた石仏を踏み台にして、

「うまく網の目を抜けやがった。今なあ日本左衛門だ」

と、舌打ちをしてのび上がったものです。

間もなくそこへ、息をせいて追って来たのは、彼が、今夜の首尾いかにと、案じていた金吾です。そして、釘勘も来る、万太郎も勢い込んで追いついて来ます。

しかし、すでに長蛇は遠く逸しているので、その意気込みのやり場もありますまい。

そこで。

待ち設けていた秦野屋九兵衛は、自分の手に収めておいた洞白の鬼女仮面を金吾に手渡しました。

久しかりし流転の般若は、よろこびにふるえる金吾の手にかかえられながら、改めて、万太郎の手許へ返される。

日本左衛門という呑舟の大魚は、遂にその晩、それ以上の追捕をつくすべくもありませんでしたが、ともあれ、聖天の河ッ童穴以来、一同の心をなやましていた仮面だけでも、無事に還る人の手へ返って来たのは、まず、上乗とまでは行かなくっても、首尾よく運んだものと言わなければなりません。

このてがらは一に秦野屋の奇策にあるところ、金吾は万太郎のよろこびをうける前に、その礼を先に彼へ述べなければならないと思いました。

しかし、九兵衛はそんな面倒な礼などをうけている顔つきもなく、もう菅笠を引っ被って、

「じゃ相良様、いろいろお話もございましょうから、手前は一足お先に仲間の者を追いかけます。え？　何処へって仰っしゃいますか？　木賊を越えて秩父の奥、秩父をすぎて中仙道、それから上総の鹿野山で落合おうというのが仲間の約束でございますから、日本左衛門もいずれその方角で……。じゃ、また秩父か何処かで、お目にかかる事になりましょう、何しろあっしのような日蔭者には禁物な親方がそこにおいでですから、ひとまず御遠慮いたします」

と、釘勘の方を向いて笑いました。

あっ……

気味のわるい薄笑いを自分に向けられて、釘勘は初めてハッと感づきました。こいつは日本左衛門と秤量に掛けてどッちともいえない凶状持ち、秦野屋という老賊ではないかと。

けれど、九兵衛はそのとたんに、器用にどこかへ立ち去っていました。

こう砂も立てない器用な逃げかたをされると、目明しとしての釘勘も、さまで口惜しい気持にもなれませんでした。ただ、金吾と彼との関係を不審と思って見送ったのみであります。

その疑点は、やがて金吾の口から解いて話し出されました。――彼がもと金吾の父に仕えていた者であること、また報恩的な行為に出た老賊の気持など、その動機から今夜までの経過をつぶさに聞くと、万太郎は一も二もなく感激して、

「そういう者であってみれば、縄にかけるのは痛ましい。なあ釘勘、日本左衛門は捕えても、秦野屋だけはゆるしてやるがよいぞ」

と、彼の顔色を察して言いました。

しかし、釘勘はそれに対して、承知したとは言いません。幕府から法縄をあずかる自分の立場から見れば、賊と名のつくものは、日本左衛門だろうが、九兵衛だろうが変りはない。たとえばそれが血縁のものであろうと、見のがすことは出来ないのです。

で、何とも答えなかったものだから、その問題にはふれないで、話はその先の相談にすすんでゆく。

さし当って、何よりの当惑は、仮面の処置です。それは一刻も早く市ヶ谷上屋敷の尾張義通――万太郎の兄なる人、および憂苦に閉じられているであろう父の尾張中将の手許へ送り届けなければなりません。

だが、万太郎には、それを江戸表に携えて行って、屋敷の勘気を解いてもらおうなどという、素直な考えは毛頭ない。おれの跳躍はこれからだ！

今までのことは、ほんの序曲でしかない。夜光の短刀をさがそうとする途中の一波瀾でしかありはしない。

こう考えている彼です。

気がかりだったこの仮面さえ江戸表へ届けておけば、もうなんらの後顧なく、夜光の短刀の捜索に歩くことができる。

義通の身も父の中将も、秘蔵の仮面さえ元の屋敷へ還ってくれば、安泰なものである。一個の万太郎は、一個の放縦児とゆるしてもらって、勘当のまま初一念どおり、これから先こそ羽根の伸ばしたい放題に振る舞うのだ。やがて、夜光の短刀を手に入れる、そして南蛮船に身を投じる、そしてあこがれの海のかなた、羅馬の都府を訪れる――

「愉快だ」

万太郎の胸はおどる。

それはいいが、とにかく、目前の使いに困りました。誰にこの仮面を託して江戸表へやったものだろうか。

元より釘勘のからだにはひまがない。金吾はこれから秩父の道へ日本左衛門を追跡してゆくと言う。

いや、自分も釘勘も、一刻も早くここの始末を切り上げて、同じあとを追わねばならぬ。――あの切支丹お蝶の籠を追って。

とすると、さしずめこの仮面を江戸表へ届ける使いはない事になります。そうかと言って、心のわからぬ者に持たせてやるのも不安心だが……と考え込んでいるうちに彼の胸底から、ニコリと笑った小童の顔がうかびました。

「そうだ、次郎！　高麗村の次郎！」

横手を打って、万太郎は二人を連れ、ひとまずそこの裏山を降りました。

焼け落ちた鼻寺の余燼のなかには、まだ柳沢家の人数が、右往左往して動いている。

鶏血の秋

花梨の梢に白い花がうごく。山葡萄の葉がペルシャ更紗のように染まる。

秋のあゆみは目にも見えてきました。

やがて武蔵野の碧空にも、赤とんぼの潮流が、旅人の笠の上に流れて来ましょう。ことに峡谷の山ふところ、高麗の郷高麗村の部落は、もう何もかも秋めいています。

そしてこの秋を、部落の長の千蛾老人は、ひどくさびしく閉じこめていました。

「おわずらいなさらなければいいが……」

家付きの郷士たちはうわさしている。

「あまりのんきらしく、大きな声で、臼挽歌などうたうなよ」

部落の土民たちも気がねして、盆の踊り、石神の燈籠祭りさえも、今年はひッそりと済ましたくらい。

「おりん、そこを開けてくれ」

その千蛾老人が言いました。

例の宏大な屋敷――御隠家の奥ぶかき一室です。老人は、鶴のような痩躯を鎌倉彫の小机によせかけて、

「秋だな。……もう秋だぞよ」

と、庭面の障子をあけた小間使いのおりんに向って、二度ばかり同じことばをもらしました。

「秋でございます」

おりんは、そこへ三ツ指をついて、

「障子をあけますと、木犀のにおいがお部屋へ流れてまいります。陽に蒸れて、むせるようではございませんか」

「気のせいか、今年は木犀の花も薬のような香いに感じる。この冬は、わしは病床につくかもしれない」

「まあ、御隠家様が、常にもないことを仰せ遊ばす。そんなことがあってよいものでございましょうか、今日は、ほんとにお顔色がよくていらっしゃいます」

「いや、それはさっき、少しばかり酒をふくんだせいじゃろう」

「いつぞや、お酒蔵の掃除の時、蔵の底からたいそう古い、苔桃の銘酒を見つけたと侍衆が珍重がっておりました。なんでしたら、その苔桃の古酒を少々持ってまいりましょうか」

「止めておこう、酒もわしには慰めにならない」

「ごもっともでございます」

「おりん、もう、秋だぞよ」

「はい……」

老人の心をなぐさめることばに窮して、おりんもついうつ向いてしまいました。

「――どうしたろうな、月江は」

遂に、千蛾の口から、いつもの嘆息が出はじめます。

「夏ではないか、まだ暑いころではなかったか、月江が屋敷に戻らぬのは。――それがいまだに帰って来ない、手を分けてさがしてみても、姿も見せぬ」
「ほんとに、どう遊ばしたのでございましょう。いつか、うまやの馬を曳きだして、久米川の辺へお遊びに出たまま、とうとうお帰りなさいませぬ」
「わしは考えておる。だれか、狛家に遺恨をもつ者に、殺められたのではあるまいかと」
「おめおめと、そんな策にかかる、お嬢様でもございませぬ」
「では、甘言をもって、かどわかされたか」
「それとしても、何か、便りぐらいは聞こえそうなものと存じますが」
「そうだの、生きたか死んだか、風の知らせぐらいはあってもいい。それが、これほど手をつくしても、行方も知れねば安否も知れぬ」
「さかしい振りをするようでございますが、おりんが考えますには、これはきっと、お嬢様の御気性から、次郎殿をさがしにおいでになったに違いないと存じます」
「次郎をさがしに？」
「はい。お嬢様は、次郎殿がお屋敷から見えなくなったことを、たいそう悲しんでおいでなさいましたから」
「浅慮なやつじゃ」
老人の顔には、ひとりの愛娘を思いやる愛着と怒りとが、抑えがたなく見られます。
おりんは、千蛾老人のその苦悩に、心から同情をよせている。ほんとに今の御隠家様としては、月江様ひとりをこの世の楽しみとしていらっしゃる。その月江様にもしもの事があったら、このお方のあらゆる希望は霧のように散ってしまう。
今はすこやかでお美しいが、やがて良人をもつ年齢になると、必ず若くして死ぬという怖ろしい遺伝の血筋を断とうとして、幾年か御隠家様が苦しまれたのも、月江様が可愛いため、――そうしてその薬とする胆血をとるために、家付きの郷士に命をふくませて、幾多の旅人の生き胆をとられたのも、お嬢様が狛家の一つぶ種であるため。また、夜光の短刀をたずねておいで遊ばすのも、その愛児のために、より多くの幸福を残しておこうというお心なのに。
思えば、困ったことになったものです。
また、御隠家のおやしきには、いわゆる家の子と称する、狛家手飼の郷士たちも、何十人と居ることは居ます。
けれど、いずれも半農そだちの野武士であって、一朝の変に、野火をあげたり兇器をとるにはすぐれて役に立ちますが、今のような場合に、老人の心の話し相手となるようなものは、一人としてに見当らない。
おりんは、それも歯がゆく思われて、
（せめて、こんな時には、あの久米之丞でもたずねて来たら……）
と、ふだんは持つ、あのいやな性質に対する嫌忌も忘れて、その久しく訪れて来ないことをさびしく思う。
「そういえば御隠家様、あの関久米之丞はどうしたことでご

ざいましょう」
「久米之丞か」と、老人は気がなさそうに、
「久しく見えんのう」
「お嬢様がいらっしゃるうちは、毎日、うるさいように訪ねて来ておりましたが、近頃は、あのお人もすっかり姿を見せませぬ」
「わしが、彼に約束したことがあるから、その方で夢中になっているのじゃろう」
「それは、どんなお約束でございましたか」
「月江を妻にくれと言う——あれがな」
「僭越な。だから、私はあの男を好みませぬ。それで御隠家様もお断りなさいましたか」
「やると言うたよ。——ただし、夜光の短刀をさがし求めて来い。その上には、月江をくれようと申したのじゃ。すると久米之丞、たいそう自信があるように、屹度と誓って帰ったが、それからすっかり音沙汰がない」
「御隠家様、私がひとつ、行って見てまいりましょうか」
「どこへ？」
「久米之丞の拝島の家へ」
「そして」
「お嬢様のご消息をただしてまいります。ことによると、あの男が、何かそれにかかわりがありはしないかと思われますので」
「そうか。だが、拝島まではだいぶあるぞ。女ひとりでは夜に入ってさびしかろう」
「いいえ、おりんにとっても、大事なお嬢様、じっとこうしている方が、かえって心苦しゅうございます。」
「では、だれか郷士を連れてゆくがよい。喬介でも三五兵衛でも」
「ひとりが結局よろしいかと存じます。それに、もしそこでも手懸りがなかったら、心当りをたずねたいと存じます故、どうか、四、五日の間、おりんにお暇をくださいますように」
午後でした。
染屋の宿の実家へ用達にゆくという体で、おりんは高麗の峡谷から武蔵根の裾へ降りてゆきます。
山を出て平野の一端に来てみますと、見渡すかぎりの武蔵野の原は、尾花の銀鼠いろの一色にぼかされている。そして、その尾花の波のなかを、紺土佐の日傘に赤い帯のうしろを見せたおりんの姿が、
（お嬢様。月江様）
心のうちで呼びかけて探してゆく。
峡谷のお屋敷を出て、ここの広い秋の天地をながめますと、おりんはもうすぐ其処らで、月江と会うような気がしてなりませんでした。
ぽーんと芒の中から蹴鞠が空へとび上がって、あの軽快なお嬢様の姿が両手をあげて自分の名をよぶような気がする。
見るまにあなたから一頭の駒が近づいて来て、駒の上から、下げ髪の月江が野菊を投げて——おりんやこっちだよ——そ

う言って駆けすぎて行くような意外が、今にも目の前に現われそうな気がするのでした。

けれど、それは尾花の靄に幻をえがいているおりんの白日夢です。歩けど歩けど月江はおろか、逢う人とてはありません。

なんと静かな武蔵野の昼でしょう。

彼女はすこしくたびれました。まだ久米之丞の家のある拝島までは、そこから一里半はたしかにある。

汗ばんだ額ぎわの白粉を小菊紙でたたいて、日傘をたたみながら暫くそこに休んでいますと、どこかでかすかな人声が流れました。

「次郎や――次郎やア……」

それは肉声です、人が人をよぶ声です。

ふと、その遠い所に、おりんが四方をのび上がって見ますと、彼方の芒の道を分けて、土民の女房らしい年増の女が、

「次郎やア……」

と、哀傷的な声を長くひいて、しきりとその辺りを見廻しています。

やがて、おりんも日傘を手に小走りに駆けだしていました。近寄って、年増の女を見ると、彼女の想像にたがわず、それは野鍛冶の半五郎の妻――かの高麗村の次郎の母親です。

「お常さんじゃありませんか」

声をかけると、女はびっくりしたように、取り乱した姿を気まりわるげに、

「あ。おりん様でしたか」

そこへ屈んでしまいます。

「次郎さんを探しているんですか」

「はい。次郎の居所を知っていたら、おりん様、どうか教えてやってくださいまし」

お常は垢によごれた袖口を目に当てて、さめざめとそこに泣いている。

「私もお嬢様の居所をさがしに出て来たところなんです。じゃ次郎さんも、どこへ行ったか分らないのですね」

「あんな不孝者はございません」

口説くようにお常はおりんへ話しだします。

「その帰らないのも、もう十日や二十日ではないのでございますよ。どこを飛んで歩いているのか、親の心配も知らないで、ちッとも顔を見せません。で、毎日、今日は帰るか、あしたは来るかと、鍛冶小屋の軒に立って見ていますと、さっき、甲州路から来た一人の旅の人が、なんでも久米川の辺で、野槍を持ったそんな小僧がウロついていたと教えてくれたので、急いで探しに来たんですけれど……」

「見つからないのでございますか」

「足も声も疲れてしまって」

「それはまア……」とおりんは、お常の素足から血のにじんでいるのを痛々しそうにながめながら、

「人違いだったのでございましょう。あの子がこの辺にいるものなら、何で家に帰らずにいるものですか」

「そうすると、あれは他国へ行ったのでしょうか」

「さア、それは分りませんが」
「大それた子でございます。ほんとに末おそろしいようなやつで」
「いいえ、狛家のお嬢様まで、同じ頃に行方知れずになっているのですから、これには何か、ふかい理由があるに違いございませぬ。私はそれについて、拝島の関久米之丞の所へ様子をただしにゆくところですから、ことに依ったら、そこで仔細が分るかも知れません。そうしたら、すぐにお宅へも知らして上げましょう」
お常が、一緒に来るというのを無理に帰して彼女は、そこから久米川に沿って歩みだしました。
すると、間もなく、また彼女を追いかけて来た男があります。お常が帰るとすぐに駆けて来たものらしく、野鍛冶の半五郎が、拝島まで送ってゆくと言って、おりんのあとにつきました。
次郎はすきな子だし、お常は質朴な女だしするが、おりんは前から片目の半五郎の性質の悪いのを聞いているので、その親切もなんとなく気味わるく思われて、
「帰って下さい。ひとりで行きますから」
たって断りましたけれど、半五郎は帰る気ぶりもありません。黙々として尾いて来ます。
しかし、そうして半里ばかり歩くうちに、おりんの懸念も薄らいできました。半五郎がついて来たのは、決して、ほかの邪心をかくしているのではなく、彼もまた、次郎の身を案じて、一刻も早く、その安否が知りたいためだという事が、動作やことばのうちに、正直にあらわれて見えたからです。
「半五郎のような破落者でも、わが子の心配には、あんな素直な人間になって、しおれ返って心配しているものを」
おりんは御隠家様の憂うつを、いとどお気の毒に思いやりました。そして、久米之丞の浪宅を訪れたら、そこに、何かの手懸りがあるようにと、次郎の親のためにも念じずにはおられません。
程なく七ツ下りも少しすぎて、拝島の岡にたどりつきました。
岡の上の落葉松の林が、うすずく陽に赤く染められて仰がれます。関久米之丞の浪宅の屋根は、そこより低い所の真ッ黄色な雑木の葉がくれに黒く見える。
例の荒れはてた岡の屋敷。
くずれた土塀には蔓草の葉が縦横に這い、骨ばかりな冠木門は、あらかた雑草に埋められております。
そこを通ったおりんと半五郎は、いくら郷士の住居でも、これはあまりな荒れようとあきれながら、母屋の前にかかりましたが、いくらおとずれても久米之丞の返辞がないので、
「留守であろうか」
と、がっかりして辺りを見廻しました。
されば、いくら訪れても、返辞がないのは当然でした。この荒れ屋敷に住む関久米之丞は、いつかここへ駒をよせた月江と共に八王子の町に向い、あれから小仏越えにかかって自分の野望を遂げようとしたため、かえって、月江を谷底へ失

い、おのれは通りすがった日本左衛門と先生金右衛門のために殺害されてしまっている。

その死骸さえ断崖へ蹴込まれて、たれひとり彼の死を里へ伝えたものもありませんから、骨ばかりの冠木門と朽ちはてた母屋の住居は、落葉や秋草の離々たる岡に、今もって帰らぬ主人に待ちぼけをくッています。

ただひとり、ここの台所に働いていた老婆も、いつか姿が見えなくなって、団栗の木の物干しに、洗濯ものの懸ることもなくなりましたから、この分でゆくと晩秋の月夜には、女狸が子を生みに来るかも知れないほどな空屋敷なのです。

返辞のあろうはずはありません。

でも、そうとは知らないおりんは、念のためにと、半五郎をうながして、家の裏手へ、廻って見ました。

と、そこに。

あるべからざる人影が三人、真ッ赤なものを取りかこんで、じッと腕ぐみをし合っている。

真ッ赤なものとは鶏の血のような、葉とも花ともつかない植物が、そこに群生していたのです。今思えば、それは鶏頭花の種属ではないかと想像されますが、まだその時代には、葉鶏頭も花鶏頭も日本の土に輸入されてなかったはずですから、おそらくそれは誰の眼にも奇怪な植物と見るよりほかの知識しかなかったものに違いない。

「ウーム、妙な花だ」

「燃えつきそうな色だ」

そう言いながら見つめています。その植物を、その三人の男達が。

で、おりんはハッと足を止めて、後ろの半五郎を手で制しました。そして二人が、庭木の蔭に身を沈めながら、暫く、その男どもの行動を見ておりますと、いろいろ腑に落ちない点がかぞえられる。

第一は、三人の風ていです。

一人は蓑直し、一人は針売の旅商人、またもう一人は、小さなカラクリ人形の箱を首にかけているくぐつ師であるのです。

「こいつだよ、こいつだよ」

やがてその人形師が、おそろしい昂奮的な口ぶりで、花の根元にかがんで言う。

「どうもこいつに違いない。ごらんよ、この色を。……ええ、どう見たッて鶏の血ッてえ色だ。鶏血草にちがいないよ」

「鶏血草かなあ？　この花が」

「そうさ。まあこの色を見るがいい」

「それをじッと見つめていると、ほかの物が黒く見える」

「おそらくこんな植物が日本のどこにもありはしまい。羅馬のバチカノに咲いていそうじゃないか。ペトロ院の庭にうつりがよさそうな花じゃないか。強い信仰、殉教の血、愛の聖火、それらをしのばせるようなこの植物の色は、まったく、わしたち山岳切支丹族の遠い聖祖、羅馬の王族ピオ様のこのみに合いそうな花ではないか」

「――とすると、これこそ、今ヨハン様がたずねている、鶏血草にちがいないと言うのだね」

「そうだよ。わしはたしかにそうと信じている。それで、お前たちにも見てもらったのだが、ただ不思議なのはこの家で、だれが住んでいたのかその由来がわからない」

と、人形師の梅市、蓑直しの安蔵、針屋の丁二郎、そう三人がぐるりと向きを変えて、またその古屋敷を不審そうに見直しました。

もの蔭に潜んでいたおりんは、この屋敷には不審はないが、その人間が不審にたえません、その言語がいぶかしい。なんとしてもただの人形師や蓑直しとは思われません。

「とにかく、山の会堂へこのことを報らせて、ヨハン様に来てもらおうじゃないか」

こういったのは針屋の丁二郎です。すると蓑直しの安蔵が、

「いや、これが鶏血草と極まれば、何もヨハン様の御苦労をかけるまでもなく、おれ達三人でその下を掘り返してみたが一番早い」

「そうさ」と、人形師の梅市も同意の顔で、

「山の会堂へ報らせに行ったり、ヨハン様を連れて来たりするうちに、どんなやつが横合から出て、掘り返してしまわないとも限らない」

「じゃあ一つ、掘って見るか」

「鍬があるか？　鋤もほしいが……」

「あるだろう、物置に」

「なにさ、道具は手近に揃っているよ」

と、梅市は弾んだ声で、

「それ安蔵、丁二郎。どれでも一丁ずつ手に持ったり」

と、縁下へもぐり込んで、そこにほうり込んであった鍬や鋤を投げ与えました。

「おっと。手頃だ」

首にかけていた針の荷や、人形箱などを肩からはずすと、三人はひとしく樫の柄を握って、向い合せてきっと立つ。

まず、鍬をもった安蔵が、真紅な植物の根元を目がけて、勢いよくパッと一掘り入れる。

サクッ、サクッ……、

つづいて梅市の鋤や丁二郎の鍬も、土に刃を磨いて太陽にひらめきだす。キメのこまかい黒土の感触のよさは、素人園芸家も武蔵野の土を措いて他国にない味だと言っております、まるで菜根の肉を切るようにみるまに、六尺四方ばかりの土壌がくつがえされて、土の香いが陽炎のように立つなかに、怪奇な赤色の葉や花が捨て土のなかに埋まってゆきました。

三人は、ようやく無言の境に入って、額に汗をうかめてくる。

一尺、二尺ー三尺。

ボクリ、ボクリと土の音がするたびに、何か出て来やしまいか、何か手ごたえがして来るだろうと、眼も心も鍬の先にあつまって、他念のない有様です。

淋漓とたれてくる汗、汗にたかる土のハネ。

一坪ばかりの花の根を滅茶滅茶に掘返して、やがて四尺も掘下げてくると、キメの細かい黒土は粘質的な赤に代って、

なかなか捗が進まなくなりました。
「暑いぞ」
丁二郎は肌をぬいで、
「なんにも出ないな」と、ホッと息をつく。
「まだまだ、こんな事じゃ分らない」
「そうとも、まだ分るもんか」
安蔵も鍬を休めません。
で、丁二郎もつりこまれて、また必死に鍬を持つ。
「信念をもって掘れ。信念をもって掘れ」
「そうだ、これもひとつの信仰だ」
「きっと夜光の短刀が出ると！」
「ヨハン様が仰っしゃった。――鶏血草のあるところ、必ず夜光の短刀がある場所だと。――根気だ根気だ、根気のつづくかぎり掘れ。いつも山の会堂で、ヨハン様が読んで聞かせる羅馬王庁の文をくり返しながら掘ろうじゃないか――」

1　日本にて客死せる王族ピオ、かれの最後の地は関東江戸市に近き僻地なるべし。

2　ピオは世襲の夜光珠の短刀をもてり。

3　ピオは日本政府の追捕をおそれて人跡なきところに餓死せしならんか。

4　ピオは自然をこのめり。生前バチカノの草原の風趣を愛せり。あるいは江戸市西北の未開の曠野にかくれて天寿を全うせしか？

5　またピオは花をこのみ、ことに鶏血草の深紅を熱愛する癖あり。かれが日本渡航の理想は、バチカノの野に似たる平和の自然に、鶏血草を移植して学林の庭とし、日本における聖カトリック羅馬教の教会を建設するにありき。

6　またピオの通信は千六百〇三年――日本慶長八年の記号を最終として絶えたるも、絶対にかれは日本政府に捕われたるものにはあらず、そは、後の天草支会の報告書を綜合するもすべて一致すればなり。

彼等は懸命に掘りつづける。その王庁の文章をくり返しながら掘りつづけます。いつか文章に音律がついて歌のようにうたわれながら、根気をつづけているのです。

が――

土の色は黒から赤に変じましても、石の櫃も出て来なければ、ピオの木乃伊もあらわれません。

いうまでもなく、この三人は山岳切支丹族の信徒です。さすがに夜光の短刀をさがすにも、この者たちは慾ばかりでなく、ひとつの信仰が伴っていますから、土にまみれ、汗につかれて来ても、容易にその信念を曲げそうもありません。

懸命はおそろしいもの。

遂に、その信念が何か掘りあてました。

丁二郎の鍬の先に、カチッと、異様な手ごたえがあったのです。

カチッと鍬の刀先に触れたものがあるので、
「おや、何かあったぞ」
と丁二郎が叫ぶと、さてはと眼色を変えて、二人も気早に

そこを掘り返してゆく。
　上の底ふかく食い込むように埋まっていたのは、うツ伏せになった一個の人体です。背中のような部分が梅市のすくッた土の下から現われました。
「オオ」という蓑直しの安蔵、道具を投げて無我夢中に、手をもって土をかき分けます。その努力やあたかも土龍のように必死でした。
　そこで、梅市や安蔵の手に、掘り出されたものは何でしたろうか？
　見ると、背の短い、片足のない人体です。王朝風の結髪に、高麗模様の服装をまとい、指のない手が胸元に組んである。そして、髪、衣服、顔だちなどを考え合せても、男女の区別がつきかねる人体です。
　また、その人体は、人間の化した死蝋でも木乃伊でもありません。生まれながら霊魂も肉体も持たない素焼の土偶で、きわめて原始的な工法で焼かれた赤土の埴輪であります。
　で、がっかりしたのはその三人。
「なんだい、これは」
　と顔を見合せて、
「高麗の埴輪じゃないか」
「そうさ、千余年も前に高麗のコクリ族が、この武蔵野に移住して来た当時の品物だよ」
「つまり、高麗のコクリというのは、今高麗村の奥に住んでいる、あの部落の衆の先祖ッていうわけだね」
「その当時日本へ移住してきた、コクリの王族というのが、あの狛家とも御隠家様ともよぶ屋敷の血筋だということを聞いていたが」
「すると、ずいぶん古い家がらだな」
「だからこの武蔵野の草分けは、江戸太郎でもなし、太田道灌でもないし、徳川家康でもないということになる。文化の江戸ッ子はべつものとして、単に血すじだけの上からいうと、真の江戸ッ子の生えぬきというのは、高麗のコクリつまり朝鮮人ということにもなる」
「なるほど」
「が、どうする？　この埴輪を」
「そうだ」
　と、話のわき道からわれに返りました。
「そんな物は、自分たちのさがす、夜光の短刀に縁はない」
「いや、まんざら縁がないでもないぞ」
「どうして？」
「聞けば高麗村のやつらも、御隠家様とやらの命をうけて、密々に夜光の短刀をたずねているというではないか。さすれば、こッちの仇がたきだ」
「オオ。たたき壊してやれ、その土偶を」
「こうか！」
　というと安蔵が、手に持っていた埴輪を、力まかせに彼方の樹の幹へ向ってなげつけました。
　素焼の土偶は粉になって、四方へ破片を飛ばしたのです。すると、その樹のうしろあたりから、あっと言って姿を見せた男女がある。

それは、彼等のいぶかしい行動に目をみはりながら、そこに潜んでいたおりんと半五郎です。――その二人がにわかにバラバラと駆け出すのを見て、

「やっ！」と、辺りに人なきものと安心していた三人も、愕然として飛び上がりました。そして、

「きゃつら、高麗村の廻し者ではないか」

「いずれにしろ、今の秘密を聞いたやつ、逃がしては一大事だ」

言うが早いか、風を切ッて走った人形師の梅市は、いきなりおりんの襟がみをつかんで、

「や、てめえは狛家の女中だな」

さてこそとばかり、ねじ仆して、裏の方へ引きずり戻してくる。

「逃がすなッ、そいつも！」

こう叫んだのは針屋の丁二郎で、挟み打ちに廻った蓑直しの安蔵と共に、野づちのように逃げ廻る鍛冶の半五郎を追い廻しましたが、半五郎はいち早く、土べいのくずれた所を越えて、岡の中腹へと飛び降ります。

と――追いかけて行った安蔵と丁二郎も、黄色い木の葉を舞わせながら、姿は見えないで灌木の傾斜をザザザと下へそよがせて行きました。

山岳切支丹族は、もとより秘密の集団です。禁制の宗教を奉じて、山から山を移り棲む、漂泊の民です。

世に交わりを絶って、山や渓にばかり生きているこの仲間が、兇暴なのは申すまでもありません。

かれらの信奉するデウスの聖典にも、殺人の罪悪なことは教えてありましょうが、為政者の迫害に追われて、世間なみの陽があたらぬ深山に漂泊生活をしてくるうち、いつか子孫へ原始人的な性質をそだてて来たのは、まことに当然なわけで、生物進化の逆行とも言えますし、また、彼等に言わせれば、

（幕府がおれたちをこうさせたのだ！）

と、まなじりを裂く理由であるかも知れません。

とにかく、かれらは兇暴です。殺人の誡だけを、その宗門の聖典から、けずり去っている集団です。

ことにそれが、仲間の秘密を知られた場合に、いっそう強く、盲目的であったようです。

――おりんは生きた心地もなかったでしょう。うわさに聞いている切支丹族！　ひそかに狛家を敵視している山間漂泊族の仲間！

それに捕まったのですから、最後です。けれど、彼女もさすがに、月江にかしずいていたくらいな女、めめしい悲鳴はあげません。相手のなすがまま、ずるずると前の場所へ引きずられて来ました。

「やい！」

丁二郎の目には、争われぬ血のすじが走ってみえます。身なりは世間を歩く都合で、おとなしい行商人となっていますが、殺気立ったその全身が、動物的な屈伸をして、山男の兇暴さを思わせます。

「てめえはたしか、高麗村の人間だろうが」
彼女をそこへ突っ放して、責めだしました。
おりんはわるびれずに、
「はい。御隠家様の召使いでございます」
「聞いたろうが、今おれたちが話していたことを」
「べつに……」
「うそをつけ、うぬは、狛家の廻し者にちがいない」
「いいえ、用事があって来たのですから」
「人の居ないこの空屋敷へ、なんの用事があって来た？」
「関久米之丞をたずねて参りました」
ところへ、息をせいて戻って来たのは、安蔵と梅市で、
「残念なことをしたよ」
来るなり言って、野鍛冶の半五郎を逃がしたことを、いかにも口惜しげに告げました。
その腹いせもおりんの身にかかって、
「こいつ、どうしてくれようか」
と、二人が彼女の両手をつかむと、
「埴輪の身代りに埋めてやれ」
梅市がカラカラと笑って言う。
「おう、穴も人がたに掘れている。安蔵、声をだすとうるさいから、何か女の口へ」
「猿ぐつわか」
「そうよ、早くしろ」
「よし！」と言うと、羽がい締めにしたおりんの口へ、むごい布が廻されました。
自分の呼吸がつまりかけたせつな、おりんは初めてヒーと懸命な救いをよびましたが、もうだめです。鳥飼の腕へ小鳥が爪を立てるよりも、効果のない反抗でした。よしやその悲鳴が生き霊のように武蔵野の宙を馳けめぐるとも耳にとめる往来の人がありますまい。
彼女の体は、鶏血草を掘り返した坑の中へ突き落とされて、忽ち土をもって埋められようとする。生ける埴輪は生きながら埋められてゆく身をもがくのみです。
すると。——誰も人の住んでいないはずの空屋敷の中で、何か変な物音がしました。
「おや？」
と切支丹族の三人は、耳をすまして振向きましたが、気がついてみると、たそがれの靄がうッすらと流れて来ていて、いつか辺りは、あいろも分かぬ暮色であります。
それきりの事で、べつに変ったこともない。
家の中の物音は、野猫か鼠であったかも知れません。
その野猫のひとみのような四日月が、紺の深い夕空に懸っているのを仰いで、
「おお、思わず遅くなった」
「帰ろうぜ、山の会堂へ」
針屋の振分、人形箱など、あたふたと身につけると、彼等は風のごとく岡の空屋敷から消えました。
……
あとには、四日月の白い光が水のようです。土とも草とも分らぬ狼藉なそこらに、雨のような虫の声。

松虫、すず虫、くつわ虫、かんたん、こおろぎ、かねたたき、あらゆる虫の音が、わが秋の夜ぞとばかり啼きすだいています。

と――空屋敷の中でポッと一つの灯がともりました。そして、さっきは閉まっていた盲目窓が半分ばかり開いている。

不思議です。

そこに居るはずもない人間が居たのはとにかく、生ける埴輪とされた土中のおりんをなぜ助けてやらないのか。

時々、虫の音がハタと止む。

根こそぎにされた鶏血草がうごきます。わずかに、土がうごいています。それが止むとまた虫が啼きすだく……。

なぜあれを助けてやらないのか。屋内の細い灯はあまりに冷酷ではないか。ごらんなさい、奥をのぞくと古簾を垂れて、じっと虫の音を楽しむごとく手枕で横になっている人間が見えますのに――。

般若の口笛

同じ日の夕方のこと。

八王子の宿の灯を遠いうしろにして、満目、芒と露ばかりな武蔵野の一路をたどって来る佳人があります。

ところどころのゆるい小川は、観世水のような紋様を流し、空には、蒔絵師の指で研いだような細い夕月がある。

「次郎や」

下げ髪の人が言いました。

「はい」

「なんて美い虫の音だろう。どんないい楽器を持って、どんな声のいい歌い手が集まっても、こんなわけにはゆくまいね。おまえも口笛を吹かないの」

「おいらの口笛なんか、ちッともいい声でありゃしないもの。折角ないい虫の声が濁ってしまうでしょう」

「そうでもないよ。おまえが退屈まぎれに、毎日小仏で吹いていた口笛は、なんともいえない上手だったよ」

「あれはねお嬢さん。高麗村の臼挽き歌をやっていたんです」

「臼挽き歌を口笛で吹いていたの」

「ええ」

「やってごらん」

「やってみましょうか」

手に野槍を持ち、顔に般若の仮面をかぶっていた高麗村の次郎は、その仮面をヒョイと額の上へめくりあげると、おかしな諧調で臼挽き歌の一節を吹き出しました。

それが済むと、すぐに仮面を元のとおり顔へつけ直し、野槍を杖に、したり顔して月江の供について行く。

聞き澄ましてから月江はまた、したり顔のうしろの仮面を振り向きました。

「次郎や」

「なんですか、お嬢様」

「最前から、おまえは面白そうに、仮面を顔へつけて歩いているようだけれど、なぜふところに仕舞っておかないの」

「もしか、落とすといけないからです。ハイ、手に持って歩

くよりも、ふところに入れて歩くよりも、顔につけて歩いていれば一番大丈夫ですからね。決して、面白がってかぶっているわけではありません。顔でお仮面をさげてあるいているだけなンです」

「おまえはほんとに言い抜けがうまいわ」

「だって、ほんとにそうなんですから」

「手で持って歩いても、顔で持って歩いて行ってもいいから、落としたりキズにしたりしないようになさいよ」

「はい、それは次郎も合点していますよ」

「何しろ、尾州様の御秘蔵仮面、万太郎様からくれぐれもお頼みをうけて来た大事な品、市ヶ谷の上屋敷とやらへお届け申してあげるまでは、おまえに大変な責任があるのですよ」

「分っております。ですから顔から離しません。早く高麗村へ帰って、御隠家様にこれを見せ、次郎の粗相をおわびした上に、改めてお暇をいただいて江戸の尾州様へこれを届けるつもりです」

「ほんとに、早くそうして上げなければ、万太郎様の御好意に対してすまないわけ」

「いつかあの人が鍛冶小屋へ泊った時、おいらと約束したことを忘れないで、わざわざ小仏までこれを持って来て、次郎よ、仮面が手にはいったから、おまえはこれをもって主人のわびをかなえてもらえ――こう仰っしゃって下さいました」

「お……河原へ出て来たね」

「熊川の岸でございますよ。ここを越えると拝島の裾でしょう」

川幅はかなりありますが、水は浅く、裾をくくり上げてジャブジャブと渡渉するには手頃な流れです。

月江が草履をぬいで着物の裾を折りかけると、

「お嬢様、おぶってあげましょうか」

と、野槍を杖に、次郎が背なかを向けました。

ちょうど、時刻にするとその頃でした。

かの切支丹族の三人が、おりんを生き埋めにしてその岡の家から、スタスタと拝島の裾へ降りて来たのは。

しかし、まだ熊川の岸までは、十数町の距離がある。また、野を縫う道も西へ東へ、或いは秩父へ甲州路へ、幾すじとなく走っている。岐れている。

彼等がもしその道を、熊川の方へとって来たらいやでも出会うのは必然です。

またもし、彼等がほかの道へ去れば、次郎と月江は事なくそこを通りすぎる代りに、おりんの運命も、あのまま誰にも顧みられないことになるでしょう。

いずれを祈るべきでしょうか。ただ草のみしげる草原のわずかな距離にも、大きな運命の岐路がある。

――あの鼻寺炎上の事があって後、万太郎は小仏の甘酒茶屋へ使いを立てたものとみえます。

そこには、まだ月江が体を養っていました。無論次郎もあれ以来、彼女のそばを離れていない。

万太郎の使いが次郎にもたらして来たものは、すなわち尾州家の秘蔵仮面洞白の般若です。かねて彼が約したとおり、

それをいったん次郎の手に貸し与えるかわりに、千蛾老人にわけを話してその了解を得た後は、江戸表市ヶ谷の上屋敷に届けてくれるように――という希望が添えられてある。

次郎のよろこび、言うまでもありません。

彼は、一刻も早く、それを持って高麗村へ帰り、千蛾老人に仮面を見せて、さらに江戸へ行くべく心をせきましたが、月江の打身が容易に癒えないので、それからも空しく一月あまりの日を、小仏の茶屋に過ごしていたのでした。

また。

万太郎はそれを次郎へ託した後、金吾や釘勘と共に、即日、甲府から秩父路へ向っています。

日本左衛門のあとを追い、かたがた切支丹屋敷のお蝶の行方を知るためであることは、言うまでもありません。

けれど、次郎と月江が小仏の茶屋に足をとめている間は、その後の万太郎を初め金吾や釘勘の消息はさらに聞かなくなりました。――甲府から奥秩父にはいる道は、甲武信の山脈の折り重なっている有名な嶮路で、不便は元よりのこと、めったに便りをもたらす飛脚の往来とてもない山地ですから、三人はいよいよ山また山の深くへわけ入ったものと想像されています。

谷間へ落ちた時のかすり傷や打身も、秋の立つ頃にはすっかり癒えて、月江の体は元の月江に回りました。で、次郎と共に、夏から五十日あまりの日を過ごした甘酒茶屋へ別れを告げて、小仏の秋を惜しみ、高麗村の秋をしのびながら、この武蔵野まで帰って来ました。

もう、なつかしい高麗村はすぐそこです。

今夜、月江は八王子の宿に泊って、あしたの朝早く、馬を雇って武蔵野を横切ろうといったのですが、次郎が、

「いいえお嬢様、夜の旅もいいものですよ。秋の晩はなおいいものでございますよ。高麗村だって、もう半夜も歩けば行き着くじゃございませんか。歩きましょうよ。歩きましょうよ、ここまで来て一晩泊るなんてばかばかしい。それに、決して道に迷うことはありゃしません、武蔵野といえば次郎の巣のようなものですからね」

強ってそういうものですから、彼の意にまかせて、宿をとる時刻の千人町を通り越して来ました。

そして、一歩武蔵野へはいると、秋草のしおらしさ、虫の音のおもしろさ、足のつかれも、たそがれのさびしさも忘れるほどですから、次郎の言に従って来て決して後悔がありません。

「ほんとに、夜の旅もおもしろいね」

次郎の背なかにおぶさりながら、月江がこういって興がりました。

彼は、その月江を背におぶって、熊川の浅瀬をえらびながら、

「昼間だったら、いくら人がいない所でも、きまりが悪くって、こんなことはできやしないでしょう」

と、ザブ、ザブと清冽へ足を入れて行きます。

「そう……」月江はホホ笑みながら、次郎の肩へやわらかい手を廻して、

「おまえ、私をおぶうときまりがわるいの」
「だって、お嬢様は、女だもの」
「でも、主従だから、人が見てもおかしくはないはずだろう」
「だって女だもの。お半長右衛門みたいだ」
「あら。おまえお半長右衛門なんてことを知っているの」
「熱海にいた時、おりんさんが貸本屋から借りたのを、読んで聞かせてくれたんです」
「まあ。おりんはあんな本ばかり好きなんだね。そしておまえは、そのお半長右衛門の話が分ったかえ？」
「分らない」
「分らないくせに覚えているの」
「絵が描いてあったんで、なんだか、お嬢様をおぶって川を渡っていると、おいらが絵になったような気がしたんですよ」
「ホホホホ、じゃ、その絵にあった長右衛門も、次郎みたいに、般若の仮面をかぶっていたかえ」
「ううん、もッと、きれいな男でした」
「女も、私よりずッと美しい、京鹿の子の帯をしめた娘でしょう」
「でも、女の方は、その絵よりもお嬢さんの方がなお美しい」
「嘘ばッかり」
と、月江が次郎の喉をしめるようにしますと、彼の胸は激しい動悸が打って、仮面の中の顔が火のように燃えました。
そして、その動悸が月江の指に感じられはしないかと、恐ろしいような心地もするのです。
鬼面をかぶッた年下の長右衛門と、油気のない下げ髪のお半。
二人は、見たことのない夢をみるように、熊川の浅瀬を渡ってゆきます。
祭文に歌われた信濃屋お半の夢は、死という夢を美しくみながら川にはいりましたが、この二人はあくまで強く生きようとする体と体を重ねながら、水を踏んでゆくのであります。
祭文のお半の夢と、今みている自分の夢と、どっちがあぶないだろうか——とも、ことさら考えてみる二人ではありません。
月江は、少女のようにハシャいで、
「次郎や、口笛をお吹きよ、口笛を」
「そんなことを言ってもむりではありませんか。川を越えてから歌います」
「私は、おまえの背なかで聞きたいの。そして、このまま寝てしまいたいの」
「寝てしまッちゃいけませんよ。しッかり肩につかまっていなければ、川へはまッても、おいらのせいじゃないからいい」
「ああ、落としてごらん、おまえも一緒に抱きこんで上げるから」
「じゃ、落としてもかまわない？」
「ああいいとも……」
そうして二人は、もう一足か二足しかない岸へ近づいたのを惜しんでいます。もっと、この川幅が広ければ——と胸にうずいているらしいのです。

ふざけているうちに、遂に次郎は手をはずして、月江を水へ落としました。しかし、岸は近いし水も浅い所なので、二人濡れもせず、石を投げられた鵠鴿みたいに、パッと向う岸へ飛び上がって、

「あははは」

「ホホホホ」

と、何がおかしいのか、手をたたいて笑いこけました。

その笑い声が、あまり時ならぬものでしたから、びッくりしたのは、かんたんや螽蟖ばかりではありません。野伏かなんぞのように、芒の根元へ身をかがめていた男が、

「あっ」と言って、のび上がりました。

そして男は、近づいてくる人影を、いぶかしそうに見透かしておりましたが、やがてのこと、牛のように歩き出して、自分からも歩を近づけ、

「次郎じゃねえか」

こう言いました。

「えっ」

「月江様じゃございませんか」

「オオ、誰だえ、お前は」

「野鍛冶の半五郎でございますよ」

そう濁す声で言って半五郎は、アアお父っさんかと澄ましている般若の顔を睨めつけて、

「この小僧め、いい加減にしやがれ。無断で家を飛びだしたまま、どこをホッつき廻っていやがッたのだ。おっ母アを見ろ、おっ母アを。毎日、目を泣きはらして心配しているじゃねえか」

「半五郎や、次郎に叱言をいっておくれでない。いろいろわけがあるのだから」

「そうだ、こっちもそんな場合じゃなかった。お嬢さん、今日おめえ様をさがしに来たお屋敷の小間使いが、切支丹族の男たちに捕まって、生埋めにされてしまいましたぜ」

「えっ、おりんが」

「ちゃん、それはほんとうかい」

次郎と月江とは、道々もうわさをして来たそのおりんが、生埋めという、稀有な奇禍に会ったと聞いても、にわかに信じかねました。

しかし、事実は半五郎の口からつぶさに語られて、二人の心を動顛させたのです。そして、半五郎自身は、かれらが拝島の岡を立ち去った後に、おりんの身を助けてやろうというつもりで、姿をひそめていたところだという話です。

「だが、その切支丹族のやつらが、まだこの岐れ路へかかって来ねえから、悪くするとそこらで打つからないとも限らない。何しろ、あいつらの眼に触れたら命があぶのうございますぜ、お嬢様、どこかそこらで、暫くの間かくれていた方がようがしょう」

彼のことばが終るが早いかです、次郎は野槍の先ッぽを拝島の岡に向けて、

「ちゃん、おいらがおりんさんを助けて来るから、おめえはお嬢様のそばを離れないでついていてくんねえ」

「生息気なことをいうな、小僧のくせにして」

「いいかい、ほんとに、お嬢様に怪我でもさせると、ちゃんだッて後でおいらが怒りつけるぜ」
「ど、どこへ行くんだ」
「知れているじゃねえか。おりんさんを助けによ！」
「ばかッ。あぶねえぞ」
「くそうッ、切支丹族のやつなんかに、高麗村の者がおそれていてたまるものか。ちゃんは臆病だから、尻ッ尾をまいて逃げて来たんだろう」
「このばか！　このばか！　命知らず――」
半五郎の目でみれば、どうしたって、まだ乳の香のうせない子供でしかありません。彼のような無頼者のおやじでも、その子が危難へ向って挺身してゆくのを見ると、狂気のような声を出さずにはいられない。
だが、次郎は耳もかしません。野槍をすぐッて駆け出しました。彼が真に怒る時には、般若の形相も怒りをおび、その赤ッちゃけた童髪はうしろに逆立って、さらぬだに凄い洞白の神作に、生ける魂をぶちこむのが常です。

秋の蚊帳

向う見ずな次郎の血相を心配して半五郎があとを追いかけましたから、月江もそこに残ってはいられない。
彼女もつづいて駆けました。
「ばかよ。ばか野郎よ」
と罵りながら、次郎のかるはずみを止めにゆく半五郎の声も、いつか聞こえなくなりますと、三人の影は一町ぐらいな間隔を置いて、ただ駆けんがために駆けているようにしか見えません。
一陣の野分が吹いて過ぎる、――ザアッと満目の芒が白い波を寝かす。
「ほい、しまった」
ところで切支丹族の三人づれ、岡を降りて来たところで、ホイと言ったのは梅市です。
「どうかしたのか？」
「忘れ物をしやがった」
「だれが」
「この頓馬が……」と自分の頭をたたきました。
「なんだい品物は」
「腰に差していた煙草入れ、丹波革の安物とはいいながら、中には大事なものがはいっている。あいつを忘れて来ちゃあ大変だ」
「そんな中へ、入れておくからわるいじゃないか」
「さっき鍬を持った時、邪魔になるので腰から抜いて、人形箱のそばへほうッて置いたのが不覚さ。実はあの中に、ヨハン様から渡された王庁の文の写しがはいっているんで……」
「そいつはいけない。あんな物が人手に渡ると一大事だ。おれ達も一緒に行ってさがしてやろう」
「いや、置いた場所はわかっているから、おぬしたちは、暫くここで待っていてくれ。すぐ一走りで戻って来る」
そこで梅市が道を取って返そうとして、丁二郎安蔵のふ

たりに別れかけた時です。
　どんと、何物かに肩を押されて、あっと安蔵がよろけたかと思いますと、ほかの者をも突き飛ばすようにして、ひとりの小僧が目の前を駆け抜けてゆく。
「やっ」
「待てッ」
　と、こッちで彼を呼びとめると同時に、盲滅法にすれちがッた高麗村の次郎も、はッと思い当ったことがあるらしく、彼等が追って来るのを待たないで、
「やい！」
　と、野槍を廻して踏み止まりました。
「おや？」
　向うから逆に、ヤイ！　と食ッてかかって来たのにも驚きましたが、その面にかがやいている爛々たる双眸にも胆をひしがれて、思わずタジタジと二の足をふんでいると、
「やい。てめえたち三人は、今、拝島から降りて来た山岳切支丹族の仲間のやつらだろうが」
　さてはこいつ、どこかで様子を聞きかじって来たな――と思いましたから、三人は同じように山刀の喉をつかんで、バラバラと次郎の前に立ちふさがりました。
「小僧、うぬも高麗村の人間だな」
「おおよ。おいらは高麗村の次郎ッてんだ」
「そして、さっきの女を助けに来たのか」
「あたりまえだ！」
「どッこい、そういう用ならここを通すことはできない。まごまごすると、おのれも鴉の餌食だぞ」
「なにを、こいつら。おいらの胆刺の味をなめたいか」
　と、やおら次郎は、鋭利な刃物のすげてある牛蒡のような黒い棒を横に持って、三方に立った三人の人間を、どいつから先に突こうかと見廻しました。
　その一足あとから、半五郎につづいて、月江が息をせいて来てみた時には、次郎は血ぶるいをしていました。
　すでに、野槍の穂さきは血糊をなめ、足元には、ひとつの死骸が草をつかんでうツ伏している。
　仲間のひとりが、いわゆる次郎の言うなるキモサシの槍玉にあげられたので、あとの二人、蓑直しの安蔵と梅市は、でなくてさえ兇暴な目をつりあげて、山刀をふッて次郎を挟撃している最中。
　それを見ると半五郎は、わが子の大胆さにあッとあきれました。咄嗟にかれは、本能的な怒りを発して、
「この野郎」
　いきなり梅市と安蔵に打ってかかります。
「やっ、てめえは」
　と、相手の狼狽に、いよいよ勇をました高麗村の次郎は、手に馴れきッたキモサシを、槍にも棒にも刀にも使いわけて、
「ちゃん！　あぶないから退いていなよ」
　と、かえって半五郎の身を子供のようにあやぶんで叫びました。
　たかのしれた小僧と思いきや、稀代な野槍の鋭さに、彼ひ

とりでさえタジタジでいた安蔵と梅市は半五郎にうしろを襲われて、もう一堪りもありません。
「うぬ、おばえていやがれ」
「山岳切支丹族の名を忘れるなッ」
いつも、捨て台詞と凄文句は、弱者のでれかくしと極まっている、そこで雲を霞という文字どおりに、二人は一散に逃げ出しました。——逃げるに逃げいい武蔵野の原を。
そのあとで、ほッとしながら半五郎は、こんがら童子のように突っ立っている次郎の姿をながめて、
「こン畜生はまあ。こン畜生はまア……」
褒めていいのか、怒ッていいのか分らないで、
「末おそろしい餓鬼だ」
と、今さら、舌を巻きました。
彼のちゃんは舌を巻いたりなどして、がっかりしておりましたが、次郎はまだ今の張りつめた気込みを少しもゆるませないで、
「さあ、早くおりんさんを」
と、すぐに野槍を持ち直します。
「まア、待てッたら」
「ちゃんも来るのかい」
「第一、どこでどうしたのか、その見当もよくついてやしまいに」
半五郎の口ぶりは、最前からみると、だいぶ子供の実力を認めてきました。
「拝島の岡だって言ったろう。え？　そうじゃないの」
「べらぼうめ、拝島といったって、ずいぶん広いじゃねえか。だからおれが案内してやるからそう急くなよ」
「じゃあ、ちゃんが先へ歩きなよ。——お嬢様、次郎のそばへいらッしゃい」
前ほどではありませんが、それから十数町の間も、月江にはかなり辛いほど急いで行く。
と、半五郎が、
「あれッ？」
岡の裾から上を見上げて、不思議そうな声を出す。
「なに？　なに？」
次郎は、事こそあれと、寄って来ました。
「変だなあ……」
「なにさ、ちゃん」
「この上の関久米之丞の屋敷には、ついさっき来た時には、たしか、誰も人が住んでいなかったはずなのに、今見ると、チラと、明りが点いている」
「久米之丞は殺されたよ」
「へえ、どこで」
「甲州境の小仏の山で——。だもの、空屋になっているのは当りまえだよ」
「それだのに、明りが点いているのは妙だと言うんじゃねえか」
「何処に見える？」
「も少し、おれの方へ寄って見な」
「……見えないやあ、なんにも見えないや」

「そんなはずはねえ、今、チラチラと木の間に光って見えた」
「お嬢様には見えますか。久米之丞の空屋敷に明りが点いているんですって」
「見えないねえ、私にも」
「それごらんな。ちゃんの眼は少しどうかしているぜ。見えたとすれば狐火か、それでなけりゃ、小仏で殺された久米之丞の人魂かも知れない」
そう言って、次郎は事もなげに笑いました。

とにかく三人は、岡の空屋敷へ急ぐことにしました。そこに灯がさしているか否かも、近づいてみれば解決がつく。
が、この押問答は半五郎の負けでした。行き着いてみると、例の古家は昼間よりシンとしていて、少しも変ったふうはなく、また半五郎の見たという灯のもれている様子もありません。
次郎と月江は、彼のあとについてすぐ草深い裏庭へ廻ってゆきました。おりんの身はどうしたろうか？　近づくに従って、予感の教える、いやな恐怖におどおどするのが、自分でも制しきれない足どりです。
すると、雑草の折れ敷いたところを目あてに、ガサガサ歩き廻っていた半五郎が、
「この辺だ」
と、有り合わせた鍬を持ちはじめました。
そこで、次郎もあわてて手伝おうとしましたが、仮面を泥だらけにしてはと気がついて、ふところから風呂敷を出し、仮面をくるんで襷の代りに肩から斜めに背負いこみます。
そして半五郎と一緒に、セッセと土の下をさぐりましたが、どうもその土の当り具合が少し不審です。
「おかしいなあ」
「不思議だ」
生唾をのんでじッと立っていた月江は、こわごわと寄って来て、
「どうしたの？」
たずねますと、半五郎も次郎も、一緒に鍬を投げだして、
「居ませんよ。おりんさんは」
「えッ」
この驚きは、ホッとしたよろこびでもありました。けれどまだ、それで彼女の生命に保証がついたとはいわれません。逃げたのであろうか？　場所が違っているのじゃないか？　と三人の迷いはかえってふかくなる。
「逃げたとすれば、高麗村へ帰って行ったにちがいない」
こう月江が気休めをつぶやきますと、半五郎は首を振って、
「いやいや。どうしたッて、ひとりで逃げ出せるわけがない」
と頑固に否定してしまう。
「じゃあ、おりんはどうしたの」
「さあ、それは分らねえが」
こんな会話をつづけ合っていると、どこからともなく、柴をいぶすような白い煙が、自分たちの足元へ低く這ってきたので、
「や。この家にはたれか人が住んでいるぞ」

そこで半五郎は、さっき途中でチラと見た灯が、決して自分の錯覚でなかったのだと気がついて、にわかに、納屋小屋とおぼしい屋敷の横手へばらばらと駆けだしました。

そこも納屋だか物置だか分らないほど荒れています。綿のような白い煙は、たしかにこの近くから流れている。

と。——彼や次郎の足音を耳に入れたのでしょう、立てかけてあった風呂場の戸をはずして、ひょいと外をのぞいた女があります。それが意外にもおりんだったのです。

おりんは、湯をわかして、髪や手足を洗っていたところでした。半五郎は呆然とするし、次郎や月江は手をとって狂喜しました。

なおさらのこと、おりん自身の驚きは申すまでもありません。探しぬいていた月江と次郎が、その戸の外に立っていようとは夢にも予想しない事ですから、胆をつぶして、にわかに会話を合すこともできない。

だんだん事情をたずねてみますと、おりんは気を失って、自分が土の下になった意識もなかったそうです。彼女が気がついてみた時には、この空屋敷の縁がわにあげられていて、板の間の冷たさに身ぶるいをすると共に、口の唾液に丹薬のにおいが胸までひろがって、清々としたそうです。

そうして、彼女が何気なく立とうとすると、奥の方で、こういう男の声が聞こえたといいます。

（お女中、べつに怪我もないようだから、もう安心するがいい。手足を洗うならば、風呂場に火打石も薪もある、ともあれ、夜中では里へも出られまいから、今夜はこの空家にやすんでゆくとするさ。どこでもすきな部屋へはいって、有合せのものを着てやすむがよい。ただ、灯や火の気は禁物、用がすんだらすぐ消しておくことだぞ）

そう聞こえたのは、三間も四間もへだてた薄暗い奥の座敷で、ことばの主の姿は見えない、ただほのかに、青い蚊帳の波がよれていたそうです。

明りがないので、どこの部屋も厚ぼったい暗が四角に区ぎられてあるのみです。おりんは、足の裏にねばりつく畳の音を忍んで、幾間もある奥の一室をさぐッて来ました。

かすかな寝息が聞こえます。

そこには静かというよりも、むしろ気味わるい蚊帳の布目がうッすらと青くよれている。

もう夜は肌寒い秋ですから、いかにやぶ蚊の多いこの辺でも、蚊帳をつるべき気候ではありませんが、何しろ、雨戸やふすまも不備なため、枕元にキリギリスが啼き、寝顔をコオロギに踏みつけられるおそれもあるので、蚊帳は夜の虫ふせぎにつるものとみえます。

かりにも、男の寝息がしている部屋なので、おりんは中の一間を措いて、それ以上は進みかねながら、

「最前、お救いくださいましたのは、多分あなた様と存じますが」

そう言って、畳に両手をつきました。

「——只今ちょうど、高麗村の者と、お主のお嬢様とがたずねてまいりました。まことは、明日を待ってゆるゆるお礼を

申すのが道でございますが、お嬢様が先を急いでいる場合なので、私も御一緒に今から高麗村へお供をいたします。――ついては、また日を改めてお目にかかりたいとは存じますが、どなた様でございましょうか、お名前だけを、伺わせてくださいませ。……もし、お寝みのところを恐れいりますが、おさしつかえなければ、あなた様のお名前なりと……」

幾たびとなく、礼をくり返していましたけれど、蚊帳はソヨともうごきませぬし、寝返りを打つ気振りもしません。

心残りの様子でしたが、おりんはぜひなく立ち上がりました。

外には、月江をはじめ、次郎、半五郎の三人が待ちぬいている。

やがて彼女はその人々と共に、夜更けにかけて高麗村の道をたどっていました。振顧ってみると拝島の岡が、悪夢の影みたいに黒く見える。

「だれだろうね？」

当然、四人の話題は、おりんの口から話された空屋敷の蚊帳に好奇をもち合って、しきりと詮索を試みましたが、遂に、おりん自身にも思い当るところがありません。

ほぼ小一里も歩いたかと思うころ、一行の前に、数頭の馬首と数点の松明があらわれました。近づいてみると、高麗村の郷士たちです。

何者が報じたのか、この夕べ、秩父の山岳切支丹族の者が里へ下りたという風聞が御隠家の耳にはいったので、おりんの帰りのおそいのを案じて様子を見に来た面々でした。で、月江はその明りに導かれ、意外に早く高麗村の屋敷に帰りつきました。

狂喜したのは千蛾老人です。オオ、オオ。ただそう言いつつ部屋へ連れこんで愛娘の手に涙をこぼす。居ならぶ郷士たちもその劇的な場面を見まもって共々に涙ぐましい情感にうたれました。

次郎の勘気も、この折からのこととて、一も二もなくゆるされました。何物より欲していた老人は石神の祠から失った洞白の仮面にも大して執着をもちませんでした。それは即刻、万太郎殿とやらの希望どおり、江戸表の尾州家へ届けてやれ、と至ってさっぱりした次郎へのいいつけです。

「ありがとうございます。では、近いうちに、これを持って、江戸へ行ってまいります」

次郎も、これでほんとに安心したというものです。で、またもや事故の起らぬうちと、彼はそれから二、三日目に、ふたたびわらじをはいて高麗村を出る。

峡谷の樹々は一日ましに朱く、秋の陽はきょうも高く澄んでいます。

御隠家様のゆるしをえて、江戸の尾州家へ仮面をとどけるべく次郎が武蔵野へ下りた時、おりんも二人の郷士をつれて、また、拝島の岡へ出直しました。

「もう、行かぬがよい」

と月江にも言われましたが、あのまま礼をしないのは心苦しいと言って、空屋敷の蚊帳をたずねてみたのです。

そこは、相変らずヒッソリとしていて、奥をのぞくと、昼

だのに、萌黄の色あせた蚊帳の吊り手が一所はずれたまま、ダラリと陰気な姿をしている。

けれど、そこに寝ていた人間は、きょうは影も姿も見当りません。やはりあれはこの空屋敷を巣にしていた者ではなく、折よくあの日だけ、行き疲れか何かして、この空屋敷に一夜を過ごしていた通りすがりの旅人に相違なかった……。

秩父異教国

金峰の嶮を避けて木賊をめぐると、同じ山越えの道でもよほど楽であります。――その木賊と金峰を前にひかえて、甲州を落ちて来た四ツ目屋の新助と雲霧の仁三の一行が足をとめておりました。

そこに、信玄の隠し湯という言い伝えのある、自然のいで湯と、かたちばかりの小屋がある。

しかし、湯治をしているほどのんきな道中ではありません。あの鼻寺の炎の下から、お蝶を山かごにのせて、命からがら落ちのびて来たのですから、一刻も早く、危険率のすくない秩父路から中仙道へ抜けて行くべきです。

それを、悠々とここに足を止めたのは、もうここまで来れば安心という見込みがついたのと、やがて自分達のあとから、日本左衛門や千束の稲たちも、同じこの道を来るにちがいないと、それらを待ち合す心もありました。

果たして、あとから一行へ追いついて来たものがある。それは秦野屋九兵衛です。なお、九兵衛の話によると、日本左衛門も同じ夜に山越えの方角をさして落ちたというので、つい一日のばしに待っていたわけです。

ところが、九兵衛が一行に加わって以来、稲吉も日本左衛門も、遂にこの信玄の隠し湯に追いついては来ませんでした。

「稲は召捕られたな」

雲霧はこう覚りました。

「だが、親分はどうしたろうか。秩父へ越えるとすれば、当然ここを通るはずだが」

と、四ツ目屋は、時折つぶやいて、小屋の前に半日も立っていることがある。けれど、この往還ばかりは、一日立っていても、ひとりの旅人を見ることさえない日が多いのです。そして、金峰や木賊に冷たい霧がながれてくるたびに、山は秋に染められてゆきます。

「九月のなかばになると、もう金峰の上には霙が来るッていうぜ。いつまで待ち合していても果てしがねえから、明日あたりは、立とうじゃねえか」

「そうさ、親分のことだから、あのおっとりとした様子で、わざと本街道へ出たのかも分らねえ」

「それとすれや、もうとうの先に、江戸か上総へ行きついて、あべこべに、おれ達の遅いのを案じているかも知れないな」

「どっちにしても、もうほとぼりもさめたろうし、長居は無用だ、立つとしようぜ」

「よかろう！」と、相談のまとまった翌日です。一同はまた山かごにお蝶をのせて、信玄の隠し湯から木賊の奥にはいりました。

登りや渓谷にかかると、お蝶は時々かごを降りて、素直にあるいておりました。無理に隙をねらッて逃げようとする様子もさらに見えません。その運命のあるところによって、生命をたもつことだけを条件に、彼女は煩悶をしない女です。

もっとも、秦野屋という策士が、あとから一行にまじっていますから、どういう隙に、四ツ目屋や雲霧の目をぬすんで、お蝶にことばをかわしているか、その辺のことは察しかねます。

とにかく、山から山へ、幾日かの初秋の旅がつづきました。

「気楽だなあ、ええおい」

雲霧は、連れの者へ笠を向けて、

「天下の兇状もちが、こんなにお練りであるいていても、見るやつはなし、追いかけて来る犬もない。女のあるく道だけに、関所を設けて頑張っている役人なんてえやつは、まったくいつも居眠りばかりしている道理だよ」

「だが、中仙道へ出ると、まさか、こう気楽にはゆくまいぜ」

「そうさ」

と、四ツ目屋は、お蝶のかごへ目をやって、

「第一、あいつに油断がならなくなる」

聞こえたでしょうが、お蝶は横を向いて笑っていました。

翌日も同じ山の旅。

次の日もおなじ山の旅でした。

その間に、左右の空に見た山をかぞえてみますと、源次郎岳、大菩薩、鈴庫、倉掛、乾徳山、みな一見識をもって、甲武のあいだに山脈をなしています。

こうして、一行が、この往来で難所の名のある、雁坂峠を越えてほっとした日の午後であります。

「おや、煙が見える」

「めずらしいな、人間が居るんだぜ」

と、雲霧と四ツ目屋が、顔を見合せて意味もなく笑っている。

ずいぶん、人を人と思わない雲霧なども、こんどの旅ではまったく人間が恋しくなっていました。あの信玄の隠し湯を出てからでさえ、まだ飛脚屋や炭焼などにも、ひとりも出会っておりません。そこで暫くの間は、あなたの空に立っている煙が、ひとつのたのしみとなって、部落があるのか、それとも炭焼のたむろか、猟師の小屋か、などとしきりに皆の空想の目標になる。

「久しぶりで、今夜は、あったかい蒲団で、あったかい御馳走にありつけそうだ」

と、雲霧が早くもそれを当てにするものですから、四ツ目屋の新助は、からかい半分に、

「だが雲霧。もしかして、山目付なんていう、役人などが居たひには、とんでもねエ御馳走を食うだろうぜ」

「ははは。そいつは、あやまるよ」

と雲霧が笑えば、かごかきや秦野屋も、一緒になって笑いました。

ところが、次第にそこへ近づいて行くと、一種異様なにおいが人々の鼻にさとられて来ました。猟師だろうか、人家だ

ろうか、さまざまに空想して来た煙も、誰の想像もあたッておりません。

白樺の樹によりかかりながら、車座になって、焚火をしていたのは十人ばかりの男どもです。火にかざしている手や、その着ている衣服が、どれもこれも、黒光りなよごれかたをしていて、鼻をうつような異臭はまさしくその一団から発している。

かごと旅人が、そこへ通りかかるのを見うけると、焚火のまわりにいた連中は、一様に首をこッちへ向けて、

「ご苦労さんでござんす」

「えらいこッてごす」

「ご苦労さんで……」

ひとりひとりあたまを下げて、長途の山の旅をねぎらうのでありました。まったく、人気のない山の中でふと出会った土地の者に、このあいさつをうける時ほど、郷土人のあたたかみと親しみを感じる場合はありません。

四ツ目屋、秦野屋、雲霧なども、人間の群れ争う都会のなかへはいると、それぞれものすごい兇賊と化しますが、さすがに、こんな平和な人たちを見ると、自分の暗い影も忘れて、

「よう、御連中、たいそう仲よくおそろいだね」

と、剽軽に話しかけて、

「すまねえが、一服やらしておくんなさいな」

と仲間にはいって、そこらへ腰をおろしました。

「さあ、旅の衆、火のそばによるがいい」

「なあに、せこせこ歩いて来たやつで、すこしも寒かアありません。……時に、変なことをきくようだが、おまはん達ゃ、なんだね？　へへへへ。なんだネっていう聞き方も不作法だが、御商売は何でござんす。どうも、猟人ではなし、お百姓さんとも思われねえが」

「あ、わしたちの、仕事かね」

「そうよ」

「わし達は、この辺の山から、漆を採っておりますんで」

「そうかい。じゃ、おまはん達は、うるし掻きというやつだね。いや、やつじゃねえ、御商売なんだね」

「へえ、うるし掻きでございます」

「道理で、変なにおいがしたよ」

「お客さん、そこらの桶にさわるとかぶれますぜ」

「なにさ、みんな面の皮のあつい手合いだから、そのことなら心配はねえ」

「皆さん、江戸の衆とみえるね。面白いことばかり言う」

「しばらく他人様とお話をしねえから、やたらに無駄口がたたきてえのさ」

「で、旅の衆、お前さん方は、何を御商売で、こんなところを歩きなさるのか」

「え。おれたちの商売かい？」

と、これには、ちょっと返辞に困って、ただニヤニヤと笑っていると、焚火の仲間に割りこんで、じょうだん口をたたいていた雲霧の前で、突然、ポーンと火薬でも投げ込んだような音がしました。

「あっ」
と、四ツ目屋までびッくりして飛び上がると、漆掻きは、いちどきに笑って、
「旅の衆、栗だよ、栗をくべてあったのだよ」
雲霧の仁三ともあろうものが、焼栗におどろかされて飛び上がるなどは、近ごろの大出来だと、かれも共に、自分で自分を嘲したいような苦笑にくすぐられました。
「焼けた、さ、旅の衆、栗をたべねえか、この辺の栗は、つぶは小さいが甘みがある」
と、漆掻きの男どもは、人にもすすめ、自分たちも灰の中から栗をかき出して、皮をむき合っている。
「ひとつ、御馳走になろうか」
四ツ目屋の新助も手を出して、
「ウム、こいつは甘い」
と、他愛がありません。
その間に、秦野屋はどうしたろうかと振顧ってみると、かれは、お蝶のかごの側で、鼻寺の法達に頼んで雇って来た四人のかごかきと、何かしきりにいい争っている様子に見える。
一挺のかごに四人のかごかきがついて来たのは、山越えには、是非その予備として必要な肩代りです。このかごかきどもは、鼻寺の法達や寺男の八助と知り合で、充分、腹蔵のない者たちだと聞いて来ておりますから、今日までかなり心をゆるして、仲間同様に待遇して来たのですが、それが、何を言い出して、九兵衛を手こずらしているのだろうかと、四ツ目屋の新助が立って行ってみますと、
「こんな所へ来て、困ったことを言い出しやがる」
と、九兵衛は舌うちをして、そのいさくさを新助に代ってもらいたい顔つきです。
「何をゴネているんだ、てめえたちは」
新助が問いただすと、
「なに、べつにゴネているわけじゃございません。ただ、あまり日数がたちすぎたから、ここらでおひまを貰いたいと、今、旦那にお聞き申してみたところでさ」
「そんな約束じゃねえはずだが」
「旦那の方じゃそういうけれど、こちとらの方じゃ、元々こんな遠方へ、それもたしかなあてもなく、やって来るつもりじゃなかったんです」
そこに漆掻きが大勢居合すので、すこし足もとを見ていうらしい苦情です。
もっとも、かごかきどもの考えでは、信玄の隠し湯あたりで、とうに引っかえしたい算だんであったのですが、帰るといえば、大刀に手のかかる対手であることは分り過ぎていたので、今日まで、折を待ちながら、いやいや従いて来たものです。
「ちッ。面倒な」
雲霧は目ですくって、
「おい四ツ目屋、酒代をくれてけえしてしまうがいいじゃねえか」
「だって」

「秩父の町へ行きゃあ、どうかなるさ」
「その町まで、まだどのくらいあるかもわからねえのに」
「お蝶だって、観念している、何も、あとの道ぐらいは自分で歩くだろう。どっちみち、ふた心のあるやつを連れてあるくのは、あとあとの為にもならねえことだ」
それも一理ある言葉ですから、新助は我を折って、四人のかごかきに相当な賃銀を与え、かれらの望みどおり、そこで放してやることにしました。
秦野屋は可とも否ともいわず、きせるをくわえて、帰って行くかごかきの影を見送っている。
かれのそばへ、かごを降ろされたお蝶が足を休めました。お蝶の目が、何か九兵衛に話しかけたいようにうごくのを、彼は気のつかない顔をして、ぷッと、たばこの火玉をてのひらに吹きました。
そのお蝶の美しさは、漆掻き達に少なからぬ驚異だったとみえて、彼等は最前から、鳴りをしずめてマジマジと気をとられていましたが、そのうちに、
「旦那がたはよいけれど、あの、かご屋を帰しては、その女子が可哀そうだ。おまけに、栃の沢までゆかないと、泊る小屋がないところだのに」
と、案じられるように、ささやき合っています。
雲霧は気軽に、
「どうだろう、今夜はおめえたちの部落へ行って泊めて貰えまいか」
「だが、わしらのいる部落は、すこし横道へはいる所だから」
「何里ぐらい？」
「一里ほどはありましょうよ。だが、そこへ来れば、あしたは秩父の町へゆく馬があるから、その女子だけでも乗せてあげたらようがしょう」
とにかく雲霧たちは人里に餓えている。部落と聞いても恋しい気がする。で、白樺の森にそいながら、漆掻きの導く道について行きました。
深林から深林へ、道はいくたびとなく折れ曲がって行きます。
西へ向いているのか東へさしているのか、この辺の地理になると漆掻きででもなければ、少しも見当がつきません。
そのうちに、行く手に明るい空がひらけました。森を離れたとたんに道は急落していて、その下に四方山にかこまれた盆地があります。
「わしたちの村は、あの盆地の底でございますよ。旅の衆、先へ下りたがいい」
こういって、指さす所を見ると、そこは足がかりもない絶壁で、頼りとするのは、一すじの縄梯子が下がっているばかり。
しかし、新助も雲霧も秦野屋も、身の軽いことにかけては漆掻きに劣らぬ曲者です。するするとつづいて降りる。お蝶はひとりの漆掻きの背なかに負われて降りました。
「おや？」
一同が下へ着いたかと思うと、今降りて来た縄梯子が、カラカラと上へ手繰り上げられたので、新助は雲霧にささやい

て、
「兄貴、すこし油断がならねえぜ」
「ウム……」と、彼の目もこの辺から猜疑ぶかく働いていました。
「あしたの朝になれば、秩父の町へゆく馬があるといったが、こんなスリバチの底のような所から、どうして馬が通えるものか」
「それに、縄梯子を巻き上げたりなどしやがって、どうも気振りが腑に落ちねえ」
「だが、ここまで来てしまっちゃ追いつかねえことだ。行くところまで行ってみるよりほかはない」
が——泰野屋は平然と黙りこくッて歩いていました。むしろ好奇の目をもって、盆地の風物をながめている。流れに添って部落へはいると、やがて大きな水車があります。水車のそばには自然木で組まれた、非常に頑固で原始的な小屋があり、小屋には小さな覗き窓が鳩の家のように切ってある。そしてそういう建物は、一戸ならず十数戸、樹木を隔て水をへだてて散在しております。
一戸の小屋の中からは、シューッと物を摺るような音が洩れる。また一戸の家の窓からは、意味のくめない郷土歌が、ふしおもしろく聞こえてくる。どうもこの盆地には、少なからぬ人口がおるようです。まだ目に見えない人家も大分あるらしく感じられました。
いよいよ不審に思ったので、
「おい、あの小屋にも、おめえ達の同職が住んでいるのかい」
と、新助が案内のひとりに問いますと、漆掻きが答えますには、
「あれですか。ありゃみんな細工場でございますよ」
「細工場……へえ？」
「今あるいて来た所に、大きな水車がございました。あれから水の力をとって、轆轤の歯車が廻っています。小屋のなかには大勢の者が、板を挽いたり、木地を轆轤にかけたり、磨きをしたり、仕上げをかけたり、そうして、彫るものは彫りをつけ、塗るものは砥の粉をすッて漆を拭きます。——そういう細工場なのでございます」
「はてね、そうして、何をこしらえるんだね」
「何ということはございませんので。盆、箸、箱物、椀のようなもの。クリ物も出来れば漆器も作ります。そうしてこの辺にドッカリと雪のある間は、作り溜めておくのでございますよ。つまり、これからがその季節で。それから春夏の間になると、わし達も旅支度をして、諸国へ売りにあるきます」
話は分っておりますが、雲霧も新助も、その説明を聞いてから、よけいに疑惑がふかくなって、見るもの聞く物、いちいち怪訝でないものはありません。
そのうちに一人の漆掻きは、かなり広い流れのふちに立って、
「おぅ——い。川番」
と、何か向うへ、合図をよびかけました。
川番——とよばれると、一人の男が、流れの向うに姿を見

せて、釣橋の仕掛けへ歯止めを咬ませた様子です。

あぶねえ。あぶねえ。

無断で、うかと足をのせようものなら、下の流れへ、蜻蛉返しというからくりにちがいない。

（油断をするなよ）

（気をつけろよ）

四ツ目屋と雲霧は、時々、目にものをいわせて警戒しあいましたが、秦野屋ばかりは相かわらずの黙々です。そしてお蝶も、あたりの物にばかり気をとられている。

「おい、旅の者、こっちだよ」

漆掻きはスタスタと桟橋を渡ってゆく。その揺れる橋を渡るのが、お蝶には面白そうで、秦野屋には用心がありそうで、雲霧と新助には不安そうです。

桟橋は十間に足りない短いものでした。渡ってみると其処此処に、さらに数戸の人家が目につく。

織物を織るのか、粉をつくのか、機械的な木音が、コトンコトンと何処からか洩れてくる。モンペをはいた若い女が、何かの壺を頭にのせて通りますし、石魚らしい魚をさげてゆく男も見かける。

部落とはいえ、宛たる山の小都会です。なおごらんなさい、突きあたりの形のいい山の裾にかかって、雲霧などの目には、一種不思議なともいえる、三角形の建物がたっています。

「さあ、この小屋が空き物だ。御苦労御苦労、よくお出なさいました、ろくな御馳走もありませんが、今夜はここでゆッくりとお寝みなさい」

自然木の横組み建で、熊の出はいりしそうな戸をあけて、

「さ、どうか御遠慮なく」

と、促します。

新助は二の足をふんでいました。たれより先に、お蝶がものめずらしそうに這入って行きましたので、

「じゃ」と、いや応はありません。

這入ってみると、そんなビクついたものではなく、草を編んだ敷物もあれば、毛皮、夜の具も片すみに積んである。なおのこと、炉には火ダネもはいっていて、くべる薪にも湯茶の道具にも、少しも不自由はないふうです。

「不自由はありがてえ、まるで何かこう、立派な宿屋にでもついたような気がするぜ」

とりあえず、疲れた足をのばし、脚絆をとき、それぞれここに一夜を楽しむことを忘れません。

「おい、旅の衆、お湯におはいり」

湯まであるのは勿体ない気がすると、なかば怖れながら、裏の風呂にゆくと、それも真っ黒な荒小屋ですが、野天風呂ではありませんし、次に来た食事の膳も、なかなか器用なものを食べさせるには驚かされる。

「だが一体、ここの家には主人がないのかしら」

「さあ、分らねえ」

「先刻、山の方に見えた、三角の屋敷はなんだろう」

「分らねえな、どうも」

「そして、何という所だい」

「なお分らないよ。何もかも分らねえ。おれもずいぶん旅を

したが、こんな山奥に、こんな土地のあるのを聞いたためしがない。――秦野屋の兄貴などは、相当に年をとっているんだから、何か、見当がつかねえかな」

黙りがちな九兵衛へ、新助がこう尋ねますと、九兵衛は初めて口をひらいて、

「ウーム、最前から、わしもずいぶん考えていたんだが、ここへ着いてからやっと分った。何しろ、ちょッと鬼門へ向いて来たよ」

「えっ。じゃ、何か凶いところへ踏み込んで来たのかな？」

その時です。

どこかで、カアーン……という鐘の音が、夢幻的な尾をひいて永く鳴りました。谷のような地形では、木の実の落ちる音さえ高く聞こえるのに、四方、山ばかりに囲まれた盆地の鐘、なんともいえない余韻です。

すると、ワラワラ、小屋の外を、人の足音が流れてゆきます。

その足音の流れもひとしきりで、内窓のひさしに白い星を見出すと、四方の山も一色に黒ずみだして、盆地は夜の底に沈んでゆく。

鐘が聞こえる――湖水の底にでもいて聞くような音響です。

小屋の炉の火はトロトロと赤いしずかな火になっていました、あたりが暗くなるほど、炉のなかの灰が白く、火の赤味がましてくる。

はッと気がついたように、雲霧はその火の色に目をこすりました。見ると、秦野屋も話をやめ、四ツ目屋の新助も膝をかかえたまま、うッとりと、いい気持に居眠っているので、

「お……」

何か言いかけようとしましたが、口に唾液がわいて、物を言うのもだるい気がしました。

そして、ごろりと炉べりに横になって、目をとじる、火の色がチラつく。また、目をあいてみると、秦野屋も横になり新助もそこに寝てしまう様子です。――お蝶は？　……と思ったが、振顧ってみるのも気だるい。

「眠い……」

雲霧はただもう眠くってたまらない。

カアーンと遠い鐘音が聞こえる。

「ああ、さっきの鐘だ」

そう思ううちに、その鐘も、だんだん耳に遠くなりました。

「寝ちゃあいけねえ。何しろ、油断のならない妙なところだ。寝るな、寝るな、寝入ってしまってはいけないぞ……」と、しきりに眠気をこらえていましたが、いつのまにか、彼の意識も霧のように、ぼやッと、わからなくなったまま、前後のけじめを知りません。

トロ、トロ……と炉のなかの暗紫色の火が、それからの、うごかぬ景色を明滅させておりました。時間にして、約、半刻ばかりの間……。

「寝た振りをしているのかと思ったら、ほんとにヘタばってしまやがった。……おや、お蝶も」

やがて、むっくり起きたのは秦野屋九兵衛です。炉を離れて、これも他愛なく寝入っているお蝶をながめて、自分は、足へ脚絆をつけ初める。

彼は、この盆地の小屋に落ちつく前に、万一の場合を思って、ひそかに用意の解毒を服んでおきました。これは当然な心がけで、その用意を忘れて、あてがわれた馳走を遠慮なくたべながら、油断するな、油断するな、と言い合っていた新助や雲霧は、まだまだ彼の目から見れば若いものだと言いたいでしょう。

脚絆わらじをつけると、九兵衛は、小屋を出てどこかへ姿を消しました。

＊　　＊　　＊

かれらの呼ぶ「山の会堂」では、鐘に集まった人々が、夜の祈祷を終えて、広い一堂のむしろに、すきなことを語り、すきなように足をくずして、拘束なく、くつろいでいる。

その人々に取り巻かれて、おぼつかない日本語をつづり、何か楽しげに話しているのは、黒い布を身にまとったひとりの異国人でありました。

堂の正面には大きな黒い帳を垂れ、切石をたたみ丸木を組み、壇を作ってさまざまな祭器をならべた前に、赤い百目蝋燭がともされてあって、その聖壇の中央に、マリヤの像がほほ笑えんでいます。

と。そのマリヤの上に懸け渡されてある、鳴子仕掛の綱がゆれると、聖堂のすみの銅鈴がガランと鳴る……。

「お。こんなにおそいのに、誰か来たようです。開けてやってください」

黒い裾をひいた異国人の手が、会堂の扉を指さしました。

「山の会堂」を司祭するひとりの異国人は、永い間、切支丹屋敷の牢獄にいた、羅馬の使いばてれんヨハンでありました。

ヨハンはある夜その牢獄から、風のごとき人間の群にすくい出されて、山また山の奥にさらわれて来ました。いうまでもなく、山岳切支丹族のもののやった仕事で、この盆地の開拓は、多くヨハンの知識と見える。

ヨハンは、建築を教え、水の力の利用を教え、歯車の組織をさずけ、附近の樹木によって製産する小工芸を与えました。

こうして、まず凶暴な切支丹族の掠奪性を撓めようとしましたが、もうひとつの剽悍性は、しばらく、ヨハンのために利用することがあるので、ある程度までは、その野性、獣性の萎縮しないようにも心がけておるようです。

ガラン――と今聖壇のそばの銅鈴が鳴ったので、ヨハンが一つの扉へ指をさしますと、切支丹族の男のひとりが、

「誰だ？」

と、そこへ寄って念を押す。

何か、声が聞こえます。うなずいて扉をあけると、ひとかたまりの人間が、ヨハンの方へゾロゾロと歩いてくる。

皆、すこしきれいになっていますが、昼間、お蝶や雲霧を盆地へ誘って来た漆掻きの人々です。

「ヨハン様、首尾よく、何もかも済みました」

「御苦労さま」

ヨハンは深いひげのなかに笑い皺をよせて、
「お蝶さんを、傷つけないように、ここまで連れてくるのはなかなか骨折りだったろうと思います」
「お察しのとおりですよ。あの方に怪我をさせたくないばかりに、信玄の隠し湯からこっちへ来るまで、ずいぶん気の永い網を張っていました。だが、荒療治をせずにうまく行った仕事も、いい気持なものでございます」
「それから、どうしていますか――お蝶様は？」
「みんな、ひとまず寝かしておきました」
「眠り薬で？」
「え。夕がたの御馳走のついでに」
「では、お蝶様だけを、この会堂のうしろの住居へ、ひとまずお迎え申そうか」
「そうそう、あの方は、ヨハン様のお話によると、羅馬王家の血をつないだものの、今では、たった一人の御子孫だそうで」
「母は日本の女ですが、父親はわしの御主人にあたる――王家の立派な血統です」
「この会堂に、その王家の血すじのお蝶様をむかえ、そして、御司祭はヨハン様がする、これで、日本に切支丹の禁制さえなければ、まったく天国でございますな」
「いえ、幕府の禁制がありましても、ここは天国にちがいありません、どこをどう通っても、政府の目付がこの盆地へは来られないでしょう」
「おお、じゃわし達は、お蝶様をあちらへお移し致しましょう」と、切支丹族の者十数人、明り木の火を先に立てて、以前の小屋へ引っ返して来ます。
程なくそこから、こわれ物でもかかえ出すように、お蝶の姿が運び出されてゆきましたが、後に残った者は、その時になって、初めてこう騒ぎ出しました。
「おや頭かずがひとり不足だぞ。ここに薬にあてられているのは、雲霧と、四ツ目屋の新助」
「あっ、九兵衛という老いぼれめだ」
「逃げたな」
「さがし出せ。さがし出せ」
獲物を取った者や、光木をふり照らす者や、例の川添いをワラワラと駆け乱れました。

ヨハンの起き伏しする住居というのは「山の会堂」の裏の森で、森の中にぼやッと橙色の灯がともっている窓がそれです。
窓のそばには白樺の葉が、サヤサヤと寒そうな音をさせて揺れております。また、この家も用材のほとんどが、皮つきのままな丸太組みでありますが、屋根の曲線や窓の形に、どこか異国的な様式が見えるのは、やはりヨハンが建て方をさしずして、羅馬の田舎家でも写したのでしょう。
「お姫様、わたしを誰だと思いますか。おわかりですか？……私の顔が」
ヨハンはこう言って自分の椅子を、お蝶の仰向いている寝台のそばへ寄せてゆきました。

ガバと、お蝶は起き上がって、
「あら？」
と、天井を見たり、窓を見たり、そして最後に、ヨハンの顔を、穴のあくほど見つめている。
「びッくりしたでございましょう。私はヨハンでございます。あの切支丹屋敷の牢にいた……」
「ここは何処？」
「秩父の奥の天童谷という盆地でございます」
「じゃ、やっぱり、漆掻きの男たちに案内されて来た所じゃないの」
「その切支丹村でございます。私はこの夏の初めごろから、この天童谷の司祭者になってくれと頼まれて、ここに住んでいるのでございます。——しかしお姫様、あなたと私と会ったのは、あれから今夜が初めてではございませんね」
「私が甲州へゆく途中で、やはり、こんな深い谷あいで、大勢のものが集まって、祈祷をあげていたのを見たことがあるわ」
「その群のなかに、私の姿は見ませんでしたか」
「ヨハンさん——と、あの時、思わず谷へ呼んだけれど」
「まさかと、お信じなさらなかったでしょう、どう考えても、小石川の牢にいる私が、あんな所に祈祷をあげているなどという理屈はありませんからね」
「だけれど、あれから後、甲府の町で、蜻蛉売りの久助という者から、いろんな話をすっかり聞いていたのだよ」
「アア、久助。あれもこの切支丹村のひとりでございます、あなたを村へ連れてくるようにと私の吩咐けをうけて、甲府へ行ったのでございましたが、日本左衛門に寝込みを襲われて、不憫な死にかたをしたそうで」
「じゃ、お前はこの山にいても、何もかも知っているんですね」
「ええ、何もかも存じております。……ですが、お姫様」
「ヨハン」
「はい」
「さっきから私の事を、お姫様、お姫様なんて呼んでいるけれど、人を茶化すのも好い加減にしておくれね」
「なぜでございますか」
「このお蝶は、ころびばてれんの娘じゃないの、どこにお姫様づらがあるもんじゃない、ホホホホホ……そんな事をいうと、私、真面目になれなくなるわ」
お蝶は、朱い唇へ手をやって笑いました。そして、つるりと寝台からすべり降りると、そこにある、デスクのようなもの、ソファのようなもの、カーテンのようなもの、異国的な部屋のいろを、なつかしそうに眺めまわして、空いている一つの椅子へ、ふわりと腰をかけましたが、ふと、この部屋からうける感じに、亡父のことを思いうかべて、その影のふかい眼もとを、じっと一所に伏せました。
お蝶の沈み込んだ心が読めているように、ヨハンは暫くその静思の時間を与えておいて、おもむろにまた話しかけました。

「私が、お姫様とお呼びするのは当りまえなことでございます。いつか、切支丹屋敷の牢の前でも話しました。あなたは、ころびばてれんの娘だなどと、身をいやしんでおいでになるが、羅馬(ローマ)王家の立派なお血すじなのです。自覚なさいませ。自己の尊い血を、お悟りなさいませ」

「だってねえ、ヨハンや」

「はい、はい」

「わたし、そんな貴族の血をうけた娘だなどとは、どうしても、思ええないんだもの……この自分が」

「どうしてな？　……ヨハンには分りませぬが」

「わたしは、悪い事が好きなんだよ」

「美しい悪魔(サタン)――二官様もそれを苦にして死なれました」

「お父さんの事を言ッちゃあ嫌よ」

お蝶は打つ真似をしましたが、その目はたまらなく悲しんでいます。そして、明りの届かない部屋の隅に、亡父(ちち)が立ってやしないかなどと、今夜はしきりに責められている。

「あー、そういうお心が尊いものです。いくら悪事がおすきでも、きっと、救われるに違いありません」

「生れつきの性質は、直らないというじゃないか。私は、お前みたいな窮屈な人が嫌いで、たとえて言えば、日本左衛門みたいな、あんな人間が好きでしょうがないんだよ」

「怖ろしいことを仰っしゃいます。あれは盗賊の巨頭ではございませんか。そして、夜光の短刀を狙っている、お姫様や、ヨハンの強敵ではございませんか」

「そんな事はべつにして、ただ私の性質を話すのだよ。……実を言うとね、ヨハンや」

「はい、何か秘密なお話で」

「私は今迷っているの」

「話しておしまいなされませ。ヨハンがそのお迷いをとって上げます」

「こんどの山の旅にかかる前にね、鼻寺という所で、こういうことを囁かれたんだよ」

「誰にですか？」

「日本左衛門にさ……お前にはまだ日本語のよく分らないところがあるとみえる」

「いいえ。もう海を越えて来てから七年になります。お姫(ひい)様、もすこし、ゆっくりと話していただきたいと思います」

「あのネ。……分って」

「はい。そして」

「日本左衛門が私に言ったのだよ、この手を、こう強くにぎりしめて……」

「無礼な悪魔でございますな。そして、なんと申しましたか」

「――女房にならぬかと言ったのだよ。恋をしていると言ったのだよ。あの大盗でも恋をするとみえてね……」

「えっ、お姫様に向って、恋を、あの妻にならぬかと」

「その時は、ゾッとして突き放したけれど、永い間の山駕のなかで考えてみると、そのくせ私は、あの人がすきらしい……それで迷ってしまったの」

「……」

「ねえ、ヨハン、私はどっちが幸福になるだろう」

がたんと、ヨハンは不意に椅子から立って、フウとうしろへ後さがりに身を引きました。
「お寝みなさいまし。今夜はもうお話をいたしますまい。そのベッドへ寝て、二官様の顔つきでも夢の中でごらん遊ばせ。そして、今のことは、お父上の二官様にきいてみるが、よろしゅうございましょう。……では明りを消しますよ。とにかくお姫様、ヨハンはあなたの血の全部が、王家の御息女に洗い返されるまで、あなたのお体をこの天堂谷へお預り申しているつもりでございますから、それだけをおふくみ下さいまし」
ふッと明りが消えました。
ヨハンの顔もお蝶の影も塗りつぶされて、ただ白いシーツの上に、窓越しにうごく白樺の葉の影がほの青く見えるばかりであります。
ギイ……と扉の音をさせて、ヨハンが小屋を外へ出ると、そこに誰やら二人の男がじっとたたずんで彼を待っていました。

「オオ、梅市と安蔵――」ヨハンはあとの扉を閉めて、外の影法師へ手招きしながら、白樺の森へ歩き出しました。
「お前たちが交わる交わる旅から帰って来るのが楽しみだ。そして何かよい手懸りはなかったか」
「ありましたよ」と蓑直し安蔵が「ヨハン様、とうとう王庁の文に書いてある鶏血草の花を見つけましたぜ」
「えっ？」と、ヨハンの目は森の闇の梟のように大きくみはりましたが、安蔵のことばを容易に信じないように、
「ほウ……」と言ったばかりです。
「そこはやはり武蔵野でございます。拝島の岡と申しましてね、誰がもと住んでいたのか、今じゃ狐狸の巣みたいになっている空屋敷がございますんで」
と梅市が、そこで出会った事や見届けたことを逐一告げておりますと、「山の会堂」の横から十数人の者が明り木の炎を振ってワラワラと馳け寄って来るのが手にとるように見える。
何事かと、ヨハンの方からも近づいて行ってみますと、今日お蝶と共に連れて来た三人のうち、九兵衛という老賊だけが、巧みにいッぱい食わせて逃走したので、手分けをしてそれを探しているところだと口々な騒ぎかた。
そしてまた、八方へ明り木の光を振って別れて行きましたが、ヨハンは急に思いついて、梅市と安蔵に何事かを言いつけた後、自分は眠りにつくべき小屋へ影のように消えこみました。
また安蔵と梅市とは、それから教えられた小屋へ急いで来てみますと、成程、ヨハンが言ったとおり、二人の人間が正体なく炉辺に長くなっている。間もなく仮死状態の二個の人間は、ヨハンの命令をうけた梅市や安蔵たちの手によって、永遠に逃走のおそれがない生ける墓場へ片づけられました。
生ける墓場はまッ暗です、どこからほうり込まれたものか、明暗の境を知らずに飛び込まされた雲霧の仁三と四ツ目屋の新助には、後でいくら考えても分らない。

正気がついた時にはそこに居たのです。夢から醒めて、夢より不可思議な暗やみにいる自分を発見して、今が夢か前が夢か、その判断もつかない気持です。

何しろそこは地底にはちがいない。音と光のない世界です。しかし決して窮屈なせまさでもなく、立って歩くに不自由はなく、横に進んで鼻がつかえる程でもない。いったいどれくらいな広さがあるのか、光と音響がないのでそれも暫く想像がつきません。

ところが、時間にして約一夜も過ぎたかと思われるころ、初めて、墓場の空に薄い光の穴があきました。見ると、その一道の丸くさした光線の中へ、ポーンと何か落ちて来たかと思うと、光の穴はすぐ閉じられて、また前にまさるうばたまの暗やみ。

すこし頭脳がヘンになったか、雲霧も四ツ目屋も、茫然としたまま膝をかかえて、その見えない暗にひとみを据えていたのです。――するとどことなく、不思議な空気のうごめきを感じました。何か力のないものが、上から落としたものを探って這い集まってくるような感じです。そして、ムシャムシャと食物を咀嚼するうるさい音です。無論ひとりや二人とは思われません。うるさいと思うくらいですからそれはどれほどな数の集合だか、ちょッと想像もつかないのです。

それから、これと同じ事件は、約十二時間目ぐらいに一回ずつくり返されました。墓場の空から丸い光線がボヤッとさして来ること、途端に何か落ちてくる事、そしてすぐ暗くなること、妙な空気が動揺しだすこと、うるさい咀嚼がはじまること、寸分もたがわぬ約束の履行でありました。

初めは、なんだろうと驚いて、すくみ込んでいた雲霧も四ツ目屋も、その三回目からうごめくものの一つとなって、手にさわった物を無考えに口へ押しこんでおりました。

十二時間目ぐらいに一回ずつ上から落ちて来るのは食物です。食物はまず目と鼻の感覚に訴えてはじめて味覚の乗りだすものですが、その目が用をなさないので、何を与えられているのか分らない。

想像するに、それは切支丹村の切支丹族たちが、食べあました残物かも知れません。山の会堂の祭壇に供えたあとの物や、ヨハンの台所の料理クズなどもあるかも知れません。

――何しろ、それによって生ける墓場にうごめく者が、ここには雲霧、四ツ目屋ふたりのほかに、なお幾十人居るのだかわからない。

また、不思議なことには、そこに居る無数の人間は、光のない沼の目なし魚みたいに、ウヨウヨうごめいておりながら、話しもしなければ笑いもしない、また同じように、泣きもしません。

この生ける墓場の新米である雲霧は、初めのうちはそれを妙に思っていましたが、日が経つに従って、身をうごかすことも、考えることも嫌になって、まったく話をする意慾などは、日ましにどこかへ薄れてゆく自分自身に気がつきました。

その証拠には、第一、こんな時には一心同体な気持になって、互いに励まし励まされる唯一の対象となり合わなければならない筈の四ツ目屋の新助とも、だんだん口数をきかなく

なりました。

新助もまた口をきいて来ない。そばにいた体がさわる事があっても、ぐんにゃりとして身をよけるだけです。

どうもこんな暗やみに息だけを吸わせて人間を生かしておくと、精神的にも生理的にも、おそろしい退化がからだの内部に起ってくるようです。すべての意慾は眠ってしまい、思判力は失われ、視覚は無能になり触覚は魯鈍になり、脳の中枢はやがて支配する神経に気をつかう必要がなくなって、ただ頭のなかに詰まっている不用物体となってどろんとしておるだけのようです。

また、かすかに生命の保持をいとなんでいる胃ぶくろの方でも、十何時間目に一回送られるわずかな食物を原則として、当然、生理経済をやってきますので、なるべく肉体の所持者に身うごきをいましめ、ムダな口をきくなと命令し、多量なカロリーを消耗するすべての考えごとなどは、最も不生産的なものとして一番早く衰えてくるようです。

雲霧などがしばしば経験している、あの伝馬牢とよぶ獄舎などは、ここから見れば、まだまだ立派な人間世界です。ともかくあそこなどでは、夜の果てには明けがあり、昼間になれば夜に入るという変化がある。貨幣の力も行われれば、性慾のもだえもあれば希望もある。

ところが、ここにはすべてがない。

光明、希望、金力、争闘、邪智、愛慾、それがありません。喜怒哀楽、失意得意、それらの生活の変化もあろうとしてもありません。まったく無音無色のなかに無神経な冬眠をジッとつづけている蟇みたいなものです。蟇といわなければ神様のような人間になっている。

——だが。

雲霧はまだそんなでもない。

彼と新助とは新米なので、多少の怪訝をもったり不安をもつだけの余裕を残しておりますが、いつかしら、

「もう助からねえ」

駄目だ——という観念の方が濃くなって、逃げ出そう、助かろう、とする焦躁や気力は、日ましに燃えとぼれて来たのは事実です。

気力が枯れて、諦めの世界にはいると、退化的な解脱がはじまる。寝ても寝てもスウスウと眠りつづけられて、その状態があたりまえになってくる。

ふと眼をさました時です。雲霧の足もとに、大きな海鼠のようなものがグンニャリとしている。

「新助……か？」

「お」とも「ううん」とも言わないので、足を上げると転がりました。で、雲霧がさわってみると、やはりこいつもよく寝ています。

「誰だろう？」

そう思ったが、見るよしもありません。

「この中には、おれ達のほかにも、まだ随分人間が居るようだが……」と、何気なく撫で廻してみると顔がある。

顔があるのにふしぎはないが、新助の顔ではありません。かさかさとしたあぶらけのない顔。

雲霧の手がこくめいになで廻しても、その人間は一向さしつかえなく寝ています。まず輪郭をさぐッてみると、頭には髷がなく、総髪らしい形です。頬骨が高く、あぎとが出っ張って、並よりは長い顔の真ンなかに、段のついた羅馬鼻というようなのが、かすかな寝息を呼吸している。

「このあんばいでは四十以上の人間だな。……だが、大きな鼻だな。長い顔だな……」

いくら退化した冬眠人間でも、そういじられてはうるさいとみえて、やがて、雲霧の手をつかまえたと思うと、目をさまして起き上がったふうです。

「おい。おい。おい……」

雲霧はその人間の肩をゆすぶって、彼の知覚を試みました。——自分の方を振り向いた様子です。この暗やみでも眼だけがかすかに光って見える。

「おい、大将」

どう呼んでいいか思いつかないので雲霧はこうよびました。しかし、起き上がった大将はさらに刺激されないと見えて、またぐンにゃりと寝ようとするので、彼はあわてて抱きとめて、

「誰だい、お前は？　え？　お前はだれだよ」

ほとんど、つんぼにものを言うようにくどく聞きますと、やっと気のない口を開いて、

「お前は誰かね」

と、初めて、人語をもらしました。

自分のことばを真似されたようなものでしたが、それでも、ひとりの話し相手を見つけたと思うと、雲霧は、この生ける墓場が少し明るくなったような気がして、

「おれかね。おれは江戸の者だが、おめえはやはり山の衆かい」と、答えると相手は俄かに嗜眠状態の神経をゆりさまして、

「ほ……江戸、お前さん、江戸の者……」

「そうだ、ことばつきでも分るだろう」

「アア、久しくその江戸弁も聞いたことがなかった」

「——と言うと、おまはんも、江戸の人かい」

「うむ」と、がっくり首を下げたふうです。雲霧は、また寝入られてはと、手首をつよく握りしめて、

「なつかしいなあ。江戸は何処だい」

「溝店」

「溝店だ？　……へええ、いよいよなつかしい。下谷だね、そうすると」

「……」

「そして、渡世は」

「トい」

「え。何の商売？」

「易者だよ」

「はーて、こいつは益々いぶかしい。下谷の溝店で売卜者というと、おれにも心当りがあるんだが、そしておまはんは、何という者だね」

「梅花堂流」

「ふム、梅花堂流」
「馬春堂」
「ひぇッ。ば、馬春堂だって」
と、雲霧が思わず大声で仰天しますと、うそか、ほんとか、馬春堂と称したものは彼の手をもぎ離して、のろまな動物のように四つンばいに這って逃げだしました。
一寸先は暗ということがあるが、この中こそは睫毛の中から真っ暗です。ひょいと手を離したその男は、もうどこへ這ったかわかりません。――すると近くに四ツ目屋の声がして、
「雲霧、何をしているんだ」
「おう、新助か。今な、そこでひょいと鼻を合わした人間が馬春堂だっていうので、びっくりして話をきこうと思っているまに、どこかへ這い込んでしまったんだ」
「馬春堂が居たって。……嘘だろう、まさか、いくら易者の身上知らずでも、あいつがこんな所にいるとは考えられない」
「ところが、何も知らずにその寝ている顔をなで廻したんだが、今になって思い合してみると、やっぱりあれの面にちがいない」
それから二人が、気永にそこらをなで廻して探しますと、変り果てた――と言ってもその姿は見えませんが、実に意外と言えるその馬春堂が、二人の四、五間うしろにおののいていました。
思いがけない馬春堂先生をそこに見出したり、暗やみにも眼がなれて来て、新米の雲霧と四ツ目屋にも、生ける墓場の実相なるものが、次第にうすうす分って来ました。
そこはちょうど「山の会堂」の真下であって、この穴蔵と会堂とはどこかに通路の階段があるのだそうです。そして今この地底には、およそ三、四十人の眼なし魚が冬眠状態になっている。
その人間達の素姓を洗ってみると、幕府の山役人もあり百姓もあり、旅の武士もあれば岡ッ引もある、また馬春堂の如き何にも知らない売卜者までが居るのだとは、先生自身が、ものうげに説くところであります。
どうしてそういう人達が、こんな所へ墜ちたかというと、その無辜な者は危険を知らずに天童谷へ迷って来た旅人で、その罪ある者は、切支丹村のうわさを聞いて、われ見届けんと暴虎の勇で、自分から飛びこんで来た者や、或いは、職のために探りにはいッて、見現わされた山役人や岡ッ引であると言います。馬春堂などは、その前者の方でした。――先生は例の道中師の伊兵衛と組んで、お粂の家から一座の有金をさらって逃亡した後、御岳口から山街道へ走りましたが金を持った伊兵衛には途中でどろんをきめられ、途方には暮れる。道には迷う、その揚句にいい泊り場所を見つけたと、よろこんではいって来たのが、この天童谷の切支丹村。
かりにも、この秘密郷の生活をのぞいた者は、その故意であるとないとにかかわらず、彼等はふたたびその人間を里へ帰すことはしません。しかしまた、それを殺す事もしないで、「山の会堂」の底へ抛りこんで置くには、或る理由があるのでした。

切支丹族の者たちが、もっとも心細く感じていることは、年ごとに自分たち種族の数が、減りつつある現象です。

それは、女の生む数が少ないのと、絶えず世の迫害と闘いつつある結果として、里で捕らわれたり殺されたり、当然な犠牲を多く出すためによりましょう。

で――その補充をしなければならない。彼等は、この穴にほうり込んで、ある期間の冬眠状態を経過させた人間を、やがて「山の会堂」へ呼び出します。

そこには、剣と十字架と、二つのものが用意されてある。そして、どっちでもその一つを選ぶにまかせる。

剣をのぞむ者には死。

十字架をのぞむ者には、洗礼を与える。

そこで反抗をみせた人間はかつてないそうです。十人が十人、洗礼をのぞまないものはありません。流涕の歓喜にひたって洗礼をうけます。そして、厳かな誓いをむすびます。初めて、切支丹族の仲間入りをしたわけです。

そうして、種族にはいった人間は、もう、どんな事をしても、村に反いて元の国や家へ帰らないという事も、彼等は信じているのです。おそろしい催眠術的な魔法ですが、また、彼等の生活にも、何か人知れぬ魅力があるのかも知れません。

「じゃあ馬春堂、お前も今に、会堂へ呼ばれて、洗礼をうける日をたのしみに生きているのかい」

雲霧がこう聞きますと、馬春堂先生は、

「うむ……」と、うなずいて、またのろまな動物のように、隅の暗やみへ匍いこんでしまいました。

「そうすると？」

「おれも。おめえも……か？」

四ツ目屋と雲霧は、眼と眼をさぐり合って、変な顔をしていました。さても変な暗やみがこの宇宙にもあればあるものです。

――が、彼等がそうしている間に、太陽のかがやく世間はどう動いているでしょう。

地球はまるいはずでした。

＊　＊　＊

きょうは月並の祭日か、日本三大神楽の一つに数えられている、三峰神社の太鼓が山蔭にとどろいて聞こえてくる。

そこから、谷ひとつ隔てた妙法岳の中腹に、今、足を止めて、満山の紅葉にまぶしげな手をかざしたのは、武士と町人、三人づれの旅の者です。

神楽舞

遙かに小さく見えたその三人が、やがて妙法の谷を渡って三峰の社前へ来たのを見ると、徳川万太郎に相良金吾で、連れの町人は目明しの釘勘でありました。

三峰神社の神楽殿では、今、湯立の舞の鈴と笛が太鼓につれて古雅な調べを合せておりましたが、三人はそれを杉木立の横になが めて、社家の玄関へ、頼む――と静かにおとずれます。

刺を通じて、やがて三人は奥へ通される。

「にわかな御遊行、前もってお報らせがございますれば、せめて、大宮の宿までお迎えをさし出しましたものを」
と、あいさつに出た神官は、尾州の若殿の来臨は、何か祈願のすじであろうと思った様子です。
「いや、不意にお訪ねいたしたのは、御参詣の為ではなく、この奥秩父の地理について、お聞き申したい事があるので」
と、金吾が簡潔に来意を話し出しました。
「ほう……」と神官は意外らしい顔をして、
「では各〻には、甲州から雁坂を越えておいで遊ばしましたか」
「或る曲者を追いかけて、山の奥まで踏み入りましたが、遂に、その行方を知ることが出来ず、当惑のあまり伺った次第でござる」
「成程、この奥秩父へ逃げ込んだものとすれば、それは容易にお分かりはありますまい」
「道々、炭焼の者などにも問い訊したなれど、大宮の宿へ出た様子もないとの事、そこでもう一応、尋ねたいと存じますが、誰ぞ山案内をしてくれる者はござるまいか」
「おやすい御用でございます。しかし、そのおたずねなさる曲者と申しますのは」
「一名は日本左衛門という兇賊、またもう一組は山駕に若い娘を乗せた彼の手下で、四ツ目屋の新助、雲霧の仁三などと申す手輩でござる」
神官はそういう名を聞いただけでも戦慄を禁じ得なかったようです。折から祭日で、山へは里の男女が大勢参詣にのぼって来ているところなので、そんな風聞だけでも穏やかでないという風に、
「では、お疲れをお休めになって、暫時ここでおくつろぎ下さいますように」
と、蒼惶として奥へはいり、社家の雑掌や舎人を集めて、何か鳩首して相談をこらしているらしく思われる。
神官の察しのとおり、万太郎はかなり疲れておりました。何しろここ一ヵ月あまり、悠々と暖かい家屋に体を横たえたことがない。
しかも、日本左衛門の逃げた先は、杳として分りません。同じようにお蝶の駕の行方もわからない。――と言って、秩父の諸方を探し廻った釘勘の断案では、どっちもこの奥秩父より先には、逃げていまいと言うのでした。
何を相談しているのか、神官の返辞はなかなか参りません。万太郎は火鉢を抱えて、思わずウットリと草臥れの居眠りが出る。
その間のすることなしに、ふと耳にはいって来たのは神楽殿の古雅な楽のしらべです。さっきは湯立神楽の静かな鈴楽でしたが、今は序破急な大太鼓のとどろきに鎌倉舞の笛囃子がいとおかしげに交じって、楽天的な神代の明るさが山にあふれるかと思われるようです。
「おう……たいそうな人だな」
何の気なしに、釘勘と金吾が、そこの肘掛け窓をあけて、あなたの群衆に目をやりました。
群衆の上には、舞台が見える。舞台の板には舞人や楽人の

姿が見えます。――と釘勘はその笛吹きのなかに、一人の奇怪なる男を見つけました。

吹いてる！　吹いてる！　夢心になって吹いている！　鎌倉舞の笛を吹いている！

その男は、道中師の伊兵衛に相違ありません。伊兵衛は例の阿佐ヶ谷組の神楽師の仲間にまじって、いかにもいい気持そうに、また得意げに、笛の高音を張りあげております。

「ほ……伊兵衛が居る」

「なるほど、道中師の伊兵衛ですね。あの野郎、妙な所で笛を吹いていやがるが、何しにこんな所へ舞い込んで来たのだろうか」

釘勘と金吾の二人は、腕をこまねいて社家の窓から彼の挙動を注視しておりましたが、神楽堂の上の伊兵衛自身は、笛に熱しきッていて、今は、笛以外何ものも知らない顔つきでした。

「うむ、そうだ」

不意に釘勘が席を立ったので、金吾は彼の身ごなしに、早くも察したものがあって、

「止せ止せ、釘勘。あんな者をこの場合に、召捕ったとて始まるまい」

「目にとまらなければそれまでの事、べつに気にもなりませんが、大勢の頭の上で、しゃあしゃあと笛を吹いているのを見ると、どうも目明しの職分として虫が納まりません」

「それゆえ、伊兵衛を召捕って来ようというのか」

「ひとつ、不意をついて、お手当を食らわせてまいります」

「つまらん話だ。止せ止せ、この金吾も彼のためには、一時難儀をこうむったが、仮面が手に返った今日となって見れば、縁も怨みもない、他山の石だ」

「どうして、どうして、この釘勘の役儀から言えば、姿を見たのが百年目というやつで、決して、見のがせない兇状持ちの大物でございます」

「その筆法で往来を歩くと、見る者、摺れちがう者、皆そちの目には、何か兇状の影がついて見えない人間はあるまい。――あまり埃の中の微虫まで見るものはそれだから困る。まあ、坐るがいい」

「どうも相良様、今日はひどく目明しをこきおろしますなあ」

「万太郎様を初め、おれ達二人は、日本左衛門とお蝶の落ちた先をつきとめるほか、しばらくは決して何へもわき目を触れてはならぬ場合だ」

「じゃ、伊兵衛のやつは、今日のところは見のがしてやるとしますが、何と冥加のいい奴だろう、御覧なさい、あのとおりお天気な顔をして夢中で笛を吹いていますぜ」

「しかし、自分にはよく分らんが、盗賊の隠し芸にしては、上手なものではないか」

「そのはずでございます、あいつは元、阿佐ヶ谷神楽の笛師の方が本業なのでございますから」

「ウーム、それで甲府から、この地方に逃げ込み、昔の神楽師仲間にはいって、姿をかくしているのだな」

「何しろ、抜け目のない野郎でございますよ。……したが、

あいつと絶えずつるんで歩いていた馬春堂の姿が見えないのはどうしたものでしょう……」などと釘勘は、その手出しを思い止まっても、まだ目明し気質な気ばたらきはやまないと見えて、じっと、眼も放たずに見ておりますと、突然、群衆と神楽堂の空間を、針のような白い光が、一本の筋を描いて飛びました。

「あっ――小柄」

と釘勘が、思わず声を発した時です、――神がかりのように熱して笛を吹いていた舞台の上の伊兵衛が、きゃッと悲鳴を上げて仆れたかと思うと、そこに鉾を持って舞っていた猿田彦命もお囃子の鼓師や笛吹きもみな総立ちに乱れ立って、わッと、一時に騒ぎくずれた模様です。

たしかに小柄の光が見えた。群衆の中にひそんでいた何者かが、伊兵衛の命を狙ッて放ったものに違いない――

はっとした咄嗟に、職業がら、釘勘の目だけは、多くの見物がせつなに気を奪られた所とは、見るところが違っていました。

彼は、伊兵衛が笛を持ったまま仰向けに仆れた、神楽堂の上の騒ぎよりも、その堂の下に人浪を押している群衆に目をつけて、小柄を投げた人間をじいっと物色しておるらしい眼ざしです。

しかし、不意の事件におどろいた群衆の動揺は、ただ口々に何か騒いで、かんじんな自分たちの中に潜んでいる小柄の投げ人を忘れている。

と――その見物のなかに、ただひとり挙動のちがう人間が見出されました。それは、編笠に顔をかくした浪人体の男です。そしてその男が、神楽堂の騒ぎや周囲の狼狽を冷ややかに見やって、何処かぜ吹くかというように、人浪の中をふところ手で抜けてゆく姿が、飴屋の傘にかくれました。

「やっ？　――似ている」

と、釘勘がそれに身のびをして、金吾の袖を引いた時、折悪しく、最前の神主がうやうやしくふすまを開いて、

「おかまいも申さず、長時お待たせいたしまして、まことに失礼仕りました」

と、それへ出て、いんぎんに改まりましたので、二人は、不作法に窓を開けて覗き見をしている訳にもゆかず、外へ心を残してそこを閉めきりました。

で、坐り直ると、脇息をかかえて、うつらうつらと居眠っていた万太郎も、さっぱりと疲れの癒えたように冴えた顔をして、

「いや、自分達こそ、祭典の忙しいところを、突然邪魔をして気の毒に思う。……して、先程頼んだ山案内の者は見つかったであろうか」

「お話を承り他の者とも凝議いたしましたところ、案内の者はお易い御用でござりますが、おたずねになる先の者は、ことによると、天童谷の切支丹村へでも迷い込んだのではあるまいかと申す者が多数にござります」

「なに……切支丹村？」

例の万太郎の猟奇心は、その村の名を聞いただけでも、何

か伝奇的な空想に心を囚われた様子に見えます。――で、にわかに膝をのりだして、

「この奥秩父に、そういう村があるのじゃな」

「あるというわさは誰でもしておりますが、まだそこへ足を踏み入れた者はございませぬので」

「この地方の者が知らぬ程な奥と申すと、よほど嶮しい所であるな」

「山の嶮しさより、その辺へ迷い込んで、一人として帰った者がないのでございます。――で山案内の申しますには、ほかの所なら、たとえ甲武信のような嶮しい所でも怯みはせぬが、どうも、奥秩父の方だけは……と誰も彼も、しりごみをいたしまして、御用に立つべき胆気の者がござりませぬので……」と、そこで神官は、返辞の遅くなった事情を婉曲に詫び入りました。

「では、案内に立つ男がないと言うのか」

と、万太郎の声が少し尖りますと、神官も恐れ入って、否とも言いませんあるとも答えません。今の切支丹村の話をくり返して、そこへ行くのでなければ――という意味を口裏にほのめかせましたが、元より、聞いたが囚果で、万太郎の意志は何処よりも、その切支丹村を探ってみることに、逸ッております。

さるにても金吾の意中では、今の表の騒動に、釘勘が、「似ている――」と叫んだのは、誰に似ているのかと気になって、一刻も早く、このまどろい神官との対座をのがれたいものだと、腰を浮かしておりました。

もらいうけた一枚の山絵図をふところに納めて、万太郎主従と釘勘は、ひきとめる神官に別れて、外へ出る。

「釘勘――」と、金吾はすぐに、「只今そちがあの窓で、似ていると申したのは、一体誰をさしたのじゃ」

「私の気のせいかも知れませんが、ちらと、人浪をくぐって逃げた編笠の男が、どうも日本左衛門のように思われたんです」

「えっ、奴がおッたと？」

金吾の眼ざしがすぐ何ものかへ逸るのを制して、

「と申したところで、今言ったように、ほんの瞬間は、似ているなと見ただけで、まだ確かにそうとは分りませんが」

「ともあれ、その姿はどう向いて行ったか？」と万太郎のひとみも、参詣の群衆を物色しつつ、釘勘のあとに尾いて、急ぎ足に、随身門の外へ出ました。

その辺の森に添うて、土産物の店をならべている里人たちに訊ねてみると、その編笠の浪人らしい者は、大宮へは下らずに、間道をとって、芦ヶ久保へ抜けたらしいという話。

――試みに、今もらいうけて来た山絵図をひらいて見ますと、そこは裏秩父の山の背を越えて、武蔵の入間方面へ出る正丸峠と、山伏峠を経て鳥首から天目山へわかれる山路と、また一方、高麗の郷高麗村の峡谷へ出る幾つかの道の追分になっている。

「はて、どうしたものか？」

と万太郎は迷わざるを得ない面もちです。

「彼を追って行くとすると、天童谷の切支丹村の方角とはだいぶ道が違うのじゃ」
「しかし若様、その切支丹村とやらには、参ってみた上でなければ、お蝶の手懸りがあるかないかも、疑問な土地でございましょうが」
「うム、それは疑問であるが、何となく予感がする――お蝶のことが分らねば、夜光の短刀の手懸りでもありそうな……」
「と言って、釘勘のみとめた者が、日本左衛門であるとすれば、みすみすそれを見遁すのも残念千万」
「では、ともあれ彼奴を追う所まで追いつめてみよう！」と意を決めると、釘勘も、
「そうなすッて下さいまし、あいつさえ片づければ、あっしも肩の荷が下りますので、あとは若様の為に、夜光の短刀でも何でも一途になって、お力添えいたします」
「おお、それでは、急ごう」
「と仰っしゃって、今からそう意気込むと、山道はすぐ疲れてしまいます。どうせ横道のない間道のことですから、方角さえつけば、息を切って駆けだす必要はございませんよ」と、釘勘は山馴れているので、足ごしらえを直し、万太郎主従もそれにならって、妙法の裾から、東南の山地へ、わけ入りました。
その日の夕刻はゆるゆると、芦ヶ久保の山村に着いて、東光寺という僧房に一泊をたのむ。
それとなく訊ねてみると、一人旅の浪人風の男は、たしかに、自分達より一刻半ばかり前にこの山村を過ぎている。しかし、それから、山伏峠か正丸越えの追分はやがて一里弱にすぎない所で、それから先は、どうしても夜旅にはあるけない所だということも確かめましたから、釘勘は、双者の距離を胸算にとって、すっかり、安心しているふうです。
朝を待って、僧房の芋粥をすすり、焼飯の糧は釘勘の腰につけて、三人はまた芦ヶ久保の山村を立ちました。
山に入るほど、山の深さと秋の深さが身にせまります。すばらしい紅葉の鮮紅も、今では目になれて路傍のものでしかありません。
「オオ」
と、釘勘が叫んだのは、ちょうど山伏峠の上に立った時で、
「見えましたぜ、先の影が」
「えっ、追いついたか」
と、万太郎主従が、彼の指さす先に目を辿らすと、なるほど、そこから遙か峠裏に見下ろされる沢辺の道を、一箇の編笠すがたが、孤影を風に吹かせて歩いて行きます。

秋の夜双紙

その時その姿は、遙か遠くにしか見えませんが、編笠のうしろ姿が、日本左衛門に違いないと見たので、
「それッ、急げ」
というが早いか、金吾も万太郎も一散に峠の下りを駆け出していました。
しかし、左程にもない距離に思われても、歩いてみると案

外、紆余曲折のあるのが山道の常で、日本左衛門の飄々乎たる姿を、沢辺の向うに見ていながら、三人がそこへ降り着くまでにはかなりな時間がたっている。

沢の渓流に沿って、最前、日本左衛門を見たあたりに来て見た時には、もうその影は行手の山蔭にかくれて先に見当りません。

「万太郎様、万太郎様。あまり急いでおいでになると、先へ行って息がつづかなくなりますぜ」と、釘勘はしきりに落着こうとしますけれど、

「いや、もう一息急げば追いつくに違いない。金吾つづけ」と彼の足どりは、容易に平調に返ろうとはしない。

ぜひなく、釘勘も大股になる。

山伏峠の勾配は、東のふもとにかけてずっと道が楽になります。そこから双子山の間にはいる数十町は、山を忘れる高原の平地で、肩まで没しそうな篠と野草がじょうじょうと秋風に白くなびいている。

「あっ……」

そこを望む所に立って見下ろした時、三人は一様に呆れました。自分達はかなりな速度で急いで来たと思ったのに、今見ると、日本左衛門との距離は、最前から少しも短縮されておりません。

では気がついて、先でも宙を飛んでいるのかと思うと、決してそうではないようです。彼は相変らず、その高原の一すじ道を、急ぎもせぬ足どりで双子の山間へ向っています。

「おゥ――い、日本左衛門」

たまらないで、金吾は遂に手をあげて、先へ向って叫びました。

彼とは、星影の谷間で、互に約したことばがあります。金吾から果し合いを言い込む場合には、いつでもそれを拒むまいとは、日本左衛門が男として断言してある言質でした。

「おーい。おおゥ……いィ」

呼んでは走り、呼んではまた駆け出してゆく。

けれど、絶えず高原をさわがす風にさまたげられて、その声は、まだなかなか先方の耳には届かない様子であります。

すると、不意に三人の行く前へ、四、五人の小娘の――いずれも山家者らしい者たちが、背負い梯子に何かの荷物をつけて、賑やかに笑って来ました。――それが、出会いがしらの驚きに、急に口をつぐんで、そこから岐れている道を、逃げるように、南の方へ曲ッて行ってしまいましたが、万太郎は、ふとその娘たちの髪に不思議なものを見たのです。

一本ずつの銀のかんざしです。敢て、銀のかんざしの珍しかった訳ではありませんが、それが十字のかんざしであったのが、せつなの瞳にはッとした懐疑をもたせました。

――東、双子山ヲ経テ高麗郷二至ル。西、天目山、鳥首ヲ越エテ天童谷ヨリ甲州路――

駆けながら見て通った岐れ道の道しるべには、どうやらこう記してあったように読まれましたが……今は何を振顧っているいとまもない。

「おーいィ」

と、金吾は声をからして手をあげているし、釘勘も今は口

もきかずに、彼に添って疾風を衝いて急いでいる。

——と声が届いたか、先にゆく編笠の影がやがて高原の真っただ中に、笠のつばを抑えてクルリとこっちへ振り向きました。

空には迅い灰色の雲が、絶えず北から東南へうごいています。

千蛾老人は早寝の早起で、もう奥の間の燭を消してやすんでいますが、月江とおりんは、この静かな、そして長夜の秋を、寝ようとしても惜しまれて寝られぬふうです。

と言って、あの道化の次郎が居ないでは、カルタも喧嘩にならないし、投扇興もさっぱり興味がのりません。——で、こんな時には久しく手をふれてみない八雲琴でも弾いてみようかと、おりんに琴台とよぶ小机を出させて、それに白い指をまろばせてみる。

われと吾が指先から弾き出る琴の音にうっとりとして、月江の横顔はいと臈たけて見えました。

と、不意に、それもやめて、

「ねえ、おりんや」

「はい」

「次郎はもう江戸表へ着いて、今頃はあの洞白の仮面を、無事に尾張様のお上屋敷にお届けしている時分だろうね」

「あの子のことですから、抜け目なくお役目を仕終わせて来るに違いございませぬ。そして、御用がすんだらその帰りに、屹度、浅草の観音様やら、両国の盛り場やら、お膝元の町々を、のん気になって、見物しているでございましょうよ」

「まあ、そんな事を言っていたかえ」

「ええその方が楽しみで出かけたのでございますもの。それに御隠家様からも、ゆっくりお暇を頂戴してゆきましたから、羽ネをのばして見て歩いていることでございましょう」

「そんなくらいなら、私も次郎について行けばよかった」

「でも、お嬢様を出すことは、もう御隠家様が、懲りておいでになりますから、おゆるしにはなりますまい」

「また来年の春になったら、熱海の海辺へ行って、駆け出してみたい」

「あの汐鳴りを耳にうかべると、おりんもいつでも、行って見とうございます。それにしても、相良様は、どうなすったでございましょうね」

「りんや……」と月江は琴のそばを離れて、

「お前もまだ、あの方のことを覚えておいでかえ」

「ええ、折にふれて、思い出すのでございますよ。御病気はなおったかしら？　あの御一緒の部屋にいた、美しい伝法な女子はどうしたろうかなどと」

「ああ、あの下町風な……」と月江は憂鬱になって、暫く間をおいてから、「——お粂とかいう女だろう」

「お嬢様とは、顔を見合わせても、口もきかないような女で、いつでも私たちを、じろりと切れの長い目で見て通りました」

「あの女は、いったい金吾様の何なのだろうね、御姉弟ではないようだし」

「夫婦にしては似合いませぬし、まったく妙な道づれでした

が、あの騒ぎが起った最後の晩には、とうとう、金吾様は女を捨てて姿をかくす、また女は、夜ッぴて金吾様を追って海辺を叫んで歩いておりました」

話のうちに、両女は当夜の波風を思いだして、思わず、襟元をぞっとさせています。

ちょうど、そうした話の切れた時です、奥まった庭の深い暗に、竹でも裂けるような物音がひびいて、一瞬の寂寞を破りました。

「おやっ？」

と、つい十日程前の奇禍におびえている魂が、新しい身ぶるいを起して、おりんのひとみを悸めました。——そして思わず、彼女の唇が、

「誰か来てください！」

と、叫ぼうとした時、内玄関にある訪鐘が、誰かこの夜中の訪問者の手によって、静かに二つ三つ鳴り揺れて聞こえます。

この狛家に、滅多に夜の来訪者などはあった事がないので、門の訪鐘が鳴りおとずれても、郷士たちは奥深い詰部屋に寝込んだものか、即座にオオと出てゆく取次もありません。

で、そこに訪鐘がありながら、

「お頼み申す。おたのみ申す」

と、来訪者の声が幾たびか、繰返されているようなので、最初は、耳を疑っていたおりんも月江も、

「おや、この夜中に、誰かお客様のようだが」

「侍たちを起しましょうか」

「とにかく、ちょッと出て行ってごらんよ」

「はい」と、おりんは今しがたの庭の物音に、まだ幾分か胸の鼓動を感じながら、手燭をともして玄関前の杉戸をひらきました。

そこの式台へ明りの影がさすと、訪れた人々は、会釈をもって待ちながら、

「夜分、御静居をおさわがせ申して、まことにぶしつけではござるが……」と、鄭重に小腰をかがめる。

「どちら様でいらっしゃいましょうか」

と、おりんも、手燭と共に、しとやかに式台へ指先をつかえます。

「秩父より越えてまいった旅の者でござるが、土地不案内な上に、御近辺には宿屋も見当らず、当惑して一宿の御無心に参ったのでござりますが……」

「まあ、それは御難渋でございましょう。では只今、主人にその由を伺ってまいりますから、暫時、そこへお腰をかけて、足なりとお休め遊ばしませ」

と、おりんが灯影を顔にゆらめかせて立ちかけると、そこに立った三人のうちで、応対していた前の武士が、

「や？　……あなたは」と、愕然としたことばにおりんを驚かせました。

「オウ」と、おりんも美しい目を丸々と見張って、

「あなた様は、この春先の頃、熱海の湯で私たちと一つ宿においで遊ばした、相良金吾様ではございませんか」

「いかにも、その時の金吾ですが、これはまた何という奇遇でござろう……」
「まあ、夢ではございますまいか、今も今とて、お嬢様とその頃の、うわさをしていたところでございますのに」
「すると、おたずね申すまでもなくこちらは高麗の郷の狛家でござるな……と、すると手前のうしろにいる連れのお方、万太郎様や釘勘とは、お嬢様も、また当家の小僕次郎にも、前からの御知己があるはずじゃ」
「これはいよいよ御珍客ばかりのおそろい、さ、どうぞそれへ、只今すぐに月江様にこの事を申し伝えてまいります」
おりんは手燭をそこへ残して、まろぶが如く奥の方へ駆け込んでゆきました。
かの高原で振返った日本左衛門が、あれから双子の山間へ姿を消したので、それを追いつつ来るうちに、いつかこの高麗の郷へ下って来た三人でしたが、その土地も家も気づかずに訪れた屋敷が、月江や次郎の住む所であろうとは、万太郎にも釘勘にも同じような偶然でありました。
ところへ、月江がにこやかな顔を見せる。
小仏で難を救われた娘の恩人である釘勘や、また、尾州の若殿の来訪と聞いて、千蛾老人も衣服をあらためて出迎えに出る。
いつか、式台には、幾ツもの明りや、幾人もの郷士たちが座列を作って、さすがに豪族の名残りをとめた応接ぶりです。
そして、奥の一間へ通される。
人知れず、月江の胸に思い出として棲んでいた相良金吾が、前に変ったりりしい姿をして、わが家の一室に坐ったかと思うと、彼女の胸はふしぎなうれしさに騒がされています。
意外な客と貴公子を迎えて、冷寂としていた狛家の夜は、燭に燭をついで夜の更けるまで戸閉すことを忘れています。
さて、酒の興も、およそな頃、
「折入って、万太郎様に申し上げたいことがござるが、暫時、別室までお越しを願えましょうかの」
と、気がねをしながら、千蛾老人が金吾へまで申し出る。
それくらいな事なら、至って気軽な若殿です。金吾の取次も待たず、即座に席を立って、彼の案内について別の間にうつります。
人の来る前に、すでに、丁字香の煙が縷々と薫っていました。ぴたりと、ふすまを閉め切って、老人の膝は改まる。
「話とは？」
万太郎は正座の敷物を少し片寄せて、微酔のからだを竹の床柱にもたせかける。
「夜光の短刀のことにつきまして……」と老人の痩躯が厳そかにそびえると、万太郎もやや態度をひきしめて、
「お。その儀は、自分からも問いたいと思うていたところじゃ。当家と、あの短刀の持主ピオと申す異国の貴人とは、深い縁があったそうな」
「さればでございます、浅からぬ奇縁があって、当家歴代の者も、夜光刀の捜索には、心をくだいておりますが」
「実は、自分もそれを手に入れようとしているのだが」と、

万太郎がすばやく挟んだ一言には、どことなく挑戦的な語気が走りました。

が、千蛾は軽く、その語の切ッ先を避けて、

「まず、お聞き下さいませ」

「ウム、短刀の詮議は止めよとあるか！」

「何で左様な自由をこの老人が持ちましょうか」

「いかなる危害が身にかかるとも、余は夜光刀の捜索を思い止まらぬ覚悟じゃ」

「千蛾も共に、御成功をお祈り申しあげまする」と、冠の紐のように、老人の白髯の先は膝につきました。

「では、そちには、野心がないのか。われらよりは、必ず多くの手懸りもあろう其方が、思い止まったとは心得ない」

「御意のとおり、家の宝としても稀代な名品、羅馬の王家へ戻しやれば、多大の報酬のある品物でございます。狛家歴世の遺志をついで、この千蛾も、手に入れたいは山々でございますが、仔細あって、それは徳川万太郎様に、おゆずり申しあげたいと存じます」

「わしに譲る？　……」と、彼いよいよ不審そうに千蛾の顔を見つめて――「と申しても糠欣びであろう、今もって、皆目手がかりのないものを」

「いやいやそうでもござりませぬ。奥秩父の切支丹谷に棲む者や、日本左衛門などという盗賊たちの手さぐりが、次第に迷宮のくらやみを縮めておりまする。必ずや、遠からぬうちに、幾本かの手さぐりの指先に、秘密の鍵がつかまれましょう」

「ふーム、では、万太郎の如き、迂遠なまねをしていては駄目だの」

「おそれながら、今のままでは、御失望が目に見えております。しかし、お案じ遊ばすな、及ばずながら、千蛾ができうる限りの、御助力をいたしましょう程に」

「ほ。そちがわしを助けて、夜光の短刀を身のものにして見せるというのか」

「ついては、千蛾が折入って、お願い申す一儀がござります。あえて、御尊体を別室までお運び願いました次第、なんと、お聞き届けを願われましょうか」

そういうと、千蛾はさらに畳をすべって、白扇を寝かしたように平伏しました。常に、村の将軍家と異名されるほど、見識の高い御隠家様自身が、かくも、身をへりくだって頼むというのは只事とも思われません。

ことに、夜光の短刀の望みさえすてて、それにも代えようという頼みは何でありましょうか？

昼のようだった庭面の月が、うすい雲の膜につつまれて、月蝕の晩のようなほのぐらさでした。

その頃、例の奥まった所にある石神の拝殿に腰かけていた一つの人影が、名月や池をめぐりて夜もすがら――そんなふうに、ふところ手をして、秋草の間をあるいていたかと思うと、いつか、千蛾の部屋の窓明りをぬすんで、その雨落ちの下に、盲蜘蛛のようにかがみ込んでいました。

――がしかし、その一室をうかがっていた者は、ひとり、

窓の外の盲蜘蛛の如き人影ばかりではありません。

廊下口の杉戸の外にも、脇差をかかえた一人の武士が、じいっと、室内の衣ずれをも聞きのがすまいとして、身を硬ばらせている。

それは、酒席を抜けて来た金吾でありました。金吾なれば、彼の行為にうしろ暗いところはない。彼が、大切な若殿の身を護衛するために、かく、側ぢかく侍しての根気は、まことに当然な振舞であります。

部屋のうちでは、いよいよひそかな二人の対坐です。――暫くすると万太郎らしい声で、

「なんの願いかは知らぬが、それ程の誓いをたて、きっと違背をせぬというならば、そちの頼みを聞いてやってもよいが……」と言う。

「ははっ」と、千蛾はおののくような感激をあらわして、

「お快く御承諾、かたじけない儀に存じまする。この上は、千蛾が骨身をけずりましても、必ず、夜光の短刀をお手に入れて、若殿の思召しに酬わずにはおりませぬ」

「それはうれしいが、しかし、老人。いったいそちの願いとは何ごとじゃ」

「ふつつかな、ひとりの娘の事にござります」

「あの月江とよぶ女子か。して、それがどうしたのじゃ」

「かなしや、恋に陥ちておるのでござります」

「かなしむことはあるまい。恋をする年ごろの女、なんで不思議があろうか」

「それ故に、老いの目から見れば、ふびんに見えてなりませぬ。自体が吾まま育ち、それに、人には明かされぬ短命な病気がござります。――もっとも、その病の方は、或る、秘薬を見出して、よほど見直しておるとは存じますが、この老人でも亡い後は、たれが、手に入れ難いその秘薬をつづけてくれましょうか」

老人の声がほろりと哀れをふくみました。頬の落ちたところに燭の影が濃く、涙をこらえる顔のすじが、びくりとうごいて見られます。

――声をのんで、また平調に、

「で、当家の世つぎに選ぶ聟がねさえ、めったにはないものを、そんなこんなの思慮はなく、好きなものを自由に恋したのでござります。それと察した時は、実もって、千蛾は当惑いたしました。……お察しくださいませ、ひとつぶの愛娘、恋をかなえてやりたいのは山々で、しかも、短命な遺伝のある娘、恋はかなえてやりがたい事が、初めから分っているのでございます」

「分った」

と、万太郎は同情のあるうなずきを与えて、

「そこで、恋の相手は、誰か」

「御家来、相良金吾様を、熱海の入湯中に恋したようにございまする」

「金吾？」

その声が、おそらく大きく聞こえたので、杉戸の外に屈んでいた当の金吾は、思わず居耐らない気もちに駆られて、無意識にそこに立ち上がったのでした。

――すると、折もわるく、
「おいで遊ばすのは、相良様ではございませんか」
と、暗がりをすかして、おりんがそこへ近寄って来たようです。
しッ……と目顔で制したい程でしたが、おりんは何も知らないので、
「若様の御用のないおひまに、ちょっとこちらへおいで下さいませ。いいえ、あちらのおひとかたは、郷士達と、まだ賑やかにお話しでございます。……あのちょっとでよろしゅうございます程に、お顔を……。ホホホホ、お嬢様が、しきりと、お待ちかねでございますのよ。……あれ、なぜでございますか、お嬢様、お嬢様、金吾様は逃げておしまいなさいます」
おりんのうしろには、月江のすがたが、おぼろげに見えていました。金吾は、決して逃げるというような気持ではありませんでしたが、とにかく、そこにいるには耐えないで、有り合う庭下駄をはいて外へ出てしまったのです。
ばッさりと、床下の暗をふさいでいるやつでの葉蔭から、その足もとを見ていた二つの目は、金吾にもつれて行った両女をやり過ごすと、また元の窓際へ背をのばして、屋内の話に聞き耳をたてていました。
しゅくしゅくと千蛾老人がうれし泣きにすする声が、やつでの窓にまでもれてから、暫くして後――
「心配いたさぬがよい。必ず金吾を説いて、当家の月江と添わせてやるであろう程に」
万太郎が、誓言をくり返していますと、老人はいくたびか彼の姿を拝して、やがて、次に聞こえたのは、ガチリと、刀箪笥の錠前をあける音でした。
あとで、違約のないように、早速にも、何か自分へ誠意を示そうというのらしい。――万太郎はそう思いながら、千蛾の手元を黙然とながめていました。
えび鞘の脇差が出る。柳鞘の大小が取り出される。さめ柄のよろい貫し、あずき塗りの野太刀、白鞘、巻絵鞘、見ていると幾腰出るかわかりません。忽ち、刀箪笥から山になって、千蛾のそばに移されます。
そして最後に、空ひきだしをスッと抜いて、底に敷いてある、花模様を浮かした鍋島織の厚布をめくると、その下から、ぷんと樟のにおいが部屋じゅうにひろがりました。
取り出したのは、尺二、三寸の虫蝕い防ぎの樟の薄板です。旧家の刀箪笥や書画入れの長持には、よくこの樟板を底へいれておくものですが、今、老人が手に取ったそれには、黒光りの板の片面に、何やら細密な絵図がひいてある。
取り出した刀を、また一腰一腰、元のとおりに納めて、千蛾は燈芯剪りを取って行燈の丁字をつまみました。
目がさめたように、明りがさえます。それを二人の間に引きよせると、樟板の図面をそこにおいて、
「さて、万太郎様。これこそ、当家の代々の者が、筆に筆を加えた、夜光の短刀の捜索図でございます、――おそらく、あの短刀をたずねる者は、皆、さまざまな空想をたどって、

そのありかの空想図を作っておるに相違ございません。しかし、当家のものこそ、三代四代と世をついで、ようやくこれまでの完成しかけた、間違いのないもの、まず、よく御覧下さいませ」

そういって、図の正面を、万太郎の方へ向け直しました。

老人はまた問わず語りに――

「拝島の郷士で、関久米之丞というものがございました。これなども、夢中になって尋ねておりましたが、気の毒なもので、やはり猟奇家のよくやる迷宮彷徨に終って、遂に、落命いたしました。その男などのおかしい事には、あっぱれ、何か一つの手懸りでもあると、もう手に入れたつもりかなんぞで、娘をくれるかの、聟にするかのと、厚かましい事を申しております。で、からかッてやった事もございましたが、案のごとく、何も耳新しいことは持ってまいりは致しません」

「老人老人……」と万太郎はもう千蛾の話などはうわの空で――

「これはどうやら御本丸を中心とした江戸絵図らしく思われるが」

「左様、まず町絵図にそっくりでございます。しかし、そのなかで、所々に印がございましょう」

「おお、あるな、朱点、黒星、そのほかさまざまじゃ」

「朱は、当家の前代が、ピオの日誌を手がかりとして、掘返してみた跡でござります。また黒点は、ピオの足跡、また、＋の印は謎の土地、そうした諸方、種々な考証、あらゆる研究を積みました結果、ピオの死所までは、ほぼ見当がついておるのでございます」

「えっ、そこまでの事が分明いたしておるのか」

「ところが」

と、千蛾は首を横に振って、

「やんぬるかな。それもやはり、諦めものでございました」

「なぜじゃ。それまでの苦心が現在むくわれておりながら」

「実は手前も、ピオの最期の地と分っている場所を、生涯に一度はあばいてみたいと願っておりましたが、それは、所詮及びもない大望に過ぎませぬ。痴人の夢でございました。――がしかし、若殿、あなた様ならそれを実行してみることは、決して夢ではございませぬ。立派にその場所へ近づき得るのでございます。……でなければこの千蛾は、不可能なことを売りつけて、若殿に無理なお願いを強いたことに当りますわけで」

千蛾老人の説いてくるところは、決して怪力乱神ではないように聞かれます。

――千蛾老人などには寄りつけない所であるが、万太郎ならば易々と行ける場所とは、何処でしょうか？

ピオの秘密と彼の最期の歴史が埋もれている地はそこであるという。

「ウーム……」と万太郎は腕ぐみをしたまま、樟板の秘図から目も離たずに考えこむ。

「だが老人……今日まで自分が探ったところによると、ピオの最期の地は武蔵野のうちであって、この絵図面にしるしあ

る場所とは、だいぶ違っておるように心得るが」
「それが、誰しも考え違えをし易いところで、武蔵野とは申しますが、今の江戸市中も、慶長の昔には、武蔵野の一部であったに相違ございませぬ」
「ふム、成程な」
「よくよくその絵図面を見ているうちには、老人が説明するまでもなく、自然と、何かが胸に解けてまいります筈で」
「して、この三つの、流れのような線は何か？」
「間道のしるしでございます」
「ほ。間道」
「江戸の三孔と申しまして、太田持資入道の頃からある長い地底の抜け穴でございますが、いつか、その上に御府内の市街が立ちならんで、今では人家や往来にかくれたまま、絶えて知る人もございませぬ」
「その三孔とやらも、そちの先代が調べだしたものであるな」
「いえ、それを疾くから調べていたのは、兵学家の素行山鹿先生でありました。そして、山鹿素行はその三孔のことを、講義の席でちょッと口を洩らしたがため、ついに幕府から罪を得て、配所へやられたとも伺っておりまする」
「また、この三孔の線が結び合っている所に、嵐山という地名が書いてあるが、江戸の市街に嵐山などという所はない。何かの間違いであろう」
「いえ、間違いではございませぬ。たしかに、その三孔の中心が嵐山なのでございます」
「はてな。京都ならば聞いておるが、江戸の嵐山とは何処であろうか」
「若殿などは、お歩きになった事もある筈でござりますが」
「いや、江戸の嵐山などとは、見たこともない」
「何せよ、この図面だけでは、難解な箇所も多く、実際の手がかりとするには、御困難でございましょうから、こよいのうちに、手前が要所へ解字を書きいれておきまする」
「オオ、そうしてもらえば、何よりである」
「で、何とぞ、千蛾の微衷をおくみとり遊ばして娘月江のこと、くれぐれお力ぞえ賜わりますよう」
「その儀は、今も言ったとおり、決して心配いたさぬがよい」
「では、夜も更けます故、どうぞあちらの寝間で御休息を。……手前はよいに早寝をいたしました故、家人どもの寝しずまっている間に、この絵図に註を入れておくことにいたします」と、老人は、机の上に樟板の図面をのせて、硯や細筆を調べはじめました。
　万太郎が元の席へ帰って来た時に、ちょうど、金吾も庭先からそこへ来合しておりましたが、何か、いつもの落着きを乱されている様子が彼に見えました。
　で、万太郎は最前の廊下のささやきを思いうかべて、
「金吾も月江に恋をしているのであろう。月江も金吾を恋している。さすれば、千蛾のたのみをかなえてやる事は、なんでもない事だ」
　ひとりのみ込みに合点して、案内された一室の夜具に身をいれると、夢はもう夜光の短刀を手にいれた気で羅馬に渡る日の波音を聞いております。

金吾は、その次の間へ。

釘勘はその縁向うの部屋へ。

そして狛家の郷士たちも、それぞれ燭を滅して、奥の詰部屋に引きとり、やがてグッスリと寝入った様子です。

ひとり、やつでの窓に灯をかかげて、樟板の秘図に注釈の筆をコツコツといれていたのは千蛾老人で、シーンと夜半の寒さが身に迫ってきたせいか、時々、彼のしわぶきがそこから漏れて来る。

「お泣きなさいますな、お嬢様。あなたがお泣き遊ばすと、おりんも共に悲しくなってまいります」

千蛾老人が夜を徹している一室のほかは、どこの棟も、すべて寝しずまったであろうと思われましたに、

「りんや、ほっておいて下さい。私はなんだか、こうして夜明けまで泣いていたい」

庭のあずまに女の声がする。

「滅相もないことをおっしゃいます。この冷えびえする夜半に、いつまでこうしておりますと、御病気のためにも……」

と言いかけて、あわてて口をつぐみ、

「おからだの為にようございませぬ。さ、お寝みなさいませ」

うかつに出たことばを言い直しながら、月江の手を取って、無理にそこを引き立てました。

「だって、りんや、おまえ私の気もちを知っておいでだろう」

力なくおりんの手にもたれて、月江はまだ泣きたらないように、ほろほろと、歩みと共にに泣いている。

「分っております。……ですから、おりんが今に、きっとあの金吾様に」

「だめよ」

月江は、駄々に身を振って、

「おまえがお呼びして来ても、さっきのように、あんなに素気なくして、奥へ馳けこんでおしまいなされたじゃないか」

「でも、それは若殿の御用があるお体ゆえ、仕かたがないではございませぬか。……またよい折を見て、このおりんから必ずお話いたしましょうから、そんなに取越し苦労をして、お泣き遊ばすものではございませぬ」

しかし、月江は泣きたいのでした。泣く理由があると否とにかかわらず、ただばくとした恋というものに、あるだけの涙をそそいで泣きたい。

はたから悲歎にみえるその涙は、彼女に、甘い味がする。

（これが、遺伝とやらいう、わるい御病気のきざしでなければよいが）とは、ひそかにおりんが一番憂えているところで、恋を得た熱海にいた頃の月江から見ると、まるであの軽快な姿態やほほ笑みはあとかたもなく失われています。

「おやすみ遊ばせ。くよくよとお思いなさらずに」

――とにかく寝せつけて、

「おりんも、休ませていただきまする」

と、彼女が月江の部屋をそッとさがってきたのは、庭から影をひそめて、なお、半刻も後のことでありました。

屋の棟も三寸さがると俗にいう刻限、ことに旧家のおそろしく長い廊下の暗やみを足をこごえさせて歩くほど、不気味

で、寒いものはありません。
そよそよと、通りぬける風があるので、おりんは一度自分の寝間へはいってから、
「あ、雨戸を」
と、気がつきました。無理に月江を引き入れた時に、閉め忘れた庭向きの一枚です。
折角、寝巻に着かえたのを、また着なおすのもおっくうな気がして、昼ならば、眼を射るであろう派手(はで)やかな長襦袢(ながじゅばん)に帯を巻いて、スルスルと、白いその素足が氷のような板の間をすべってゆく。
「まあ、降るような――」
銀河を眺めて呟やきながら、ぶるッと、身ぶるいをして、そこを閉めかけましたが、どうしたのか、うごきもしない。
「おやっ？」
と見ると、動かない筈です、自分が手をかけた少し下に、五本の指が戸に掛って押えているのです。――自分の指は自分の指、それはいくらながめても、自分以外な者の指です。
ぎょッとして、おりんは、雨戸にかけた手を引っこめようとしましたが、蛇のように、するすると雨戸の桟(さん)を這って追いかけて来たその指が、ムズと、おりんの指先を掴(つか)みました。
「あっ……」
と、身をねじ曲げたのは、何か、黒い見上げるような影が、さっと、廊下におどり上がったので、人を呼ぼうとしたのですが、もう一方の薄べったい掌(て)が、自分の口をおさえていて、どうする事もできません。
「しッ。……驚くことはない」
耳のそばで、こう低く言ったのは男の声です。しかも、どこかで覚えのあるような声がらなのです。
相手が、鯉口(こいぐち)を切るばかりに用意しているのを見て、おりんはいたずらに騒ぐことの非を悟りましたから、じっと、眼を閉じて相手のなすままにこらえている。
と。
「おい」
気がついてみると、自分は決して、相手の力に束縛されているのではない。身を締めているのは、胸に結んでいる自分の腕で、今見た人影は、戸を閉めて、もうろうと廊下の中に立っています。
「おりん、なんでそんなに驚くのだ。……忘れたのか、おれの姿を。この声を」
「あっ、あなたは」
彼女が、よろめく背を、あやうく柱にささえて踏みとまると、目の前のもうろうとした影も、ゆらりと迫って、
「命の親を忘れるやつがあるものか。しかも、自分の肌までゆるした男を……」
白い歯が見える。
声をぬすんで笑ったらしい。
おりんは、総毛だつおののきをこらえるのに全力で、とても、救いを呼ぶ気力もなく、そこを逃げ去る足もすくんでいました。

と――相手はさらに寄って来て、
「どうだな、あれ以来、からだの工合は」
と、やさしい声でいう。
「もしッ……」
おりんは口惜しさに、やっと、反抗的に出ない声をわななかせて、
「な、なにをおっしゃるんです、あなたは」
「何を言うって」
「ええ。なにを言ってるんですか。だまって聞いていれば、私が不義でもしたような……」
「したじゃあないか。ふふふふ」
相手の語尾が、ゆがんだ笑いにかすれたので、おりんは、あの事だけに、かっと熱い血が頬へのぼって、怖ろしいことすら忘れかけました。
「じょうだんを言うのも、よい程にしてください。なるほど、拝島の空屋敷で、切支丹族の三人の男に、私が生き埋めになったところを、あとで、あなたが助け出してくださったのは、真実でございますが……、肌をゆるしたの、からだの工合はのと、そ、そんなことを、私は知りはいたしませぬ」
――相手は黙って聞き入って、すぐに澄んだ返辞をしてきます。
「知らない？」
「し……知りません」
「その知らないのが証拠だとも言えるが、じゃ話してやろう。あの誰も居ない空屋敷の奥の蚊帳に、おまえはおれの腕をまくらに、一刻のよも寝かされていた。ちょうどおれもただ一人で、何とはなく、あの陰気な昼の蚊帳に、寝ころんでいたところだったから、ついでもなく、手が出たのはあたりまえなことだった。……やがて、口うつしの……薬や、水や、それから先はお前にもおぼえがあろう」
静かで明晰で、しかも何か強い力をふくむ彼のことばは、聞くまいとしても、どうしても、耳に拒むことができない。
そうしておりんは、刃をのんだように、全く色を失っているのみでした。

嘘だ、嘘だ、と心で強く否定していながら、おりんはこの間うちからの肉体の変化を、おののきの奥に、思い出さずにはいられません。
「そして、あの翌日だが」――と相手はなお身ぶるいの出るような低声をつづけて、
「おれは秩父へ出て行ったのさ。少し、たずねている者があってな。――そのあとで、おまえは多分、あの空屋敷へ礼に出かけたろうと思う。しかしその時は、おまえとおれと、ふしぎな夢をむすんだ、あの昼の蚊帳があったばかりで、誰もあそこには居なかった筈だ」
「もう……そんな口から出まかせは、言わないでください。けがらわしい」
「というて――見た夢を、おまえは何で拭い消すか」
「知りません、そんなこと！」
涙も出ない口惜しさにちがいありません。けれど、彼に向

ってそう激しくいい返したことばも、忌わしい疑いにくるまれて真っ黒なものを胸に抱いてしまった彼女には、なんとしても、泣くに泣けない、弱々しい反抗であるのをどうしようもないのです。

「まあ、その話は、打ちきるとしよう。おれの恋はほかにある。あの空屋敷の昼蚊帳は、おれにも解せない夢だった」

「……そ、そしてあなたは一体、だれなんです？」

「おれか。――おれは日本左衛門というものだ」

「……」

おりんの顔色は紙のように白くなって、そのまま柱の下へよろめきそうになりますのを、日本左衛門の手がやんわりと支えて、

「驚いたのか」

と、耳へ口をつけました。

「なにも驚くことはねえ、ただ少し頼みたいことがあって、さっきからここに屈んでいたのだ。――奥廊下へ渡る錠口のカギを貸してくれ」

「……」

「いやか」

……ぱたッと、何か物音がそこで聞こえたかと思うと、それっきりです。

それから暫くして、ズズズズと廊下を向うへ摺ッてゆくような音がしたのは、どうも日本左衛門の跫音でもないようでした。

何しろ古い様式の建物で、中の屋、北の屋、東の屋、と棟もべつに、中庭から橋廊下をへだてているので、これ以上なことがあっても、滅多に客間や詰侍の部屋までは分るはずがない。

まして、千蛾老人の部屋は、一番奥まった北の屋の一室で、そこへゆくには、ひとつの橋廊下と、二ヵ所の厳重な杉戸がある。

約束のとおり老人は、窓もふすまも閉めきって、燭を机の左に寄せ、例の樟板の絵図面へ筆をとって、丹精な解字をそれへ書きこむことに、夜の深沈たる寒さも、身にせまりつつある禍いの影も、まったく心にない様子です。

――と、切燈台の燈芯が、ボッと、赤い焔を横に寝かしましたので、オヤと、老人が筆を止めて横を見ると、そこが、三、四寸ほど開いている。

「誰じゃ」

激しくいったが、答えがない。

「誰じゃ、そこを開けたのは」

立って、ふすまの外をあらためようとした時です。自分のうしろにさした人影に、ヒョイと振顧ってみると、黒々と装った頭巾の男が、冷然と、自分の上から樟板の絵図面をながめ澄ましている。

前差の刀、尺二、三寸の短いもの、それを抜いて、いきなり老人が、

「曲者ッ」

と、のどを破ッていった短いことばも、語尾は血煙の中にかすれて、皆まで聞こえなかった程です。

床をうしろに立っている日本左衛門、その手は柄を握って待っていました。かッといったかと思うと、振り向いた老人の肩先へ、抜き打ちに落ちて行った冷刃！　彼の手に馴れた長船です。深く、肋へかけたその切ッ先は、ななめに通った床框の一端にポトッ――と赤い糸をひいていました。

ふすまへ走ッた血潮の細粒が、朱を吹いたようにパッと冴えて見えた途端に、千蛾老人のからだは前に俯伏して、

「ううムッ――月江ッ……月江……」と二声ほど、悲痛なうめきをもらすなり畳に爪の音を立てて、鬢の霜の毛に断末のあえぎをそそけ立てていました。

老年であり、日本左衛門の腕ではあり、ただの一刀でも、たまろうはずはありません。ビクと、最期のけいれんを両の拳にふるわしたかと見ると、もう横顔はサッと死色に変って、まったく絶息した様子です。

血糊をふいた長船の刃を、そろりと鞘にいれると、日本左衛門の手は机の上にある樟板の図面へのびて、それを横に持つと同時に、ふッ……と短檠の灯をふき消して、その一間から音もなく踏み出しました。

そして――

長廊下をさぐり長廊下を忍んで、最前の戸口から外へ出ようというつもりであるらしい。

ところが、折悪しく、その向うの一室から、手燭を取って起きて来た武士があります。……まずいと、舌打ちをして、日本左衛門が身をかがめて眺めていると、北の屋の物音を怪しんで目をさましたらしい相良金吾が、

「はてな？　……」というような様子で、彼の居る方へ足を早めて来ました。

途端に――日本左衛門の影は鼠走りに、中廊下の横へかくれました。もう、金吾にはそれが感じられたので、彼は、手燭をそこへ置いて、

「曲者ッ」

と、一跳足に、飛んで来ました。

「なに、曲者？」

同時に、彼の起きて出た隣の部屋で、こういったのは万太郎です。――遠ざかる廊下の足音を耳にするが早いか、同じく、おッとり刀という構えで、

「金吾ッ、何ごとじゃ」と色をなして駆けつけて来ました。

「おお、若殿。お目ざめでございましたか」

こういいつつも、なお八方へ眼をうごかしている金吾の様子に、

「曲者はいかがいたした？」

「見失ったようにございますが、まだ屋外へ逃げ出した様子は見えませぬ」

「家族たちを起こしたらどうじゃ、物盗りであろう」

「気がかりなのは、千蛾殿のいる、北の屋の一室です。――あの辺りで、何かふしぎな物音が聞こえましたので、それで目をさましましたので」

「千蛾の部屋に妙な音が聞こえたと。それは気がかりだ。万一、あの……」といいかけたまま、万太郎は思い当った不安

に駆られて、一散に彼のいる北の屋へ走り出しました。そして、そこの橋廊下を渡って、境の錠口でドンという音をさせると共に、

「あっ、開いておる！　開いておるぞ、ここの杉戸が！」と、金吾を振顧って、事こそあれと叫んだものです。

さては、と金吾も胸のとどろきを覚えました。しかし、万太郎についてそこの異変を検めにゆくのはよいが、その間に、この辺でたしかに見かけた曲者に、逃げる機会を与えてはならない。

「金吾！　……金吾」

と奥ではしきりと万太郎の呼ぶ声がして来ますが、彼は、そう考えて、断じてそこをうごかずにいます。

そして――なおも油断のない目で、中廊下の曲り角から、そこの天井をズウと見上げていますと、覆面をしたひとりの男が、片手を欄間にかけ、片手を柱にグッと伸ばして、あたかも、蜘蛛のようにペタリと体を貼りつけたまま、鴨居の上から、自分をじいっと見おろしているのでした。

梁上の曲者に気がついて、金吾があっとおどろいた途端に、彼の肩先を鴨居の上からぽんと蹴った相手は、軽いからだにその弾力を加えて、ひらりと廊下の向うへ飛び降りました。

そのすばやい踵を肩に与えられて、うしろへよろめいた金吾は、咄嗟に向うへ跳んだ曲者の影をみとめるなり、あまりな意外さに度胆を抜かれた形でした。

それこそ、自分たちが、秩父の神楽堂の下から双子の高原まで追いつめて行って、遂に迫ることのできなかった日本左衛門ではないか。

無論、それと気がついて怯む金吾ではありません。おのれッとおめいて、うしろへとびつくが早いか、上背のある相手の体へ組みついて、

「拙者は相良金吾だ。うしろを見せては約束がちがうであろう」

耳も破れよと怒鳴りました。

日本左衛門はあわてもしないで、肩から胸元へ廻している金吾の腕に自分の手をかろく重ねて、

「今夜はすこし都合が悪い。またそのうちに会おうじゃねえか」

ジロリとうしろへ瞳を流してあいさつしました。――がしかし、金吾はこう組止めた大きな仇敵をどうしてめったに離すことではありません。

「だまれ。小仏の谷間でなんと言った、この後拙者から果し合いをのぞまれた場合は、なん時でも、必ず逃げかくれはせまいと言ったことばを、よも忘れてはおるまい。卑怯であろうッ」

「いや、卑怯ではない。おれは今自分の渡世を働いているところだ。稼業のなかでそんな道草を食ッちゃいられねえ。おれに会いたくば、拝島の空屋敷まで改めて出直して来い」

という言下に、肩を落として、組みついている金吾を前に振り捨てようとしましたが、金吾もウムと踏みこらえて、易々

とそうはさせません。

受身になった日本左衛門と組みついた金吾と、ふたつの体が一つによじれ合って、どんと壁の腰にぶつかるなり大きな震動をたてましたが、その途端に、日本左衛門のかかえていた樟板の絵図が、彼の左の脇の下で、バキッと二つに折れたかと思うと、金吾の足元にその半分の板がカラリと落ちます。

しかし、金吾はそれをどれ程大切な物ともまだ知っていないので——また知っていてもそれを拾い取っているような余裕は無論なかったので、ただ、彼の喉輪にかけた腕を死すとも離すまいという懸命をこめて、さらに相手の体をあとへねじる。

でんと、そこへ同体になって仆れたせつなでした。変を知って飛び起きた釘勘、その他、狛家の飼侍たちが、一時にドドドッと馳け集まって来た気配です。

吠えるように耳をうった日本左衛門の一息が、足業にかけて金吾の体にもんどり打たせたのもその瞬間でした。——そしてそこへ真っ黒に見えた郷士たちへ不意を衝いて、一方のふすまをサッと開けたかと思うと、彼の姿は、忽然と一室の暗に呑まれてしまいました。

血眼になった金吾と釘勘が、すぐそのあとへ駈け込んでみると、もう次の間のふすまが開いている、そこへ入るとまた次の部屋へ、次の室へはいるとまたその先に、十方の通路は彼の行くままに口を開いていて、人数ばかりいたずらにふえても、彼の姿はふたたびそこらの長押の上にも見つからない。

「灯しを。灯しをつけろ」

「曲者をのがすな。庭先へ出合え、庭先へ出合え」

そんな騒ぎが八方を駆けずり廻る間に、まだほんとに眠りついていなかった月江は、おそろしい胸騒ぎを抑えて衣桁の小袖を肌着の上にまとい、歯の根に寒さを噛みながら帯を締め廻しておりました。

そして、真っ先に、おりんの寝間へ駈けこんで行ってみると、おりんは扱帯に両腕を縛られて絹糸のように身をねじったまま、仆れた体をもがいております。

暴風的な驚きのなかに、千蛾老人の横死が人々の口に叫ばれ出すと、その乱迷な廊下を狂わしい勢いで、北の屋へと駈けこんで行った月江とおりんの姿が見えました。

とたんに、声を惜しまずにわッと泣きふしたような、若い女の哀声がその一室から洩れて来る。

表の方ではさらに激しい騒音と喚きがなおも度を加えておりましたが、曲者はその混乱に乗じて手際よく姿をかくしたものらしく、やがて疲れた人々の顔に空しい色がありありと読まれています。

いつか、夜は白々と明けている。

暴風のあとの家には重苦しい哀寂が満ちて、密閉された千蛾老人の部屋から絶えなく洩れるすすり泣きに、家の子の郷士たちも胸をつかれて、皆その板縁の外にうずくまるなり暗愁な涙をのんでひれ伏しました。

とにかく、この際善後の処置を執らなければならない立場の者は万太郎でした。深い因縁というものか、ゆうべ千蛾が

万太郎に苦衷を打ち明けてすがった言葉は、彼の遺言となったわけです。

曲者は日本左衛門と明らかに分っている。その目的も樟板の紛失したことで万太郎には読めていました。――しかし彼は迷わざるを得ません。千蛾の遺言を一同へここで発表したがよいか、悪いかということ。

それを話すには順序として、ぜひとも月江の恋に及ばなければなりません。一族悲しみ傷んでいる席で、それを語るのは、誰よりも嘆きの深い月江をして、いっそう悲痛な思いを加えさせるものではあるまいか。

機会がある。それを語るには語る機会があるであろう。

万太郎はかく思案をして、取りあえず月江に代って一同へ喪をのべ、向後の処置やあと始末などを計って、それから約七日程の間は、ほとんど狛家の遺族同様な立場になって暮らしていました。

――と或る日のことです。

程離れた山腹の禅刹に、千蛾の霊をとむらう鐘がものさびしく鳴っていた昼のこと。

その日、月江や万太郎を初め、すべての人々は寺へ行って、留守となった狛家の屋敷には、わずかな召使いだけがさびしい塵を掃いているのみでしたが、そのうちに、いつも台所の隅に、黙々と働いている唖の水汲男が、妙な物を抱えて、こっそりと裏門から高麗川の谷間へ降りて、やがて奥秩父へ通う峡の奥へ逃げこみました。

唖の男が手に抱えて行ったのは、あの騒動のあった翌日、彼がふと廊下の一隅で拾い取った樟板の半分です。それを持って一散に、彼は奥秩父へはいって行きます。ふだん耄ている男に似ず、その足の早いことといったらまるで猿かなんぞのように。

察するところ、この水汲男は、唖を装って住み込んでいた「山の会堂」の諜者であったのではないだろうか。どうも彼の走って行く道が、例の天童谷の方角へ向っているような気がされてなりません。

前に見えるのは、鳥首峠です、左の山間に肩をそびやかしているのは天目山のようです。どうやら三峰の社前へ出る秩父街道の高原とはガラリと四囲の山容が変っている。

するとまた、その山ふところの霧の中から吹いて出されたような一人の男が、旅合羽をひらひらさせて、唖の男の駈けてゆく彼方から、これも山馴れたわらじばきで、スタスタと急いで来る姿が見えます。

飄々と風に吹かれて飛んで来た旅合羽の男を見ると、偽唖の男は、樟板の絵図の半分をあわてて小脇に隠して、顔をそむけながら道のわきへ身を避け、彼の行過ぎるのを待とうという素振りに見える。

ところが、そこへ来た旅合羽は、彼を見るや、わざわざ顔をそむけている前へ廻って来て、

「もし、もし。高麗村へ下るにゃ、どう出たらようございましょうか。あっしは甲州路からはいって来たんですが、信玄の隠し湯からずっとこっちで、変な方角へ踏み込みましてね、どこへ向いてもこの通りの山、今日で十日も道に迷っている

んですが……」

と、腰をかがめて訊ねましたものの、相手に一向感応がなく、ぽかんとして、無表情に、いつまでそういう自分を見つめているのに間拍子を失って、

「へへへへ……」と意味もなく笑って見せました。そしてまた改めて、

「秩父の大宮か、武蔵の高麗村へ抜けたいと思うんですが、どっちが近うございましょうね」

と、畏る畏る問い直してみる。

この旅合羽は、秦野屋九兵衛でした。かの天童の切支丹村からあぶないところを脱出して来て、いまだにこんな所をウロウロしている様子ですと、今彼の言ったように、この際涯のない山中を数日歩き迷っているという事は、嘘ではないかも知れません。

「え、もし。これから人里へ出るにゃどう行ったが一番近いでしょうね。お前さんは何処から来てこれから何処へ行くつもりだえ？　エエおい、不愛嬌な男じゃねえか、なんとか返辞をしたっていいだろう。……おやおやこいつは情けない、たまたま人間に出会ったと思ったら、さてはおめえは唖だとみえる。こいつが役に立たねえだろう、こいつが」

自分の口を指さして言うと、偽唖の男は、初めて一つうなずいて見せましたが、九兵衛がからからと打笑うのを、おかしくもなさそうに睨んで、すたすたと先へ行ってしまう。

そこで九兵衛もしかたがなく、彼と別れて、あてのない道を急ぎ出して行く。

するとやがて何処かで遠い鐘の音が聞こえて来たので、

「こいつは脈がある」

と九兵衛の足は急に勇気づいて来ました、そして例の疲れを知らない足どりで、峡谷の細道をひたすら急ぐうちに、だんだん人里くさい景観がひらけて来る。

ふと見ると、今しも彼が登りきって行った峡谷の上に、赤松の植林された円い小山があって、その中腹にある寺の石段から、一列の人がうつ向きがちに降りて来ました。

最前の鐘の音と思い合せて、これは誰かの野辺送りか、忌日の供養に詣でた人々であろうと、久しぶりに世間らしいものを眺めた九兵衛が、もの珍しそうに見ていますと、ひとりの侍女に助けられつつ一番先に降りて来たのは、白綸子の衣装に下げ髪をすべらした姿のいかにも処女らしく浄らかな十九か、二十歳ぐらいと見える女性です。

手に手に、数珠を持って、うしろに黙々と尾いて来るのは、高麗村土着の郷士たちで、約四、五十人は居るかと見えます。

さて、九兵衛が驚いたのは、その供養の列の一番最後に、山門を出て来た徳川万太郎と釘勘と、そして金吾の姿を見たことであります。

金吾も目ざとく九兵衛を見つけて、意外な顔をしながら万太郎に何やらささやいていました。――しかし、この路傍では憚られるので、ちょっと彼に目まぜを与えたままで通り過ぎる。

で、九兵衛も神妙にそこでは声をかけずに、列の一番おしまいにのそのそと歩き出して、遠く白壁の土塀が見える狛家

の屋敷へ尾いてゆきます。

さて、一方の偽唖の男が、天童谷の切支丹村へ樟板の絵図を齎してから、そこでは大きな変動が起りました。

「山の会堂」の司祭者たるヨハンの姿が忽然と村から消えて見えなくなったことです。――同時に、白樺の森の家に押し込められていたお蝶が隙を見てその檻から逃げ出したことです。

ヨハンの姿をかくしたのは、何か、諜し合せの上の事とみえて、村の切支丹族達はみな素知らぬ様子をしておりましたが、その翌日、お蝶が逃げたということで、ひどく狼狽して騒ぎ廻った朝のこと、そんな空気も嗅ぎつけようのない「山の会堂」の地底から意外な事件が勃発して、ここに人獣争闘の原始劇をそのままな惨鼻が白日の下に演じられました。

外部に裏切者がいたのかも知れません。――でなければ、あの生ける墓場の穴蔵へ外の消息がわかるはずもなし、また、そんな隙のある機会に、彼等目なし魚同様なものの神経をさまして、その脱出を企てさすような、強い刺激のある光線が流れこむはずがない。

とにかく、村の者が、お蝶の逃げたことに騒ぎ合っている頃に、誰か、山の会堂から地底へ通じる隠し口を開けた者があって、そこから外部の光線が千年目に夜明けの来た太陽の如く、さッと生ける墓場にさし入ったかと思うと、ワーッという悲壮な声がその下から湧き揚がりました。

まるで、蛆のように這い出して来た囚われの人間と、それに驚いて駈けつけて来た切支丹族の者との間に、忽ちおそろしい活闘が起ったことは当然です。

猛然と、死から生へおどり帰った人間と、兇猛な切支丹族たちとの争闘は、そこに振り撒く血を惜しまずに戦いました。その結果は累々たる犠牲者の死体を積んで、双方が最後のただ一人となり終るまで、勝負の果てしはあるまいと見えましたが、そんなばかな真似をしていない人間が五、六人ほど、いい汐時を見計らって、盆地の先の絶壁に取ッ付いております。

――雲霧の仁三、四ツ目屋の新助、そのほか二人の百姓ていの男と、もう一人は、これも同じ地底に永らく陽の目を見ずにいた馬春堂先生。

彼等はいち早く、死地を逃げ出して来ました。――逃げて来る前に、「山の会堂」の祭壇にあった燈明でも仆して来たのか、蔦葛をよじ登って断崖の上に立ってみると、盆地の底からまっ黒な煙が渦をまいて噴き揚ッている。

――後に馬春堂が人に話して、そこまでの事は何が何やら分らなかったと言ったそうですが、無理はありません。

「ここは陽の照っている世間の一部だ。おれの上には太陽がある……」

そう考えただけで先生は、不甲斐なくもそこでまた、生命意識をボウとさせてしまったものとみえます。

――気がついてみると、傍にはもう誰も居ない。

雲霧も、四ツ目屋も、また一緒に逃げて来た二人の墓場の友達も、いつのまにかそこにはおりません。彼は彼ひとりで、

ボウとした意識のままで、何処か分らない山の中を歩いている。決して、そこが何処だろうか、この道の行先は何処かなどと、そんな事を考えてもいなければ、知ろうともしないのであります。

先生は、ただそうして、歩いている。

かくて、盆地の底から揚る黒煙は、その日の夕刻になってもやみません。その翌日もいちめんな煙が雨雲のようにひろがって、金盥を灼いたような太陽がドンヨリとこの山中に存在していました。

いわゆる、火の性質は山火事というものに変って行ったのでしょう。それから後、幾夜も幾夜も、この奥秩父と裏天目の北にあたる空の上に真ッ赤になって見えている。

しかし、やがて里よりは一月も早く、そこへサラサラと降って来た雪みぞれに、さしもの火勢も衰えて、秩父あたりで怪し火と騒いだ噂もやみました。

それから後――約十数日。

里へ着いた秦野屋九兵衛の話したところによって、釘勘から甲府の柳沢家へ人数のくり出しを頼み、日どりを諜し合せて、甲府と高麗村から挟撃的に捕手を出し、寒さを冒し天童谷をうかがってみた事がありました。――けれど日はすでに遅く、そこはいちめん真っ白な八寒の盆地でありまして、その雪渓の底から人骨の如く腕を空へ伸ばしている焼木の梢に、一羽の雷鳥が雪をちらして飛んだのを目撃したほか、人はおろか、生物と名のつくものは虫一匹見あたらなかったと申します。

吹上異変

早いもので、と言うのは誰もが口癖に出る師走のことばで、その年も暮れると、明くる翌年は正徳五年です。

市中の初春気分はいうまでもありませんが、江戸城の正年行事は元朝から始まって、登城の大小名の駕は大手の濠端を埋め、松の内の城内は諸礼諸儀式の吉例ずくめで日ごと型どおりな繁忙で暮れている。

「実に何年ぶりでございましょうな」

その厳かな千代田の大玄関に立って、こう珍しげに言ったのは、兄の尾張中納言義通と共に登城した徳川万太郎でありました。

「この江戸城の多門をくぐりましたのは、自分が元服した折に、父に連れられてお目見得に登城いたした以来のことで、実に久しぶりでございますよ」

御三家の登城なので、格式どおり部屋付の表坊主が、すでにそこに控えているのに、まるで往来でも見て歩くような万太郎の放言が、兄の義通にはいちいちハラハラされてたまりません。

松の内の登城ですから、無論式服、熨斗目の裃に長袴、袴の括りは大玄関の板敷へ上がるとすぐに下ろして裾を曳くのが通例でした。

同時に、刀も、大広間溜りの供の者に持たせ置くことになっているので、作法どおり義道は召連れた近侍の手へ、万太

郎は連れてきた相良金吾に、自身の脇差を預けて、曳き馴れない長袴を曳いて本丸の奥へ通りました。

三家の詰部屋は大廊下御休息の間と唱える所です、そこに万太郎だけを控えさせておいて、義通はひとりで手に一個の塗りの箱をかかえて静かに白書院へ通って行く。

白書院には、月代の青々とした若き新将軍吉宗が微笑をもって彼を待っていました。

まず、義通から年頭の御慶をのべます。

吉宗は潤達に、「目出度い」と辞をうけてから、ここ約半年あまり引籠っていた義通に、その病状などをたずねておりましたが、ふと彼のたずさえて来た、砂子塗の立派な箱へ、怪しむような目を向けて、

「尾州殿、それへ持参いたされた品物は何であるな？」と率直にたずね出しました。

義通はその質問の出ることを待ちかまえていたように、

「は。これは、すでにお聞き及びのとおりな仕儀で、上屋敷の秘蔵より盗み出された洞白の鬼女仮面にござります」

「おウ。昨年の七夕能に使用するところであったのを、何か紛失したとやら申して、遂に間に合わなかったあの品であるか」

「文照院殿様から拝領いたしました神品で、毎年、二の丸の能お催しの場合は、必ず持って登営いたすことになっていたものを、昨年だけは不慮の禍いのため、遂に不面目ながら差出すことがならず、爾来今日まで、どれ程心痛いたしたか分りませぬ」

「ははは。それで尾州殿の引籠りでござったか。しかし、無事に手に戻ってまいったとあれば目出度いこと。新春早々の吉事、これで病気も本復であろう」

「就いては、春は例の年始御答礼の勅使に御馳走能がござりまする」

「お、あれは二月じゃ」

「その折には、ぜひまた御使用の栄もある事と存じますし、旁々、こういう神品を私人の塵蔵にまかせておきましては、折角の名作もその光を放たず、また何時不慮の事がないとも限りませぬ故、手に戻ったのを幸いに、今後は柳営の御宝蔵に永くお預りを願いたいと存じて持参いたしましたが、如何にございましょうか」

と、畏る畏る顔色を見る。

「鬼女の仮面だけに祟りでもするか、尾州家には、ひどく洞白に懲りられたようじゃな」

吉宗は軽い諧謔にまぎらして笑いました。

まったく拝領品の光栄も、頂戴だけで済むならばよいが、能催しのあるたびに持参して登営しなければならない責任付きの品物などは、義通にとって有難迷惑な光栄に違いはありません。

で、これを機に、将軍家へ返納してしまった方が、肩の荷が下りることだという彼の考えは、明敏な吉宗にもすぐ読めていたに違いない。

それは、彼の任意と認めておいて、さて吉宗は思い出したように、

「時に尾州家には、万太郎と申す愉快な男があったが、その万太郎は健在であるか」

と話題を変えて問い初めました。

吉宗が大統をうけてから、万太郎はまだ一度も新将軍に謁を賜っておりませんので、義通は、今日の拝賀をよい機に彼を伴って来ております。

その万太郎が、高麗村の放浪を最後にして、にわかに、勘気をうけている江戸表の上屋敷へ帰って来たのには、何か目企みがある事にちがいないが、上屋敷ではその前に、洞白の仮面が届いておりましたので、勘気も不問の形でそのまま、春を迎えました。

また、彼や金吾が高麗村を出る際、共に江戸表に連れて来た月江とおりんは、それより前に、洞白の仮面を持って江戸へ上っていた次郎と共に、今では根岸の下屋敷の方へ預けてあって、その身辺のことは一切釘勘にまかせてあるのですが、それやこれやの経過を察するに、万太郎の胸には今、何か一つの画策が立って、そのため暫くの神妙を装っているのではないかと思われます。

「なに彼を同道してまいったというか。なぜ目通りへ連れて来ぬのじゃ」

と、吉宗は聞くと共に、即座に義通をうながしました。

間もなく、召呼ばれた万太郎は、笑みを作って新将軍の前へ出ます。

「やあ、久し振りであるの」

と、吉宗の会釈は、青年らしい当時の調子から少しも変っておりません。

万太郎と吉宗とは、ちょうど同じように三家の庶子で、一方は紀州家の三男、一方は尾州家七男坊として、互いに弓の馬場で騎射を競ッたり、悪たれを言い合ったりした竹馬の友でありますが、今では、彼は廟に大統をうけた八代将軍であり、これは相変らず無為に父や兄の脛をかじっている一個の放浪児でしかありません。

「昨年の春、大手の外濠でお目にかかりましたな」

と万太郎も将軍家とは思いながら、急に元の友人的な調子を改めることができないで言うと、

「そうそう」と、吉宗はそれにふさわしく快活に相槌を打って、「あれは先将軍の御不例で、身が柳営に馳けつける日であった。気が急いておる場合ゆえ、其許とは承知しながら馬腹に鞭をくれて行き過ぎたことであった。……でそれ以来久しく消息を聞かずにおったところ、先頃、川越の秋元但馬守からちらと妙な噂を耳にしてな……」と、何かひとりでおかしがる。

「ははははは」と万太郎も思い出して、将軍家の微笑に哄笑を交ぜました。

彼は、川越の城下での事が、吉宗の耳にはいっていたと思うと、何か愉快に思われて来るのでした。あの「おやじ」と呼んでいた秋元家の家老や用人の河豚内などが、万太郎の記憶の前に道化た顔を描いて見せる。

「羨ましい御身分じゃ」

と、吉宗は笑ったあとでこう追け加えました。そして、ま

た義通の方へも等分に向って、
「しかし尾州の七男殿も、いつまでそうしてはいられまい。水戸殿を介して越前家から養子に欲しいという話があるが、どうでござるな」
「養子ですか。ハハハハ」と二の句も聞かずに笑い流して、
「養子の口などはどうか御用捨に願いたい。不肖ですが万太郎は、ほかに些か志もございます故、その辺は紀伊殿にも、いや、将軍家にもどうか御放念願いたいものです」
そばではらはらしていた義通は、いくら元の友人的な気持が失せない弟と吉宗の仲にしても、余りな放言に、座に耐えないで、体よく楓の間へ引退がりました。
若い二人は、話に熱して、そこには一介の放浪児と将軍家の隔てもない様子に話し込む。
「養子はいやか。成程、其許の気性としてはそうであろう。しかしいつまでも、部屋住みでいるわけにも行くまいが」
「いや、部屋住みの境遇で結構です。そのうちに折を見て、また遠方へ出かけてみたいと思っておりますから」
「高麗の郷や、武蔵野や甲府や秩父や、ずいぶん歩き廻られたのに、まだこの上何処へ行こうと言われるのじゃ」
「や、よく御存知で……」
「柳営には、お庭番という密偵の者が居る」
「伊賀者ですな」
「左様、それが時折いろいろな事を報らせてまいる。それを聞くのは、お駕台の下で、只今万太郎殿は五日市より小仏を越えて、峠の甘酒茶屋に着きました、などという事まで手にとるように教えてくれるのじゃ」
「ははア……」と万太郎は少し呆れた顔をする。
「しかしまだこれから遠方へ行くということは初耳であるが、一体どこへ行くつもりであるな？」
「羅馬へ渡ろうと思っています」
「羅馬へ？」
「如何でしょうか」
「よかろう。羅馬はよかろう。いかにも其許のような自由児には、この吉宗の政治を布く日本には窮屈で居たたまれまい」
「そこで、折入ってお願いがあるのですが」
「船の便なら、長崎奉行に申しつけて、蛮船の都合万端、よきように取計ろうて進ぜよう」
「いや、その前に」
「何であるか、申されてみるがよい」
「当江戸城のお庭を拝見させていただきたいのですが」
会話は、軽く進んでいますが、吉宗の腹にも一物、万太郎の胸にも一物、或る反感を隠し合っています。
吉宗は思っています。
「万太郎の胸は鬱々とした不平で燃えているであろう」と。
万太郎は観ております。
「吉宗は飾り物に祭り上げられた得意な気持から、おれをみじめな者に見下しているな。それで養子の口があるなどと自分を揶揄して誇るのであろう」と。
前の将軍家が歿した時、紀伊と尾張の間に激しい暗闘があったというううわさが、誰の口からともなく巷間にひろがって、

尾張は新将軍の令に伏すまいなどというような事さえ吉宗の耳にはいっておりますので、彼は万太郎の素行も、昔からの性格とは知りつつ、やはり好意のある理解は持てなかったとみえます。

しかし、表面はどこまでも、竹馬の友である紀伊の庶子と尾張の庶子とが打解けたさまで、

「何の頼みかと思うたら、江戸城の庭を観せてくれとはいと易い望みじゃ、幾日なりと滞在して御覧あるがよろしかろう」

と、吉宗は彼の深慮のあるところを知ってか知らずか、簡単に笑って承認を与えました。

「早速の御許容で」

万太郎はまず先に礼をのべておいてから、

「ではおことばに甘えて、当分、当城の隅に泊めておいて戴くとする」

「いや、隅でなくとも、大奥以外の場所ならば、何処にでも自由に」

「御好意は分りますが、しかし、いくら自由にと言われても、帝鑑の間で昼寝をしているわけには行かず、鏡の間で欠伸もできず、評定の間でお茶漬をたべているわけにもまいりません。自然と、どこか老中若年寄などの目ざわりにならぬ、隅のお数寄屋でも拝借いたすことになるでしょう」

「そこが気楽なら其処もよかろうし、また吹上の庭の方へ参ると、梅の茶屋、菊の茶屋などと申して、樹林や池泉のほとりに、小さな茶座敷の棟がぽつぽつと建っている、あれなどもよろしかろう」

「居候馴れている万太郎のことでござる。その辺は如才なく、後ほど貸家を見つけてまいる」

「ははははは、江戸城の中の貸家さがしは神君御開府以来始めての珍事であろうな」

「家主は新将軍の吉宗公、いずれ新統治の御善政ぶりを布かれる上に於いても、きびしい家賃の御催促はありますまい」

とすぐに万太郎の口から針が出る。

吉宗は鋭敏にその皮肉を感じましたが、彼また決して、すぐ顔色に出すような練れない人間でもありません。

「しかし万殿、仰せのとおり自分はまだ新世帯の持ちたてで多忙な体、滞在は随意じゃがおかまいは出来ないかも知れぬ」

「御念までもないこと、お側衆だの表役人だの申す手輩に、いちいち付かれていては窮屈至極、空家を見つけて入ったら一切おかまいない事に願いたい。そこで、ちょっとおたずねいたすが、当城苑内にあるという嵐山と申すのは、本丸の庭であろうか、それとも二の丸の方でござろうか」

「さあ、嵐山とはどこであろうか。江戸城の庭と申しても、紀州や尾張殿の城内とは少し広いので、まだこの吉宗さえ足を踏まぬ所ばかり」

「成程」

「しかし、山の多いのは三の丸から二の丸の間の火庭と思う。紅葉山、山里、吹上の諸苑のうちには、狐狸もすめば、雉子山鳥の群棲する千古不伐の森林がある。……いずれにしても一人では迷子になられる怖れがあるから、黒鍬の者でも案内に立てて行くがよろしかろう」

黒鍬の者に案内させたがよかろうという吉宗の好意に、万太郎はその日は大人しく宿直にさがって、翌日、それの来るのを待ちうけましたが、さて何とも音沙汰がない。

何事も、おいそれとは行かない柳営の事なので、どうしたと催促してみるわけにも行かず、ひとりでその辺を散歩して退屈をまぎらわせている自由もききません。そこらに時々見受けるのは、池田候とか、伊達候とか、松平某とか、いずれも糊付けになったような長袴の静粛な去来のみです。

はて、欠伸が出る。

紀州の吉公め、おれを、困らすつもりかな？

御三家の間の宿直に万太郎が痺れをきらしていると、やっと、三日目のこと。

側用人松平源次郎と近藤外記の両名が来ておそるおそる万太郎に向って言う。

「上様のおいいつけによって、御庭案内といたして黒鍬組頭小早川剛兵衛、只今、竹の間のお沓石にてお待ちうけ申し上げておりまする」

「大儀だ」

「お支度は……せめてお袴だけでもお改めがよいかと存じますが」

「元よりのこと。供部屋に、相良金吾と申す者が控えておる故、それへ申しつけてくれい」

「はッ」

程なく支度を更えて、万太郎が竹の間の沓石へ出ると、廊下には金吾、庭先には黒鍬の組頭小早川剛兵衛が平伏しております。

無論、肩衣は脱って、羽織に結城木綿の袴、それで足袋が万太郎好みの紺足袋でさえなければ、どうやら将軍家の遊歩と見違えそうな身装でした。

金吾は万太郎に従い、万太郎は黒鍬の剛兵衛に尾いて本丸の棟を離れ、富士見番所の宝蔵を左に見、西桔梗門を通って清冽な道灌堀の流れに沿いながら、的場曲輪の高麗芝をふみしめて行くこと十数町、やがて、満山楓の木ばかりで埋まっている紅葉山の裾まで来ました。

「秋は鮮紅なお山の風情が得もいわれぬ美観でございますが、冬は、御霊廟の玉垣が神々しいばかりで、楓樹の梢には一葉もござりませぬ」

と剛兵衛はそろそろ案内役の説明をしはじめて、

「これより登りましても、船見山、吹上、山里の方へ、丘つづきに参られますか、それともお広芝を通りぬけて、山里から吹上の方へ出てお戻りなさいまするか、如何でございましょう」

万太郎は剛兵衛のことばをうつつにして、

「広い。——さすがは広い」

と暫く感に耐えて眺めている。

「はい、御城内の広さと言っては、とても一口ではお話にはなりません」

彼は足を躍らせて、紅葉山の高所にのぼり、鷲の森の一端からふたたび四方を見廻しました。

そこに立てば、さながら深山の中腹から鬱蒼たる谷や流れや、峰を見る思いがあります。お庭方の古参である剛兵衛の説くところによりますと、江戸城総面積の三十万六千七百六十坪のうち吹上の庭だけでも十三万坪、堀の坪だけでも数万、崖地だけでも、二万四千坪からあるというので万太郎も想像外に思いました。

そして、天守閣、白堊の御宝蔵、西丸、山吹丸、出丸廓などの狭間が高く見えるほかは、諸門殿閣、みな樹林の底に埋ずまって、その上は模糊たる冬霞のうっすらと流れているのが、どうしても此処が江戸市街の中とは思えぬ程であります。

「江戸の中の嵐山。開府以前の武蔵野の原――そして羅馬の貴族ピオが最後の秘密を埋ずめた土地――」

しきりと四方を見ていた万太郎には、今、四隣夜更けた一室で亡き千蛾老人の囁いたあの声が、耳の底からありありとよみがえって聞こえて来るのでした。

「まだこの辺は御本丸の出端れ、風趣が浅うございます。さ、この鷲の森を抜けて、もう少々幽邃な深山へ御案内いたしましょうか」

と、剛兵衛は先に立って歩き出す。

紅葉山から西北に、丘となり芝生となり、山となり渓谷となる所は、有名な吹上の大園で、林間堂濤の響きをなすものは、こんな所にと誰もが意外に思うであろうところのすばらしい大きな瀑布の落下でありました。

千代田の城内には古くから三ツの滝が落ちている。吹上のお茶屋の近くにあるのが作兵衛滝、船見山の森林を水源とする三筋滝、もうひとつは寛政滝、それは華厳の趣があるとのことです。

とにかく万太郎、黒鍬の剛兵衛に案内されて、幾つの山、幾つの橋、幾つの森林を抜けたことでしょうか。足の疲れたあんばいで、十里も歩いた気がします。四方の嵐気が身に迫るのを感じては、遠い山地へ踏み迷ってきた心地がする。

「ああ、ここがどうして江戸なのだろうか」

不思議な錯覚さえ起こって来ます。

案内役の剛兵衛は、自分のものでも見せるように得意になって、

「どうして江戸でない事がございましょうか。内濠、外濠、幾つもの御門を通らなければ、江戸城の外へは出られませぬ」

「それは分っておる」

「はっ」と、剛兵衛は言い過ぎたかと、少し冷やりとして金吾の方を向いた。

「若殿にもお疲れでござりましょう故、今日は、このくらいにしておいては如何で？　山里やその奥の方はまた明日御案内いたしまする」

「そうじゃの、日もだいぶ暮れてまいった。剛兵衛がああ申しますが、若殿には如何なさいますか」

「剛兵衛、この辺に家はあるか」

「お茶屋のことを仰せ遊ばすので？」

「そうじゃ」

「ならば、こうおいでなさいませ」
と剛兵衛は針葉樹帯の山間を縫って、少し、道を西へ下がってゆく。
松と松との林間です。見るからに静かそうな、一戸の寒亭が戸閉してある。古びた戸額の文字を仰ぐと、船板に白緑青、題して「錦霜軒」と誌してある。
その林間から、江戸の市街がすいて眺められます。山を北にした東南向きの建て工合、冬のお茶屋と見えまして、そこへ来る風当りがバッタリ違う。けれど間数は至って狭く、一の間、床の間、中の間、後ろ納戸、次の間、口の間、お膳の間、それに水屋が付いていて、黒竹の葉がのぞいている小さな忘れ窓が一つ。
「手頃じゃないか、金吾」
万太郎は方々を開けて見ながら、
「ここでいい。ここなら至って気楽そうじゃ」
と、独りで決めてしまいました。
「しかし、お食事は如何なさいますか」
と、これは剛兵衛の心配。
「午はいらぬ。朝と夕だけ連んでくれい」
「は。は……」驚いたらしいが、否やは言えずに「御膳部のものへそう申し付けておきまする」と、自分には責任のちがう事を断るように釈明しておきました。
「では今夜から、早速そう申しつけておけ。もうお前には用はない。帰れ」
「はっ。お暇申しあげまする」
「いや、ちょっと待て、つい聞きそびれたが、この錦霜軒のそばの山は何と申す」
「古くは船見山、または望岳台とも申しまする」
「嵐山というのは」
「それよりずっと山の窪から、向うへ峰をなしております、桜樹の多い所でござります」
「よしよし、もう用はない」
剛兵衛が立ち去ると、万太郎は疲れた足を長々と伸ばして、腹んばいから仰向けに引っくり返る。
そして、一方の膝へ一方の足を組み重ねて、
「さて金吾、これで手順はすべて首尾よく行ったが、これからが難問題、夕餉に美味いものでも来たらうんと食べて、宵のうちにグッスリと一寝入りしておくことだな」
さて、その夜からの異変です。
将軍家そぞろ歩きの折の休み茶屋である錦霜軒から、夜になると黒装束の影が二つ、船見山の蔭から吹上の方へ出かけてゆく。
それが毎夜のこと。
昼は錦霜軒の炉べりに寝て、夜になると眼をさましては活動するらしいのです、――徳川万太郎と相良金吾であります。
目的は、ピオの遺跡を探すにあること勿論で、彼が、この城地で最期をとげたものか、或いは捕らわれていたものかは分りませんが、とにかく、千蛾老人の言った、江戸の嵐山というのはここの以外にはありません、また、常人には近づけ

ぬ場所、万太郎なれば行き得る所、と言った事なども、すべてこの吹上一帯を意味するものと見て間違いのないことでありましょう。

それにつけても、今になって惜しくも残念でならないのは、あの時の樟板の図面を、奪われたことでした。

けれど、あれがたとい日本左衛門の手に入ったにしても、それがこの吹上を中心とした図解であったとしたら、彼の力も及ばぬことで、定めし失望したであろうと、その点は安心もし、あとで苦笑を催しました。

ところが、或る夜のことです。

相変らず金吾と万太郎の二人が、春先の寒さをしのぎながら、あっちこっちをしずかに歩き廻っていますと、吹上の最も奥にあたる嵐山の西の松山を、ザワ、ザワ、と微かな音をさせて、通ってゆく者がある。

――思わず足を止めて、

「あ……誰か人が参ったようですぞ」

金吾が注意すると、万太郎は暫く耳をすましておりましたが、

「この吹上の奥を、自分たち二人のほかに夜半歩いている人間のあろうはずはない。この城地の奥には狐狸や河獺のたぐいが多く棲むと申すこと故、何かそのような獣類などがうろつくのであろう」

「しかし若殿、それにしては少し歩調が違います」

と、金吾は大地へ耳を付けて、じいっと夜陰の地音を聞きすましながら――

「どうも獣類とは思われませぬ。……人です、確かに人間の歩行に相違ございません」

「ふーむ、人とすれば怪しい奴だ、この上に登って見届けてやろう、静かに来い」

野州石の大岩石が、造庭の奇工をこらして畳み上げてある所をよじ登って、その上の這い松の蔭に身をひそめておりますと、やや暫くして後、あなたにぼやっと黒い一つの影が見えて来ました。

「……うーむ、なるほど人間だわえ」

万太郎は怪しみました。

無論、要害堅固な江戸城のこと故、寝ずの番もあろう、黒鍬の者の夜廻りもあろう。けれどあの古参な剛兵衛でさえ昼も滅多に来たことがないと言ったこの辺りに、夜半徘徊している人間はありえぬはずで、あるとすれば奇怪きわまる話ではないか。

とまれ彼は、息を殺して見つめていると、その人影は頗るゆっくりした足運びで、すぐ二人の目と鼻の先を通りかかります。

ひとみをこらして窺うと、暗夜なので充分に容貌は見えませんが、中肉中背のどっちかというと優形な男。なお、万太郎がいぶかしく思ったのは、黒の覆面に黒の膝行袴をはいて、自分や金吾とほとんど同じ身ごしらえをしていることで、ちょうど夢遊病にでもなった自分の分身がそこを通って行くような気がする。

「不思議だ」

思わず、彼が身をのび出したので、手をかけていた樹の枝からばらばらと夜露が落ち、下を通る男の影に降りこぼれたので、その影は冷やりとしたように立ち止まって、覆面の顔を仰向けに振り上げました。

はっと、二人は息をのみましたが、せつなチラリと見たその顔の輪郭が、夜目のせいかクッキリと白い。

先でも気がついたものか、はっと思うまに、その不思議な人物は、フイと何処へやら消えうせていました。

――次に出会ったのは、それから四日目の同じように月もない闇の夜半。

例のごとく、万太郎と金吾の二人が、吹上の赤壁渓に沿うて、鵲橋とよぶ唐橋の手前へかかろうとすると、その橋上で動いてみえる人影がある。

「や？　……金吾あれを見たか」

「オオ、また先夜の奇怪な者がやってまいります」

「身を隠しておれ、何者であるか、今夜は篤と見届けてくれねばならぬ」

二人が左右の暗がりに身を伏せているところへ、橋を渡って来た者は、先夜の如く、黒装束に全身をつつんでおりましたが、背丈や肩幅のまるで違っているばかりでなく、腰に横たえた大刀も身なりにふさわしく頑丈で、足どりも大股に来る様子。

この間の晩見かけた覆面とは、たしかに、人物が違っている。――するとこの吹上を夜な夜な徘徊する者は、前夜の曲者ひとりではないのだろうか？

相手の正体が分るまでは、決してうかつに手出しをするなと、固く金吾に誡められていた万太郎も、余りの不審さに思わず隠れていた樹木の蔭からザワと躍り立ちますと、その曲者の投げ礫に違いありますまい、一個の小石が勢いよく風を切って来て、彼の眉間をかすりました。

「あっ……」

「若殿、どうなさいました」

「きゃつ奴、わし達の居ることを、先に気取っておったらしい」

「今の礫に、何処ぞお怪我はありませんでしたか」

「いや心配するな。頭巾の端を掠ったのみじゃ」

「前にも御注意したこと、滅多に御油断はなりませぬ。先夜の男と只今の者とは、まったく別人でござりますぞ」

「しかし、何とも不思議なわけじゃ。この城内にどうしてあのような異装の曲者が出入りいたす隙があるのであろうか」

「その儀は金吾にも殆ど思い寄りございませぬ。城外の者か？　城内のお人か？」

「まさか城内の者が深夜あのような異装を作って徘徊いたすはずもなし、そうかと申して、要害無双なこの千代田城のあの幾重の濠や石垣や諸門を越えて入り込むことは人間業ではできないことじゃ」

「何にしても不思議な人物」

「謎だ……これは」

「若殿、御自重なさらんといけませぬ」

「ウム、気をつけることにしよう」
それ以来、二人は居所進退に気を配っておりましたが、例の不思議な人影を見ることは、その後も一度や二度ではありません。
吹上の嵐山を中心として、幽鬼の如く、夜ごと何物かを探して歩く人影は、万太郎と金吾と、そして優形の覆面と肩幅のある背の高い覆面の男と、時には、どれが誰とも分らないように、千代田の深夜を彷徨うのでありました。
かかるうちに、錦霜軒の前の臥龍梅には、ぼちぼちと白い花のほころぶ頃となって、月も如月と変って行く。

怖い誘惑

少し時日をさかのぼって、話はここに切支丹屋敷のお蝶の事にうつるとする。
――そこでは彼女が、秩父天童の盆地を脱出してから、行く先々の宿場や街道の辻で、口の悪い馬方だの百姓の子らに、容貌の異うところを気がつかれるたびに、
「碧眼の女よ」
「混血児のむすめよ」
と指さされて、食に困り、宿に迷い、浮世の悲雨惨風にたたかれ通して、みじめな彷徨いを続けた後流れ流れて、元の江戸へめぐり帰って来た褪せ窶れた姿が、歳晩の巷に見出されます。
「私はほんとに、お馬鹿ちゃんだわ」
江戸へはいると、草市よ羽子板市よと、あわただしく雑沓している都会の雰囲気が、温い気持に彼女をつつんで、四囲の人の目も冷ややかに光る、地方を追われ通して来たお蝶をほっと息づかせて、
「――なぜ私は、甲州へなど逃げたんだろう。やはり江戸が何処よりも一番いい。通る人だって、口をきく人だって、私の睫毛や眼の底なんか見ていやしないもの……」
ただ怖いのは宗門役人です。それと辛いのが、帯や裾のほころびている今の着物です。
「アアお金が欲しい。着物だって下駄だって……これじゃ町が歩けやしない」
帯や裾を振向いて、お蝶はそれのみ苦になりました。そして、飢えている境遇は忘れて、何よりも着物と白粉が欲しくてたまりません。つまり、それを求める金が欲しい！
故郷へ帰省したものが第一に、生れた家を訪れるように、お蝶は江戸へ着いた日に、もう浅草へ行っていました。
田舎のお婆さんでも被りそうな、性のぬけた小紋の古い頭巾を、眉までかぶって裾綿のはみ出している着物に、薄よごれのした帯を大きく結んで――。
そして、羽子板店の市に立ったり、呉服屋の暖簾の前に見とれていたり、暮の買物をしてゆく女の髪や身づくりを振顧ったりなどして、やがて、奥山の雑閙へぶらついて来ましたが、あの瓢箪池から裏田圃まで軒をならべている安芝居や見世物などは、今のお蝶には、あまり魅力のないものでした。
「……お金、お金、お金」

……一心にこう思いつづけていると、誰か、お蝶の五本の指をそッとつかんで、真っすぐになった手のひらを、じいっと見ている人がある。

オヤこの人は、私の手相でも見るというのか、それとも私が、あまり可愛らしい手をしているので、いやらしい事でもするのかと思っていると、……一枚二枚三枚四枚と、その手へチャラチャラと小判を読みながら滑り落としてくれる。お蝶の胸は一枚ごとにオドオドと躍り立つ。

……四枚、五枚、六枚、七枚、おお拾両、拾五両。

「うれしい！」

と思わずその男の顔を見る。男は意外にも日本左衛門だったので、彼女は、恥しそうに顔を隠しました。

すると日本左衛門の人さし指が、横を向いたお蝶の、ちょうど笑窪の辺りを軽く押して、

「お蝶、しばらくだったなあ。あれ以来、おれはお前を忘れかねているのだよ。お前は？　エ？　お前は？」

こう言って、男らしい幅のある胸と腕が、じりじりと息づまるまで抱きしめて来たので、お蝶はきまり悪さに身を縮めましたが、その弾みに、手に乗せていた小判がチャランと寒い響きを散らして足元にこぼれました。

その音に、ぶるッと身ぶるいをして、お蝶は眼瞼をハッと開く。

夢でした。

そこはお蝶が夜に入ってから、宿る所がなく身を休めていた観音堂の廂の下で、彼女は今、歩き疲れた体を氷のような板縁に縮めたまま、とろとろと居眠っておりましたので、醒めて見れば、日本左衛門のすがたも小判の色もなく、あるのは、飢えと寒さにガタガタふるえている深夜の我が身一つであります。

「寒い！　……」

とろとろと眠った後の寒さはかくべつで、お蝶は知覚のないわが身をひしと抱きしめます。

けれど、今坐っている観音堂のこの廻廊が、氷の上でも石の上であっても、そこを立つ勇気はない。

夜はだいぶ更けていると見えて、奥山の小屋の灯も、吉原通いの人どおりも、ばったりと途絶えて、傘のような御堂の廂をのぞいた以外な所は、霜に冴えて、真ッ白に見えるばかり。

すると最前から、伽藍の裏に倚りかかって、じいっとお蝶の方をながめていた三十前後の町人がありました。八丈の襟をかけた藍縞のはんてんに、虱絞りの手拭で頬被りをしているので人相は分りませんが、ふいと腕ぐみを解いてそこへ寄って来ると、

「姉さん、眼がさめなすッたようだが、そんな所で夜を明かしていると、風邪をひくだろうぜ」

と、じろじろとお蝶の身装を見廻している。

「有難う。ほんとにブルブル慄えてしまった、どこか、火の気のある所はないかしら」

「こんな所に寝るから悪いや、ここは、煙草の火も禁断だよ」

「だって……」と何か言いかけましたが、お蝶はその時になって、男の素性が気味悪く思われて来たので、ぷいと横を向くと、白い指を膝の上で躍らせながら、小声で、何かの唄をうたい出しました。

口のうちで唄っているので、よく聞きとれませんが、それは、手毬唄でもなし、琴唄でもなし、三味線にのる花街の唱歌でもありません。

切支丹屋敷の吉野桜の下で、父の二官がよく口笛に吹いていたのを、薄ら覚えに記憶していた羅馬の唄――。

お蝶の心は、その意味のわからない唄で、虱絞りの町人を煙に巻いてしまおうという軽い悪戯な気持か、飢えと寒さを、それによって忘れようとする情けない気持か、どっちとも分りませんが、しきりと、膝に指を躍らせています。

「あれ、もしやおめえは、切支丹屋敷に居たお蝶っていう娘じゃねえのか」

「えっ？」

「そうだよ……道理で何処か見たことのある娘だと思ったが」

町人は手拭をとって、

「――似ているはずだ、二官の娘のお蝶じゃないか。おれはおめえといい仲だった山屋敷の仲間の龍平の所へ、よく遊びに出かけた、本所の鶴吉という髪結よ、お忘れかい」

「……知らないわ、私」

わざとらしく首を傾げるお蝶の顔を指さして、

「知らねえことはねえじゃねえか。ほれ、いつかおめえと龍公が、山屋敷の仲間部屋で、何か寝そべって話している所へ、おれが不意に戸を開けて、びっくりさせたこともある」

「じゃ、知っているとして置くわ」

「アー成程、そうそう、まさかおめえも、気のゆるせない人間には、滅多に知っているとは返辞のできない身の上だったな。だが、安心するがいい、髪結の鶴吉は決して、宗門役人などに懇意はねえんだから」

彼が独りでベラベラと喋舌っている間に、お蝶は眉をよせながら、帯の間に手を差し入れて、じっと其処へ屈み込んでしまっている。

「おや、どうしたんだね」

「もう話すのはいやですから、あっちへ行って下さいよ」

「どうもおめえは素ッ気ねえ人だな、何も、口説いているわけじゃなし、断ることはないだろうに。……おや、腹でも痛むのかい」

髪結の鶴吉とかいうこの男を、お蝶はよく覚えておりませんが、しきりと馴れ馴れしく話しかけて来て、

「とにかく、家へおいでよ、相談にも乗って上げようし、悪いようにはしないから」

親切そうに誘うので、お蝶もその気になりました。

行ってみると鶴吉の家は、お厩河岸に近い露路裏で、ちょっと小綺麗な格子づくりです。

「おや、お帰りかえ」

長火鉢には鶴吉より年上らしい四十前後の大年増が、しどけない伊達巻に丹前をひっかけ、燗銅壺に入れるばかりの銚

子を猫板にのせ、寝白粉をつけて待っているといったふうな家庭でありました。

「さあ、お蝶さん、ずっと火鉢のそばへ寄んな、誰も遠慮はねえ家だから。……どうだいお千代、この娘は」

「まあ、いい娘だねえ、上玉だよ」

「おれの兄弟分の龍平と懇意だった或るお屋敷の娘さんだから、そのつもりでよく面倒をみてやってくれ」

「アアいいとも。そのうちに、ほかの友達も帰って来るから、すぐみんなと馴れちまわアね。きまりの悪いのは初めのうちだよ」

猫板をチャブ台にして、鶴吉とお千代という年増が、相酌でちびちび飲んでおりますと、この夜更けだというのに、ここの家はそれからが繁昌で、妙な女がぞろぞろと帰って来る。

「オオ寒。姐さん、只今」

「兄さん今帰りましたよ」

「寒い、寒い。今夜はばかみた寒鴉」

一人一人、いろんな事を言いながら、格子の内へ駈けこんで来るのが、どれもこれも、白粉を厚く塗りたてて、凩に吹かれたようなよごれた髪に、性のぬけた安縮緬の裾綿という姿です。

その白粉首が五つ六つ火鉢をかこんだ時に見ると、飛んでもない四十面もあれば、十六、七に足らない小娘もあり、頭の頭巾をとらない比丘尼さんもある。

鍋焼き饂飩の熱いのをフウフウ吹いて食べ終ると、今夜の客はどうだったの、目明しがどうしたのと、お蝶には意味の分らない会話がベチャクチャ交わされていましたが、そのうちにべつの部屋で、お千代を中心に銭の音をさせて、皆も鶴吉夫婦も、それぞれ枕について寝入りました。

「なんだろう？　ここの家は」

床に入ってから、お蝶は不審に考えましたが、食物に温まった体が、風もない寝床を得たので、その晩は、不安も迷いもなく、ぐっすりと寝ついてしまう。

翌る日になると、

「お蝶さん、これを着てごらん、そして、この帯をしめてお見」

お千代が一重ねの衣裳をそろえてくれる。

古着らしいが、いい柄でした。お蝶はそれが何の為という結果も考えずに、言われるまま体に着けて見せると、

「ああ寸法もちょうどいい……それにお前さんには、ばかにうつりがいいじゃないか」

お蝶はいい気持になって、

「おばさん、私に、似合って？」

「少し目立ち過ぎるくらいだよ。あとでお角さんと銭湯へ行って、すっかり襟足をお化粧してごらん、ほかの女達はみんな影が薄くなっちまうよ」

「あら」

何しろお蝶は、永らく渇いていた着物の慾が少しでも満たされたので、その時は、ただお千代の好意に甘ッたれておりましたが、やがて灯ともし頃になると、お角という薄あばたのある中年の女が、お蝶に負けないほど厚ぼッたく白粉を塗

りこくって、
「ねえや、あたいがお師匠さんになってあげるから、今夜から一緒においで」
と、何処へ何しに行くのか分りませんが、お蝶は外に連れ出されました。

尾いて行くと、お角はお厩河岸を五、六丁ほど下って、鳥越川が大川に注ぎ出る丁字形の河岸縁に立ちどまりました。

川風が強く吹きつける川口には、土橋があって、枯れ柳があって、少し向うに砂利置場がある。ちょうど殺し場の書割りにでもありそうな所、歳の暮らしい、人通りもさッぱり稀です。
「――お蝶さんあぶないから、履物をおぬぎよ」
そこへ来るとお角はこう言って、自分も着物の裾を端折る。そして、お蝶が意外な顔をしてためらっている間に彼女は、砂利場の杭につないである綱を引いて、苫をかぶった一艘の小舟をぐいと岸へ寄せます。
「びっくりしているのかいお前さん。――大丈夫だよ、舟の中には、炬燵もあるし、お酒もある。こんな岡より、いくら暖かいか知れないんだよ」
手を取られて、苫の中に入りましたものの、お蝶は屋根の低い小舟の中の世帯をながめて、愈〻、腑に落ちない顔つきです。
お角は早速、中の炬燵の火をほじッて、蒲団のそばに酒を置き、あられもない手酌で飲みながら、
「呑気なものだよ、こうしていると。だからなかなか足が洗えないのさ」と、お蝶の顔を見てげらげらと笑っている。
「ねえさん、これから何処へ行くんですか？」
「何処へも行きゃあしないさ。こうしてね、ぼつぼつ商売を始めるんだよ。そのうちに、亡者がやってくるから、そしたら、私のいう通りにすればいい」
商売？　亡者？　お蝶にはだんだんお角の言う事が分らなくなりました。――しかしお角の言ったとおり、苫舟の中の置炬燵は、辛く当る風もなく、ぴちゃりぴちゃりと船底をうつ川波の音を聞きながら、手足を蒲団に埋めていると、ほんとに呑気で、いつまでもここを出たくない気がする。
すると、そのうちに上の土橋を踏んで行く人の跫音がする度に、お角は、炬燵の中から片手をのばして、苫の横から顔を出します。そして、
「ちッ。……二本差の浅黄裏だよ」
舌打ちをして、何か、じれッたそうに首を振りながら、
「引き汐の大川みたいに、年の暮は人の足が早くッてしようがないね」とお蝶に向って言いましたが、これもお蝶には、何の意味だか分りません。
けれど、いくら切支丹屋敷という別世間に育ったお蝶にでも、それから夜更けにかけて、橋の上から声をかける男だの、苫の下から鼠鳴きをするお角のことばだのが、幾度となく繰返されるうちには、この苫舟の世帯が、何を営むものだかという事を覚らぬわけはありません。

これは、いわゆる岡の岡場所と対立して、江戸の風紀を紊している、「船まんじゅう」と俗によぶ売笑婦の巣船でした。江戸ではまたこの種類の売笑婦を「お千代舟」と言っています。

いつの頃か、お千代という眉目のすぐれた売笑婦が、浜町の菖蒲河岸に舟をつないで、嫖客を招くに水上から、「お千代、お千代」と、啼くように呼んだのが初まりとなって、それから殖えたほかの船饅頭をも、すべてお千代舟とよぶようになったのであると申します。

何せよ、今思い合してみると、あの髪結の鶴吉というのは、売笑婦の置屋であったり、また世間見ずの女を騙かして来るぽん引きと呼ぶ渡世の人間です。――で、お蝶をその道のあばずれ者であるお角に預けて、永く金の絞れそうな、いい客を見つけて今夜彼女に当てがおうという相談が、あったものにちがいない。

そのせいか、お角はだいぶ客の選り好みをしていましたが、そのうちに苫の陰と橋の上とで、何か下相談の出来たらしい様子で、

「お蝶さん、ちょっと待っておいで、すぐ来るから」

と、彼女を置いて、岡へ上がってしまいました。

好色そうな宗匠頭巾の隠居をつかまえて、そこの砂利場の隅で、お角がしきりと何か交渉している声が、お蝶の耳にも、時々、みだらな笑い声に交じって聞こえて来る。

好色隠居の狒々顔が、苫の間からジロジロとのぞいたり、お角を相手に、お蝶の貞操の代価に露骨な懸引をかわしたりしておりましたが、やがて人肉の取引ができると、

「じゃお蝶ちゃん。私はちょっと、蔵前まで用達に行って来るからね」

と、お角はそこをはずしてしまいました。

入れ交わってゴソゴソと苫舟の中に入って来たのは、お蝶を買った狒々隠居です。

無遠慮に炬燵のなかへ手を差しこみ、蒲団の上に頤をのせて、むさぼる如くお蝶の目元、唇元、襟元の白さなどを、舐め廻すように見ておりましたが、

「なるほどお前は初心らしい。可愛い娘だ、わしはな、佐賀町の穀問屋で、そして大した金持の隠居さ。もう吉原だとか辰巳だとか、あんな尋常な所では遊び飽いたので、わざと売女などを見て歩いているのさ」

この隠居のエヘラ笑いが、お蝶には他愛なく見えました。そして、売女を買いに来ても、おれは金持なんだぞという所を見せたいような気持も露骨に分ります。

お蝶は、お角がお食べといって置いて行った金玉糖を口に入れて、クスッと笑いながら、炬燵の上へ顔を横にする。

「きれいな髪だな、よく結えているねえ」

と、隠居は指を出して猫の髭にさわるように、お蝶の髪の毛を怖々と弄っています。

「もう明日、明後日、ふた晩寝るとお正月だな。初春には何か買ってやろうか」

「ええ、買って頂戴」

「何がいい、櫛かかんざしか？」

「繻珍の帯にお召の着物、玳瑁の櫛にギヤマンのかんざし、さんごの帯留に鹿の子の帯揚、そして蒔絵の下駄を穿かせて、塗りのお駕に男芸者をたくさん付けて、堺町の勘三郎芝居へ連れて行って頂戴」

「とんでもない望みをする娘だぞ、そんな真似をしたひには、吉原の太夫をひとり身受けする程かかってしまう」

「だって、お爺さんは、金持でしょう」

「お爺さんなんて、色消しなことを言うものではない、旦那とお言いよ、旦那とね」

「だって、何も買って貰いもしないのに」

「おれは、お角に二両渡しているよ。舟まんじゅうといえば、たいがい、安いところが二百五十文、高いところで一歩どまり、二両なんていう大枚を投げ出す旦那様は鉦太鼓でさがしたってあるもんか」

「じゃ、私の体は、二両なの」

「松の位の太夫と同じ値だよ」

「知らないわ、そんなこと」

「何しろゆっくり遊んで行こう」

「沢山遊んでおいでなさいね」

「お前はなかなか愛嬌のいい娘だ。お角は初めてだと言ったが、そうじゃあるまい、何処か岡場所に居たこともあるんだろう」

「知らないわ」

「じゃ、年は幾ツ？」

「知らないわ」

「自分の年を知らない者があるもんか。ほんとにお前はあどけないところがある。だけれど、こういうことは知っているだろう」

炬燵の中で、お蝶の手を握りました。

お蝶はおかしさをこらえながら、死んだ父親とこの隠居との年齢を比較して考えていました。手を握られてもその手ざわりよりは、炬燵の火に温まった木の方が、どれ程お蝶の抱擁をそそるか知れません。

「いやよ、お爺さん」

指を弾いて、金玉糖をまた一ツ口に入れる。

「何がいやなことがあるものか。お前はまだきまりが悪いとみえる」

狒々の動作が初まりました。いきなり体へ抱きついて来たので、お蝶がきつく突き飛ばすと、舟の世帯は苫ぐるみ、ダブリと大きく揺れ返る。

「これ、舟が揺れるわ、じっとしておいで、じっとして……、怖いことも何もありはしない」

「嫌ッ……嫌ッ……。ええうるさいッ」

「わしはお角に二両渡してある」

「嫌だッてば、この人は！」

平手で狒々の横顔をなぐりました。

宗匠頭巾をハネ飛ばして、尻もちをついた好色隠居は、それがお蝶の羞恥ではなく明らかな憎悪の反抗だと知ったので、にわかにムッとなって飛びかかって来る。

お蝶は、隠居の指に噛みついて、彼が、痛いッと悲鳴をあ

げた隙に、苫をハネて岡へ逃げ上がろうとしましたが、はっと、顔色を変えて足を竦ませました。

争い合った動揺で、纜の綱が解けたのでしょう、舟は知らぬ間に砂利場の岸を離れて、鳥越川の川口から満々たる大川の中流に押し出されて、下へ下へと流されていつつあるのでした。

途端に、お蝶が川の中へでも飛び込むと思ったのか、狒々隠居は彼女のうしろから抱きついて、

「これ、何処へ行く」

と船底へ引き戻しました。

こんな事なら早く隙を見て逃げ出すのであったのにと、お蝶は自分の悪戯に過ぎた心を悔いましたが、岸を離れたその小舟が何処かへ流れつくまでは、飛び出すことも出来ません。

お蝶が逃げ廻ったり拒む力は、かえって狒々の獣情に油をそそぎかけたようです。隠居は老人に似気ない力で、お蝶を船底に押し仆すと、

「さあ、打つがいい、打つがいい。もっとその爪を立てるがいいよ。何、ばら掻きになってもかまわない。そうだそうだ、力まかせになぐッておくれ」

甘んじて、お蝶の打擲を受けながら、眼を細くしてこらえている。

自分の手が火熱ッて来るほど打ッてやると、お蝶は胸がスッとすいて、同時に急におかしくなって、

「気狂い！　色情気狂い！」

と罵りながら、キャッキャッと笑ってしまいました。

そしてまるで、盲目的になって寄って来る狒々隠居を、力まかせに突き飛ばして、

「私は夜鷹じゃないんだからね、誰がいつ、おまえなんぞに買われると言ったの。知らないわよ。ばか！」

と、簪の光を振って、怒りました。

「何だと、この阿女め」

性懲りもなく、また飛び起きて来た好色なおやじは、猫が小鳥へかかるように、ぬッと舟べりへ出て来ましたが、同じ怒り猛るにしても、彼がそうして追い廻すことは、かえって強い興味であるらしいのです。

けれどお蝶は必死でした。

女色を漁り飽いたこの隠居の変態的な獣情を解していたなら、彼女もさほど狼狽はしないでしょうが、彼の眼色、彼の血相、これは本気に自分を殺す気ではないかと、怖れをなして逃げ廻る。

隠居の手にはいつのまにか、短い刃物が握りしめられています。それとて彼には、実は興味を助ける一つの小道具でしかないのですが、霜夜の川の波明りをうけて、凄い光をギラギラと持っています。

「逃げると殺すぞ。さ。中へはいれ。逃げると殺すぞ」

そう言いながら、苫を伝わって舟べりを追い廻すと、お蝶も同じように逃げ廻って、彼が舳に来れば舟尾の方へ、舟尾へ来れば舳の方へ、鼬鼠ごッこにかわしていました。

そして、漂い出たその小舟は、大川の汐足に乗って、木

の葉のように揺れながら、小気味よく流れて行く。
　――すると、これは下流からのぼって来た一艘の猪牙船。
　今、脚の高い両国橋の暗い陰から、ギイッ、ギイッと櫓臍を鳴らしてこぎ上って来ましたが、代地手前の河心から舳を左に曲げて、神田川の口へはいろうとした所で、
「あ……あの声は女じゃねえか」
　と、猪牙船の中の人影が、黒頭巾の半身を伸ばして、向うから流れて来る苫舟の上を、じっと見つめている様子でした。
　すぐと彼の眸のなかへ、波明りに映された奇怪な男女が飛びこんで来たことでしょう。
「率八率八。早くあれへ漕ぎ寄せて見ろ、若い娘が手込めにでもされている様子だ」
「やりますか、あの船へ」
「そうよ、屋根舟の中の睦言なら、こッちも避けて通るけれど、どうやら女が逃げ廻っているらしいぜ」
「合点です！　あれ――というところへ、宮本武蔵という格ですね」
「ええ、またくだらねえお喋舌りをしているな」
「おッと、案の定だ」
「どうした？」
「待っておくんなさい、櫓臍がはずれてしまったんで」
「ちぇッ、しかたのねえ奴だ、それ、早く漕げ」
　率八と呼ばれた舟尾の男が、櫓をしなわせてギッギッと漕ぎ寄せて行ったかと思うと、近づく間もなく、舟べりに肱をついていた黒頭巾の男が、
「しまった！」
　と、唇を破って胴の間に立ちました。
　同時に、上の方から直線に流れて来た小舟のそばで、ドボーンと白い水煙が揚ったのです。
　ダブリ――と大きな波紋が、次第に大川の両岸へひろがって行くのを眺めて、
「親分、間に合いませんでしたよ」
　と、がッかりしたように、櫓の力を抜いたのは、舟尾に立っている率八という男です。
「ちぇッ、だから早くしろと言ったのだ。だが、飛び込んだのは、男か、女か」
「それがネ親分、あっしの見た見当じゃ、女の方が野郎を川の中へ突き飛ばしたように見えたんですが……」
「おれもそう思ったが、それにしては少し妙だ、おお、娘は苫の蔭に立っている」
「じいッと川の中を見つめていますよ、何だか凄い娘じゃありませんか。……オヤ、こッちの舟に気がついたと見えて、急に、舟底へ姿を隠しましたぜ。――かまわねえからあの舟を取ッ捕まえて見ましょうか」
「待て待て。向うで影を隠したのは、おれの舟に気がついたためじゃねえ、上流の方からお船手の見廻り船がやって来たのだ」
「あっ……成程」
「と言って、あわてて逃げ出すなよ、逃げるとあいつは二挺

櫓で追いかけて来る。いつもの通りにしていればよいのだ」
「じゃ、親分」
「叱ッ……」と、目で叱ると、黒い頭巾の侍は、その上から一枚の蓆を被って、ぺたりと舟板に身をつけて寝てしまいました。
二艘づれで下って来た、伊奈半十郎配下の水上見廻りの舟は、忽ち、そこに漂う船影を見つけると、二手に分れて、一艘はお蝶の乗っている苫舟へこぎつけ、また一艘は矢のように率八の舟へ寄って来ます。
そして、船手の同心でしょう、朱文字の提燈を水の上にあげて、
「何処だ？」
と不意に声をかける。
川合図というやつで、それにまごつくと忽ち川番所まで引ッ張って行かれるのが通例でした。
「へい、辰巳の金田屋でございます。紅梅河岸までお客を迎えに参りますところで」
「船の焼印は」
「丸に金の字」
「よし、行け」
「御苦労様でございます」
ギイーとわかれて、一方は両国橋の脚の蔭へ、率八という男の櫓は、そこから舳を曲げて幅の狭い神田川の中へすべり込んで行く。
「親分もうよろしゅうございますよ」
「寒いからこのまま手枕で寝ていよう」
「それも工合がいいかも知れません。じゃ風邪をひくといけませんから」と、ちょっと櫓を放して、隅に丸めてある掻巻を、蓆と更えてかけます。
そして、その猪牙船は柳原の土手の間を漕ぎのぼって、やがて紅梅河岸まで来ましたが、そこで岸へ寄せる様子もなく、なおグイグイと漕ぎ進めてまいります。
そこは、上れば上る程、両岸が高くなって、水際は芦草に埋もれ、空は高々と立つ左右の樹木につつまれて、葉の落ちている冬木の梢にも一つぶの星さえ見えないほどな暗い谷間。
猪牙船がそのお茶の水の真ッ暗な水上をすべって行くと、寝ていた黒い頭巾の男は、やおら掻巻を刎ねのけて、ふッ……と舳の舟行燈を吹き消しました。
チョロチョロと何処かで水の湧く音がするほか、上流にも下流にも、ここら辺りを通う舟はありません。
そして、朽ち木の枝を手懸りに、一方の岸へ徐々と舟脚を寄せておりましたが、繋綱を取りながら覆面の男が、真ッ暗な中でこう呟いたのが水の静寂に響いて大きく聞こえました。
「なあ率八、梟じゃねえが、この頃は、すっかり暗闇に眼が馴れて来たような気がするじゃあねえか……」
＊　＊　＊
ところでその晩、川見廻りの役人に怪しまれて、永代橋の川番所へ、縄に曳かれて行ったのは、お蝶を乗せた苫被りの売女舟です。

「吟味は明日いたすから、今夜はここで神妙にいたしておれ」

若い娘だけに、手荒なことはしませんが、無論、風紀を紊す闇の女と思われたのは当り前で、川風の洩れる番所の一間へぽんと抛り込まれたまま夜具も枕もあてがわれません。

弄られたり打たれたり、昼は股火をして退屈している川番所の番太郎や船手の同心に、さんざん売女扱いに調べられた上、お蝶が永代の番屋を放たれたのは、その翌日の午過ぎでした。

相手が、役人や番太郎では、彼女も悄々として見せるより表情がない。

首尾よく自分の素性もばれずに、外へ出されるとお蝶はほっとした顔です。けれど、悲しいのは、再びその体をいじめて来る餓えと空ッ風で、こんな事なら、あの狒々隠居をもっと手玉にとって、お金でも貰って置けばよかったなどと浅ましい後悔もわく。

しかし考えてみると、あの老人を大川の中へ突き飛ばしたのは、少し罪な事とも思い出されました。どうしたろうか今頃は？　あの年だから死んでしまッたかもわからない。

「死んだ人の身なんかを考えてやるどころじゃないよ。困ったねえ、どうしようかしらこの私は、いッそのこと、髪結の鶴吉の家へ帰ってやろうか、そして、あの女たちの仲間になってしまおうか？　……」

お蝶の思案は後ろから来る空ッ風に、千断れ千断れに飛んで行く。

着物だけは、どうにか垢を落としたものの、今夜の宿の当てはないし、二度とふたたび観音様の縁がわにお慈悲を仰ぐ勇気もありません。

町は押しつまる年の暮で、血眼の人達は、誰も自分を怪しまない代りに、誰も自分に温かいことばをかけてくれてもない。

田舎は親切だが猜疑ぶかいし、都会はうるさくない代りに素ッ気ない人ばかりと、お蝶はぼんやりと暮の巷を見廻しましたが、はッと、その顔色を変えました。

「畜生ッ、あんな所に」

「あら、居てよ、お蝶ちゃん」

不意に、こういう声を筒抜けにさせて、お蝶を目がけて駆け出して来た者がある。——と、彼女はもう袂をひるがえして逃げ出していました。

「畜生」

「お蝶ちゃん、お待ちッてば」

売女宿の鶴吉と船まんじゅうのお角が、腰弁当で探してでもいたように、声をあげながら追いかけて来る。

何処という方角も知らずに、横丁から横丁へ逃げ廻って、そして逃げながらお蝶は考えているのでした。「捕まろうか、捕まるまいか」と。

捕まれば目前に食物と寝床は与えられますが、売女宿の食い物となる覚悟がなければなりません。捕まるまいとすればそれと反対に今夜の餓えをしのぐ工夫もない。

けれど心と足は別物のように、迷いにかまわず足は速度を

加えています。遂に鶴吉とお角を、何処かの辻へまいてしまったようです。そしてお蝶は「もう追いついて来ない」と知って振向いてみましたが、べつにアアよかったという安心もありません。むしろ何かを取逃がした気がする。

金。金。金。

お蝶は足のつま先に物欲しい目を落としながら当てのない心を抱いて歩きました。と――其処の曲り角に、黒髪を束ねた髷の看板と「おん小間物類」とした暖簾がふッと目につきました。

「あ……」

何か胸を掠めたものがあるように、お蝶は立ち止まって、小間物屋の奥を覗きましたが、そこを小刻みに通り抜けると、人影のない河岸縁へ出て、物の蔭にひそみながら帯揚を解いてその中へ手を入れました。

匂い袋のような小さな袋の中に、一粒の珊瑚の珠があったのです。今の小間物店を見て、彼女はそういう所へ、幾度も物を売った経験をよび起して、

「ああ、あったわ、あったわ、これを売れば……」

と、珠を手のひらに転がしてニッコリしました。

見得もなくそれを握って、お蝶は小間物屋へ駆けこみましたが、暫くしてそこを出て来た彼女の顔は、また前にも増して悄れ返って、出るとすぐに、発止とそこの切石へ珠を打つけて砕いてしまう。

そして後も見ずに、かもじの釣り看板の下を小走りに駆け走りました。

肌を刺す寒風がやんだかと思うと、夕方からチラチラと白いものが降って来る。

そして少し更けた頃に、高台から雪の下町を見ると、真っ白な江戸の全市に火の見櫓の灯が幾つも年の暮を見張るように灯されてあります。

「綺麗に降ること……」

飢えた眼にも美しい雪。

お蝶は湯島の額堂でふるえていました。

たった一粒身に着いていた珊瑚珠も、小間物屋に見せれば、それは練玉という紛い物だと分って、お金にはならず、腹が立つやら悲しいやらで涙も出ません。

「もし、お嬢様」

彼女が、寒々と額堂の隅にうずくまっていると、最前から、蛇の目の傘を手にさげて、雪に見とれていた一人の女が、側へ寄って来てこう声をかけました。

お嬢様――と呼ばれたので、お蝶は間が悪そうに、

「はい」と、伏し目に返事をすると、女はいろいろな事を訊いて来ます。そしてお蝶のいい加減な作りごとにホロリとさせられて、

「じゃ、私の家へおいでなさいな、小間使いが欲しいと思っているところですから、辛抱してくれる気なら、永く居てもらってもようございますが」

弓町の近くに住む、挿花の師匠だという話なので、お蝶は、ワラでもつかみたいところですから、そのまま女に尾いて行

きました。

成程、門には池の坊の小さい札が出ていましたが、翌晩になって分ったことは、それは弓組与力の松下という男の妾で、その松下が来て遅くまで飲んでいる。

ちょッと酒屋へ行っておくれでないか、帰りに八百屋へ寄っておくれ、それからでん屋へ何を誂えて来ておくれと、お蝶はいい重宝に使われて、寝たのもだいぶ更けてからです。

「人をばかにしている！　親切ごかしに」

彼女は腹が立って寝られない。

こういう屈辱は彼女の耐えうることではありません、――と言って此家を出れば行く先もない。まして、今夜は除夜です、明日はもう人の着飾る元日です。

今夜も此家の女主人が、松下という旦那から、春の小遣を貰ったり仕立て上がった春着を見せたりしていたのを、お蝶もチラと見ていましたが、彼女に来る春は何の幸福も齎しません。

「ああ、つまらない」

溜息をついて寝返りを打ちました。しかし、それからそれへ、悶々とした不平が数えられて、たまらない空虚が若い心をいじめつけます。

と。

お蝶は何か怖ろしいことを思い決めたように、蒲団の上に起き直りました。そして、きのう珊瑚の珠を探した時に、捨てようとして取って置いた、匂いのない匂い袋を取り出してみる。

その中に、もう一つ残っていた品物があるのです。

何かというと、それは銀いろをした一箇の鍵でした。亡父の二官が公儀から役目の上に預かっていた切支丹屋敷の官庫の鍵です。

その鍵は、お蝶の飢えるたびに、

（官庫へおいで、官庫へおいで、切支丹屋敷のある庫を開ければ、無限に金目な物があるじゃないか、そこはお前もよく勝手を知っている場所じゃないか）

と怖ろしい誘惑を囁きます。

だが、怖ろしい。お蝶はあそこへ近づく事が何となく怖くて、今日まで、その誘惑と恐怖の闘いに幾度迷っていたか知れません。

――帯を固く締め、頭巾を眉深にかぶって、水口の戸をソッと開けてみると、昨日から小やみもない雪がまだサラサラと落ちている。

そこにある蛇の目の傘を開いて、お蝶は遂にその家から忍び出ました。

もう人通りもあるまいと思ったのは、家の中の考えで、通りへ出ると、掛取りの提灯が、雪の中をめげずに忙しそうに歩いています。

しかし、塗りの下駄に蛇の目傘のお蝶を怪しむものはなく、やがて彼女は、小石川の切支丹坂を下りて獄門橋まで一息に歩いて来ました。

そこまで来ると、龍平の獄門首がくわッと眼を見ひらいて、お蝶！　と橋の袂から呼び止めるような気がする。

ヒューッと吹き煽る雪颪に、彼女は傘を取られそうになって、思わずそこに立ち竦む。

それも風の力とは思えません。あの時、血みどろにさせた三人、山屋敷の仲間が吹雪の中からおどり立って、肩や蛇の目を抑えて離さないような気がする。

彼女は目をつぶって駈け抜けました。そして切支丹屋敷の高塀へどんと打つかって、その傘も体も雪の中へ抛り出すように仆れてしまう。

「ああ、怖かった……」

前後を見廻して立ち上がると、彼女は、投げ出した、傘も下駄もそのまま、暫く塀を見上げておりましたが、やがてのこと、崖に寄った樹木の雪を落として、ヒラリと山屋敷の内へ飛び降ります。

雪明りの明るさに、お蝶が物蔭から物蔭へ小走りに忍んで行く姿は、餌をあさる雉子のように、ひらひらする袂の色や帯の色まで夜目に映る。

やがてその姿は、例の官庫の前に立ちました。帯の間から取り出した合鍵をもって、一心に其処を開けようとする様子。

そこを開ければ、彼女の心を満たすさまざまな物がある。官庫は彼女の打出の小槌であり、彼女の物慾を満たす殿堂です。お蝶は寒さも怖ろしさも忘れている。

けれど、官庫は開かない。——どうやっても絶対に開きません。それもそのはずで、あの日本左衛門の手下が荒して以来、蔵の戸前は厳重に釘づけとなっているし、四方の塗籠窓にも太い鉄の柱が打ちつけてある。

とこうするうち、牡丹畑の木蔭にポチと明りが見えたかと思うと、

「やっ、官庫の前に、怪しげな人影が見える」

「オオ曲者」

と、雪を蹴って来る足音。

山屋敷の同心と見廻りの仲間です。

お蝶は驚いて走り出しました。しかし、この切支丹屋敷の中で生れている彼女のことなので戸惑いをすることなどはありません。

「足痕を辿れ、足痕を尾けてゆけば逃げた先が分る」と、同心はやや暫くの間、根よく雪の上のくぼみを見歩いておりましたが、そのうちに、自分達の足痕にも錯覚を起こして、遂にあきらめたように、役宅の方へ引揚げて行った様子です。

その後で、檜の木立から、ザワッと雪を落として姿を出したのはお蝶で、

「ちいッ、骨折り損をした上に、あぶなく捕まってしまうところ……。ああ、着物は濡れるし、髪はこわれるし、こんな事なら来るのではなかったのに」

空しく、元の所へ帰ろうとすると、突然、低いけれど鋭い声で、

「お蝶様ッ……もしお蝶様」

と、すがり付くように、呼ぶ声がします。

はッとして四辺を見ましたが、大きな牡丹雪が降りしきっ

ているのと、雪をかぶった樹木の枝と、ヨハンの居ない石牢の鉄の格子が見えるばかり……。
「お蝶様。お蝶様。ヨハンをお探しでございましょうが。そのヨハンはここにおりまする」
「えっ、ヨハンだって？」
二度目のことばに驚いて、彼女がそこへ駆け寄って見ると、ああ意外です、秩父天童谷で会ったばでれんヨハンは、昔のままな姿で、石牢の中にじっと坐っております。
「まあ、ほんとにヨハンだね。ヨハン、お前はまた此処へ捕まって来てしまったのかえ？」
お蝶は石牢の中の人影を一時は幻影ではないかと怪しみながら、それが真実のヨハンだと知ると、あわれむ如くこういいました。
しかし、ヨハンはかえってお蝶の姿をこそ、哀れむような眼で見ながら、
「お蝶様、あなたは天童谷をなぜ抜け出して来ましたか」
「江戸が恋しくなったから」
「でも、世間はあなたを容れてはくれますまい。天童谷以外な所で、あなたを容れる所は、この切支丹屋敷があるばかりです。……オオ雪が吹きかけます。お蝶様、ここへおはいりなさいまし」
「だって、そこは牢舎じゃないか。どうしてこの鉄格子の境を越えてはいれるものじゃない」
「いいえ、この鉄棒の二本はいつでもとれるようになっています。切支丹族の者は絶えずこの鉄窓の中と秩父の山の間を往来しているのでございますよ。ですから、私は何度捕まっても、決して自由を縛られてはおりません」
そういっているうちに、ヨハンはいつのまにか鉄窓の一部に二尺四方ぐらいな口を作って、お蝶をそこへ引き入れました。
石室の中は八畳ぐらいな広さで、横に黒布の帳を垂れ、帳の奥は二坪ばかりな板敷で、ヨハンが八年間使い馴らした椅子、食器、寝具などのほかに、馬糧小屋のようなワラがいっぱい敷いてある。
ただ明りだけはありませんが、それも外から射す雪明りで、さのみ不自由はなく膝を容れる事ができる。
ヨハンはお蝶の凍えきッた手を自分の人肌に暖めて、
「もう此処を出ては危険です、ヨハンのそばを離れてはいけません。あなたの身には、宗門役人の眼、怖ろしい凶賊の眼、野心の眼が光っています」
「じゃヨハン、私はいつまでもここに居てかまわないの」
「石室の奥に居れば、山屋敷の役人でも、気のつく気づかいはありません。欲しい物は、時折ここへ忍んで来る切支丹族の者にいいつけてやれば、何でもととのえてまいります」
ヨハンの母性的な慈愛は、巷の苦しみと寒さに凍えていたお蝶の心に情けの温みを知らしめたようです。彼女はもうヨハンに甘える気持は出ても、反逆的な心は持てなくなりました。
除夜も元日もない石牢の奥に、そうして幾日か匿われて

いる間に、ヨハンはお蝶がいやがらない程度に、聖書を読んで聞かせ、羅馬の都の話をして聞かせ、ひたすら彼女の心の故郷から善を呼び起こそうと努めたのです。ローマ王家の血を享けている彼女の自覚を醒まそうとするのでした。

ヨハンのその努力は、天童谷の時では厳父が説き諭す形になって現れ、ここでは慈母の愛をとって教えました。そうして、この頃ではようやくその真心がお蝶の心にもしみ入って来たか、時折は、彼の読んで聞かせる聖書の声をじっと聞いているうちに、お蝶の頬を涙が流れることもある。

そういう時に、ヨハンは殊に力をこめて、

「あなたの大きな幸福は、羅馬の都に待っています。夜光の短刀をお探し遊ばして、海の彼方へお帰りなさい。そして、絶えかけている王家の家名を興すことができれば、二官殿の霊もどんなに満足か知れません。いいえ二官殿ばかりでなく、日本へ渡って鬼となった羅馬の使徒の幾十人の霊が、みな天国でどよみをあげて欣びましょう」

噛んでふくめるように説いて教えます。

かくしている間に、世間の松の内も過ぎた時分。

お蝶はこの頃になって、夜ごと、或いはどうかすると真昼にも、山屋敷の見廻りの隙を狙って、江戸の町へ出て行くようです。――しかし前と違って、明け方か、或いは二、三日目には、母を慕う子のように必ずヨハンの石牢へ帰って来ないことはありません。

変化双六

竹の柱に風呂敷ほどな布一枚の囲いでは、寒さを防ぐ足しにもならない。薄氷の張っている三味線堀から吹き上げて来る風にもふるえ上がッて、

「ええ、堅気は辛い、金の有難味が身に沁みるぞ」

と、算木のほこりを口で吹いて、ザラザラと筮竹の空鳴りをさせていた露店の主は、近ごろ古巣の江戸へ舞い戻って、三味線堀に長い顔をさらしている梅花堂流の馬春堂先生でした。

「閑ですな」

「亡者も初春は休みとみえる」

「餓鬼はすなわち吾々さ」

その辺の川ぞいには、同じ売卜者の露店が三、四軒、名ばかりの机をならべ、各〻水洟をすすッていたので、自ら出る愚痴のつぶやきに、自ら答えて来る哀れな声があります。

ところへ、鼠木綿の宗服に尺八を持った二人づれの虚無僧が、今そこの前を通りぬけたかと思うと急に引っ返して来て、天蓋を被ったまま、馬春堂の机の前に立ち、

「ふーム……」と何か笠の中で笑っているらしい。

勿論、こういうのは銭になるお客ではありません。のみならず中には、多少易経の端を読みかじッている手輩などもあって、素見のうちでも売卜者たちには苦手な部類の者と見たので、

「お通んなさい、店の邪魔になる」と、馬春堂が長い顎を横に振りました。
「そう言うなよ、馬公」
おやと思うまに、二人の虚無僧は、尺八の端で幕をめくり上げて、御免とも言わず中の空箱に腰をおろし、
「こいつは焼け過ぎる」と言いながら、先生が折角あんばいよく摺鉢の火鉢で焼いていた餅を取って、口へ持って行きそうにしましたから、用捨はならんという血相で、
「これこれ、無作法なまねをするな」と先生がムキになってその手を抑える。
二人はクスクス笑いながら、
「いいじゃねえか」
「よくはない、これはわしの弁当じゃ」
「おごってやるよ、後で」
「誰だい、其許たちは」
「まだ分らねえのか、この声でも」
そう言いながら、天蓋を仰向けにして見せたので、ひょいとのぞき込むと、片目を白い布でしばった雲霧の仁三と、ひとりは四ツ目屋の新助なので、
「あッ兄弟か」
と、先生が思わず、ばかでかい声を出す。
「しッ……」と雲霧はその声を制して、
「どうだ、拵らえはうまかろう」
「まったく、それじゃ分る筈がない、しかし、何時から江戸へ戻っていたのじゃ」
「おめえと同じ時に、天童谷から這い上がって、あれから中仙道を下総の方へ突ッ走っていたのだが、どうも弱ったことになったよ」
「へえ、何をそんなに弱っているので」
「親分の身だ」
「日本左衛門様の？」
「ウム、甲州で打合せをした事が、あれ以来、すッかり行き違いになって、鹿野山へ行ってみても、親分の立廻った様子はねえんだ。そこで、こうして探しているわけだが、馬春堂、おめえは何かうわさを聞いていねえだろうか」
「存じませんなあ。何ならひとつ、易をたてて見ましょうか」
「親切はありがてえが、おめえの易占なら勘弁してもらおう、分る探し人も分らなくなってしまう」
「いや、そうばかにしたものでもない、信じると信じないとはそらの勝手として、とにかく一筮を試みて、伏義秦王の御意見を伺ってみようじゃないか。……つまりその、親分日本左衛門の生死と居所をたずねるわけだな」
頼みもしないのに呑み込み顔の先生が、筮竹を額につけてパチと指を入れた時です。
「やっ兄貴、向うへ行く女を見たか」
と、不意に四ツ目屋が立ち上がって、折角馬春堂の無念無想に入ろうとするところを破りました。
「おっ、あの娘か」
「お蝶だッ」

と、河岸沿いの易者の露店から、不意に駈け出して来た虚無僧二人が自分を目がけて来るのだと知ると、つい、その前を通りすぎた頭巾の娘は、飛鳥のごとく走り出して、忽ち人混みの中に姿を紛れ込ませてしまいました。

見失って、探しあぐねた雲霧と四ツ目屋は、半刻ほど経つと、再び空しい顔をして馬春堂の露店へ帰って来て、

「残念なことをした、確かに、お蝶の奴に違いなかったものを」

と、何か小声に囁き合っています。

やがて一息休むと、雲霧は小判一枚、馬春堂の机の上にチリンと薄金の音をさせて、

「ほれ、見料じゃねえ、商売の邪魔料だよ」

「えっ、これを」と先生は、処女の如くぽっと赤くなって、有難う、有難う、と幾たびも押しいただいて財布の中にしまい込む。

「ところでな、馬公」

「はいはい」と一両の手前、馬公でもこの際は腹が立ちません。

「親分の身やお蝶のことで、何か耳に入れたらおれの宿まで知らして来てくんねえか。宿は例の音羽の筑波屋だ。頼むぜ」

と、なお何か言い残して、仁三と新助はそこを立去りました。

「さあ、今日は早仕舞として、久しぶりで一つ、正月らしく怠けようか」

忽ち、空箱の机や日月星晨の幕をおろして、後に水洟をすッている同業の先生達へ、

「お先に――」と言いながら好い気持で、ぶらりと住居へ帰って行く。

住居というのは、やはり以前のどぶ店の近くと見えます。三味線堀に沿ってあれから、稲荷町の方角へ足を向けて行くと、

「あら、暫く」

と、あざやかな笑い顔をもって、彼を待っていた頭巾の女があります。

「やあ……これは」と馬春堂は仰山に、

「お前は、切支丹屋敷のお蝶じゃないか」

「ええ、昨夜ちょっと三味線堀を通ったら、馬春堂という幕が下がっているので、まあ珍しいとのぞいてみると、あなたの姿が見えないので、今日も通りがけに、そっと覗いて見たんですよ」

「ああそうかい、寄ればいいのに」

「だって、変な虚無僧が居たじゃありませんか。そして私を追いかけて来たので吃驚して逃げ出しちゃったの」

「ウウム、よく捕まらなかったな」

「あれは一体だれだったの」

「あれかい？　……」と馬春堂が口を濁している間に、お蝶は先に立って歩みながら、

「とにかく往来じゃ話ができないから、先生の家まで行きましょうよ」

「えっ、わしの家へ来るッて言うのかい」

「そのつもりで、手土産のかわりに、少しばかり御馳走を買って待っていたのよ」
「こいつはどうした風向きだろう」
先生は酔わないうちから陶然と鼻毛を伸ばしてしまいました。
細い露地のドブ板を踏んでいると、二枚の板戸を閉てた先生のねぐらが、何事もなく待っていて、そこに掃溜へ鶴のような若い女を迎え、何はなくとも春のようで、行燈の明りまでがいつもの晩より明るい気がする。
お蝶が、たすきをかけて、酒の支度をしてくれるのを見ると、先生は感極まって、幾日も掃いた事のない箒を持ち、後の酒の美味さを夢みながら、
「正月め、おれを驚かそうと思って、不意討にやって来やがった」
どうもいつもの不性に似ず、働くことと言ってはない。
その有様を格子の外に立って眺めながら、
「おや、馬春堂の家へお嫁が来たのかしら?」
と、はいりかねている様子の男は、以前からここへは時折遊びに来るお人好しの率八であります。
馬春堂の家の常にない空気をのぞき込んで、率八は例の剽軽な口調です。
「先生、今日はたいそうお宅の中が明るいね」
「おう率八か、上がって一服吸って行くがよい」
「エヘヘヘ、お邪魔になりゃしませんか」
「なぜだい?」
「でも、いつもお見かけした事のない、美麗なお客様が働いているようじゃありませんか」
「居たってよいじゃないか、余人と違って、お前ならば邪魔にはならんよ」
「人間が甘いからでございますか。どうも驚きましたね、先生も見かけによらない色男だな」
「うふ……」と馬春堂は妙な笑い方をして箒を掛け、「率八、きょうは一杯飲ませるぜ」
「ところが、これから野暮用に行く途中なんで」
「じゃ帰りに寄るがいい、支度をして待っているから」
「ヘエ、ばかに景気がいいんですね、それにひきかえて、うちの所帯は相変らず火の車で、今もこの先の七ツ屋へ駈けつけるところなんです」
質草のはいっている小風呂敷を差し上げて見せると、率八は抜け露地を駈け出してあたふたと用達に急いで行く。
「どれ、これで春風一掃じゃ」
後では馬春堂先生、久しぶりの煤を掃き終えると、脚のあぶない茶卓台をすえ、炬燵と行燈の配置よろしくあって、
「これ、お蝶さんや、早くここへ来て手でも暖めないか。なに、お燗はわしがここで注けながら飲るとしようよ」
と、斜めならぬ機嫌顔で、まず一、二杯のところを手酌で試みる。
「驚いたでしょう、不意に来て」
お蝶は、炬燵向うへフワリと坐って、その蠱惑な姿態を甘

えるようにくずしながら、
「私ほんとに困っている事があるの。……で、お願いにやって来たのよ」
「聞いてやろうじゃないか。わしは、人にすがられると、元来が涙ッぽくって、いやと言えない性分でな」
「じゃあ聞いて下さる」
「うむ、どんな事か、話してごらん」
「でも最前、雲霧と四ツ目屋の二人から、私の姿を見つけたら宿へ知らせてくれと言って頼まれた時も、先生はうんと承知していたじゃありませんか」
「ほウ、お前はあれを見ていたのか」
「幕のうしろに立っていて、すっかり話を聞いちゃッたわ」
「そいつはいかん」と先生は毛の薄い頭へ手を乗せましたが、少しもテレる様子はなく、
「だがお蝶さん、それは心配にも及ぶまい。なぜかと言えば、あの雲霧や四ツ目屋の輩には、何の好意をもつ理由もないが、わしは元からお前さんには深い同情をよせておる」
「ほんとに？」と力をこめて――「実はね先生」と言い難そうにもじもじする。
馬春堂は眼を細くして、片手に杯を運び、片手を炬燵の中のお蝶の手へ重ねて、
「窮鳥ふところに入れば何とやらいうたとえもある、決して他言はしないから、どんな事か言ってみるがよい」
「私はほんとにその窮鳥なのよ。宗門役人には尾け狙われるし、世間の者はみんな仇のようだし、それに何より困るのは、楽々と寝る家がないことなの。……ねえ馬春堂さん、可哀そうだと思って、私を当分の間ここの家に泊めてくれない？　……その代りには、お金なら勝手を知っている切支丹屋敷の官庫から、幾らでも私が夜半に持ち出して来て上げるわ」
これは窮鳥どころか願ってもない鴨がかかって来たわい――と馬春堂は一も二もなく承知して、思わずその晩の酒を過ごしました。
率八が帰りに寄ってみた頃には、先生はもう他愛なく酔って醜態を究めております。ただお蝶と率八があまり仲よく話し込む時に、とろんと睨みつける嫉妬らしい眼だけは、多少本性にたがわぬところがないでもない。
思わずグッスリと寝込んで――その明くる朝。
「おや、お蝶は？」
と彼はムックリ起きに、何より先に家の中を見廻しました。しかし、馬春堂なるもの安んじて可なりであります、お蝶はこの家の世話女房になりすまして、小忠実に勝手で働いている。
盆と正月がいっぺんに来た気で、馬春堂はすっかり若返ってしまったようです。今日は顔を剃ろうの湯にはいろうのと、ついうかうか遊び暮して、虎の子にしていた一両は、またたくうちに消えてしまう。
そこで、また三味線堀の空ッ風に幕を張らなければならないかと、少し酔の醒めた顔をしていると、その夕方です。
「もうお金がないんでしょう。いいわ、心配しないで寝てい

らッしゃいよ」
　こう言って、お蝶はその晩、身支度をして出て行きそうにした。
　その身支度を見ていると、いつのまに持って来てあったのか、黒の男小袖に薄木綿の膝行袴を穿き、同じ黒の頭巾を眉深にかぶって大小を差して行く様子ですから、先生も一驚を吃して、
「これこれ、そんな身装で何処へ行くのじゃ」
　と、炬燵を飛び出して目をみはりました。
「何処へ？」と、馬春堂が怪しむのを聞き流して、お蝶は男装の上に覆面したおのれの姿をしきりと見廻しておりましたが、
「どう？　似合って？」
　と、袖口を胸で合せながら、朱い唇をつぼませて、男らしからぬ媚の眼をする。
　思わず釣り込まれて、馬春堂も、
「よく似合うな、そうしていると、路考とか伝九郎とかいう役者絵のようだ」
「じゃあ外を歩いていても、男に見えるわね」
「だがその膝行袴が少し変だよ、それじゃ第一、草履穿きでは恰好がつかない」
　そう言われるとお蝶も気がついて、またその上に並の平袴を二重に穿いて、
「これならいいでしょう、スラリとして――」
「ウム、それならばどう見ても、旗本の御次男が、夜遊びにでも行くようだ」
「じゃ先生、ちょッと行って来ますから、大人しく家に待っていらっしゃいネ」
「おい、おい、お蝶さんや」
　呼び止めるまに、すっと格子の音がして、お蝶は変ったその姿のままで、宵暗の露地へ出て行った様子です。
「あれ、もう行ってしまった」
　馬春堂は格子の前まで出て来ましたが、急にソワソワとそこらを巡り歩きながら、何か考えていたかと思うと、戸閉まりもせずに続いて長屋を飛び出しました。
　徒士町の四つ辻あたり、幾つもの提灯を棒鼻にブラ下げて、
「駕ウー、駕ウ」
　と白い息を吐いている駕かきの溜りがある。
「おい、駕を一挺」
「旦那、何処へ向けますか」
　と馬春堂を乗せた駕屋が肩を入れかけます。駕の垂れには春らしく輪飾りが下がっていて、寒いうちにも春らしい夜風がさらさらとそれに触る。
「あの、今向うへ行った、仲間のあとを尾けておくれ」
「じゃ今ここで、黒頭巾を被ったお武家を乗せたあいつですね」
「そうそう、切通しの方へ真っすぐに駆け出した」
　先の足どりが早いとみえ、やがて暫くの間は激しく揺れに

揺れて、駕の中の先生は舟にある思いをしています。

ぎッと、駕の足が止まったかと思うと、

「旦那、先のお武家が下りましたが、どうなさいますか」

「なに、下りたかい？　それではわしも此処から歩くとする」

駄賃を払って、そこの曲がり角から暗い坂をスタスタと下って行く。彼の先には、覆面をしたお蝶の姿が見えました。そして、そこは例の切支丹坂――

お蝶の足は坂へ向って、加速度に早くなりました。歩調が激しくなるにつれて彼女の影も男性的な活溌の度を増して見える。

いや、活溌どころの沙汰ではありません、獄門橋の先まで尾けて行った馬春堂は、次の瞬間に、あッと言ったきり、掌中の玉を失ったように、やや暫くというものは其処で開いた口がふさがらない。

もうお蝶の姿は、彼の視界の届かぬ所に逸していました。椋の大木の梢から丈余の高塀を跳び越えて、切支丹屋敷の中へ紛れ込んでしまったのです。

「なるほど、お蝶の言ったのは嘘ではない。おれが金に困っているので、切支丹屋敷の官庫の中から、何か持ち出して来ようという気だろう。イヤハヤ、娘心のひとすじと言うやつは怖ろしいものだテ」

天下の色男はわしかしらと、長い顎を抑えてニヤリと悦に入った先生は、買物に入った女房を店の外で待っている男のように、そこで再び彼女が出て来るのを待っている。

ところが、豈計らんやです、お蝶はその頃、宗門方の若侍が役宅から出て行くように、通用口の門番に門鑑を示し、山屋敷の表からサッサとそこを立ち去っていたのであります。

で、それから先の彼女の行動は、遂に先生の知るよしもない事。

先生はその翌日、銭はないが大道へ稼ぎにゆく勇気もなく、炬燵に狸をきめていましたが、いつかトロリとしたところへ、

「あら、寝ているの？」

お蝶の嬌笑が障子を開ける。

何だか狐につままれたような気持で、馬春堂は眼をこすっています。

「これは約束のお金、少しですけれど、当座のお小遣いにして下さい。またなくなったらいつでも、切支丹屋敷から持ち出して来て上げますからね」

馬春堂の寝ぼけ眼をハッと覚ましたのは、お蝶が、無造作にそこへ置いた二十両ばかりの小判の色。

先生は驚き且つ欣びましたが、彼女が前夜山屋敷へ忍びこんだ実際を見届けていますので、その金の出所については、何の懸念も持ちません。

同時に、お蝶に対しては、色と慾の両天をかけて、彼女の事を頼まれた雲霧に密告するどころか、下へも置かぬようにして、気随気ままに任せています。

そこで、拘束のない住居を得たお蝶はどうかと言いますと、彼女は、例の黒頭巾に男拵えの身装で、毎日、夕暮となると何処かへ出て行く事が、雨の降る時以外は、一日も欠かしたことがありません。

「面白かったわ、ゆうべは男になって、吉原へ行って来たのよ」

そんな話を持ち出して、なにがしと呼ぶ青楼に何という馴染が出来たとか、或いは、そんな社会で知り合になった茶屋の女将と、博戯をして夜を明かしたとか、時によると、昨夜はなつかしい切支丹屋敷へ忍んで、一晩、昔の家で寝て来たとか、とにかく、夜は帰らないことに極まっている。

それだけは馬春堂も、甚だ不平に思いましたが、いつか習慣のようになって、その不平や不審にさえ慣れてしまう。

「先生、お蝶さんていう娘は、いつ来ても昼寝をしているね。今日も隣の部屋に寝ているんですか」

足忠実に、今日も馬春堂の家へ立ち寄った率八が、こう言って不審がると、訊かれた方は、至って当然のように、

「この娘は、蝙蝠のように、夕方になると起きて出る。まったく、夜遊びの好きな性分でな」

「へえ、家にいる親分と、よく似ていますね」

「お前の家にも、誰か居るのか」

「え……」と率八は、あわてて口をつぐみましたが、

「なに居候のこってすよ」

「だって今、親分と言ったではないか。この間うちから、わしも少し腑に落ちないと考えているのだが、率八、お前は日本左衛門を匿っているな」

馬春堂が睨みつけて言うと、果たして、率八の顔色が変って来ました。

「じゃ先生には、もうそいつが分っているんで……」

「分らないでどうするものか。わしも梅花堂流の易者だよ、それくらいなことは、とうに心のうちで卦を立てて観抜いている」

「じゃあ先生にだけ話しますけれど、極内にしていておくんなさいね」

「誰がそんな事をツベコベと喋舌るものか。居るんだろう？」

「へい、実は師走の中頃から、あっしの家に隠れていますが、その親分もお蝶さんと同じように、毎晩家を外にしちゃ、昼になると寝ているんです」

「そりゃあ何も不思議はないさ、盗人の昼寝というやつ、毎晩稼ぎに出かけるのだろう」

「ところがそうじゃありません」

お人好しの率八は、いつのまにか、馬春堂の口車とも気がつかずに、膝を進めていましたが、それと共に、障子を閉てた隣の部屋に微かに寝息をかいていたお蝶も、ふッと眼をさまして、枕から顔をもたげました。

時の移るのも忘れて、お喋舌りをしていた率八が、障子に蔭る陽脚に驚いて、蒼惶と馬春堂の家を辞して帰るとすぐに、お蝶も外へ急ぎました。

隣の部屋で、率八の話に聞き耳をたてていた間に、身装も作っていたものとみえ、いつもの黒頭巾に男袴、腰に細身の大小を落としている。

町を歩いてゆくうちに、案外油を売っていた時間が長かったことに気がついた率八は、にわかに慌てた足どりで、三筋町

から新堀端に沿い、蔵前の通りをまっすぐに出て、見付から横山町の抜け道にはいります。

やがて、辿りついた所は、浜町の片端れ、その辺りまだ空地や空井戸や古池などが多く、大川端をすぐ前にして、四、五軒の紙漉小屋と、漁師の家などが散在しているその中の一軒家。

そこが率八の家とみえて、

「おっかあ、今帰ったよ」

声をかけると、井戸端で炊ぎの米を磨いでいた彼の女房らしい女と、その女の周囲に寄りたかッていた幼い子供達が、一斉に彼を迎えました。

「親分はどうしている？」

「さッき眼を覚まして、この井戸端で顔を洗っていましたよ」

「じゃあ、納屋の方だな」

彼の家族が住む二間ほどな狭い母屋と離れて、夏ならば、屋根には一八の花が咲き、秋には夕顔のつるでもからみそうな、一棟の納屋が見える。

一同が家にはいって、破れ障子に明りをともすと、まだ藍色に暮れ残っている大川の空から、バタバタと白い千鳥が降りて来て、井戸の流しに磨ぎこぼしてある米粒を争ってついばみます。

「親分、只今帰りました、ツイどうも遅くなりまして済みません」

十能に炭を盛ったのを持ちながら、率八が納屋の戸口へこう言うと、配流の人でも居そうな小さな切窓に、今肱をついて川洲の方へ横に立って千鳥を眺めていた一人の男が、

「おう火を持って来てくれたか、水際の家は、日が暮れると急に寒いものだな」

側の火鉢の灰を掘る。

それへ移す炭火の火で、赤く映って見える鼻すじや頬骨の線には、日本左衛門の特徴が線香で描いたようにハッキリと見えました。

「今日は遅くなったので、お支度をなさるにも、少し暗うございましょう」

「いや、そう急ぐことはない、毎日の事なので、舟の支度も馴れて来たし、最前夕食もしたためた」

「気のつかない嬶あなので、あっしがいないと、何のおかまいも致しません」

「いや、こうしている間は、かえってかまってくれぬ方が自分も気楽だ。そちの用意がよかったら御苦労だがまたいつもの所まで送って貰おうか」

「それじゃすぐにお出かけなさいますか」

「ウム、明りを灯すにも及ぶまい」

膝の傍の大刀を寄せて、腰にたばさむと、あたりの物を片づけて、静かに、そこを立上がった様子です。

立ってみると、着流しではありません、足元を括った膝行袴に、土間へ降りてわらじを穿く。そして、彼が黒頭巾の緒を結んで納屋の外へ出る間に、率八の方は大川の洲に一艘の猪牙舟を解いて、

「親分、あとは嬶あが戸を閉めに来ますから、どうか、その

ままにしておいておくんなさい」

と、櫓支度をして待っている。

ぽんと、それへ日本左衛門の影が没して、ギイッ、ギイッ、という櫓韻が大川の夜霞に遠くなって行った頃です——やがて入れちがいに、二人が去った納屋の中に、ぽっと明りの影が射して、男姿のお蝶が黙然と坐っていました。

一閑張りの小机があります。お蝶は覆面のまま前に坐っておりましたが、思いついた風に、硯筥の蓋をとり、有合せの江戸川紙へこんな文字を幾つもうつつに書き散らしてみる。

日本左衛門様、日本左衛門様、恋しい日本左衛門さま、恋、恋、恋、恋、恋、恋、恋。

——恋という字が虫のようにならびました。

ビリビリとその一枚を破って捨てると、筆の端を白い頬へ突いて、暫く首を傾げておりましたが、やがて思い切った様子に、こんどはこんな風に書いてゆく。

甲斐、鼻寺以来でございますね、日本左衛門様。

どうしたのでしょう、私は怖ろしいはずのあなたが、あれ以来、何だか忘れ得ない　いで悩んでおります。

あの鼻寺の本堂で、私に囁いたおことばが嘘でなければ、お蝶はほんとに救　われますけれど、もしやあれは当座の嘘ではなかろうか、それとも真実のおこと　ばかしら、と娘心は、他愛もなく、いまだに判断がつきませぬ。

お留守のあとへ参って、心残りの一筆、あわれとお読み下さいませ。またのお　訪ねの折に、それが真ならば久しぶりの笑顔を、また、それが嘘ならば、お蝶　の命を召されるなり、何と遊ばされるなり、御意のままに。

こう書き流して自身の名を記す所へ、文字の代りに、一筆描きに一羽の蝶の印を書きかけていますと、納屋の小窓の外へ、誰か人でも近づいて来たらしい気配に、ハッとしながら筆を置いて、側の行燈を吹き消しました。

微細な注意と身構えを持って、そッと、納屋から外へ抜け出ようとすると、案の定、外には一箇の人影が屈伏していて、じっとお蝶の挙動に目をつけている様子。

彼女はギクとして、宗門役人の手先を連想しましたが、さり気ない態を作って、率八の家の裏手から浜町の屋敷地の方へスタスタと足を早めだします。

——と、それを遣り過して十二、三間の隔てを置いてから、

「お蝶だ！」

ムックリと身を起こしたのは案外体の小さい小童で、その影が飛躍すると共に、彼の手にある棒先の刃物が、水を振るようにキラキラと闇に閃流する。

と、思うと、一足飛びに、

「待てッ」

と、その刃物の穂先が、追いつきざまに空を走って、お蝶の肩を貫こうとしましたが、彼女も察していたことなので、身を沈めると共に振顧って、

「何をするのさッ、あぶない！」

帯の間からつかんだ物を少年の顔へぶつけて走り去りまし

た。

「あっ……」と、顔を撫でた小童は、不思議な快感をもつ匂いにくるまれて、暫くは目が開けませんでしたが、やがてよくよく検めてみると、それは桃花粉とやらいう白粉のはいった袋を目潰しに投げつけられたものだと覚りました。

「臭い、臭い、女臭いぞ。これをみても、今のは女にちがいない。男に化けた切支丹屋敷のお蝶とかいう女にちがいない。そうだ、早くこの事を」

真っ白になった顔や手を、そこらの水溜りで忙しげに洗うと、刃物の付いた短い棒を小脇にして、あたかも風を呼んだ孫悟空が急な用達にでも出かける時のように、大川端から下谷方面へ、踵を飛ばして駈け出しました。

辰巳でもなく、北でもなく、夜ごとに何処へ通うのでしょうか、日本左衛門を乗せた猪牙舟は、隅田の本流から神田川をさかのぼります。

そして、朝になっては帰ってくる。

今朝も、まだ川洲の砂に千鳥の足痕さえない夜明け方に、率八の舟は、霞の中からゆうべの岸へ戻って来て、

「ほイ」と、揚げ櫓のしずくを撒いて、舳を洲の上へ乗り上げます。

ひらりと飛び上がると、率八は駆け出して、母屋の床下から炭俵や芋俵を抱えて来て、

「親分、今ひと燻べ焚きますから、体を暖かくしてお寝みなさいまし」と空地の一端で、ドカドカと焚火の焔を揚げ初めました。

「ああ人心地がついて来た」と、日本左衛門も背中をあぶる。

焚火に火照らされた眼で見ると、枯れ草の霜の屋根の白さが一倍冴えて真ッ白に見えます。

火のそばを離れ難く、そこであたりながら、頭巾や膝行袴を脱ぎすてた日本左衛門は、それを一括げにして、

「いい気持になった、もう少しここで暖まっているから、これを納屋へ抛りこんで、ついでにおれの煙草入れを持って来てくれねえか」

と、率八に渡して言う。

すぐ納屋の中へ飛び込んで行った率八は、それを置いて、いいつけられた煙草入れと一緒に巻紙の切れ端を持って、読みながら歩いて来ました。

「親分、親分」

「なんだな、それは」

「机の上にこんな物が置いてありましたが、誰でしょう？」

「どれ……」

と、焚火のそばに腰を下ろして、彼は二、三度読み返しておりましたが、それを焔の舌先へ持って行って、赤くなって舞いあがる灰の蝶々へひとみを吊り上げました。

そして、呟くように、

「今日は来るかも知れない」

と、頬へ手をやる。

「親分」

「うム？」

「誰が来るんですえ？」
「お蝶という切支丹屋敷の混血児さ」
「ヘエ、じゃ親分は、あのお蝶という娘をとうから御存じなんてすか」
「あの女にゃいろいろな理があって、江戸へ戻る前までは血眼で探したもんだが、ここへ来てからは、そんな事もしていられないので、忘れるともなく過ぎていたのだ」
「そうですか、それなら早く親分にも話せばよかった。実は、馬春堂の家へ三、四度寄って見るたびに、いつもあの娘が寝ているんで、変に思っておりましたんで……」
「そこで何か喋舌ったのだろう。……それでなければお蝶がおれの居所を知って来るはずがない」
率八はドギマギしながら頭を掻いて、
「つい、口を辷らしまして、親分とは言いませんが、その……家に客が居るッていう事を話したもんですから」
「まあいいよ、口止めされても、つい喋舌ってしまうところが、おめえの値打ちのあるところだ」
「お人好しの率八でございますからね」
「そのお人好しの家へ厄介になって、おめえに質草まで入れさせているのは済まない話だが、いずれそのうちには、たんまりと恩返しに儲けさせるから、どうか暫く辛抱してくれ」
「ど、どう致しまして、親分に恩返しなんかして貰う覚えはありません。あっしの方こそ、以前の御恩があると思えばこそ、及ばずながら、こうしているんでございますもの」
「てめえの心持ちはよく分っている。だから、何かいい機があったら、生涯食えるだけの金を持たせて、おれと結んだ悪い渡世の縁を切ってやりたいと考えているのだ。……お陽がさして来たな」と、話を切って、火のそばを立ち上がりました。
乳色の霞の空から穏やかな川波が、陽の光を反映して来ると、そこらをスイスイと飛ぶ白い小鳥が、苫を被ったあたりの泊り舟へ朝を告げて飛び廻る。
「親分、もう少し焚き木を見つけて来ましょうか」
「いや充分に暖まったから、おれは納屋で一休み寝るとしよう。……そしてな、率八」
「ヘイ」
「もしかすると、お蝶が来るかも知れねえから、訪ねて来たら起してくれよ」
と頼んでおいて、小屋へはいる。
大川の空には、春風に乗った二枚半の字凧や武者絵が、のどかなウナリを揚げております。

一方、野槍を小脇にもって、下谷の方へ駈け去った小童は、あれから何処へ行き着いたか？
そこは東叡山の北裏にあたる根岸村――土地に住む雅人が呼んで曙の里となす閑静な所でした。――手入れをせぬのがかえって風趣を増して見せる茶寮風の下屋敷、今は廃屋にしてありますが、元は尾州侯のまま見えた園亭に、近頃は誰か住んでいる。
その茶寮の縁先からは、遠からぬ所の御行の松が、夜の空

を摩してのぞまれますし、広い庭は、雪見燈籠も空堀の那智石も、落葉に埋まって冬ざれの霜の荒れにまかせてあります。――がしかし、南隅の寒紅梅一枝、月温く霞む夜を待つもののように、やはり何処か下萌の季節らしく、寒いうちにも春意を含んでふくらんでおります。

「お嬢様、こんどはあなたの番じゃございませんか」

「あら、そうかえ」

「考え事ばかりしていては、折角こうしてお慰みのお相手をしていても、何にもなりは致しません」

「だって、何をしても、気が紛れないのだからしかたがないよ。私も、お祖父様のことは、忘れよう、忘れようと、心では努めているのだけれど……」

玉の如き佳人の涙が、双六盤にこぼれました。

「おりんや、もう止しましょう」

「そうですか……」と、小間使いのおりんも、慰めることばに困りながら、双六盤を床脇へ片寄せて、

「では、お気が晴れますように、おりんが田舎娘の手前を一服たててさし上げましょうか」

襖を開けて、隣の茶室の炉べりに坐りました。

ところへ、裏門の潜り戸を音させて、ガサガサと落葉を踏んではいって来た高麗村の次郎が、

「おりんさん、月江様は？」

「おや次郎かえ、よい所へ帰って来てくれました、お前が居ないので、お嬢様も淋しがっていたところですよ」

「今夜、釘勘のおじさんが来ると言ってたね」

「そうそう、何処やらのおいしい最中を買って来ると、この前帰る時に、約束をして行きましたが」

「まだ来ない？」

「ええ、まだ」

「どうしたんだろう、じれッたいなあ」

「早く上へおあがりな、何を独りして、そんな所で力ンでいるの」

「金吾様や釘勘のおじさんが、前々から探している、混血児のお蝶を今日見つけて来たんだよ。だから、早く知らして欣ばしてやりたいと思って来たのに、何を愚図愚図しているんだい」

「そんな事を言ったって、金吾様と万太郎様は、当分この根岸にはお帰りがないというお言伝だし、また、釘勘も、知らないでいるものを、そんな事を言ってじれたッて、無理というものじゃありませんか。……ま、そのうちに、お見えになるかも知れないから、上へあがって、お嬢様の御機嫌でも直るようにしてあげてください」

「うム、おいらの顔を見れば、月江様の泣き顔はすぐに直る」

「ほんとに、お嬢様の機嫌を直すのは、お前が一番名人だわ」

「なんかって、人をおだてるから、おいらは嫌だ」

「おだてはしない、この通り、次郎や、頼みます、頼みます」

茶を立てながら、おりんが片手で拝む真似をすると、次郎はその辺へ野槍を立てて、

「お嬢様、次郎でございます。只今！」

と、わざと元気な声で、次の間の縁先へ這い上がる。

「あ、帰ったの……」

泣いていたのでしょう、窓へよってうつ向いていた月江は、あわてて袂を離した顔を、明りにそむけて答えました。

次郎は、ちょこと、月江の前に畏って、

「お嬢様、あなたは其処で何をベソベソ泣いていたんですか」

「あら、何も泣いてなんかいやしないのに」

「だって眼のふちが赤くなっているじゃありませんか」

こう、ぶッ切ら棒に詰問されて来ては、絹糸のように細い佳人の哀傷も、思わず、破顔せずにはいられません。

その泣き笑いの笑くぼを指さして、

「ほーら笑って来た、今泣いた鴉がもう笑った、おりんさん、お嬢様のごきげんが直ったよ」

そこへおりんも薄茶を一服立てて来て、

「やはりお前に限りますね。さ、お嬢様、次郎も帰って来ましたから、お気持を直して、また双六盤か投扇興でも」

と言うのを、次郎はあわてて手を振って、

「いや、おいらは今も言った通り、今夜は遊んではいられないよ。釘勘のおじさんが来なければ、これから浅草まで急いで行って、あの事を早く知らして来なければならない」

「あの事と言うと、何なの？　次郎」

月江も思わず彼の眼色につり込まれました。

そこで次郎が仔細を話す。次郎はその以前に釘勘や金吾の口から、お蝶のことを耳に挟んでいて、暇あるごとに江戸見物に出歩くついでに、それとなく注意をしていたものと見えます。

偶然、彼はそれより数日前に、お蝶が狭い横丁から出て来る姿に行き逢いました。しかし、その後気をつけてみると、まるで服装が違っているので、男か女かの判断に迷いながら、今日、浜町へ帰る率八に尾いてゆくお蝶を、またその後から尾けて行って見たのでした。

そしてまた、この根岸の下屋敷に、千蛾老人が亡い後の月江を引取ったのは、万太郎の計らいで、機を見て、彼が老人の生前に誓った約束を果たそうとする準備であるとも考えられるし、或いは、この家族に金吾を協力させて、千蛾老人を殺害した仇を討たせんとする支度であるようにも思われる。

ともかく、月江はここに移されて、或る機運の巡転をじっと待つ境遇に置かれています。

しかし、金吾からも万太郎からも、この正月以来、さっぱり音も沙汰もない。

時折、釘勘が浮かない顔をして月江の様子を見舞に来ますが、その釘勘にも、以後の消息はさらに窺うべくもありません。――つまり夜光の短刀を繞るお蝶と日本左衛門とにからむ探索の手がかりも、渦紋がこの江戸表へ移ってから一層迷路の霧につつまれてしまった様子で、さすがの目明し釘勘も、近頃はこの事件に匙投げ気味になったのではないかとさえ、他目には思われました。

「来ないなあ、釘勘のおじさんは――」と、次郎はしきりと待ち焦れて、

「もう来そうもないから、これから浅草の釘勘の家まで一走り行って来よう。いいでしょうお嬢様」

と、再び庭へ下りかけます。

「もうだいぶ夜更けらしいから、明日にしてはどうですね」

おりんが止めるのを、かぶりを振って、すでに野槍を持ちながら、

「行ってまいります。遅くなったら、泊まって来るかも知れませんよ」

彼時代の元気というものは、自分にも他人にも抑止することを許しません。次郎は深夜の曙の里を、再びタッタと駆け出しました。

釘抜きの勘次郎の手先部屋は、以前は京橋のお竹蔵でありましたが、後に南の附属となってから浅草千束村の桐畑に移っていました。

その桐畑は観音堂のお火除け地で、葉のない坊主木が、霜明りの大地に骸骨を植えたように冴え返っている。

僧院のものらしい法衣の人達が、提燈をさげて行くのを追い越して、やがて次郎は、荒格子を戸閉した一軒の家の前に立ち、

「今晩は。――今晩は」

勢いよく、其家の表を叩き初めました。

訪れてみますと、折角彼が不眠で告げに来た甲斐もなく、

「どちら様ですか。もう寝んでおりますが」

と、よそよそしい女の返辞が奥の方でするばかりで、釘勘の家の戸は、彼へ冷淡に閉まっているままです。

でも、次郎はなお其家をたたく手を止めないで、

「こんばんは。今晩は。――ここを開けて下さい。私は根岸の方からやってまいりました高麗村の次郎というもんですが……」

「今晩は生憎と、部屋の衆はみな留守で一人もおりませんから、また明日来て下さいな」

「いえ、部屋の者は留守でも、釘勘親方にさえ会って、たった一ことお話すれば用は済むんですから、どうぞ、ちょっとここを開けておじさんに取次いでくれませんか」

そう言っている間に、奥の方でする女の声は、一向立って来そうもなく灯影も射してまいりません。

「お気の毒様だけれど、その親方もこの四、五日の間、ちッとも家へ顔を見せないんだから、また出直して来て貰うよりしかたがないね」

「困ったなあ」

次郎はそう呟いて、また奥へも聞こえるような声で、

「困ったなあ、そいつは」と繰り返しながら、いつまでもそこに嗟嘆を洩らしていました。そして、もう先では帰ったものと思っている時分にまた戸をたたいて、

「もしもし、それでは、釘勘親方が帰って来るまで泊まらして貰いますが、何処から這入ったらようございましょうか」

内と外で、なお二、三度押問答をしておりましたが、とうとう、根気負けがしたように、

「私は留守居の者で、何の御用事か知らないけれど、じゃあ裏の方へ廻ってごらん」

と、見当違いな方で、やっと雨戸を開ける音がします。

次郎は家の横を廻って、裏口の明りを目あてに近寄って行きました。見ると、ことばの通り、もう戸締りをして寝ていたものに相違ありません、髪をぞんざい結びにした二十四、五の肌の白い女が、二尺ほど明けた戸の隙に妖冶な姿を細長く見せていて、

「泊って待っていると言っても、親方はいつ帰るか分りませんよ。何しろ、商売がらだからね」

「でも、しかたがありません」

「それに私は、此家の家内でもなし雇い人でもなしするから、滅多な者を、泊めていいか悪いのかも分らないんだよ」

「決して、御心配には及びません、私が参ったのは初めてですが、釘勘親方とはとうから御懇意で、根岸のお下屋敷へは、時々訪ねて下さいます」

「根岸のお屋敷だって？」

「はい、前には徳川万太郎様が押し込められていた窮命屋敷で、先頃からそこに御厄介になっている狛家の召使い次郎と申す者でございます。或る急な事をお知らせしたいと、わざわざそこから飛んで来たんですから、お留守なら帰るまで待たして置いてくれませんか」

「何か知らないが、じゃ寒いから、内へ上がっているがよい」

「どうも有難うございます。ここから上がってもようございますか」

「今、雑巾を上げるから、それで足を拭いて上がっておいで」

「折角、お寝みのところをすみません」

「さ、ここへ置くよ、雑巾を」

「はい、はい」

「そして、真っ暗だから、ちょっと其処に待っておいで、今、明りを持って来て、部屋へ案内して上げるから……」と、縁座敷の障子を開けて、奥に細く灯っている丸行燈の燈芯をかき立て、それを左にさげながら、寝巻の小褄を取ってスルスルと出てきました。

円い灯影の輪が、女の白い腮から面長な顔を逆さまに撫でて、暗い天井を海月のようにふわふわとうごいて来る。

すると、次郎は初めて愕然として、

「やっ、おめえは熱海で逢ったことのある、江戸のお粂さんという女じゃないか」

明りを提げた凄艶な寝巻すがたへ、目をみはって叫びました。

意外です。それは紛れもなく、熱海の隠居藤屋に泊まっていた丹頂のお粂に相違ありません。

けだし次郎ならずとも、お粂の素性を知る者ならば、彼女が今こうして、目明しの家に留守居をしているなどという事は、あり得べからざるものと否定して、信じないかも分らない。

しかし、事実はどこまでも事実で、

「おや、それじゃお前は、あの時、何処とかいう御大家のお嬢さんについていたお供だったのかえ」

と、彼女もひとしく驚いた顔をした様子を見ますと、それは他人の空似ではなく、やはり丹頂のお粂であります。

「それじゃまんざら知らない仲でもなかったね。さあ、早く後ろを閉めて、こっちへ這入ったがよい」

お粂は親切に、火鉢に火を取って与えたり、寝るべき夜具を押入れから出して、自分も再び寝間へはいって、そこの明りを消しました。

「変だなあ、あのお粂というのは、金吾様をたぶらかしていた女賊だという話を聞いていたけど、どうして、釘勘のおじさんの家に隠れているのだろう？　目明しのおじさんが、そんな悪党の女を匿っていていいものかしら」

次郎はもっとお粂と話を交わしてみたいと思ったのですが、彼女がそれを避けるように、すぐ明りを消して寝てしまったので、自分も寝るよりほかはありません。

で、疲れた足を蒲団の中にのばしながら、その疑惑に、寝入りばなの空想を囚われておりましたが、いつか、邪気のない高鼾をかいて、ぐっすりと寝込んでしまった様子です。

と――同じように、お粂もさまざまな考えに迷ったことでしょう。

どうしてあの高麗村の次郎が、根岸の下屋敷にいるのか？　また、何の急用をおびて此家へ来たのだろうか？

いや、それよりも、彼女とすれば、すでにこういう境遇に措かれて在る自分自身の現在からが、前から大きな疑問なのです。

去年の夏――

彼女の眼の先には、青い螢のようなものが明滅して見えてくる。

うまうまと秦野屋に誘い出されて、あの甲府の信玄堤の畷で、突然、相良金吾に出会った時、どういう気持か後では自分でも分らない心理ではあったが、帯の間に秘めていた魔薬を自分の顔に浴びて、死のうとしたお粂です。

彼女は、そうして自殺を果したものとのみ思っていました。……ところが、誰かに介抱されて気がついてみると、おのれの身は柳沢家の町方役所の仮牢に、牢医の手当を受けていた。

吐き気をつづけて、半日ほどは苦しみましたが、解毒を服まされて体が癒ると、猶予なく、おきまりの軍鶏籠に乗せられて、甲府表から江戸町奉行へ差立てになり、阿弥陀街道から笹子、小仏を揺られて来ました。

三尺高い獄門の台が、もうお粂の目には近づいていたのです。彼女も、相応な覚悟はきめて、軍鶏籠の中では頗る神妙に返っておりましたが、夜中、江戸表へ着いたと思うと、意外にも、自分はこの観音堂裏の桐畑の家に運ばれて、

「そのうちに吟味があるかも知れないが、暫く養生をするがいい」

と、釘勘に言い渡されて、夢とも謎とも考えつかない数ヵ月を此家に送っていたものであります。

洗えば、凶状の多い自分の体を、町奉行から公然と、そんな寛大な起居をゆるされるはずもないし、第一、外出がちな釘勘が今夜のように留守な例は屡々ですから、逃げようとすればいつなん刻でも逃げられないという事もない。

けれど、人間いつでも逃げ得られる境遇からは、逃げようとする衝動も起こらないし、また、どうして釘勘が自分をこ

うして置くのかという疑問も、お粂の心を一日のばしに此の家に引き留めて、ついつい、立去る気持も起こさせません。

浅草艶語

枕元で、釘勘らしい声がしたので、次郎がふと眼をさましてみますと、陽は三竿、すでに翌日の午近い刻限です。

「あ……おじさん」

「どうしたい？　次郎」

「寝坊しちゃった、お帰んなさい」

「鼻から提灯を出していたぜ、随分よく寝ていたようだな」

と、彼は次郎の寝ぼけ眼を笑いながら、今外から帰って来たばかりらしく、羽織を壁にかけて火鉢の前に坐り込んでいます。

「おじさん、急用があるんだぜ、今話すから待っていておくれ」

次郎はその間に、元気よく、夜具を押入れの中へまるめ込むと、流し元へ走り出して、ほんの真似事だけに顔を洗って来て、

「何と言ったッけ……そうそうお蝶だ、切支丹屋敷のお蝶という女だ」

「それがどうかしたというのか？」

「おじさんはあの娘を、去年から血眼で探し歩いているんじゃないか」

「おめえも小耳に挟んでいたろうが、お蝶と日本左衛門の隠れた先が、皆目知れないので弱っているのだ」

「ところがそのお蝶に、おいらが昨日出会ったんだよ。それで、もう夜半だったけれど、此処まで急いで知らせに来たところが、部屋の者もおじさんも留守なのでガッカリして寝てしまったのさ」

「ほんとうか、次郎」

「ウソなんか言うものか」

「そいつが真実なら有難い話だが」

「お蝶ばかりでなく、おじさんが今言った日本左衛門の隠れ家も、おいらはちゃんと突き止めて来ているよ」

「えっ……」と、釘勘も目明しの本業をこの少年に出し抜かれた驚きよりも、意外な吉報に思わず膝を立てて、彼がつぶさに話すところの率八の家の位置や、そこに現れた覆面異装のお蝶の行動を物静かに聞き取っていました。

やがて、茶筅髷をかき廻して、有合せの菜で茶漬をかッ込むと、

「じゃあ、すぐに手配にかかるとしよう」

羽織を着直して外へ出ました。

次郎も捕手の仲間に加わる気か何かで、例の野槍をたずさえて、彼と共に飛び出しましたが、桐畑から千束の用水堀まで駆けて来ると、

「おっと、お前はこの辺で待っていてくんな」

と、逸る足を止められて、

「七刻頃になると、上野の方から一人、茶屋町の方から一人、草履ばきで、十手を持った男が来るだろう。それはおれの部

屋に冷や飯を食っている岡ッ引だから、訊いてみて、もしそうだったら、灯ともし頃を合図に、大川と浜町の陸から、例の所へ人数をよこすように親方が言い残して行きましたと、言伝をしてくれないか。――でその時には、御苦労でも、お前がそこへ案内をして来てくれればなお有難いが」

無論、次郎に否やはありません。

「承知いたしました」

「じゃ頼んだよ」

「あ。――親方親方」

「なんだい？」

「その時は、おいらも捕手と一緒になって浜町へ行くよ。ちょうど明りの灯く時分に」

「うまくこっちの方寸どおりに行くかどうか、とにかく、部屋の者に、上手にやれと言ってくんな」

次郎をそこに止めて置いて、釘勘は大股に何処ともなく立去りました。

「あ。……忘れた」

後ろ姿を見送って、用水堀のふちにぽつねんと立っていた次郎は、その後で、何か悔むようにこう呟きました。

「忘れた、忘れた。……自分の教える事ばかり喋舌ッていて、ツイ、ゆうべから訊こうと思っていたお粂の事をたずねてみるのを忘れてしまった」

霜解けの千束村の畦を、梅の枝を持って通る人や、のろのろと歩む空駕の人影がいかにも春先の点景らしく、うららかに動いて見えます。

紙漉職人の働いている紙干し場の原の手前で、一つの駕が止まりました。

「おい、すてきもねえ美女が通るぜ。天降りでなくて、駕降りの天女だ」

「ほウ、成程、こいつは素晴らしい眼の保養だ」

「何処へ行くんだろう。行く先が気にかかる」

「あれ、溝にそって大川の方へ歩いたぜ。あの流れが越せないので、橋を探しているんじゃねえかしら、それなら手を取って渡してやりたいものだが」

などと干し場の紙漉職人が仕事の手をやめて騒いでいる彼方を見ますと、今、小川の縁で駕を捨てた押絵のような娘が、その声に顔を反向けて、小川の水際を大川河岸の方へ、朱塗りの木履を転ばせて行きます。

と――其処から小半町、

「あ。お蝶さんで」

その流れの水に屈み込んで、目笊に摘み入れていた芹の根を洗っていたお人好しの率八が、木履の裾を見上げて声をかける。

「あら、今日は」

と、お蝶がこっちの岸から笑い返すと、率八は腰をのばして、

「見違えちまった――今日は馬鹿に綺麗にお化粧して、それに、素晴らしいおめかしじゃありませんか。それじゃまるで、瀬川路考大家のお嬢様のようですよ。そこで、どちらへ？」

「あの……お前のうちに居る人へ、少し用があって来たんだけれど」
「親分も、お蝶が来たら起こしてくれと言っていました」
「じゃ、ゆうべ書いて置いた物を、読んでくれたのね」
「とにかく、こっちへお渡りなさい」
「あら、怖い……」
二間ばかりの小川の丸木橋を、操りのお染のように、怖々と木履で越えて来る娘らしさは、前の夜の男装覆面の彼女とはどうしても同一人とは思われません。
「親分、来ましたよ」
率八に揺り起こされて、眼をさました日本左衛門も、今まで幾度となく見たお蝶よりも、今日のお蝶の思い切った濃艶なおめかしに、思わず眼を奪われて、
「おう、上がるがいい」とは言ったものの、殺風景の納屋の隠れ家に、多少テレない訳にはゆきません。
「どうぞ、ごゆるりと」
率八が出て行こうとすると、
「おい」
「何か御用で？」
「面倒だろうが、あとで酒の支度をしておいてくれ。それと、ぬかりはなかろうが、納屋のまわりを時折見張っているようにな」
「よろしゅうございます。安心して、お話なさいまし」
どんと、戸を閉められると、納屋の中の光線は、わずかに明り取の切窓一つで、お蝶の絢爛も日本左衛門の姿も、程よく室内にぼかされて二人の気持も落着いて来る。
――まず何から話そうか。
彼と彼女の間に、或る心の経過があったとしても、茶屋町の四ツ目屋の帰りからずっと今日まで、彼が追えばのがれ、彼が迫れば蛇の如く忌んで逃げていたお蝶が、自分からここへ来てから真向きに坐る気持は、何としても、唐突で、にわかに言葉の緒口が見つからない。
が――そういう時には、女にはモジモジしているという受身の姿態が助けます。お蝶もそこで、娘らしい羞恥みを作って、男の言い出す声を待つばかりでした。
「……」
けれど日本左衛門も暫くは無言で、彼女の襟脚を眺めながら、彼女の心を読もうとするものの如き眼ざしであります。
外では率八が、見張りの眼を光らしながら、酒の肴にしようとして、そこらの枯れ草で有合せの蛤でも焼いているものとみえ、明り取の窓からその煙と、こうばしい汐の焼ける匂いがぷんと流れて来る……。
暫くの間、ひそかだった納屋の中で、やがて男女の低い囁き――
「お蝶。それに偽りはあるまいな」
日本左衛門の低いうちにも力のある言葉です。
「考えてみると私ほど、世の中に頼りの薄いものはありませんもの……。いつかの晩、鼻寺の暗やみで、女房になれと、あなたに言われた時は、ただ怖い一心でしたが、後になって

みると、ほんとに自分の生涯を託すお方は、あなたよりほかにない事が分りました」

「そうだろう、お前は切支丹屋敷を脱出した、ころびばてれんの娘だ。お前を容れる世間はなく、お前を狙け廻す宗門役人があるばかりだ」

「ほんとに私はその通りなの。今日は駕で来ましたけれど、外へ出るには、油断も隙もならないので、男姿で役人の目を晦ましているくらいなんです。……可哀そうな女だと思って下さい」

「おれも孤独だ。孤独のおれはそういう薄命な女をいつも心でさがしているらしい」

「じゃ今でも、鼻寺で言ったことばに変りはないのでございますね」

「あのお粂に裏切られた後は、一層、愛というものに飢えて、孤独なおれは、しきりと恋の相手を探していたが、おれは常に運命の尺前に、十手と獄門台を見ている大盗だ。所詮、人情の温かみにめぐまれる日はないものと、淋しい覚悟を持っていたが……」

「私の悩みと似ておりますのね」

「お前というものがいつかそれに選ばれたのだ」

「ほんとに嬉しゅうございます」

「女房になれ」

お蝶の腕を引寄せて、その肩を抱えました。

「なりますわ。いつまでも、屹度……」と、引寄せられたまま、抱擁の力を求めるように媚の謔るる目をあげて男の顔を見上げました。

「親分、何にもありませんが」

と、そこへ率八の声がして、戸口から射し込む光線の中に、酒と膳とを運んで来た彼の姿が立ちました。

「お蝶さん、此処へ置いて行きますから、お酌はよろしく頼みますよ」

「あい」と、彼女はいそいそと受けて、

「まあ、なかなか御馳走が」

「率八も可愛い奴、あいつだけは、早く足を洗わして、矢来の中の往生はさせたくねえものだ」

お蝶は、彼の杯へ一つ酌いで、

「私も死ぬのはいやですわ」

「それや誰だってそうに違えねえが、人間には、何の力も及ばぬ運命がある」

「どんな運命が向って来ても、私は屹度生きて抜けます」

「お前は、おれより気が強そうだな」

「弱い気持では、とてもこの世間に、生き通して行けませんもの。それに、あなたという人があれば、一層私は気を強くして、少しでも永くこの世に居てみたいと思います」

そう言いながら二人共に、何となく、寸前の運命に儚い予感を持ち合っているらしく、酒にも深く酔えませんでしたが、思慕の情はかえって濃密な気持を双方に起こさせました。

「おう、暮れて来た」

日本左衛門はふと切窓の夕星を見て、何かにわかに気を急かれて来たらしく、

「夜になると、出かけなければならない用事があるんだが……お蝶、また折を見て訪ねて来てくれ」

今日の首尾を惜しみながら、お蝶も夜になると切支丹屋敷にいるヨハンの姿が目に見えて来て、じっと落着いていられない気持に急かれて来るのでした。

「じゃ、またそのうちに」

と眼で誓って、彼女が先に男のそばを立った時です。――慌ただしい率八の跫音が、どどどどッと来て納屋の外へ衝かったかと思いますと、

「親分ッ、手が廻った！」

と廂に火のついたような彼の絶叫であります。

さてはと、さすがに胸をギクとさせて、男女が顔を見合わせたまま佇立んでいますと、途端に、そこの戸を開けた率八が、

「親分、今のうちです、早く舟の方へ」

と顔色もなく、舌をふるわせて急き立てました。

――と共に、飛鳥のように外へ走ろうとするお蝶を後ろに制して、

「騒ぐな。捕手か」

「え、そんなあんばいです。最前からこの辺へ、うさん臭い男がウロついていましたので、嬶あにも油断をするなと言っていますと、案の定、向うの紙漉場へ人数が集まって、いつのまにか八方を塞いでしまった様子です。もう逃げ口は、大川よりほかにはございません」

「よし、よし。それくらいの事はかねての覚悟だ」

「だが私はどうしたらいいのかしら？　……」

「案じる事はない。率八の言うとおり、八方は捕手の遠巻き、滅多に駈け出しては、かえって危なかろう」

「そうです、愚図愚図していると一大事ですよ。……さ親分、お蝶さんも、早くここを」

「とにかく、おれと一緒に舟へ乗るさ」

「ああ、それなら私も気が強いわ」

男の腕にすがりついて、お蝶が外の夕暗をのぞくと共に率八は、大川の洲へ走り出して、猪牙舟の小べりに寝ている櫓柄を取り上げています。

今だ！　と直覚したので、男女がそれへ目がけて疾風のように駆け出した時は、すでにその逃げ口にも、危機のワナが懸っていました。――走り出して七、八間、あッと筒抜けの声が夕暗を流れたかと思うと、男女の姿は、地に張られていた一本の縄に諸足を拯われて、

「しまッた！」

と叫びざま、左右へ離れてのめりました。

耳をつンざく呼子笛の音が、一息のうちに律を刻んで四方へ響きを伝えますと、相手の足をすくッた縄の左端から、

「日本左衛門、御用」

と呼んだのは、まぎれもない釘勘のどす声であり、同時に縄の右端から、

「お蝶、待てッ」

と野槍を持って躍り立った人影があります。それはここに

捕手を導いて来た高麗村の怪童次郎に相違ありません。

次郎が鋭い勢いをつけて、お蝶へ野槍を向けて来たのを見ると、率八は驚きながら、有り合う舟の鈎棒を持って、

「お蝶さん、舟へ、舟へ」

と、おのれが代って彼の相手に立ちました。

咄嗟、あぶなかったのは釘勘の頭蓋骨でした。呼子笛を口から放した途端に、鬼神のごとく怒った日本左衛門が、身を蹌めかせた反動を抜き打ちにかざした長船の大刀に乗せて、

「釘抜き。まだ生きていたかッ」

と、飛躍と共に、斬り下げて来たのです。

何の尺二、三寸の十手がそれを支え得ましょう。ガッキと受けたら長船の刃はこぼれて飛んだかも分りませんが、その代りには釘勘の脳骨がたしかに二つに割れたでしょう。

元々、目明しや捕手などは、武芸をほこる武芸者ではありませんから、どう穢い逃げ方をしようが、逆トンボを打とうが、要は、怪我をしないに限ります。そこでこんな場合に、その切ッ先に当って行くような愚な目明しはありません。

「おッと！　あぶねえ」

ひらりと横ッ飛びに逃げ退いた釘勘は、所詮、手元に近づき難いものと見て、十手を口に預けるが早いか、前の捕縄を輪に手繰って、その分銅の先を、鶺鴒の尾のように微かに振りながら、機を見ています。

がしかし、日本左衛門は二度とは寄って来ませんでした。

彼は片手の長船を少しずつ手元に納めて、一歩一歩と後退がりにお蝶のそばへ寄って行きますと、

「慌てることはねえ。日本左衛門が付いている」

囁きながら、彼女の手首を右腕の脇へ抱き込みました。そして、片手の切ッ先は、いつか、釘勘と次郎の野槍へ等分な注意を配りつつ、なおジリジリと川波の白い洲の方へ退がッて行くのです。

そのうしろには、猪牙舟がある。

しかしその時――深川河岸の方からと永代の川番所の方から、紺色に黒ずんだ宵の大川に灯をかざして、早くも漕ぎ迫ッて来る幾艘かの櫓声がします。無論、釘勘の手配による捕手を乗せた小舟でしょう。

けれどもまた不思議なのは、紙干し場の原やその辺の小屋の蔭に、合図を待っている人数です。

今の呼子笛が聞こえないはずもなく、次郎と釘勘が苦闘に陥ちて、すでに長蛇を逸しそうに見えるこの場合になっても、何処からも、一人も駈け寄って来ないというのは何とも合点が行きません。

そのくせ、彼方の紙漉小屋の附近では、何かわめき合う声も聞こえ、乱れ飛ぶ提灯の影もただ事ならず見えますのに――。

ちょうどその前後に、菖蒲河岸から浜町附近の露地を流して来た二人連れの虚無僧がある。

ちらと、笠の裡をのぞいた岡ッ引がそれを認めて、

「やっ、雲霧と四ツ目屋だ！」

折から張込んでいた捕方にそれを伝えたから堪りません。

彼方の納屋で合図があったら一度に動き出す手配をして、幾段にも構えている捕手の伏せ勢が、何気なくその危地へ懸って来た虚無僧の二人をつつんで、

「それッ」と、声を揚げてしまいました。

不意を衝たれてギョッとした虚無僧が、「何をッ」と天蓋をハネたのをきッかけにして、二本の白刃へ向って集まる十手の疾風が、まず紙漉場の裏あたりから凄まじい乱戟の渦紋を起こして、遂にそれから間もなく彼方の納屋の前で、釘勘がけたたましく吹いた呼子笛の音にも、手を分けて駈け向うことができなかったのであります。

驚いたのは、雲霧と四ツ目屋でしょう。

二人は、この遭難を偶然とは思いません。

江戸表へはいり込んで以来、偽普化僧の姿で、暫くうるさい岡ッ引の眼から離れたものと安心していた矢先ですから、当然、自分達を待ちうけて張られていた捕手の網と思ったらしく、自暴と狼狽と死に物狂いとで、寄りつく人数を滅茶苦茶に叩き斬ッてあばれ廻る。

この向う見ずな二人には、多勢の捕手もスッカリ手を焼いた形で彼方の川洲、此方の露地、或いは狭い横丁から浜町の屋敷地にまで引き摺り廻された揚句、果ては組々の人数もちりぢりになって、とうとうどこかへ取逃がしたのは、諦められない忌々しさでしょう。

その頃はもう、とっぷりと陽が暮れて、大川を隔てた深川の屋根の上から、黄色い宵月が顔を出しています。

その反映が箱崎川の枝河にまで射し込んで、脚の高い女橋の杭の裏まで仄明るく見えたかと思いますと、守宮のように、橋の裏に取ッ付いていた二人の男が、

「驚いたなあ、雲霧」

「まったく不意を食らわしゃアがった。前から気振りでもあれば、少しは覚悟のしようもあるのに」

「どうだろう、もうボツボツ出かけて見ようじゃねえか」

こんな事を言い合っていたかと思いますと、杭を伝わって、石垣から、橋の袂へそっと顔を出して、

「いいか？」

「よし」と一方に眼くばせしながら、ひらりと陸へ飛び上がりました。

「困ったなあ、天蓋を吹ッ飛ばしてしまった」

「おれは尺八を何処かへ落としてしまったぜ」

「どうせ偽者だからしかたがねえや」

「おい、待ちねえ。……誰か向うから駆けて来やがった」

「成程……だが犬じゃねえようだが」

「何処かで見たような男だぜ」

「誰か探しているんじゃねえか。ふらふらしながらこっちへ来る」

枯れ柳の蔭に身をかわして、通る男をやり過ごそうと見ていると、それは、少し度を失った様子で、眼色を変えてよろけて来たお人好しの率八でした。

四ツ目屋の新助は吃驚して、

「やっ、あいつは率八だ。オイ、率八じゃねえか。率八、率八」

呼び止める声に、駈けて来て、
「おっ……四ツ目屋の」
「叱ッ」
「オオ雲霧の兄哥もここに……」
「静かにしろッて言うのに、わからねえ奴だ、どうしたんだその態は？」
肩を叩かれてそう訊かれると、率八は、クスッと一つ肩でしゃくり上げて、遂にワッと手放しで泣き出しました。
新助と仁三は驚いたり慌てたりして、
「やいやいやい。泣く奴があるか、泣くやつが？」
こんな所へ捕手でも来られては——と四辺を見廻して、大急ぎで、率八を柳の下にしゃがみ込ませる。
「ばか野郎め。大きなりをしやがって、人の面を見る途端に、ベソをかく奴があるものか。泣いていたんじゃ話が分らねえや、一体何がどうしたんだ、ハッキリと口を利きゃアがれ」
可笑くもあるが実際腹も立って、思わず雲霧が怒鳴りつけました。

雲霧に叱られて、率八はやっと泣き黙りました。そして、話すのではなく、訴えるが如く言うのを聞き取ると、四ツ目屋と彼は顔を見合って、
「それじゃ親分は、お蝶と一つ舟で大川へ逃げたと言うのか。なんのこった、おれ達は足を棒にして探していると言えば、飛んだ道行と洒落ていたんだぜ」
「そんな親分じゃなかったが、鼻寺以来、お蝶に少しどうかしているな」
「何しろ率八がいい災難だ」
「可哀そうに、てめえを捨てて、お蝶を連れて逃げた親分の心が、おれは憎い」
憮然として、不平を言葉に鳴らしました。
「とにかく、落ちた先を探そうじゃねえか」
「親分のか？」
「そうよ」
「また、お手軽にゃ分るめえぜ。甲州でドジを踏んでから、仲間の連絡も支離滅裂だ」
「その心棒になる親分が、眼色の異った小娘の擒人になってしまったんだから、戦にすりゃ散々な敗北だな」
親分が悪く言われるのを、率八は辛い顔をして聞いておりましたが、そのままにして置くと、何処まで辛辣になるか知れないので、
「ねえ、四ツ目屋の兄哥、親分に会おうと思えば、いつでもじきに会われますぜ」
二人の間へ、横から顔を伸ばして言う。
「ふウむ、何処で？」
「お茶の水の底へ降りて、夜になるのを待っていれば、きっと親分がやって来ます、今日まで毎晩、そこへ行く事を欠かした事はありません」
「何しに行くんだ、そんな所へ」
「何しに行くのか、俺にも分らねえが、毎晩舟で送って行く

と、あの谷間にある洞穴へはいって行きます。そして、帰って来るのは明け方なんで」
「へえ、そいつは初めて耳にした」
「だけれど、親分も今夜からは、俺が居ないで不自由だろうな。きっと暫くは、そこへ行くのも止めるかも分らない」
「何しろ、そのうちに、折を見て一つ行って見ようじゃねえか。その時は、案内だぜ」
二人に尾いて歩きながらも、率八はうろうろと後ろばかり振返っている。逃げるからには、人通りのない方へ行くのだろうと考えていた彼の想像は違って、雲霧と四ツ目屋は、鎧の渡舟から茅場町まで一息に急いで、それから先の縁日の人混みに交じると、初めて足を緩めました。
「おい率八、空き腹だろう、食いたい物は何がいい？」
「ありません、沢山です」
「意気地のねえ奴だ、元気を出せ」
「縁日を歩いていると、みんな女房や子供を連れて、楽しそうに歩いていますね」
「盗ッ人がそんな事に気を取られているようじゃ脈はねえ。率八、悪くすると、てめえは近いうちに獄門へ顎を乗せそうだぜ」
「な、なぜですか」
「いやに哀れッぽい声を出しゃあがって、仏心があり過ぎるもの」
「これでも随分我慢をしているつもりなんで……実アさっきから、嬶アや餓鬼がどうしたろうかと、それが心配で、足が前へ進みません」
「そうそう、てめえには、女房子があったんだっけな。第一、よろしくねえ男だ、泥棒のくせにして、女房を持ったり子をでかす奴があるものか」
「こんなつもりで持ったんじゃありません。そのうちに子が出来て、食えなくなったから、始めたんです」
「そして、てめえの罪が、女房子にかかって行けば、元々になるじゃねえか。そんなに案じられるなら、もう一度後へ戻って、見届けて来い。その代り、すぐ捕まるぞ」
「お、おどかしちゃ、いけません」
「ははははは。此奴をからかッていると限りがねえ。どれ、飯でも食おうか」
薬師の横丁をのぞくと、菜飯、奈良茶飯、木の芽田楽、蒲焼など、軒並びの八間が団扇をハタかせて、春の淡雪のような灰を綺麗な火の粉の流れる往来へ叩いております。

梅香鬼

朝飯前に百射の弓と半刻のそぞろ歩きは、若い新将軍の習慣となっていました。
今朝も的場で一汗しぼって、本丸の道灌堀からお駕台の附近へ、早咲きの梅を見ながら歩いてきた吉宗、ごつい木綿の平服に結城の袴をつけ、
「源次郎、そちの歩き方を見ると、まるで締まりがないぞ。それだから弓も剣道も上達しない筈じゃ」

従いている小姓番の松平源次郎に、元気よく話しながら戻って来ます。

「左様でございましょうか。しかしお上の歩き方もべつに変った所はないように存じますが」

「いや、わしには心得がある。屋内では禅坐、戸外では歩心、一歩でも、不用意には歩いておらん。それに引きかえて、そちの足は、体を前に出す為にしか動いておらぬ」

「元々、足を動かすのは、体を前に出す為のものと心得ますが」

「いや、足は体を運ぶ道具だけではいけない。世の中を踏み上げてゆく心がなくては」

「難かしゅうございますな、考えまするど、どう歩いてよいのか、分らなくなりました」

「不及先生の歩術でも習え」

「歩術、ははあ、どこかで承りました」

「屋内禅坐、戸外歩心、両道を合せて味わうとなかなか面白い。おお、咲いたな、梅が」

「この附近は、南向きのせいか、早咲きにござりますが、吹上の方のは、まだつぼみも固うございましょう」

「錦霜軒の臥龍梅もまだ早いかな？」

「あれは、わけても遅い方で」

「お、錦霜軒で思い出したが――」と吉宗はふと足を止めて、

「黒鍬の小早川剛兵衛はその辺に見当らぬか」

「お召とあらば、見てまいりましょう。近頃、山吹のお茶屋の手入れにかかっております故、あの附近に居るかと存じます」

庭を駈け出した源次郎は、やがて黒鍬の組頭剛兵衛を連れて戻って来ました。時ならぬ場所で、不意のお召に、剛兵衛は何事かと、吉宗の前にひざまずき、

「何ぞ、お庭の手入れに、悪いところでも、お目に触れましてござりましょうか」

と、畏る畏る顔色を仰ぎ見る。

「そういう咎め立てをするのではない」

と、吉宗はまず古参の老庭師が心配顔を安堵させて、

「呼んだのはほかでもないが、過日、そちが案内に立って吹上へ参った尾州の万太郎の事じゃ」

「おう、あのお方の事でござりますか。それについて、剛兵衛からも、いつぞや、お側衆まで申し上げておきましたが、お上のお耳には」

「いや、何も聞いておらぬ。尾州家の気まま者ゆえ、誰も、なるべく噂を避けているのであろう。――ところでその後、彼は如何いたしているな」

「相変わらずにござります」

「相変わらずと言うと？」

「錦霜軒で寝てばかりおいで遊ばします」

「江戸城の庭が拝見したいなどとは、元々、口から出任せの口実と思うたが、寝てばかりいるとは、合点がゆかぬ」

「時折、あの前を通りまして、それとなく声をかけてみまするが、いつも、御家来金吾様と共に、戸を閉した限りでございます。そうかと思うと、夜中錦霜軒に灯りを見る事なども

あり、未明に煙をあげている時などもござります。吹上は、火気厳禁のお定め、それとなく、御注意申したくは存じますが、何せい、御三家の若殿、剛兵衛直々には恐れ多い儀と、その由、お側衆にまで申し上げておきました次第でございます」

「そりゃ無益じゃ。近習の中にも、万太郎へ苦言をするほど勇気のあるものはあるまい。よし、よし。そのうちに、吉宗自身から申してくれよう」

なお二、三、万太郎の行動について、剛兵衛に問い糺した吉宗は、しきりと、小首を傾げながら、講書の時刻、書院の方へ足を向けてゆく。

その頃から、妙なうわさを、吉宗はちらちら耳に入れました。

深夜、船見山の方角に怪し火が走った。また曰く、大奥の女中達七、八人吹上の梅林に暮れて帰ると幽鬼に出会って気を失った。また曰くです、四更の頃になると作兵衛滝の鳴りが止まって陰々たる人の囁きが聞こえる事があると。

そんな噂の出所はいつも長局ときまっていて、さすがに、表方では真顔にうける者もないが、大奥の夜ものがたりでは、もっぱらそれに尾ヒレを付けて、遂には、御中臈などの口を経て吉宗の耳にもはいって来るものとみえます。

もっとも大奥にこんな噂の立つことは、珍しいことではありません。大奥と怪力乱神とはつきものです。華美豪奢をつくしている彼女たちの生活も、女ばかりの国はどことなく陰気で、常に妖説が信じられる。

しかし、それを聞くと、吉宗も信じました。

無論、口では笑っていたでしょうが、心の裡では、（万太郎だな）と、あるべき事とうなずいたのです。

その万太郎の所為にしても、彼には二様の解釈がある。一つは、ちょうど自分と同じ三家の嫡子にあった彼が、天下の大統を享けて将軍に坐った自分に対して一種のそねみと反感を持ち、新将軍の代がわり早々何かこの江戸城に不吉な妖兆を起こそうとする故意な悪戯であること。

また一つは、別な目的をもって、錦霜軒に起伏しながら夜中何かの策動をやっているのであろうという想像。

そのいずれか一つに違いないと見たのが吉宗の信ずるところでありましたが、将軍継承問題では、水戸とも暗闘があったところなのに、継職早々、またまた尾州家と確執を起こすのは苦しい事であり、水戸派、紀州派の諸臣に対しても面白くない成行きを見そうなので、まず聞き流しにしております。

けれど妖聞はなかなかやまない。

「狐狸の仕業であろう？」「いや黒鍬の者の悪戯ではないか」などという取沙汰はまだしもの方で、そのうちに誰が言い出したことか、紛々たる臆説を排して、

「いえ、いえ、狐狸や黒鍬の者の仕業ではありません、たしかにあれは幽鬼が出るのじゃー幽鬼ー異国人の幽霊が出てこの江戸城を呪うのに違いありますまい」

と、その存在性を肉づけるために、さらに臆説が臆説を生

じ、うわさが噂を作り出す。――仮に火のない所に煙が立たないものとすれば、異国人の幽鬼とは、何を根拠として起こった説か、けだし大奥の異聞のうちでも、今度のうわさは徳川八世のうちでは新しい怪異でありましょう。

儒官、筑後守新井白石は、前々将軍家時代から久しく営裡に権勢をふるッていましたが、お代がわり以来、風向きがよくないので、早くも身を退く汐時と感じて、中野桃園に隠邸をしつらえて、その日、新将軍に別辞をのべるため、最後の登城をしていました。

講書の間で、吉宗と白石と会う。

これが初めての賜謁で、初めての別謁です。

吉宗は紀州の屋敷元にいた時代からこの老儒があまり好きでなかったので、今官を去る彼にも何の愛惜はありません。二つ三つ雑話の後、彼はふと、

「時に君美、そちならば存じているかとも思われるが、当江戸城の内に於いて、異国人で誅殺された者の例があるであろうか」

「君美御奉公中には心得ませぬが」

「いや、近い世の事でなくともよい。大猷院殿時代、或いは、台徳院殿の治世、また神君御開府の当時にでも……」

「宗門役の御制度、切支丹屋敷の御設置などが開かれました後ならば知らず、柳営御創始当時には、左様な例もないとは限るまいかと存じられます」

「ひとつ調べてくれぬか。奉公じまいじゃ」

「数日の御猶予を願わしく存じまする」

「急がいでもよい」

「取調べました後、文書をもって取次衆まで差出しておきます」

「いや、公の書態では、老中どもが見まいとも限らぬ。小姓組松平源次郎宛取次をもって、よこしてくれい」

「かしこまりました」

「もはや登城の折もあるまい。余生安楽に暮らすがよいぞ」

「洪恩の大、老生が世を退きました後も、忘れは仕りませぬ」

君美は暇を受けて退きましたが、異国人の幽鬼が出る――そんな噂を心得ない彼は、吉宗が何のためにそんな例を調べよというのか、腑に落ちないで下城しました。

急がずともよい、とは言いましたものの、吉宗は心のうちで、今日は来るか、明日は届くかと、新井君美の調べのつくのを待ち久しげでありました。

陽は日にまして、春めいてくる。

下向して在府中であった年頭の勅使、広幡、梅渓の二卿が帰った後は、饗応の混雑やおびただしい供人も去って、江戸城がにわかに広くなったような気がしました。

それが、如月の初め、千代田の内外、やっと落着いた春日がつづきそうです。

御錠口にかかる手前の廻廊の梅、南殿の梅、三の丸の梅庭、ぽちぽちと胡粉を打ったような花をつけ初めて、霞む夜は、大奥の明りも笑いさざめいて来ましたが、妖鬼のうわさは止みません。

「上様、御覧あそばしましたか」
松平源次郎は、紀州家に在った時から吉宗に仕えていた小姓です。その源次郎には、君美から書状のくるのを含ませてありますので、ふと、こう言われた途端に、
「参ったか」
と、吉宗はそれと早合点をした様子でした。
「いいえ、あれではございませぬ」
落胆した様子で、
「何じゃ」と、改まる。
「今朝ほど、黒書院のお庭先にある梅の木へ、短冊がついておりましたそうな」
「誰ぞ、まずい歌でも認めたか」
「どなたの筆やらわかりませぬが、女文字で、吹上の妖鬼のことに寄せて、不吉めいた歌が書いてあったとやら申します」
「そうか……」と吉宗は苦ッぽい微笑を頬にのぼせて、「女のしたことでは取るにもあたらぬ。捨て置け」
「楓の間御用人鳥居外記様が初めにお見つけになって、そのままどうかなされました」
「それでいい、何事も、聞き流しにしておくがよかろう。いずれ、水戸か、尾州か、吉宗に心よからぬ大奥雀の悪戯じゃろう」
寛容に笑ってみせましたが、世継早々の、三家の葛藤や、大奥と表方との執拗な暗闘など、少しでも、その間の消息を聞きかじッている源次郎の目には、やはりその日の吉宗に、多少沈鬱の気のあったことは見のがせません。
「吹上の悪戯は万太郎の所為じゃ。そして、それを不吉の兆らしく、尾ひれをつけて言いふらすものは、紀州家にそねみをもつ気の小さい大奥の女どもじゃ」
吉宗はこう思って、しきりとそれへの対策を考えておりましたが、いわば内政の醜いこと、明るみへ出して争うのは、新将軍の威厳にかかわる。
そこに辛さがありました。
「憎むべき万太郎の悪戯――さて何としてくれようか」
じりじりと思いつめた揚句、ふと、こうもしようかと案に浮かんだ一策、源次郎に旨をふくませて、ついにある夜のこと、本丸の寝所からこっそりと外へ忍んで出ました。
本丸の甍は、夜がすみに汗をかいて、おぼろな春の夜更けた月が、紅葉山の森にぼんやりとありやなしやの光です。
「源次郎」
「上様……」
目と目にうなずき合って、番士の眼をおそれながら、ひらりと何処へか影を消しました。
その支度は、二人とも黒の頭巾、そして総身黒の扮装に軽装していたようです。――その用意と時刻とを思い合せますと、吉宗はいよいよ忍耐ならないで、自身、徳川万太郎の憎むべき行為の実相を突き止めようと思い立ったものに相違ありません。
しかしながら、彼と小姓が、あんな姿で、この朧夜を吹上へさまよい出して行くと、かえって風説は将軍家それ自身の影までを、妖鬼と見てしまいはせぬでしょうか。

こよいも錦霜軒から起き出して、吹上の奥をさまよい歩く覆面の人影が二つ。

長局の女たちが取沙汰の種となったのはその影ではありますまいか。そうとすれば、妖鬼すなわち、徳川万太郎と相良金吾であります。

「夜更けになっても、一頃と違って楽になった。春だなあ、金吾」

「早いもので、もう二十日余り、よく御根気がつづきました」

「根岸に残しておいた月江や次郎、そして釘勘なども、さだめし、どうした事かと消息を案じておろうな」

「釘勘へは、先日、黒鍬の剛兵衛殿に手紙を頼んで、近況を知らせておきました故、まず、御無事の点だけは、安心いたしているだろうと存じます。……しかし若殿」

金吾は前後の木立を見廻して、万太郎に切株の根を床几にすすめ、自分は土へじかに膝行袴の腰をおろしました。

作兵衛滝の水の音が、疎林の裏あたりにどうとうと夜気をゆすって鳴る。

夜は三更か四更か、とにかく深々たる丑満の前後にはちがいありません。しかし、気候もすでに如月の中旬、風はぬるく、樹肌は汗ばみ、月は湯気に蒸されたように朧な晩——有情の天地が人に与える感じも、二十日前の霜針を立てていた頃とは、だいぶ違ってまいりました。

しかし若殿——と声をひそめた金吾は、四隣の気配を探ってから、

「意気地のない事を申すのではありませんが、ここ二十日余りの間に、夜ごと、船見山、嵐山、赤壁渓の附近、ずいぶんと隈なく捜索いたしましたが、いまだに、ピオの遺蹟というような石碑一つ見当りませぬ」

「ウム、今のところでは、殆ど何らの得るところもない」

「金吾が愚考いたしますには、恐らくこれは、徒労に終るのではないかと存ぜられますので」

「なぜじゃ」

と万太郎は少し色を作す。

「いや、さりとて決して、千蛾老人の遺言が偽りであると申す次第ではなく、事実、慶長の昔、ピオがこの城内に刑罰をうけて、その亡骸もこの吹上の、奥に埋め隠されたものとしても、さる異国人の亡骸を埋めたあとに、墓碑とか御堂などの、印を遺して置くまいと考えまする」

「だから、どうせいと申すのか」

彼の一念を翻すような言葉は、いつでも彼の不機嫌を誘うものである、とは金吾も知りぬいておりましたが、

「将軍家の御不審を求め、またまた、御本家へ迷惑を及ぼさぬうちに、御断念なされた方が賢明ではないかと心得まする」

と、ツイ諫言を試みました。

案の如く、万太郎は取ッてもつけない頭を振って、

「金吾、そちは精が切れたとみえる。嫌なら去れ、わしは突き止めるまでここを去らぬ」

「精が切れたとは、お憎いおことば、左様な金吾ではござりませぬ」

「ならば、なぜ左様なことを言い出して、わしの捜索に励みをつけぬか」
「もしや将軍家の御不審もやあると、ただ、尾州家のおん為に、それのみを惧れます」
「そちは、何かにつけて将軍家将軍家と、吉宗に憚ってばかりおるが、彼とわしとは、部屋住時代から竹馬の友じゃ」
「いや、その心持は違います」
「大事はない、前もって、彼の諒解も得てあることだ」
金吾は黙ってしまいました。
「……是非のないこと」と独り思い極めた様子がその沈黙に読まれましたが、万太郎は見て見ぬふりをしております。
――やがて、金吾は前の気色を払って、
「若輩者の小悧巧な諫めだて、お聞き流し願います。もう御諫言はいたしません」
「するな！　万太郎は思い立った事を、貫かずには済まさぬ性質じゃ」
そうした主従の話の間に、カサコソと、疎林の中を踏んでうしろへ近づいて来る者がありましたが、作兵衛滝の水音に二人の神経はそれとも知りません。
どうとうと鳴る水の音に、四囲のものの気に気がつかなかったのは、万太郎主従ばかりではありません。
近づいて来る足音を、二人が少しも知らなかったように、疎林の中をカサコソと歩いてきた何者かの黒い影も、そこに万太郎と金吾が腰を下ろしていた事をば、さらに意識もなく足をすすめてまいりました。
樹と樹の枝にせばめられた細い小道からヒョイと一足踏み出した途端に、当然、不意にその姿を見合った両者は、
「あっ！」
と、猟師が鹿の足を踏んだような驚きをして飛び退きました。
「何者だッ？」
金吾は伏せ身になって白眼を射向け、万太郎は素早く立ってその人形の横を挟む。
ギョッとしたらしい相手の影は、咄嗟なことに逃げ道を失って、樹幹をタテに身を隠しながら、屹と、一方の手は刀の柄に行っている。
おお、その手の白いこと！　夜目にも綺麗な手をしている！　そしてその手は抜き打ちの閃光を吹かんとして、刀の柄にかかっている。
（違いない、いつぞや会った優形の男だ！）
凝視をもって両方からはさみ撃ちに迫った万太郎主従は、彼の黒頭巾が隠している星のような二つの瞳と、その仄白い顔容と、その黒い曲線とで、すぐにも思い当ったでしょう。
いつか、赤壁渓の小道で見かけて、たたみ上げた野州石の上に身を隠し、主従して這い松の蔭からのぞき下ろした時、ふと、上と下で、顔を見合せるなり風の如く去ッた覆面の白い顔はこの男に違いありません。
また、その前後、二、三度影を見かけた肩幅の広い覆面も、二人には常から解けない疑問でありましたが、計らずも、重

ねてここで打つかッたのは、願ってもない僥倖です。
「金吾、逃がすな」
いいつけると、一方も、
「心得ております」
と、すでにその気で、手捕りにしようとするものらしく、先の足許へそろそろと蟇のように這い詰めて行く。
相手は進退に窮しています。
うしろは松や楓の林です。低い灌木の枝が手をつないで拒止している。一方の横は乱岩叢竹、作兵衛滝の水がその下を通っているのです。
前には、手に唾して寄って来る挟撃の敵二人。——どうすることも出来ません。
「柳営の者か、外から忍び込んだ賊か、名を言え、名を申せ、次第に依ってはゆるして遣わさぬものでもない」
念のために、万太郎がもう一応こう言ってみましたが、相手が立ち竦んだまま返辞もせぬので、さてこそ、愈〻うさんくさい曲者と、いきなり相手へ向って飛びかかりました。
「あっ、若殿！」
先を制せられて、金吾が思わずこう叫んだのは、あながち敵に怯んでいたわけではなく、その時、幹の蔭から白い光が水を振るように走ったので、無手の暴虎を危ぶんだのです。
案のごとく万太郎は、相手を優形と見くびッて、手捕りにする気でかかりましたが、ハッと気がついて途中からさらにうしろへ飛び回って、
「おのれ」
と、自分も柄を鳴らして鯉口をのばしました。
ところが、その一瞬です。
ザザザザッ——と嵐山の上の方から、風の神でも降りて来るように、あわただしく熊笹の戦ぎが聞こえたかと思いますと、程さらぬ崖の方から同じ道へ、ぽんと飛び降りた一人の男がある。
倔強な体躯に、大反り打った大小、覆面黒装束というこしらえも、この男こそふさわしく見えます。
——と、その山猫のように捷ッこい男の嵐が、そこをサッと吹いたかと思うまに、
「ああッ……」と、身をよろめかしたのは万太郎で、突然来たその男に、肩を突き飛ばされたものと見えました。
と言って男は、そこを一顧もするでもなく、何に慌てているのか一目散に、そのまま鵲橋の方へ疾風のように身を飛ばそうとするのを、
「待てッ」
一飛躍して追いかけた金吾が、その長反りの刀の鐺を、力まかせに引止めました。
鐺をつかまれた相手の男は、慌てもせず、ガッシリしたその体躯をひねって、
「ちぇッ」
舌打ちを鳴らしながら、金吾の襟がみをつかんで無造作に振回そうとしかけました。
小兵なりといえど金吾、さはさせじとあるべきところです、

その手をパッと払い上げると、両々の体が相迫っている機をすかさず、雷霆の早さで体当て一本、

「えいッ」

と試みましたが、空を衝って、手ごたえはない。

相手は韋駄天、鵲橋を一足とびに、その黒い影は、どうとうの水の飛沫く、流れの彼岸に躍っている。

逃がした！　残念――と彼もつづいて走ろうとした刹那です、ふと忘れてしまった万太郎の声で、

「金吾、金吾ッ」

と、助勢を求めるらしく、何かしきりと慌ただしい。

「オオ」

気がつけば一方にも、今二人して立ちすくませた、異装優形の曲者が残っています。助勢を呼ぶ様子では、万太郎ひとりで手にあましていると見える。

両兎を追うもの一兎を得ず、逸早く、金吾はきびすを巡らして前の所へ戻って来ましたが、もうその時は万太郎の方も、優形の覆面を取逃がして、地団駄を踏んでいるあとでありました。

「その林の中へ逃げこんだのじゃ。こよいこそ、追詰めて、彼奴が何者であるか、その正体を見てくれねばならぬ」

優形の男の没した木立の奥へ、彼はこう言いつつ駆け込みました。で金吾も、両兎を追う愚を思い止まって、彼につづいて雑木の枝を掻き分けて行く。

しかし、奥へ奥へとすすむうちに、林の小道は幾筋にも分れ、或いは渓泉に切れ、或いは丘の上下にうねり、遂に逸した優形の男の影は見つかりません。

その間に一刻の余も費やしたと見えて、ぼやっとした朧月も、いつか江戸城の西の方――紅葉山の襟筋へ隠れかかって、どこともない有明の色が、四林の梢に仰がれて来ました。

その仄明りを頼りにして、針葉樹帯の小道から二つばかりの丘を越えてダラダラと下りて来ると、目の前は広い山芝の平地です。

「意外な所へ出たな、ここは何処であろうか」

「やはり吹上の一部でございましょうが、とんと覚えがございませぬ」

「思い出した、お広芝じゃ。本丸の的場のある平庭じゃ。向うを見い、弓小屋があり、茶亭があり、そして的場の土手が見える……」と指さしているうちに、その手をすくめて、

「やっ、最前の奴があれに居るぞ」

「えッ、どこに？」

金吾もひとみを凝らしました。

「身を隠せ」

「はっ」

ばらばらと、横に駆けた二人は、芝生の平庭に、臥牛形に寝そべっている巨石のうしろに体を潜めて、

「あの弓小屋の裏から歩いて来る者を見ろ」

「オオ、なるほど、二人連れで……」

「察するところ、最前は別々であったが、あの優形の者と体の大きな男とは、同類なのに相違ない」

「ウーム、或いは、そうかも知れません」

「今度こそ逃がさぬように。よいか」
「金吾にお任せ下さいませ、きっと、一名だけは捕り押えてごらんに入れます」
「いや、相手が連れ立って来た以上、そち一人では手にあまる。わしは一方の、優男を組みふせるから、そちはもう一人の者へ打つかッて行け」
腕をさすッて、諜し合せているうちに、彼方の的場から来た二ツの姿は、目早くそこの人影を見たか、はッと足を止めて立ち止まりました。
機先を制するつもりで、万太郎、
「うごくな！」
ぬッくと立って両手をひろげると、金吾も臥牛の蔭を立って、今度こそはと飛びかかって行く。
しかし相手は前とちがって二人組なので、意を強くして出直して来たものか、今度は逃げ腰も見せず待っていたぞと言わないばかりに、
「曲者ッ」
かえって、万太郎と金吾へ曲者呼ばわりをしながら、猛然と、逆に攻勢を取って来ました。

曲者の曲者呼ばわり、沙汰の限りな図々しいやつではある。今に、その覆面を引っ剥いでやるから見ておれよ。
――万太郎は勇敢でした。
彼が勇敢なる故は、その柔術も刀法も、いわゆる大名育ちでして、真に世の中の怖い者に会った例が少ないからでもありましょうが、近頃は、多少社会の浅瀬を踏んで、少しばかり命がけな経験にもなれて来たので、いよいよその性行が放胆に出て来た形でありました。
それと見て、
「あっ……早い」
と注意をしたのは金吾です。――金吾は何しろ万太郎のその無鉄砲が見ていられません。
相手の身構えには、立派な用意が備わっております。
で――思わず、金吾がアッと言いましたが、もう万太郎は体をとばして、敵の喉輪へ拳法の一手をはげしく突いている。
と思うと案の定です。
「えいッ」
鋭い一喝！
しまッた――と叫びながら万太郎、敵の矢筈にかけられて、でんと大地へ投げ捨てられました。
金吾は金吾で、べつな覆面の男と対して、互いに機を計っておりましたが、それを見ると、万太郎の危険を感じて、不意に、彼を役げた男の方へ助勢に駆ける。
「卑怯」
逃げると見たか、こういうのです。
そして、一方の覆面が、彼の帯際を食い止めて、ズルズルとうしろへ引戻す。
「何をッ」
「曲者！　神妙にいたせ」
こいつ、いよいよ法外もない言い草と、金吾はむッと怒り

ながら、
「だまれ、おのれこそ怪しいやつ、その黒布をひん剥いてやるから覚悟しろ」
つかみ止めている、彼の腕くび、それを拯ってグッと身を沈める。もつれて二、三歩、二人の体がよろけ合ったかと見ると、軽く身を寝かした金吾が、敵の体を足業に乗せて、ストンと猫回りに乗りかかって、手もなくそこへ捻じ伏せました。
もがく敵の腕を膝下に敷いて、垂剣というおや指一本、仰向けになっている喉へグッと押すと、
「うう……」と、彼の下の者は、くちびるに歯を当てたまま、もうちょっとの身うごきもなりません。
さて、こッちはこれで片づいたが、
「どうなすったろう？　万太郎様の方は」と、そのまま、首をうしろへ、見廻して見ると、彼と優形の覆面とは、今や対峙の形を改めて、くんず、ほぐれつ、互いに手捕りにせんものと、人交ぜもせぬ肉闘の最中です。
それへ助勢に向おうとして、金吾は一人の敵を膝下におさえながら、口と片手で脇差の下緒を解いて、この邪魔者を縛りつけて置こうとします。
しかし、それにも及ばなかったことは、ここを先途と善戦した万太郎が、最後の鋭い気当と共に、見事相手を倒したのでした。
そして、金吾と同じように、
「しめたぞ」
と叫びながら馬乗りになり、さらに、その得意そうな顔を振顧らせて、
「金吾、組み伏せた！」
「オオ、お出来しなさいました。――が油断をしていると、足業にかけられますぞ」
「なんの、案外もろい奴じゃ」
万太郎はこう言いながら、そも何者か、正体をただしてやろうと組み伏せた男の覆面をムズとつかんで、その黒布を剥ぎかけましたが途端に、眼でも射られたように、アッと――頭巾の布をつかんだまま身を弾かせたかと思いますと、
「いけない、いけない！　金吾ッ帰れ」
二人の巣としている錦霜軒――船見山の山蔭さして、後をも見ずに駈けだしました。
「あとを閉めておけ。戸を。戸を……」と息をきって錦霜軒の中へ駆け込んだ万太郎の気ぶりは、何ともタダ事ではありません。
「どうなさいました、若殿」
金吾は合点がゆかないので、座に着くとすぐにこう訊ねましたが、
「水を……」
と、彼の色は紙より白い。
裏の流れへ出て、掛樋の水を器にうつして来ますと、万太郎はそれをグッと飲んで、
「ああ、驚いた」

と、初めて人らしく呟きました。

「実に、意外でございましたなあ、折角、組み伏せた怪しいやつの面を見てやろうとした途端に、いきなり若殿が駆け出されたので、金吾には、何が何やら一向理由がわかりませぬ」

「いや、そちの驚きはまだしもの事よ、この万太郎は、生れて以来、あのような意外な目に会った覚えはない」

「とはまた、一体どうした理で」

「力闘して、やっとわしがねじ伏せたあの覆面じゃ」

「はい」

「そも、何者かと、そちは思う？」

「分りませぬ」

「吉宗じゃ」

「げッ、……将軍家」

と言ったまま、金吾も色を失って、さすがに二の句もありません。

まさか——と疑いたい程ですが夜目に透かして見たなどというあいまいな話ではなく、彼をねじ伏せ、馬乗りに跨って、その覆面までめくり返して見た上の事ですから、いくら瞬間の場合とはいえ見違うなどというはずもありますまい。

「すると先頃から、嵐山の裾、赤壁の水辺などで、時折出会った怪しい者は、将軍家とその侍臣であったのでございましょうか」

「どうも、そうであったと見える」

「しかし……」と、金吾は少し小首をかしげて、

「拙者の組み伏せた男の方は、どうもいつもの男とはやや違う気がいたしまする」

「どう違うというか」

「第一肩幅、体のこなし、そしてつかんだ腕のもろくもねじ得た事などが、あのウワ背丈がある敏活な曲者とは、まるで手ごたえが相違しております」

「すると、初めの覆面の男とは、別人であると申すのじゃな、だが待てよ……そういたすと、吹上の深夜に、暗をさぐる者達は、わしとそちと、あと、幾人おるか分らぬ事になるではないか」

「まさか、そう幾名もおるわけはございませぬが、とにかく、別人には相違ござらぬ」と金吾は、それだけを断定しましたが、何としても胸づまりなのは、将軍家へ対しての失策です。強腹な万太郎にしても、これだけは気持がわるいと見えて、しきりと、吉宗の心を臆測したり、後の気まずさを考えて、このまま黙って押し通しているか、それとも本丸へ伺候して、自分の目的を打明けてその過失をわびようかなどと、その日は、不快な迷いに暮れていました。

「なんの！　吉宗の新将軍づらに、わびをするなどは忌々しい。わしも尾州の徳川万太郎だ、彼が日本の将軍として納まるなら、自分は海を蹴って、羅馬の王座を占めて見せる」

夜になると、かれの眼は冴え、心はしきりと磨げました。

金吾が案じるのを、

「捨ておけ！」

言い放って外へ出る。

——いつもの支度、穿き馴れたわらじの音もさせぬ忍び足

で。

それから約七日ばかりの間、吹上には何の出来事もありません。

すると、その晩は、春にはめずらしく、水気のない空に、常よりは明るい月がかさもにじませずにヒッソリとさえていた夜半でした。

型のごとく、錦霜軒を出た二人が、その晩に限って、嵐山から山里の苑へ足を向けて曲がりかけると、山蔭の畑地の中に、一つの人影がチラと見える。

そこは、千代田のお薬草園で、俗に、人参畑とも呼ぶ地域です。養生所と薬草園の係り以外のものは、足入れを厳禁してあって、その囲いと防風林をかねた灌木の藪が、垣のように畑の北がわを取巻いている。

「やっ？」

足を止めた万太郎は、もう屡々見ているので、月明りの遠目にもその薬草園の人影を、いつぞや取逃がした優形の覆面と見て、

「金吾、あれはよもや、吉宗ではあるまい」

姿を隠してささやきました。

前の失敗にこりているので、金吾も充分に注意しながら、藪の蔭を這って近づいてみると、どうもいつぞや広芝で組伏せた者とは、その柔軟な輪郭が違っています。

「あっ……」

途端に、勘のするどい優形の男は、藪の枯れ葉がカサリと鳴ったかすかな気配に驚いて、忽ち、飛鳥のように人参畑を横に切って逃げ出しました。

が――そこは枯れ木の柵があり、柵の外には万太郎がひそんでいたので、

「待っていた！」とばかり、彼がそこをつき破って出て来るところを、大手をひろげて飛びかかる。

――と思うと一閃の流刃が、月光を切って彼の真ッ向へ鳴って来ました。かわしましたが万太郎は、その切ッ先に手の甲を掠められて、ピッと散った冷たいものに、はッと気をすくめると、そのせつなに、艶めいた梅花香の薫りがプンと鼻先を一過して、相手の影は風を残して疾走している。

「ええ、またしても！」

今は、意地です。

指の先から血を散らしながら、追おうとすると、十歩ばかりの間隔の先で、屹と、振顧った覆面の白い顔が、自分の方を睨むかと思われた途端に――

「やッ」

声と共に、飛んで来た小柄――キラッと白い光を引いて、彼の耳をあやうくも掠めました。

「たしかに、吉宗とは別人。きゃつこそ曲者！」

金吾も追う。万太郎も飛ぶ、

いつかの夜とは違って、月明の晩、それに身を隠す樹林も少ない嵐山の裏です。

かなたこなたと追い廻された優形の男は、かなり狼狽した様子で、やがて、息をせきながら、裏山の一端まで逃げ込ん

で来ると、厚ぼったい熊笹の茂みから身を跳らして、古びた祠の扉を押して飛びこみました。

「もう袋の鼠だ。あの堂の中へ逃げ込んだのが運の尽き」

「のがれぬところと、観念したものと見えまする」

喜連格子の外へ寄って、堂の破れびさしを仰ぐと、北辰石神という額があります。江城鎮護の石神として、太田持資が築城以前からあったのをそのまま江戸城の最も奥まった所に祠ってあるというのは、こんなお粗末なものかと万太郎には思われました。

それと、ふと頭を掠めたのは、石神という額の文字です。

目白の丘の石神堂、高麗村の月江の屋敷の庭にある石神堂、そのほか、武蔵野のおちこちに限りなくあるという石神堂が、この江戸城の奥にもある？　……

この江戸城も、遠い昔は、やはり武蔵野の一部であったことを思えば、なんのふしぎもありませんが、彼には、ふしぎな奇遇のように感じられてならない。

何はともあれ、彼は金吾と共に、その喜連格子を開けて、中に潜んだ優形の男を引きずり出そうと意気ぐみました。

しかし、そこにはもう誰も居ません。二坪ばかりの鞘堂の中には、魔術師の箱のように、優形の男が変ったかと思われる一体の石像が立っているばかりです。

「不思議な」

茫然と、二人は顔を見合せて、

「居ない」

と、さらに言葉を同時にしました。

「たしかに、この堂の内へ逃げ込んだと見たが、金吾、そちの眼にはどう見えた」

「拙者も、確とそう認めましたが」

「おらんとは不思議千万、もしや……」と天井から床板へひとみを落とした時、万太郎はハッと足をひらいて、

「ここだ！　床を上げて見い」

「オオ」と膝を折った金吾が、喜連格子を洩れる月光に、よくよくそこをすかしてみると堂の一隅の床板が一枚、こころもち浮いています。

ぽんと、その床板を払って見ると、縁の底へ落ち込んでいる石段らしいものが見える。さてはと、二人はそれへ降りて行きます。――ふた段、五ツ段……十二、三段、存外に深いなと思いながら、とにかく手さぐりで一歩一歩と降りてゆきますと、やっと、地に足が着くまでにはおよそ二十四、五歩の階段を下りました。

「どこだろう？　ここは」

「築城には秘密として、知るものはございませぬが、これこそ、うわさに承る、汀戸城の間道ではございませぬか」

「ウム、或いはそうかも知れぬ。――金吾、火をすってみい」

「はっ」

金吾は燧打ぶくろを解いて、青白い火花をチカチカとすっていましたが、やがて、それを附木に移して、

「オオ、土肌に鑿の痕があります」

と万太郎の前へそれをかざす。

燃え尽きると、すぐあとの附木へまた火を移して、そこらを照らして見ますに、やはり金吾の察しにたがわず、そこは何処の城にも必ずあるべきはずの間道で、殊に、開鑿者の名とおぼしく、岩壁面の一端に、こういう文字が彫られてあるのを見出しました。

江城ノ秘孔、二道有、一道ハ西丘ヲツラヌイテ走ルコト里余、白丘ノ一道ニ通ズ。一ハ北道、マタ東折シテ十余丁、スナワチ渓水、袖海ニ通ズベシ。

越後三徳流後学村上能登守之ヲ拓。

開鑿者の年代はありませんが、徳川家お抱えの軍学家に三徳流の系統も村上姓もありませんから、これは、家康の移る以前――上杉、太田持資時代にひらいたもののように考えられる。

「読めた」

附木の火の燃えつきたのを、ふッと捨てて、

「ここが曲者の出入口にちがいない」

「しかし、これには、二道ありと誌してありますが……」

「まあよいわ、とにかく急げ」

無音、無明の間道です。いかに何でも、月光の下を飛ぶようには行きませんが、とにかく迷わずに進みました。

すると、岩壁の誌文にたがわず、間道は途中から二股にわかれています。そこで、二人は、そのいずれへ行こうかについて、しばらく案じ合いましたが、結局、万太郎は北方の一道へ向い、金吾は西へ向ってその出る所をつき止めることに一決しました。

西道は白丘に通ずと言い、また、北道は渓水より袖海に達すとあります。――さてそこで、ふた手にわかれた二人の行く先に、各〻どんな視界が開けて来たでしょうか。

夜光朝光

この二筋の間道――分れて何処へ出るものやら知れませんが、とにかく外部へ出るものと仮定して、後に落合う所を約束し、金吾は西へ、万太郎は北方へ、各〻方角をべつに急ぎました。

暫く暗をたどると、万太郎のとった行く手の先に微かな明りが見えだして来ます。

「意外、ここはお茶の水の谷底だ」

そうです、やがて彼が出た所は、茗渓の底で間道の口は、青黒い水が波紋を描いてヒタヒタと流れている。

のぞいてみると、水の色がかなりに深い。流れの幅は七、八間ばかりで、すぐ向うに岩壁が見えますが、とても足で渡り得るような浅瀬ではありません。

「はてな？　……」と当惑して、樹木の枝がふさいでいる間道の上を仰ぎましたが、そこからも、猿でない以上は、何処へも登る足がかりがないので、しばらく、空しい時を過ごしております。

月明りとのみ思っていた水面の明るさは、いつか夜明けであったとみえて、彼が、当惑しているひとみの前は程なく輝かしい朝陽の色に染められて、さまざまな小鳥が水辺を飛び

交わし初める。

と――茗渓の上の方から、

「あぶねえ、あぶねえ、おれがやるから棹を貸しな」

「なに大丈夫だよ」

「だって、打つけてばかりいるじゃないか」

「臆病だなあ、おじさんは」

「何も怖がるわけじゃないが、物見遊山じゃあるまいし、舟が廻ってばかりいちゃしかたがねえや」

人声がする――一艘の小舟が見え出す――そして矢のように、万太郎の目の前へ流れて来ました。

「オオ、そこへ行く舟の者、ちょっと向うまで渡してくれい」

彼があわてて呼びかけると、

「おッと！　舟を止めろ」

一人の持っていた棹を引っ奪くって、蓑笠を着けた男がすばやく彼の前へ小舟の先を着けて来る。

「忝い」

と、万太郎が、ぽんとそれへ飛び込んだ途端です。

「やっ、あなたは！」

愕然とした声で、舟の二人は着ていた笠と蓑とをかなぐり捨てました。

「オー、そちは釘勘と、高麗村の次郎ではないか」

「万太郎様とは少しも気がつきませんでした。して、どうしてこんな所に？」

「いや、仔細は後に話そう。――それよりはこの舟で、そち達はどこへ行こうという考えじゃ」

「実は少し心当りがあって、ゆうべから夜通し、このお茶の水を漕ぎ廻っていたのですが、夜が明けたので、桐畑の家へ帰ろうとして参ったところです」

「では、わしと一緒に、根岸の方へ来てくれぬか。そこへはやがて金吾も落合う約束になっている」

「いろいろ申し上げたい事もございますから、すぐにお供を致しましょう」

「だが、舟は」

「紅梅河岸の番屋へ預けてまいります」

互いに聞きたいことも積っていますが、そこでは要談もムダ口も制して、舟から上がると駕を雇って根岸の下屋敷へ急がせました。

そこへ着くと、次郎は誰より真っ先に、屋敷の庭へ駈け込んで行く。そして、

「お嬢様！　お嬢様！　万太郎様がお帰りでございますよ」

ありッたけな声で月江の部屋へ向って呶鳴る。

そう聞くと、われを忘れて、障子の内から転ぶように立って来た月江とおりんのふたりが、

「えっ、万太郎様が、お戻り遊ばしたって？」

「次郎や、ほんとにかえ？」

「嘘ではございません。嘘だと思うなら、玄関の方へ廻ってごらんなさい。……だけれど、お気の毒様なことには、お嬢様の大好きな、金吾様は御一緒ではございません」

「まあ。次郎があんな事を言って！」

「オヤオヤ、お嬢様が今にも泣きそうな眼をして来た。だが、

お笑いなさいまし、御一緒じゃありませんが、金吾様も、今日は後から此処へ来るそうです」

次郎が揶揄うその顔へ紙礫をぶつけて、おりんは月江と共に玄関へ駈け出しました。

万太郎を主座にして、月江、釘勘、次郎、おりん、こう五人が何かの話に時刻のうつるのを忘れていると、

「相良にございます。只今到着いたしました」

と、ここで落合う約束のあった金吾が、遅れ走せに顔を見せて、同じ席に加わります。

万太郎は、待ちかねていて、

「そちの向った間道は何処へ出たか」

と、何よりも先に、それを訊く。

そして、自分が出た地点と、釘勘や次郎に出会った理由を話します。

金吾は膝をすすめて、

「拙者が歩みました西道は、行くこと暫く、やがて、空井戸のような所に突き当ったのでございます。四方は削り立った岩面、上へのぼる手がかりもないので、小柄をもって、一段一段足掛けを掘りこの通り……」と、赤土にまみれた衣服を示して、

「やっとの事で、這い上がってみますと、そこは古びた一宇の堂内……吹上の石神堂と同じように、やはり一個の石神が祠ってあります」

「ウム、その堂内に抜けていたのか」

「されば……出て見ますと、人も通らぬ森の中で、何処かの丘と思われました。で、坂を下ると、程なく例の切支丹屋敷の門前に出ましたので、ほぼ地点の見当もつきあれから急いで参った次第です」

「ヘエ、するとそこは、あの切支丹屋敷の近くなんですか」

釘勘はかつて見た、目白の丘の石神堂を思い合せて、ふしぎな念に衝たれていました。万太郎は話頭をかえて、釘勘に向い、

「して、そちが今日、次郎と共に、お茶の水を下って来たのはどういうわけじゃ」

「それも、ただ今細かにお話しようと思っていたところでございます」と話は釘勘の方に移って、彼の口から、その後、次郎が突き止めたお蝶の行動や、日本左衛門を大川端の隠れ家から逸したことなどを語って来て、

「――すると、前夜のことでございます。神田川の土手下から妙な侍がお茶の水の崖へ這い込んだという、番屋からの知らせがありましたので、それを探しに参ったところが、夜ッぴて、舟で見て廻りましたが、何の手懸りもなく引っ返して来たところを、万太郎様に呼びとめられたのでございました」

「では、番屋の者が認めたという、その侍の風体が、日本左衛門に似ておったのか」

「そういう知らせがあったのは、一度や二度の事ではなく、あのお茶の水の崖上にある、駿河台の番屋からも、同じような事を知らせて来たことがあるんです」

「ふウム？　――」と万太郎は金吾と眼を見合せて、自分の

踏んで来た径路に符節を合して考えこみました。

「どうじゃ金吾……わしは何か一縷の曙光が見えて来たような気がするが」

「拙者にも、おぼろげながら、吹上に出没する曲者の輪廓が、心に浮んでまいりました」

御隠家様の殺害された当夜、彼の部屋から失われた樟板の秘図――そしてその割れたる半分の行方など、釘勘が、その後極力さぐり集めた考査の料を心のうちでつぎ合せて、じいっと黙想してみますと、彼にも、黒い二つの影が浮んで来ました。――それは万太郎の考える者や金吾の考えとは違っているかも知れないが……。

疲れているので、一同はそれから一睡の休息をとって、夜に入ってから、また何か重大な凝議に一間を閉め切っていました。

そして、その密議がまとまると、万太郎と金吾は、ふたたび例の間道から江戸城へ戻り、釘勘は次郎を連れて、お粂ひとりの留守をしている桐畑の家へ帰って行く。

――お粂。あの丹頂のお粂。

彼は途すがら、その女の身の上にも、さまざまな黙想をめぐらせている。

奉行所へ送り込めば、死罪をまぬかれない凶状のあるお粂を、目明しの自分が、ひそかに家に隠しているのは、まったく相良金吾の頼みをうけてしたことです。

金吾は、お粂には怨みもあるが、また再生の恩義もある。ことに、あの螢の飛び交う甲州の夏の夜自分に責められて、みずから毒を顔に浴びて自殺しようとした彼女であってみれば、悔悟の状は充分に見えています。怨むところはありません。

で、甲州から差立てられる時、金吾がひそかに、その助命の工夫を、釘勘に頼んでおいたものとみえます。しかし、いつまで現在のままでも置けますまい。

この処分は、彼の胸の宿題でした。

やっとそこらの額風呂の戸があいて、紅殻いろや浅黄のれんの下に、二、三足の女下駄が行儀よくそろえられ、盛塩のしたぬれ石に、和らかい春の陽が射しかける午少し前の刻限になると、丁字風呂の裏門から、すっと中に消え込む十八、九の色子がある。

曙染の小袖に、細身の大小をさし、髪は髻に結い、前髪にはむらさきの布をかけ、更にその上へ青い藺笠を被って顔をつつみ、丁字屋の湯女たちにも羞恥ましそうに、奥の離れ座敷へ燕のように身を隠します。

そこの小座敷には、初期の浮世絵師が日永にまかせて丹青の筆をこめたような、お国歌舞伎の図を描いた二枚折りの屏風が立て廻されてあって、床には、細仕立の乾山の水墨物と香炉には冷ややかな薫烟が、糸のようにるるとのぼっていました。

「おうお蝶か。きょうは来ぬかと思うていたが」

ふと見ると、屏風の蔭に、友禅の小蒲団をかけて、枕元に朱羅宇のきせるを寄せ、黒八を掛けた丹前にくるまッていた

男がある。

日本左衛門です。――むっくりと起きて、

「一風呂浴びて来るから、待っていてくれ」と、手拭をとる。

「ええ、ごゆっくり」

お蝶はニッコとしながら、袴腰の若衆すがたで、何もかも打解けた世話女房のように、あたりの物を片づけます。

この額風呂の庭には、植込みもかなり多いので、離れの一棟も母屋からは見透されません。手拭を持った日本左衛門は、軽い庭下駄の音を飛び石に遠退かせて、向うに白い湯気をあげている風呂場の中へかくれました。

それを、濡れ縁の端から見送っていたお蝶は、彼の姿が隠れると、キッと眼くばりを変えて、部屋の四方を見廻しました。

しかし――衣桁にかかっているのは、常に彼の身につけている黒の衣服と一すじの白博多で、そのほかは、床の幅であり、乱れ筥であり、これと言って変った品も目にとまりません。

が――やがてうしろを見廻しながら、お蝶が隅の地袋へ屈み寄って、その袋戸を開けますと、一個の包がかくしてある。

「オオ……」と、彼女はすぐに、解いてあらわれた品物へ目を見張ったのです。

ちょうど書物でもくるんである程な大きさに見える包の中には、薄絹で作った、忍びの黒衣に、土のついた伊賀流の布わらじが一足、そして、その下に秘してあったのは、樟板の秘図の半分であります。

その欠けたる方は、たしかヨハンの手に渡っているはずで、今は、ヨハンからお蝶の手に与えられている。

完全なものが両分して、完全な秘図の用をなさない以上、各〻その一方を求めているのは想像に難くないことで、お蝶も日本左衛門も、口にも色にもそんなことは微塵も現しておりませんが、心の裡では疾くから探り合っていた品物にちがいない。

（そうだ！　今のうちに）

彼女のひとみに、そういうような意志のうごきが険しく見えたかと思うと、お蝶の手はすばやくそれを元の通り包み込んで、自分の、袖の下へ抱えようとしかけます。

すると、不意に濡れ縁の障子が開きました。

「おやっ？　……」

「あっ……」とお蝶はあわてて地袋の中へそれを戻して、何気ない顔を作ってひとみを上げますと、日本左衛門ではありません。

「こいつはいけねえ、座敷ちがいをしてしまった。へへへへ、つい酔っているもんですから、飛んだ失礼をして、ごめんなすっておくんなさい」

無論、額風呂の客にはちがいありますまいが、作り笑いをした眼元に一癖のある町人が、ヒョコヒョコ頭を下げながら、ぷいと縁先から姿をかくしました。

ですが、町人の去ったあとも、いつまでもお蝶の胸は動悸が納まらないように、あの睫毛の濃い眼を見ひらいたまま。

「ああ、よかった……」

と暫く胸騒ぎをおさえています。

こうして、ある時は女のまま、ある時は若衆の男姿で、恋に寄せて、彼に近づいておりますが、もし今の挙動を、あのけい眼な日本左衛門にちょっとでも見られたならば、もう彼女の運命も長くは無事でいられません。

すると、すぐその後へ、濡れ手拭をさげた日本左衛門が戻って来て、

「アア、さっぱりとした」

だるそうに湯上がりのした両足を、畳の上へ投げ出しました。

彼の姿を見た途端に、お蝶の眼ざしはさりげなく鋭さを消して、

「すこし髪がくずれましたのね、私が、梳いてあげましょうか」と、鏡台から取出した櫛を抓んで、甘えるように、背なかへ寄る。

しなやかな白い指が、自分の髪の根へこころよい櫛の歯をくり返すのに任せながら、

「おれが風呂場から出て来ると、この離れの植込みから、飛び出して行った男があるが、座敷をのぞいて行きはしなかったか」

「何ですか、座敷ちがいをして来たと言い訳をしていましたが妙な素振りだッたんですよ」

「犬だろう。またここにも長居はできねえ」

「でも、きょう一日ぐらいは大丈夫でしょう」

「まあ日の暮れねえうちはやって来まいが、油断をしていると、この前の時のように、飛んだ泡を食わなければならねえ、明日は少し方角を変えて、山の手の白梅亭あたりへ宿更えをしよう」

「じゃ、わたしが、また明日の今頃に、そっちの方へ行きましょうね」

いつのまにか、櫛はどこかに姿を隠して、白蛇のようなお蝶の両腕が、うしろから日本左衛門の肩にからんでいます。

で、その肩越しに、お蝶の頬が彼の頬へすり合うように寄りついて、その髪の香、肌の香、ものを言う息のかおりまでが、咽せるばかり直接に感じられる。

「ね、行きますよ、白梅亭へ」

「同じ額風呂でも、あそこならば人眼が少ない。だが……」

と日本左衛門は、胸に来ているお蝶の白い手の甲へ自分の手を重ねて、

「お前は、なぜ一つ宿に、泊まっていないのだ。そうすれば、滅多に犬に嗅ぎつけられることもないのだが」

「だって、日が暮れると、あなたこそどこかへ出て行ってしまうんですもの」

「そりゃ白浪の世渡りには当り前だ。おれたちが、夜をムダに過していちゃ、飯の食い上げになるだろうじゃねえか」

「だから、私も家へ帰るのよ」

「家へ？　……」と、男の眼が自分へ来ると、お蝶はあわてて打消して、

「家と言っても、わたしに家なんかありゃしませんけれど、

そッと、切支丹屋敷へ寝に帰るのよ」
「それが、おれには少し、合点がゆかない」
「なぜ？」
と、お蝶はまぎらすように、男の体をゆすぶりましたが、彼の面持ちはやや真面目です。
「なぜというまでもない話だ。あの切支丹屋敷は、お前にとっては、怖ろしい故郷だぜ」
「エエほんとに、怖ろしい故郷ね、あそこの憶い出に、一つだッて、いい過去はありゃしません」
「まして、宗門役人のいる場所だろう、それを、所もあろうに、毎晩そこへ寝に帰るというのは少しおかしい話だ」
「ところが、今のような、岡ッ引や何かが絶えず尾け廻る外よりも、あの広い山屋敷の方が、どれほど私には安心なのか知れないのよ。……なぜかと言うと、あの山屋敷の中には、犬の目も光らなければ、宗門役人だって、まさか私が、切支丹屋敷の中に寝に来ているとは気がつきゃあしませんもの……」
いかにも、その合理的な事は、日本左衛門にもうなずけます。しかし、いわゆる敵の営中に眠って敵を眠らせぬというような大胆な所業は、日本左衛門や雲霧ぐらいに甲羅を経た大盗でも、容易に行えない離れ技で、まだ十九や二十歳の小娘が口にするさえあまりに不敵であり過ぎる。
理にうなずいても、やはりその点では、彼はお蝶に油断ができないと思っています。
けれど、いくら心を許すまいと思いつつも、こうして、自分の愛撫を求めてやまない蠱惑な彼女の両の手をどう振り離しましょうか。ともすると、危険な四囲におかれてある身をも忘れさせそうなお蝶の艶な媚態をどうして憎めましょうか。
まして、日本左衛門という男には、愛といい情けという形だけのものにすら、常に渇いている弱点がある。そして、自分もそれを知っている。
率八の家の納屋から、二人して、大川へ舟で逃げてから数日の間――江戸の額風呂や旅籠を転々として、あぶない逢瀬をつづけて来ましたが、まだ二人の恋は、あの納屋で囁いたことば以上には、一歩もすすんでおりません。盲目的な相愛のものまでには燃えてまいりません。
そのくせ、日本左衛門の悩ましそうな態度や、お蝶が、危険を冒して毎日訪ねてくる様子などを見ると、表面いかにも熾烈で、他愛のない睦言に過ごす半日の二人の仲には、どんな恋の飽満が醸されたかと思われるのですが、そうしつつ、恋は一歩もすすみません。
その矛盾は、夕方になると、二人の顔いろにあらわれます。お蝶が来る――障子が閉まる――二人のささやきが甘そうにもれる――姿も見せないで半日が暮れる。そして、夕方が迫る。
こういう順序が、額風呂の離れへ来てからも、毎日判で押したようにつづきましたが、丁字風呂の二階に、ぽッと春の灯が橙色にともるころになりますと、お蝶も、日本左衛門も、期せずして酔のさめたようなひとみに変り、二人の心に

冷やかな刃と刃が闘いはじめる。

燈火を嫌う妖精のように、離れへ行燈が運ばれると、その明りのはいる先に、丁字風呂の裏門をスウと帰ってゆくのはお蝶です。

「やっ？　……誰かこの袋戸に手をふれたな」

彼女が去るとすぐ後で、こう気がついて愕然とした日本左衛門が、そこの包みを解いてみると、夜ごとに使う黒衣の類は残されてありますが、その下に秘めておいた樟板の半分は何処にか失せて見当りません。

「ちッ、――さてはお蝶が……」

嫌疑はお蝶に走るよりほかはない。

まだ宵ですが、いつもそうする事なので、離れの雨戸を閉めきると、寝につくように見せかけて、中で忙しく身支度をすると、横の小窓から身をひるがえして、ひらりと裏木戸の外へ走り出し、お蝶のあとを追いました。

彼は、神田川の火除け地まで駆けると、脛のききそうな辻駕を拾って、

「切支丹坂の下までやってくれ」

酒代をハズんで一気に急がせ、例の獄門橋の藪だたみに身を隠して、お蝶の通るのを、待ち伏せている。

――と、知るか知らないか、やがて、あの急な暗やみを、ヒタヒタと小走りに降りてくる姿をすかしてみると、藺笠に振袖、まぎれもない色子姿のお蝶であります。

「待て！」――とその前へ、大手をひろげて立とうとしましたが日本左衛門は、今夜というこの機会に常に解せないでいる彼女の行動を突きとめてみる必要もあると考えて、その姿をやり過ごし、見え隠れに、お蝶の後を尾けました。

見ていると――かつて、自分が官庫に忍びいる時、足がかりにした見覚えのある塀際のムクの木から、その姿が苦もなく山屋敷の中へ飛び越える。

「あっ……あの高い塀を」

驚くべき敏活な動作を見せつけられて、日本左衛門すら、その姿を追うのに心を急いた程です。そして毎日会っているお蝶とは、まるで別人の気さえしました。

「ヨハンや……ヨハンや……」

敏捷に忍びやかに、榎の下の石牢まで寄って行ったお蝶は、

「ヨハンや、今帰ったよ」

極めて低い声でその鉄窓をほとほとたたきました。

「オオ、お姫様ですか」

陰静な答えが暗で応じます。

「入口をこしらえておくれ」

「ただ今」

黒豹のようなヨハンの影が、鉄窓の下の一部の桟をはずしますと、お蝶は忽ちその中へ影を消して、うしろの木蔭まで尾けて来た日本左衛門をして茫然とさせました。

「ああ、これはどうした事だろう？　……」

さすがの彼も、この奇異な事実を目のあたりに措いて、何の想像も判断も及びません。

石室の中では、ほんの微かに、茶色の鈍い光線が射したよ

うに思われましたが、それは一瞬で、依然たる冷たい暗と沈黙があるのみです。

　ほとんど、地をはうようにして、鉄窓の外に耳を付けてみると、黒い帳を垂れたヨハンの寝床で、お蝶とヨハンとの話声が、木の葉のささやきぐらいな低声で彼の研ぎすます聴覚へ触れて来る。

「どうなさいました、その後の首尾は？」

　こういうのはヨハンの声のようで――

「この頃は、ここへも稀にしかおいでがないので、何か変った事でもないか、それとも、いよいよあの方が分明したかと、いろいろ想像ばかりしておりました」

「ヨハンや、よろこんでおくれ」

「では、私の想像があたりましたか」

「まだそこまではゆかないけれど、近いうちに、私はきっと、夜光の短刀を手に入れてみせる」

「オオ、定めし、御苦心でございましょう、お体もお疲れでございましょう。……けれど屈してはいけませぬ。私が使いにやった切支丹族の者も、もう長崎に着いていましょう。そして、敦賀の港に、船を廻して待っていましょう。もうお姫様が幸福の御生涯は船出の支度をととのえて彼方に待っているのでございます」

　幸福の船出といい、敦賀津に船が待つといい、またお蝶をさしてお姫様と呼ぶことなど、途切れ途切れにもれてくるヨハンの言葉は、日本左衛門には少しも綜合がつきません。

　ただ、その言葉のうちの端的な意味に、ふしぎな耳をそばだてるのみです。

　ヨハンの囁きが切れると、さらに低いお蝶の声で、

「じゃ、敦賀津の港へゆけば、私を乗せて行ってくれる、羅馬の船が待っているのね」

「はい、夜光の短刀さえ手に入れて参りますれば、すべてのことは、船のカピタンが心得ていてくれます」

「夜光の短刀の方のことは、もう私の物になったのも同じだよ。なぜかってヨハン、これを見ておくれ……」

「おっ……これは樟板の半分」

「私の手にある図面と合せて、これでピッタリと吹上の何処にかピオの遺品が埋めてあるかが分るだろう」

「図面がそろえば、一目で分明しなければならないはずです。ど、どれ、お見せなさいませ……」とお蝶の齎したそれと、手許にある半分とをつぎ合せて、二人が眼をこらし合っているらしく、帳の隙から弱い燈火がそこに声もなく揺れている。

「ウーム、おれは何という愚か者だろう。お蝶のような小娘の手くだに、今日までうまうまと乗せられていたのだ」

　鉄窓の外に体を屈していた日本左衛門は、思わず心のうちでうめきました。先には、お粂に苦い経験をなめさせられ、今またお蝶に首尾よく騙されたばかりか、樟板の秘図まで彼女にシテやられたのです。

　元々、彼はお蝶というものを、一個の不良少女ぐらいにしか思っていない。それが、夜光の短刀を目がけていたり、牢

の中のヨハンが糸をひいていようなどとは、今初めて投げつけられた驚愕です。
　恋と慾を両天秤にかけて、彼女の愛と短刀を併せて手にいれようとした日本左衛門の計画は、そっくりそのまま、反対に、お蝶の方から致された形になってしまいました。
「おのれ、どうしてやろうか」
　悍えんとしても彼の四肢は、髪の根のしまるような忿怒のために、身ぶるいを刻んで手の痛くなるまで鉄格子の下に握りしめている。
　石室の奥では、ツギ合せた樟板に依って、何か明確な地点を見出したものらしく、
「これだ。オオここだ……お姫様、この薬草園の東の方に、妙な印があると思いましたが、今、一方の板をみると、その印が解いてある」
「ではやっぱり、あの薬草の中には違いなかったのねえ」
「そうです。ま、お待ちなさい……。ウム、判りました。一方の符号と一方の解を考え合せてみますと、つまり、薬草園のうちの北の境から九十六歩、東の崖から四十四歩、その三角線の中心にあたる所に、一基の石を乗せた古塚がある」
「塚？　……あったかしら？　……そんなものが」
「塚は土饅頭に堆れ上がって、四方に大きな榛の木がそびえ、秋となると、鶏血草が血を流したように咲き出るので、薬園奉行や黒鍬の小者は、そこを、江戸城の血塚とよんで、足ぶみ禁断の地としてあるという」
「まあ、そんなことまで誌してあるの？」
「場所が江戸城の奥のこと故、ここまで突き止めた狛家の先代も、どうする事もできなかったのでしょう」
「だけれど、それも江戸城だけの伝説じゃないかしら？」
「伝説かもしれません。おそらく現在の江戸城に棲むものは、何でそんな所に奇異な塚があるのか、疑ってみることも忘れているのでしょう。けれど、あながち世の伝説は、みな架空なりとも申されますまい」
「そうね、きっと、その塚かも分らない」
　――暫くそこで言葉がとぎれる。
　何か、帯を解くような音がする。そして、帳の蔭の灯が消えました。
「じゃあ……ヨハン」
　お蝶が立って来るのかと、日本左衛門が身をすくめ込むと、
「お蝶様、聞くことを忘れておりましたが」
「なアに」
　それから、少し改まったような、ヨハンの声音でした。
「あなた様はこの樟板の一方を、一体、どこからお持ちになりましたか」
「日本左衛門に近づいて、やっとの思いで手に入れて来たんだよ。……ヨハンや、お前はそれが何かふしぎなの？」
「いいえ、不審とは存じませんが、あなた様は、秩父でも、この石牢へ来た時も、初めのうちはこのヨハンに向って、こんな事を平気で言っておられました」
「どんなことを？」
「――私は日本左衛門が忘れられない……と」

「ああ、私は、そう言っていた」
「あの男が恋しいと仰っしゃいました。あの男の妻になりたいとも言ったことがございます」
「アア、私は、そう言ったよ」
「では伺いますが、あなた様は、今でもそのお心でございますか？」
お蝶は黙りこみました。しばらく返辞が洩れません。
臆面なく、彼女が口にまで出していた恋が、嘘か真か、という点は、今以てヨハンの気がかりであるとみえます。答えに窮したものか、お蝶は暫く黙しておりましたが、
「……分らないわ、今の私には」
そして、ヨハンがまだ何か問い詰めようとする先に、暗の帳をふわりとあげて、ほの白い顔の端をのぞかせたかと思いますと、
「私のすることを見ていておくれ、永い目でとは言わないのよ、ここ二晩か三晩のうちだから」
ヨハンは瞑目しながら十字を切って、彼女の足元へ祈祷を投げました。
「お姫様！　あなたをお信じ申します」
――が、その途端に、彼女の白い腕はハラリと帳を落として、「ヨハンや、後を閉めておくれ」
鉄柵の一端に隙を作ると、猫のように身をすぼめて、音もなく外へ抜け出しました。
ハッとして、物蔭へ身を退きながら、息を殺した日本左衛門は、途端に目の前をススと通ってゆくお蝶の影を見上げて、「ウーム……」と思わず出る唸き声が、唇を破りそうになる。
ヨハンの石室から出て来たお蝶は、前のお蝶の身装とはまるで姿が変っていました。紫巾振袖の艶冶の色子すがたは、黒ずくめの覆面と小袖の膝行袴にくるまれ、足さえわらじばきの軽々しい身ごしらえです。
飛鳥という形容は、それから刹那の先に見た、お蝶の行動にこそふさわしいことばでしょう。
その足が、以前の塀際へ向ったかと思いますと、すぐに姿は塀のミネに止まって、椋の梢に白い手が伸びるや否、ちょうど黒描が跳んで降りたように、大地へ降りた地ひびきもしない間に、彼女はもう山屋敷の外をスタスタと向うへ歩いている。
長い高塀の角を横に曲って、切支丹屋敷の表門を過ぎる頃から、さらにその足どりは加速度になって、摺り足から小走りに、小走りから宙を飛ぶ如く変って行く。
こんもりとした森と森の間を抜けると、俄に胸つきの急勾配になって、やがて鼠坂を上がりきると、また一方の森へはいる。
「はてな。どこへ行くのか？」と、後を慕ってゆく日本左衛門は、さながら彼女のために五里霧中を引き廻されているような気がしています。
――すると、その足音を聞きとめたか、四方の樹の蔭から、ぽかと、四ツ五ツの提灯が螢のように飛び出して、それに幾人もの人影を加え、ぱらぱらとお蝶の周囲に集まって来る

のでした。
　見ると、提灯には一つ一つ、明らかに「御用」と記してありますから、さてはと、日本左衛門はギョッとして笹むらの中へ身を伏せましたが、意外なことにはお蝶はすこしも驚いた様子が見えない。
　いや、驚かないばかりではありません。
「あら、梅市、安蔵、そのほかみんな、山の者達じゃないか、何しにこんな所へ来ているの？」
「ヨハン様のお申し付けで、石神堂を見張っているのでございます。どうやらこの間道は、誰やら一度通ったらしい形跡があるので」
「あるとすれば、いつぞや私を追いかけて来た、相良金吾かも知れない。先でも、この頃は薄々覚ってきたようだからね」
「そこへ足を踏み込むのは、虎の穴へはいるのも同然で、ずいぶん危なッかしい仕事だと思いますが……」
　寄り集まった明りの中には、かの山岳切支丹族の人形師の梅市の顔や、蓑直しの安蔵の顔などが、憂わしげに見出されました。
「あぶない事は、素足で刃渡りをするようなものさ。だけれど私は行かなければならない……もし、三日のうちに、ここへ帰って来なかったら江戸城の土になったものと思っておくれ」
「みんな！」
　突然、梅市が「御用」と書いてある提灯の灯を消すと、一同もそれに倣って、ふッ、ふッ、と一瞬のまに残らず消して、彼の次のことばを森として待ちすくみます。
「――お姫様のために、お祈祷をささげてくれ、これが、最後のお別れになるかも知れない。イヤ、そんなことのないように、夜光の短刀を抱いて、ふたたびここへ帰って来るお姿が見られるように、みんなして、お祈祷をあげようぜ」
　ゾロゾロとひざまずくと、一団の人影が、やや暫く、声なく、身うごきなく、じっと、首を垂れている。
　――その黙祷をうけながらお蝶が一歩うしろへ退って、石神堂の扉をギイと押したかと思いますと、掻き消すごとく、姿を堂の中へ隠しました。
　カランと堂の中でひびいたのは、木桟の縄梯子でも空洞へ下ろしたような木の音です。
　醒めたる如く、それに首を上げた切支丹族の者たちは、火のない御用提灯をふところに畳んで何処ともなく立ち去りました。
　後は、ごうッ――と、空を翔ける春の木がらし。

　御府外雑司ヶ谷の薬草園、芝の魚籃坂における薬草園、小石川養生所の薬草園、こう三ヵ所が幕府経営の城外薬園地でありました。
　中で最も古いのは雑司ヶ谷の西お薬園で、そこの奉行をかねながら、閑役の余暇に本草の研究に没頭しているのは小野暁台という篤学な人です。
　暁台、今も屋敷の書斎にはいって、何か虫蝕本をくりひろげていると、

「桃園の筑後守様がお見えでございますが」
と、門人の取次でした。
中野桃園の人といえば新井白石です。近ごろ役を退いたとは聞いたが、あの権勢家が何しにこの薬園などへ訪れて来たのかといぶかしく思いながら、取敢えず立ってゆくと、
「おお、暁台殿、御無事か」
筑後は門外に駕を待たせて、もう式台へ来ております。
「おめずらしい事ではある。さあ、こちらへ」
自身案内に立って書院へ通る。
久濶のあいさつが終って、世情のうわさから、新将軍吉宗の人となり、或いは、政治のこと、鳩巣、徂徠学派の悪口など、それからそれへ話が熟したころに至って、
「時に、今日伺ったのは」
と初めて要件をもちだしました。
「なんぞ折入ったことでも？　……」と暁台も膝を改めます。
「ほかでもないが、近ごろ閑を得て、古書類を整理しておるうちに、御城内の人参畑にある血塚について、妙な記録を見出したのでござるが、それについて、二、三疑問の点を御垂示願いたいと存じて、参ったわけでござるが」
「人参畑の薬園は、手前の祖父小野蘭岳のひらきましたもの故、聞き覚えもないではござりませぬ」
「そこの人参畑の血塚は、一体、徳川御開府以前のものであろうか、以後であろうか」
「祖父の蘭岳が、お上の命をうけて、人参を移植いたした当時に、慶長甲寅という年号を刻した石がその塚より出たと申しておりました。いつかそれも埋没して近頃では見当りませぬ」
「慶長の甲寅は十八年、大坂攻めを遊ばした冬の陣の当年で、神君の御発令により、大久保忠隣が京都の耶蘇教会堂を取り毀し、諸国に邪教禁止のおふれを布かれてから三、四年後にあたる」
「塚もその当時に建てたものではあるまいかと心得ます」
「して、以来あの塚について、何か変った話は残っておるまいか」
「と申せばあの塚の附近で、よく下役の耕作人が怪我をいたす事で、それと、秋になると、塚の周りに限って、異な植物が芽を出します。またその草は蛮草であろうという想像のみで、祖父も父も名なし草としておりました」
「ほう？」
「しかるに、数年前に、手前が長崎表へ公用で参りましたせつ、その捺草を所持いたして同地の蘭人に示して糺しましたところ、それは南蛮の地では、鶏血草とよぶ植物であると申すこと。……がしかしどうして左様な蛮地の野草が江戸城の奥庭などに咲き出るものか、その儀ばかりは、この暁台にも、とんと想像が参りません」
「なるほど、それで自分にもおよそながら綴りがついた。まだお上へ復命せぬうちは、ちと他言を憚るが、いずれ其許の御不審については、後日白石よりお話いたすこともござろう」
彼は要件をすまして中野の隠邸へ帰りました、
当代の碩学を以て任じ、西洋紀聞の著者でもある彼は、吉

宗から依頼された例の調べ事にかかって自身でも多少の興味をおぼえないではありません。

数日前から、諸書の記述や諸方の考証を蒐めた白石は、いよいよ案成って、ここに吉宗へ復命の筆をとり始めます。

――近ごろ、大奥にかしましい妖説は是か非か、江城の深秘、人参畑の血塚の真相は何でありましょうか。

蒐め得た考証を材料にして、彼の該博なあたまがその真をどこまで突き究めたかは、最も興味ある問題で、将軍家でも首を長くして待ちあぐねているところであります。

果たして、白石の探究によっても、そこがピオの最後の地と見極めがつけば、ピオの通信が本国へ絶えた紀元千六百〇三年以来、ローマの人々が千里を遠しとせず探しぬいて来た王家世襲の宝刀、夜光の剣も、意外なところから、この世の朝光を浴びることになるかも知れません。

煙草色の船

そこは、城内御薬園の一部。

北の境から九十六歩、東の崖から四十四歩、三角線をえがいて中心にあたる所、人参畑の血塚です。

四方をかこむは、高々とした榛の木で、赤い芽ざしの浅く染められているのみですから、梢を透いてあたる太陽の木漏れ陽は、地上に美しい光線の斑を描いて、あるかないかくらいな樹上の微風も、地に燦々とうごいている。

「ところで、他言を禁じるぞ」

こういったのは若き吉宗、床几をすえて、そこに野立をしております。

「はっ」とその左右、指先を土について、居流れたのは近側の旗本、土屋勘解由、水野弥一兵衛、庄司仙三郎、近藤幹雄、中坊陽之助、長坂血槍九郎、本田龍平、こう七人で、吉宗の弓馬の相手に近ごろ選び出された倔強の者たちでした。

また一方には、黒鍬の小早川剛兵衛、小姓組の松平源次郎、頭をさげて森としております。

吉宗は平服、それも例の素服、旗本たちは稽古着を下にのぞかせ、いずれも、的場の弓からこっちへ立ち寄った様子に察しられる。

「突然、その方たちをここに集めて、塚をあばけと申せば、いかにも吉宗が怪を好むやに思うであろうがこれには仔細があることじゃ、源次郎、筑後守からまいった調べを一同に読み聞かせてつかわせ」

命をうけて、松平源次郎は、黙念と一礼して、ふところから一帖の綴じ物を取り出して読む。

白石が復命した調べ書です。

――原文はあまり長きに失しますし、本篇の筋には関係のない部分もありますから、ここに概要だけをつまんで申しましょう。それはつまりピオの生涯記です。

……

耶蘇紀元一五九五年は、日本の文禄四年で――吉宗の代をさること百二十余年前、羅馬の貴族ピオは、日本へ渡った。彼は、羅馬十二王家のうちの首座の家すじであった。しか

もピオは、王家の世襲とする宝剣と「鶏血草」の種子だけを持って、海を越えた。

その動機は、首都における王族間の内乱と、失恋であると想像される点があった。

ピオは初め、天草支会に身を寄せて、やがて、普通の伝道者のように、京都へのぼった。

それは、慶長八、九年前後であった。

当時は、秀吉歿後、いくらか、異教徒の往来もあり、伝道も黙認されていた。ピオの目的は、関東京坂の貴顕の間にとり入って、徐々と曙光を見、晩年には実行の端緒にはいった。

天下は二勢力に分れていた。彼は大坂の秀頼の許しと、関東の大御所の印可とをあわせて得て、日本に一大耶蘇会堂をたてる目的の下に、地を捜すための旅に出た。

そういう通信は、故国の王庁へも通じられていたから今までにも明瞭である。彼が、不明の人となったのは、慶長十七年、旅先で、不慮の禍いに会って、関東の山へ姿を隠してからであった。

なぜ、ピオが山へ隠れたかというと、当時すでに、関東大坂の交渉は風雲険悪になりはじめて来て、その間に、やはり一人の耶蘇会の異国人が、密偵を働いて、関東の機密を、大坂へ通じた事件が発覚した。

その事件が関東方の神経を尖り立てていた時なので、ピオも忽ち嫌疑をうけて、数多の刺客に狙われた。

つづいて、関東の老将軍家康は、突然禁教令を発し、多くのばてれんを斬り、教会堂を毀し、年ごとに迫害の度を強めた。

ピオの山岳生活は知るよしもない。しかし、彼は三年目に、もうほとぼりも冷めたろうという気持からであろう、武蔵の高麗村に姿をあらわした。

狛家の祖先は、彼を優遇した。

けれどピオはそこにも長くいられなかった。忽ち、徳川家の武士の知るところとなって、曠野から赤城の山へ走ったが、途中、安中の城下で、井伊直政の家中の手に捕われてしまった。

江戸城へ送られたその年が慶長十九年。ちょうど関東大坂手切れとなって、大御所の息右大臣秀忠は、関東の兵をすぐって大坂へ発向しようという間際であった。

そういう際であったせいか、ピオは深い吟味をうけた様子もなく、出陣の血祭に、江戸城の庭で斬られたらしい。死骸は小者の手に渡って、無造作に埋けられた。また「慶長甲寅」の塚石は、その死骸を扱った小者が、ピオの死後、その土壌から鶏血草が咲いたため、迷信をおこして、病むものが多くひそかに計らって建てたものであった。

どうして、鶏血草がそこに咲くか、それは想像であるが、恐らく、ピオの所持していた種子が、ピオ自身の血汐を肥料として狂わしき鮮紅の葉を伸ばすのではあるまいか。

迷信は迷信を生む。以来、江戸城の三代、四代、五代、とかく奥庭で怪我をすると、塚のせいにしたがった。

……

白石一流の文章と引証で、つぶさに認めた書を読み終る

と、松平源次郎は目礼して、それをふところに納めました。
「以上、聞いたとおりな次第であるが、そこでじゃ」
と吉宗は、ズウと一同の顔を見渡します。
「そこで……」と語をつづけた吉宗は、先頃から忌むべき噂にのぼっている吹上の妖について、最後の断案を下して言います。
「――察するところ、鼠賊、猟奇の輩など、夜行の鬼を躍らすものは、ピオと申す異国の貴人が地下に抱いていると伝えられる宝刀の為す仕業と思う」
頭を垂れて聞き入っていた一同は、黙然として頷き合いました。微風にうごく梢の陽蔭は、幾つもの顔や肩や塚のあたりを陽炎のように浮遊して、その人々の視覚をもてあそんでおります。
それから、どんな秘命が吉宗の口から出たものでしょうか、やがて、旨を含んで、「はっ」と立った一同は、黒鍬の剛兵衛を先にして、春秋百余年の秘密をつつむ血塚の地底をあばきかかりました。
まず土饅頭の上の苔石は、剛兵衛とその下役の手によって取りのぞかれ、七人の旗本と、小姓の松平源次郎は、各〻、鍬と鋤とを手にして、塚の周囲から円陣になって掘りはじめる。
太陽の下、振り下ろす鍬の下には、いかなる暗も秘密もつつみ得ません。
七尺の地底――あばかれた白骨はそも何を齎すでしょうか？

＊　　＊　　＊

夜になりました。
山里、吹上、船見山、嵐山、すべて寂とした暗の底に沈みこんで、春の星ばかりが、模糊として美しい。
ギイ……と石神堂の扉が開く。
白い顔の端が外の赤松の林をのぞきました。
お蝶です。――小石川の石神堂の穴から江戸城の秘孔を抜けて、そこに顔を出した彼女でした。
大丈夫――と見ると、お蝶の姿はむささびのように松林から船見山を越えて行きます。すると、すぐまたその後から、同じ石神堂を飛び出したのは、日本左衛門の憤怒に燃えている姿です。
一陣、二陣、吹き去る風の静寂に返るのを待って、
「よかろう！」
何処かで、こう言った人声がする。
――と共に、堂の裏手や、四方の木蔭などから、熊笹をザワつかせて、影を起した八、九人の中に、松平源次郎と黒鍬組の剛兵衛の顔が見えました。
「早くいたせ、こういう場合は神速でなくてはならん」
四、五の人間は剛兵衛の使っている黒鍬の男と見えて、彼がこう指図をすると、「はっ」と答えながら堂の中へ飛び込み、間道へ通じるそこの床板を釘付けにし、さらに、堂の喜連格子も外から厳重に釘を打って、テコでも開かないようにしてしまう。
「これでよろしゅうございましょうか」

見張りに立っていた剛兵衛と源次郎は、一応、その入口をゆすぶって試みながら、
「よし！」
そして、相顧みて、ニッコと笑い合いました。
「こうしてしまえば、袋の鼠じゃ」
「では、手前は錦霜軒の方へまいりますから」
「御苦労にぞんじます。後刻また……」と予定のように、軽く左右へ別れてゆく。
松平源次郎はただ一人で、裏山づたいに、例の万太郎主従が根城としている錦霜軒の方へ足を運んでいる。――刻限は、ちょうど八ツか九ツ時分でしょう、遙かな、本丸、二の丸の深殿の灯も消えて、富士見番所のお櫓の灯だけが宙にボッとにじんでいます。
彼が、暫く附近に身を隠していると、やがて錦霜軒の戸があいて、例によって身軽にいでたちをした万太郎主従の影が、忍び足にそこを出て行こうとする気配でした。
ばらっと、物蔭をとび出した源次郎は、不意に、二人の前にあらわれて、
「尾州様、しばらくお止りを」
小膝を折って、いんぎんに申します。
ぎょッとしたらしい万太郎は、足をひいて、
「誰じゃ？」
と鋭い目を以て暗をさぐる。
「小姓番の松平源次郎にござります」
すかして見た彼の背丈や輪郭、ははア、さてはいつぞやの明け方、広芝の先で、曲者と誤って組み仆した一方のはこの男であるな――と思い当りましたが、万太郎は空うそぶいて、
「なに、小姓番の松平源次郎と申すか。その源次郎が、何用があってここへ参った」
「お上の御口上をうけまして」
「ふーむ、この万太郎に、将軍家から？」
「はい」
「何じゃ。承ろう」
「上意、戸外にては、申しあげかねます」
危げな沙汰とは思いましたが、いつぞやの気がかりもあり、将軍家の旨といえば、まさか、立話にも聞かれません。
「こちらへ来い」
あごで招いて錦霜軒へ引っ返します。
先に戻って、戸をあけた金吾は、さてこそ万太郎の行為がたたって、何か、尾州家に対する吉宗の凶命、いよいよやって来たかと予感をもちました。
銀泥のふすまに滅入りこむような灯が更けております。水の底かと思われるばかり森とした本丸の深殿に、吉宗はまだ起きている。
「お……参ったか」
音もなく開いた一方のふすま。
「はい、お供仕りました」
身を伏せたのは松平源次郎です。――それを目でうなずいて、

「尾州殿、私見でござる。昔の友として会いましょう。遠慮はいりませぬからどうぞこれへ」

こういった吉宗のことばは、将軍家の格式をのぞいて、紀伊の息子である元に返った口ぶりでした。

「では」と、源次郎のうしろから、つかつかとはいって来た者は、何かお召しというので、錦霜軒から導かれて来た徳川万太郎で、それを見届けた後、金吾は畳床から板廊下へ身を退きます。

「源次郎、遠慮いたせ」

吉宗は、顎で侍側を払っておいて、ひとしお懐しげにくだけました。

「お呼びしたのはほかでもないが、昼間、公の格式で会うては、親しい話もしにくいので、今夜は、すこし寛ごうという所存……。時に、万殿、お探し物は見当りましたかな」

過日の、広芝の件は噯にも出さないで、真っ向へこう探りを入れてみましたが万太郎もここへ来る間に、相当の応酬の用意をもっていたとみえ、

「いや、なかなか、雲をつかむに等しい手懸りで、何の端緒もつかめません。このあんばいでは、あるいは飛んだくたびれ儲けかも分らない」

何の前提もなく、彼の単刀直入に対して、こっちも底をぶちまけてしまい、その後の空虚をふさぐ為のように、ハハハハハと音響の返る天井へ高い笑い声を投げました。

「ところが万殿、偶然といおうか、きょう何心なく吹上を歩くうちに、この吉宗が、奇異な短刀を手に入れたのだが、鑑定をしていただけようか」

「刀の鑑定は、たしか、そちらの方が先輩であったと思う」

吉宗の皮肉を、万太郎は逆手に出る。しかし、さすがの彼も、昼のうちにピオの遺蹟があばかれているとは夢にも気づきません。

「いや、それが目の届かない品物、日本の鍛冶が打った物なら、わざわざ其許をよぶこともないが、どうやら異国の短刀らしく思われるので」

「異国の……」と、万太郎は目を冴えさせて、「異国と申しても、種々、明のものか、高麗のものか、あるいは呂宋刀でござりますか」

「何か分からぬが、短剣じゃ、柄は夜光珠にちりばめられ、なかごは直身、切羽の上に象嵌がある。眼をこらしてよく見ると、青金、赤金、黄金の三色の金であらわした南欧の少女の顔が浮いている」

「おっ……」

「御記憶があるか」

ないとはいえません、夜光の短刀！　万太郎は彼に対する意地も忘れて、思わず膝を乗り出させる。

「見せてください！　その短刀を」

「見てもらおうと思って呼んだこと。さ、こちらに置いてあるから、御案内申そう」

吉宗は先に立って、サッと廊下を開けましたが、そこに、うずくまっている人影を見て、

「何者じゃッ」

と、将軍家らしい威凜をもって叱りつけます。
万太郎は彼のうしろに従いて来て、
「あ、それは手前の家臣です」
「なに、万殿の家来とか」
「相良金吾と申します」
「主人思いなやつ、叱って、気の毒であった」
白い足袋の裏が鏡のような大廊下をそのまま踏んでゆく。
その姿を遙かに過して、金吾は竦む足をしずかに急がせました。——何ともふしぎな吉宗の話、主人の身も気づかわれてならない。
と——先に行った吉宗は、鉄のような厚い欅の階段を踏んで、本丸の望楼に上ったようです。
金吾は、それ以上に進み得ず、望楼の下に身を屈めて、ひたすら事なきことを祈っておりましたが、この深夜に、将軍家自身が望楼の上に万太郎を誘って行くなどという行動は、何としても腑に落ちません。
「もしや？　……」彼の想像は彼の肉と血を凍るようにひきしめました。吉宗は、望楼の上に刺客を伏せて、主人を亡いものにしようというのではあるまいか？
そういう例が、支那の歴史などにもないとはいえない。天下の大統をうけついだ吉宗にとって、万太郎の存在は、決して快いものでないことは分り過ぎております。
案じる程のものではありません。上を見ない金吾の杞憂は、あまりにも主人思いな、思い過ごしです。
吉宗に導かれて、望楼の上へあがった万太郎は、太い柱のみで、四壁のない櫓の床に立つと共に、その一方の柱の下に、一灯の明りと、一個の壺と、一個の壇とが、星でも祭るように据えてあるのに目をとめました。
「何であろう？　あれは」
「白骨を祭ってあるのです」
と、吉宗は微笑をふくむ。
白骨——と聞いて万太郎は、何となく霧でも吹かれたような寒さを感じました。寥々とした星ばかりならいいが、消えなんとする燈心の細い焔が、いやな陰気の這い廻るのを目に見せます。
万太郎はいぶかしげに、また、ことばかず少なく。
「白骨……誰の白骨？」
「白骨に名はござらぬ。想像で申そうならば、羅馬の貴人、ピオのであろうか」
「……」
初めて彼は、ここに至って、吉宗がいつか自分の目的を知り、その目的の線を越して、鼻をあかせてみせるのかと気づいたらしく、口を緘して、彼の横顔をちらと睨めました。
「塚をあばいた時は、その土を祭るものじゃそうな。で、一緒に出た夜光珠の短刀と共に、ここに、こうして霊を祭っておいた」
いわれて、彼がふと見ると、なるほど、白骨の壺のそばに、白絹をもって包んだ横笛ぐらいな長さのものがおいてある。
初めは、左までなかった万太郎も、その白絹にに包まれ

たものを思うと、矢も楯もなく、吉宗をつきたおしても、それを奪って、天へかけ去りたいような衝動を抑えきれませんでした。

だが、相手はこうしておれの羨望をながめてひとりで愉悦を感じているのだ、と心づくと、彼の気性は、意地でもそれを見たいなどという気振りを出させない。

「それは飛んだお拾い物だ」

こういって、苦ッぽい笑みをかすめたのみです。

「どうじゃ、手に取って一見されては」

「そのうち、昼でも、ゆるりと拝見いたしましょう」

「左様――この暗では、奇異な装剣も、切羽の象嵌も、よく見ることはできなかろう。おう、時に万殿、何刻であろう」

今度はふいと話を更えて、望楼の欄から北斗の位置を仰ぎました。

「何せい、だいぶ更けましたな」

「もう見えてもよい時分だが……」

「え、何が？」と問いかけて、万太郎は理由のない後悔を軽くおぼえる。

「見えるであろう。吹上の奥が。――いや見えるといっても、黒い樹木と、黒い山と、そしてあとは星明りに光る流れの水が分るのみだが、やがてあの辺に見えてまいる」

再度、何がといってたずねたいところを、黙って聞いておりますと、吉宗も口をつぐんで、根気よく西北の暗を見つめています。

ふと、万太郎が顔を上げたのは、流れ星に目をひかれたのでした。しかし、吉宗は眼たたきもしません、心耳をすまして、吹上の暗と対峙している。

四半刻もたったでしょうか、そうして、二人は無言のまま、望楼の欄に手をかけていましたが、なんの別条もあらわれない。

「さて、どうしたであろうか、こんなはずはないのだが……」

と吉宗はつぶやきながら、

「万殿、今宵はここで、白骨の通夜をなさらぬか」

と、すえてある床几へ腰をおろします。

元より、万太郎とても、このまま吉宗に愚弄されたような形では寝つけない。殊にまだ、吹上の方に、何か見えて来るはずだといった彼の言が、うわべにこそ出しませんが、心の裡では気にかかっている。

「望楼の通夜は風変りじゃ。春のこと故、風邪もひきますまい、おつきあいするといたそう」

彼とならんで、同じ角度に胸を反り、床几に体をあずけますと、

「いやいや、万殿の体は、風にも夜露にも、だいぶお馴れになっておろう」

またしても吉宗が、ちくりと刺すようなことばでしたが、それに不快を抱いているまもなく、

「あっ！　あの火？」

と、万太郎の瞠った眼は、吹上の暗の一方へ、何のためらいもなく奪われてしまいました。

――お蝶、お蝶、お蝶、お蝶。

お蝶のかげを追い慕って、吹上の丘を越えつめぐりつ、日本左衛門は息をきりました。

彼女の今夜の敏捷なことは、かつて、小仏の甘酒茶屋から暗夜の険路を追って行ったその夜の迅さにも劣りません。殊には、幾夜となく、探り歩き、さまよい廻っているところなので、深山大沢を思わすような吹上の道の曲折も、自分の庭を歩くように、忽ち例のお薬園まで、迷いもなく駆けつけました。

ヨハンがいった人参畑――、継ぎ合せた樟板の絵図によって明確に教えられたピオの遺蹟はそこの血塚！

場所が分っても、その地底を見るには、幾尺の土を掘る努力がいるだろうとか、または、ピオの遺物死体があった場合も、それが石棺にはいっていたらどうしようとか、そんな場合の第二策は、彼女の念頭にありません。

「夜光の短刀は、もうわたしのものだ！」

歓喜のほかは何ものもない、希望のほかに何物も持たない、一念一途のお蝶であります。

その懸命は彼女をして、彼女が生れて初めて知る、熱と大胆をもたせました。

パリッと響いたのは枯木の柵です、いつもは息さえ殺して歩くのに、もう、夜光の短刀はあそこにある、余人に先を越されてはならない、そういう性急に張りつめているお蝶は、美しい猛獣のように、何ものも破る勢いで、一瞬の刻をもそこへ焦心ッたのです。

「――攫われてなろうか、夜光の短刀。ここまで事を漕ぎつけて来ながら、日本左衛門ともあろうものが、お蝶のような小娘ずれに、横奪りされたと言われちゃあ、末世末代、緑林仲間の笑われぐさ」

彼はさすがに音もさせず、柵を躍って越えますと、すばやく薬草畑を走って、榛の木蔭へ身を入れました。

青い星明りの下、お蝶は、ほっと息をついている。

息を休めながら、彼女の鋭い目くばりは始まりました。そして彼方、此方と、しきりと探し歩くうちに、昼間、吉宗が旗本たちにあばかせた血塚の前でハタと足を止めると、

「オオ、これだ……これにちがいない」と呟やきました。

見ると、夏草の伸びる頃には、その中に隠れてしまいそうな低い塚石がある。が、ふしぎなのは、その日の昼、鍬を入れた形跡もなく、踏みにじった痕も消えて、やわらかい枯れ草と山芝が少しの不自然もなく土をかくしていることです。

しかし、元よりお蝶は何事も知りません、確かにそれ！と飛びつくように寄って、石の肩を抱くように手をかけました。どうしてこの石の下を探ったものかと、そこで思案につき当ったものか、この石こそ血をうけた祖先の姿かと懐かしく思ったものか、とにかく、暫くそうしておりましたが、やがてその手が石の抵抗を試みるように、力をこめて向うへ押す。

案外にも、据えられてある石の根はもろく動いて、ごろッと向うへ倒れましたが――と思った途端です。

「お蝶ッ！」

榛の木立から、叫んだ日本左衛門が、餌に飛びかかる豹のように、彼女の姿を目がけて身を躍らせました。

どんな激情もめッたに顔に出さない彼が、そう叫んだ形相と怖ろしい勢いといったら、かつて見ない程でしたが、その瞬間に、何ということでしょう、彼の目の前――およそ七尺四方ほどの大地が、ザッ――と突然くずれ込んで、真暗な巨口を開いたかと思いますと、お蝶の姿も倒れた石も、せつなに地上から消えております。

「やっ、これは？」

と、すんでのことに、彼もその陥穽に自ら飛びこむ弾みだったのを、ハッとして足を食い止めましたが、濛々とあがった砂塵と驚愕に、中をのぞく隙もなく、

「曲者！」

四方の暗を破って、彼一身をばらばらッと取り囲んだ数人の武士がある。――それは吉宗の旨をうけて、宵からここに手ぐすねひいていた、長坂、近藤、中坊、本田、そのほか倔強な旗本七名でした。

驚愕に重なる驚愕、意外にかさなる意外な強敵の計策です。――危地に墜ちたお蝶、重囲にかこまれた、日本左衛門、ああ遂に夜光珠の夢は惨憺たる破れをここに告げました。

どう遁れましょう、この陥穽を。

合図はさかんに火を呼びました。木魂をしてひびく呼子笛につれて、あなたの樹林やこなたの山蔭から、狐火のごとく殺到するのは、番士や黒鍬の者の手に振る明りです。

望楼の上で万太郎が、アッと驚いたのはこの火光のうごいた刹那でした。

それと共に側にいる吉宗の片頬にニッとゆがむ北叟笑みが、目に見えるような気がします。

跫音につぐ跫音。

知らせにつぐ何かの報告。

やがて集まる提灯や雪洞の明りは、下から逆しまに望楼の柱を染めました。

とんとんとそこへ誰やら駆け上がって来る。

きっと、吉宗が振返ってみますと、革襷股立ちのまま、旗本の中坊陽之助がそこに小膝を折って、

「捕り押えました曲者、かねてのお指図どおり、ただ今不浄駕籠にのせて、平河口から宗門役人の手へさし渡しまするが、それにてよろしゅうございましょうか」

「一人か？　曲者は」

「もう一名のものは、なかなか手強く、後より加勢をやって追い詰めておりますから、程なく縛についてくることと存じます」

吉宗と万太郎が、やがて望楼を降りてゆきますと、今しも、一挺の不浄駕籠は江戸城の番士に固められて、平河口へ送られようとする矢先でした。

見ると、その中には、黒装束を剥がれた、一人の女が、高手小手に縛しめられて、息さえあるかないかの様子、苦悶の白いうなだれ顔へ、ガクリと黒髪をくずしている。

「若殿」

そッと袖をひいて知らせる金吾に、返辞もなく、万太郎は、
「ウーム、お蝶だ……」
茫然たるばかりでした。
「万殿、曲者は法によって、役人の手に処分を委すが、それで御異存はなかろうな」
吉宗のことばのうちに、すでに中坊陽之助は先に立って、縛についた切支丹のお蝶を本丸から不浄門へと運び去って行く。
しかし、吉宗はまだ寝所へは戻りません。武者溜りとよぶ望楼下の大床の間に床几をすえて、次々に来る、吹上の報告を待っています。
すでに四更を感じる時刻です。
一番鶏がどこかで鳴く。
「どこに姿を隠したものか、日本左衛門の姿は一向見当りませぬ」
――最後の報告は吉宗を失望させました。しかし、石神堂の間道もあのとおり塞がせてありますから彼に翼のない以上、ふたたび江戸城の外へ逃げ出す気づかいは絶対にない。
彼は、注進の侍に、わざと声を激しくして、
「腑甲斐ない旗本どもである、水野弥一兵衛は何をしておる、長坂血槍九郎はおらぬのか、土屋、本田、近藤のともがら、常に武をほこる者たちが寄って、ただ一人の鼠賊を捕え得ぬという法やある。早く行ってそう申せ、そち達の手や才覚にあまるならば、自身吉宗が出向くであろうと」
言わず語らず、万太郎をそばに据置いて、手厳しく懲らしめている吉宗は、この機に峻厳たる彼の半面を見せました。
注進の者は、将軍家の叱咤に会って、ハッと恐れ驚いたまま吹上の方へ引返して行きましたが、その後の白け渡った無言の行が、刻一刻と過ぎてゆくうちに、不意な方角で、バリバリッという物音がひびきました。
「やっ？　……」
ひとしく、吉宗や万太郎の眼は、望楼の上へつり上がりました。早、暁に近い静寂を破って、異様な音がきこえた所は、たしかに高い楼上に違いありません。
一同の胸に、何か知らず、ハッと不意を衝かれたような狼狽が走った途端です――
「御免！」
と叫びながら、将軍家と万太郎のうしろから、袴の股立を引ッからげて、櫓の階段を駆けのぼッて行ったのは、相良金吾でありました。
「ヤ、ヤ？　……あの音」
つづいて将軍家も床几を立つ。
万太郎も辺りの動揺につり込まれずにはおられません、素破と立って、言い合せた如く、金吾のあとから望楼へ向って駆け上がる。
真っ先に、その頂きに駆けつけて来た金吾は、そこに立つ咄嗟に、実に驚くべき不敵者を見ました。
何処をどう逃げて、どこから此処へ伝わって来たものでしょうか、まさしく、そこに立っていた人影は日本左衛門です！
ピオの白骨の祭られてある白木の壇から、夜光の短刀をつ

かみ取って去ろうとする刹那に、天運の尽きるところか、黒衣の袖を白木の台の端に引ッかけて、それをたおした様子です。

「オオ、おのれッ」

叫ぶが早いか、金吾がパッと飛びかかッて行きますと、咄嗟に身を沈めて、相手の体を泳がせた日本左衛門は、白絹にくるんだままの短刀を、牙の如く口にくわえて欄にヒラリと足をかけると、

「めずらしいな！　金吾」

「おぼえておッたか、日本左衛門」

「オオ夜が明けそうだ。――おさらばだぜ」

「待てッ」

「おれの年貢の納め時は、まだちッと早そうだ」

言うかと思いますと、望楼の一角の柱をすべッて、四層目の廂まで、スルスルと、蜘蛛のように辷ッて行きました。

あっ！　何たる離れ業でしょう。

そこで一つよろめけば、四重層から櫓下まで落ちて微塵となる五体を、咄嗟、猫足のごとく納めたかと思いますと、日本左衛門の影は風を割ッて、扇廂の腕木から天守番役所の屋根の一端へと、ヒラリと躍っておりました。

「今だッ」

逃がしてなりましょうか、相良金吾として、与えられたこの再会を逸して、ふたたびこんな機会というものが巡ッて来るかどうか分りません。

無論のこと、彼もつづく。

豹躍！　また豹躍！

先の影は、すでに天守番長屋から銅塀のミネへ移って、本丸の大屋根へと必死によじ登っているのです。

「あれよ！」

思わず叫んだのは、望楼の上の吉宗と万太郎でした。

天地は暁闇。

遠い辰巳の海の境が、かすかに曙いろの一線をひいているばかり。

そこから見れば、目の下は、御本丸大奥から大本丸の表方まで、海のごとき甍の波です。万余の坪もあろうかと思われるこの大屋根、天下、ここより壮観な屋根というものはありますまい。

甍は露に濡れていて、徐々に白む暁闇の明りが、そこを、脱兎と駆ける一人の男をあざやかに見せている。

われを忘れた吉宗は、欄を打って側にいる松平源次郎に叱咤しました。

「助勢をよべ！　旗本どもを呼び返せッ」

しかし、ここに至って万太郎は、やや自分の立場を盛り返しました。彼は溜飲をさげつつそれをこう言って制したのです。

「あいや、あまりお騒ぎなさらぬ方が得策でしょう、かりそめにも天下の首城が、一盗賊に足痕を印された事さえ名誉ではありません。まして、あなたが大統をうけて以来日も浅いうちに、かようなことが華やかに世間の語り草となっては、新将軍のかなえの軽重を問わんとする者がないとも言えま

せん。――まずどうなるか、愚臣金吾にまかせてお置きなさいまし、金吾が追ってまいりました」

そうです。彼は金吾に手がらをさせたい。この機会を完全に、金吾ひとりの力に授けてやりたい。――でなければ、よいのうちから随分と吉宗に翻弄されていた自分の鬱勃もやり場がありません。

吉宗の聡明は、たやすく彼のことばをうけ容れて、

「ウーム、それもそうか」

無言と冷静の佇立に返りました。

されば、日本左衛門を追って行った金吾には、彼ひとりの宿怨のほかに、「どうかやッてくれ、吉宗に見せてくれ、頼むぞ」と望楼の上で力こぶを入れている主人の期待が多大にかけられている。

元より金吾も怯みません。

彼が本丸の屋根によじれば、金吾もすばやく大屋根にのぼって、彼と十二、三間の間隔を、一跳、一歩にちぢめてゆく。

四方へ富士形にながれている屋根勾配は、追わるる者と追うものとの影を、見え隠れにさせましたが、やがて、表方の方へ、坂を下るように走った日本左衛門は、さすがに少し、その方角にも迷ったのでしょう、車寄せの破風から足を回して、ふたたび大屋根の浅瀬を駆けながら、当番所、納戸前、御台所の上まで伝わって来ますと、御広敷の橋廊下という屈強な渡りを見つけて、二の丸御門につづくお留守居部屋と賄い方の屋根をふみこえて走りつづける。

そこまで来ると、もう目の下に水が見えます。平河門、三の丸、丑寅櫓のこう三ツで、カギの手を作った内濠の水です。

「しめた！」

彼の心は叫んだでしょう。

初めてそこで、ヒラリと大地へ降りました。ちょうど梅林門の地先です。

土をふむが早いか、彼はさらに自由な足どりで、梅林櫓の芝土手へ向って疾風のごとく駆けだして行く。ただし、そこにはお手先番所と進物番の寝小屋がありますが、彼の目にはそんなものは、脱兎の前の枯れ草にも足りません。

番所の間を駆けぬけて、小松の植えられてある芝土手へかかると、夜光の短刀は咄嗟にかれのふところが呑む。

逃げて来た道は誤りません、およそ江戸城の十重二十重のかこみから出るにはここよりほかに逃げ口はない。なぜといえば、この梅林櫓の土手から水のかなたの竹橋御門の間にかぎッて、幅は広いが、濠は一重になっています。

が、しかし――彼がそこから躍ろうとしたせつなには、金吾もすでに、彼の姿をそこに見つけて、

「おのれーッ」

疾呼して日本左衛門を捕えました。

どぶーん……と凄まじい水煙を、暁闇濠の水面に見たのは、まさしくそうした途端であって、本丸の望楼に身伸びをして見つめていた吉宗と万太郎のひとみには、もうその影が二つとも、一沫の白いものとなって消えていました。

時ならぬ水煙です。しかもまだ薄ぐらい明け方。

そこへわらわらと飛んで来た人数は、折よく竹橋御門の外を通りかかった宗門奉行井上河内守とその配下でした。

忽ち、濠の水面へ、分銅縄が飛ぶ、刺又がさぐる。そうして、組み合ったままの二つの人体を、陸へ引揚げました。

金吾と日本左衛門です、二人ともに気を失っている、そしてぬれしずくな乱髪と、蒼白になった顔や腕の傷を見ますと、二人がいかにはげしい水中の格闘をやったかが想像されて、見るものの眼を慄然とさせる。

来合せた井上河内守は、この遭遇が、折よくもあり折悪しくもありました。なぜかというに、彼は前日から命をうけて、切支丹屋敷のお蝶の体を、平河口の不浄門でうけとることになっていました。

この未明に、早出のくり出しはそのためです。しかし、そこで約半刻ほどの時間を費やしてしまったのは、事情まったくやむを得ないと言わなければなりません。

＊　＊　＊

それより少し前に、中坊陽之助を先にたてて、本丸を出たお蝶の不浄駕が、平河口の犬くぐりから外濠へ来たのは、まだ人の顔もさだかに見えない頃でした。

「まだ宗門方の者は来ておらぬようだ、約束よりは、少しこっちの方が時刻が早かったかも知れぬ」

陽之助は、外濠の番小屋の前に駕をおろさせて、明けの空と四方の暗を等分に見交わしておりましたが、向うの木立に、チラ、チラ、とうごく提灯の幾つかを見たので、

「おう、あれへ来た」

と自分からも提灯を振って、早くと合図を送りました。

すると、さしまねく灯に応じて、足なみシトシトと近づいて来たのは、宗門役所の印をつけた幾ツもの提灯と、菌を植えならべたような菅笠の一列で、いずれも露よけの合羽に、あられ小紋の脚絆、ぞろぞろと地上に指先をついて屈みこむと、

「昨日の御飛札により、井上河内守の名代として、山屋敷与力佐脇仙十郎、お蝶の身がら受収りに参上いたしました」

と、列の中から一人の武士が、こう言いながらいんぎんに、中坊陽之助に会釈をしました。

「大儀でござる。――がしかし、河内殿御自身は？」

「病中のため、御舎弟主水殿をあれに付き添わせましてございます」

「ウム、お風邪のことは前日承っておったが、大事な囚人、ずいぶん手落ちのないように召され、何かの処置は、追ってお沙汰が下がるであろう」

「では、たしかに」

「御苦労でした」

お蝶の体は、縄のまま駕付きで差渡しになる。

で、陽之助は役目が済んだわけですから、平河口から城内へ引っ返しましたが、ここに奇怪きわまる事には、それから約半刻を経て、ふたたび平河口へお蝶をうけ取りに来た人数があります。

それが偽物か前のが偽物か、宗門方と陽之助の間に、目まぐるしい紛争がありましたが、ともあれ一騎の使いを山屋敷へ飛ばせてみると、お蝶の駕は着いていません。

落度の争いは後のこと、さては前の一列こそ、何者か企んだ偽役にちがいないと、中坊陽之助と宗門方の役人は、八方行方をさがし求めて、その追跡にあせりましたが、江戸三十六見付、何の手懸りもありません。

その早朝、根岸の里にも飛報がありました。

息をきって知らせに来たのは、この四、五日、ここへも帰らなかった高麗村の次郎で、

「おりんさん、おりんさん、お嬢様はどうしたい？」

と、声のありッたけを出して、今起きたばかりの耳を驚かしました。

縁先で、小鳥の摺餌を作っていたおりんと、庭先の吹井戸で髪をなでていた月江は、

「まあ……」と、両方から彼の突拍子もない現れに目をみはって、

「次郎じゃありませんか、どうしたの？」

「あ、お嬢様ですか、どうもこうもありません、早く支度をして、私と一緒に、お濠端まで来てください」

「お濠端へ？　何をしに」

「くわしいことは話していられませんが、何しろ、大変なさわぎ、あの、日本左衛門がネお嬢様、天運つきて、とうとう蠅にかかったんです」

「えっ、ほ、ほんとかえ次郎」

「ほんとですとも！」

「いつ？」

「きょうの明け方――たった今です。だが、もっと驚くことがありますよ、その日本左衛門を捕まえるために、金吾様も組みついたまま濠に落ちて、気を失ったままどうしても息を吹っ返さないと騒いでいました。――で私が来る時に、御城内から万太郎様も駆けつけて来たり、釘勘のおじさんも飛んで行きましたが、何しろ早く、私はお嬢様にこのことを知らせようと思って、息をきって飛んで来たんです」

おりんは鳥籠をほうり出して、奥の塗箪笥から月江の帯や衣類を乱れ筥にもいれずにかかえて来ました。

「さ、お嬢様、ここで次郎の話を聞いているより、少しも早くそこへおいでになるのが肝腎でございましょう、お支度を遊ばせ、早く、早く」

「おりんや、着物などはこれでいいよ、それより早く、駕を頼んで来ておくれ」

「おっと！　駕ならば、おりんさんのと都合二挺、ここへ来るついでに連れて来てあります」

「じゃ、私の護り刀を」

「ハイ」

「それと、お祖父様の紙位牌を」

「ハイ、ハイ」と、おりんはくるくる舞いをして、彼女と自分の草履を二足、庭の沓石へ移しました。

裏門の木戸から、ふたりが乗物に身を入れると、次郎は例

の野槍を小脇にかかえて、月江の駕わきに付きながら、
「ねえ、お嬢様」
タッタ、タッタと、駕屋の足と速度を合せて駆けながら、中の月江に話しかけます。
「ねエ、お嬢様、うれしいでしょう」
「私は、何だか胸がワクワクして、嬉しいのだか、悲しいのだか分らない」
「金吾様は、そのまま死んでしまいはしないかと、それを心配しているのでしょう。……だが、それは大丈夫ですよ、水を飲んだだけですから」
「私は、駕の中で、今もじいっと祈っているんだよ」
「だが、胸が晴々するじゃありませんか。御隠家様を斬った日本左衛門が、やがて、獄門に首をさらすんだと思うと、仇を討ったような気がします」
「やはり、お祖父様が、金吾様の蔭身について守っていて下すったんだね」
「そうかも知れません、金吾様は、今にお嬢様のお聟様になるお方ですから」
「何をいうの、次郎は」
「ホイ！　また石のやつに躓きました」
喋舌っていると、道の遠さも分りません。
汗をしぼった二挺の駕は、またたく間に神田橋から外濠に沿って、金吾と日本左衛門が引き上げられた場所まで駆けつけました。
だが、そこに矢立と手帖を持って立っていたのは、大番組の侍四、五名と、町奉行の与力同心と、外濠の番小屋の小者や仲間などで、もう金吾も見えなければ、日本左衛門も倒れておりませんでした。
「もし、お伺いいたしますが、これにおりました釘勘という目明しと、徳川万太郎様たちは、どちらへお移りになったでしょうか」
次郎がその内の一名にこう尋ねてみますと、
「オオ、そちは、万太郎様の召使いか」
「はい、召使いでもございませんが、日本左衛門と一緒に、お上の御介抱をうけました相良金吾様に会いたいお人がございますので」
「それならば、呉服橋御門内の南町奉行のお役宅へ伺ってみるがいい」
「有難うぞんじます……。お嬢様、聞いたでしょう」
駕の中へこういうと、次郎はまた先に立って、飽きもせずに駆けだしました。

呉服橋門内の役宅では、その日の早朝から総出役で、奉行所始まって以来の物々しさと混雑を呈しております。
仮吟味の準備のために、与力や同心が狂奔するかたわらには、奉行中山出雲守が三家の若殿万太郎が不時の訪れに、その応接にも狼狽し、一方、役宅へ迎び入れた日本左衛門と金吾とには、養生所のお抱え医小川笙船がかけつけて、その手当にもいそがしい。
折も折です。

そのただならぬ混雑のところへ、また新しい入牢が三人、釘勘の組のものに縄尻をとられて、数珠つなぎに門内へはいって来ました。

見ると、鼠木綿の宗服を着たのが、虚無憎とみえますが、蠅をうけた以上、無論、掛絡も天蓋も剥ぎとられているので顔はさらしている。

それは、雲霧の仁三と四ツ目屋の新助で、一番どんじりに、屠所の羊のように引っ張られて来たのはお人好しの率八です。

「入牢です。入牢です」――釘勘の組のものは、揚屋の境でしきりと怒鳴っておりましたが、右往左往のとりこみかたで、暫くそこで身動きもなりません。

「あっ、親分……」

と、率八が、右側の板じきの上に、医者の手当をうけて仰臥していた日本左衛門を見て、いと悲しげに叫びました。

「おう、率八か」

日本左衛門も気がついて、ガバと向うで身を起こしながら、

「や、雲霧も四ツ目屋もか」

「親分……」涼しそうに二人は目礼して、

「とうとう、来る時節がやってまいりました。小塚ッ原へ着くまでは、どうかお達者でお暮らしなさいまし。いずれ、お話は獄門の上で寝もの語りにいたしましょう」

「ばかを言え、おれはまだもう少し生きのびるつもりだ。いろいろ娑婆に未練があって、どうもこのままじゃ往生ができねえ」

こう言って、ニッと笑うと、聞きつけた同心が駆けて来て「これッ」と双方を裂いて、引っ立てました。

果たして日本左衛門の放言は後日、うそでなかった証拠を見せました。やがて揚屋入りとなった吟味中に、かれは四、五度破牢をくわだてましたが成功せず、遂に、あしたは小塚ッ原の露となるにきまった前の夜、嵐に乗じて牢舎の天井を破り、白雨黒風の夜を衝いていずこともなく消えうせました。

そして、紫紐の丹三、赤星重兵衛などと、第二の緑林の徒を糾合して、東海に白浪の悪名をほしいままにしたのは、それから彼が二十九歳に刑刀をうけるまでの短生涯の話で、ここでは語る時機ではありません。

一方――金吾の方は、充分手あつい介抱をうけ、根岸から急いで来た月江や次郎も、共々、その枕辺に寄って、あらゆる心づくしを捧げている。

ところへ、桐畑の自宅から、釘勘の手へ一通の手紙が届きました。辺りの者が立った時、彼は金吾の手へそッとそれを見せて、

「金吾さん、あとでよく読んでください、お粂もとうとう、自分で身の処置をつけました。――鎌倉へ行って松ヶ岡（尼僧院）へはいるそうです。あそこへ駆け込めば、どんな兇状のある女でも、決してお上では手をつけません」

そうこうしている間にも、奥へは、頻々と、江戸の四方の番所や諜者からの密報がはいって来る。

「釘勘、やっと目ぼしがついたぞ」

出雲守と対談していた万太郎は、やがて明るい顔をして、月江や金吾に何か言いおくと、飄然として奉行所の外へ出ました。

飄然です。まったく飄然です、彼は釘勘と共に、奉行所の前の石豆腐（差入れ茶屋）で軽い旅支度をすると共に、遠く江戸を離れたのです。

いや、病気というものほど怖ろしいものはありません、彼の持ちまえの猟奇病は、この最後に至ってもお蝶の先途を見届けないでは、まだ何か宿題が残っているような気がして、なんとも気が済まなかったものと見えます。

＊　＊　＊

中仙道から北国路、善光寺平も過ぎました。道中は、加賀の藩のさる貴人というふれ込みで、前田家の関手形も持っている。その、菅笠合羽の一行が、ひとりの美少女を駕にのせて、急いだ早さといったらありません。

これなん実は山岳切支丹族の変装でした。救われたのがお蝶であることは申すまでもないこと。

ヨハンは山屋敷の石牢で自殺しました。前の夜、事の破れたのを知ったからです。そして、彼女はヨハンの遺命によって、その行くところへ運ばれているのです。

真ッ青な北越の海が目の前にひらけました。沖に、煙草色の帆を張った、一艘の南蛮船がかかっている。

敦賀津の港でもありません、三国港でもありません、甚だ漠としていますが、確かにあの辺の海浜です、煙草色の帆を張った南蛮ぶねは、お蝶をのせて白い海波の果てに消えたのです。――それを見送ってから、山岳切支丹族のともがらも、祈祷の後に、附近の山へちりぢりばらばら蜘蛛の子のように立ち去りました。

「どうだ釘勘、追いかけては」

「ウーム、もう目明しの縄じゃ届きません」

「だが、ふしぎにわしは気が軽くなった。もう夜光の短刀も欲しゅうない。帰りにはひとつ、信州路の大名を訪ねて、何かまた、タネになるような秘密を拾ってやろうか」

「およしなさいまし、また三年も苦労をしちゃ、あなたはともかく、この釘勘がたまりません」

砂山の砂をくずしながら、ふたりの旅人は、その晩の宿をさがしに帰りました。